e-FICTIONS

SEIKAISHA

本作品は、縦書き表示での閲覧を推奨いたします。横書き表示にした際には、表示が一部くずれる恐れがあります。

ご利用になるブラウザまたはビューワにより、表示が異なることがあります。

ダンガンロンパ霧切 2

北山猛邦

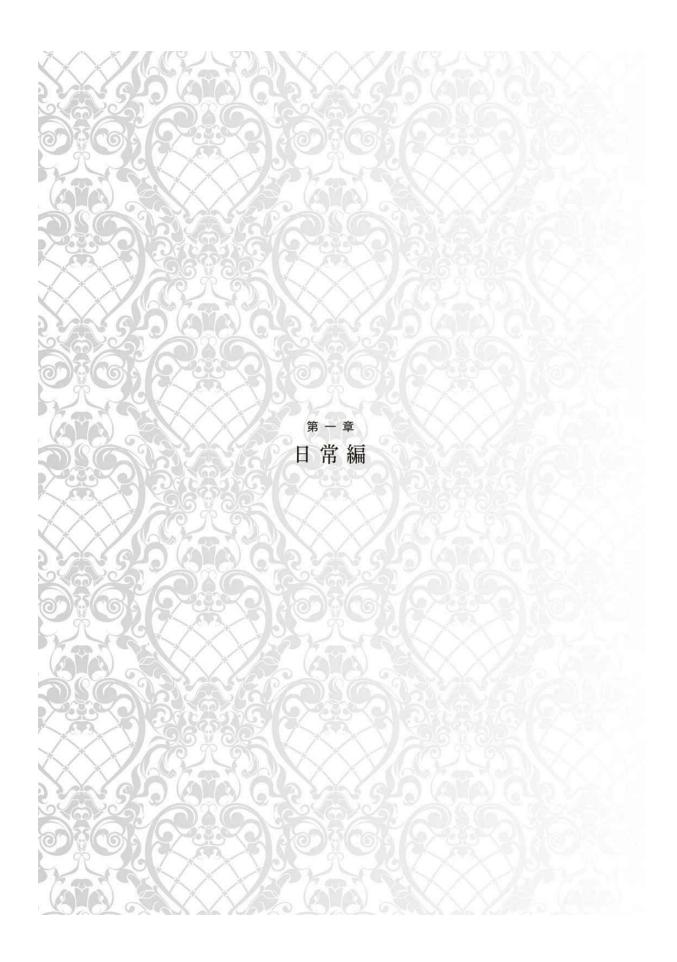
Illustration／小松崎類

星海社

2
ダンガンロンパ
DANGANRONPA
霧切
KIRIGIRI

Contents

第一章

日常編

クリスマスのレストランでは、おめかしをした男女が窓際の席を埋(う)め尽(つ)くしてディナーを楽しんでいた。高層階からの夜景(やけい)は彼らの頭越しにかろうじて見える程度で、いくら背伸(せの)びしてみても、満足に眺(なが)めることはできない。

　なんとか外の景色を見ようと、わたしがホールでぴょこぴょこと跳(は)ねていると、コートの裾(すそ)を誰かに引っ張られた。

　霧切響子(きりぎりきょうこ)だ。

　彼女は無言でわたしをたしなめるように、冷やかな目で見上げる。

「お待たせしました、どうぞこちらへ」

　ウェイターに先導されて、わたしと霧切はホールの奥へと向かった。

　途中、巨大なツリーの前を横切る。海外から輸入したというモミの木には、街(まち)の灯(ひ)に負けないくらい電飾(でんしょく)や星飾りがきらめいていた。

　広い個室に通される。

　真っ白なクロスがかけられたテーブルの上に、アンティークな燭台(しょくだい)が置かれ、火が灯(とも)されていた。すでに三人分のナプキンと食器が用意されている。個室の奥の壁は硝子(ガラス)張(ば)りで、わたしたちのための夜景がそこにあった。

「わあっ、すごい」

　わたしは思わず窓辺に駆(か)け寄って、冴(さ)え冴(ざ)えとした夜に輝く街あかりを眺めた。

「霧切ちゃんもおいで」

　背後(はいご)でためらいがちにしていた霧切を、隣(となり)に呼んだ。

　彼女は困ったような顔でわたしを見返してから、窓に近づいた。

　夜景を見下ろし、頬を赤く染めながら、街の灯に釘(くぎ)づけになる。

「ねえ、きれいでしょう？」

　尋(たず)ねると、霧切はこくりと肯(うなず)いた。

「ちゃんと言葉で、君の気持ちを教えて？」

「……きれい」

　そこへ遅れて七村彗星(ななむらすいせい)が個室に入ってくる。

「待たせたね、お嬢(じょう)さんたち。私からのクリスマス・プレゼントは気に入ってくれたみたいだね」

プレゼントというのは夜景のことだろうか。
　餌に釣られてはしゃいでいる自分のことが急に恥ずかしくなって、わたしは慌てて窓から離れた。
　七村が手慣れた仕草で椅子を引く。わたしは卑屈にぺこぺこ頭をさげながら椅子に座った。こういう場所におけるしかるべき所作というものを、わたしはまるで知らない。
　一方、霧切は慣れたものだった。まるでお姫様のように椅子に腰かけると、さりげなく七村に礼を告げる。
　霧切響子という少女の人柄については驚かされてばかりだけれど、基本的には上品で素直な子だと思う。事件や探偵のこととなると、冷徹で近寄り難い雰囲気になるのだが、それは探偵を家業にしているという家で育ったことと無関係ではないだろう。
　七村は自分の頭に被っていたサンタ帽を霧切の頭に載せると、向かいの席に座った。なんで彼が帽子を霧切に被せたのか説明はなかったし、霧切も無反応のままだった。
　まあ、かわいいからいいとして……
「クリスマスの夜に美人のお嬢さん二人と食事なんて、私は幸せ者だね」
　七村は席に着くと、テーブルに両肘をついて顎を支えながら、いきなりわたしをじっと見つめた。
　意味ありげな視線に戸惑う。
「な、なんですか？」
　わたしは思わず照れて云う。
　七村は舞台俳優のように顔の造りがはっきりとした二枚目だ。クリスマスのディナーの相手としては申し分ない――
「12000、9800、23000」
　七村は唐突に、謎めいた数字を羅列する。
「え？」
「君のかけている眼鏡の値段、コートの値段、靴の値段」
「え、えっ？　どうして……」
　知っているの？
　彼の口にした数字はほとんど当たっている。
「人物を観察する方法にはいくつかあるが、相手の身につけているものの価値を数値化することは有効なやり方の一つだ。ものの価値を知ることは、すなわち物事の本質を見抜く最短の方法といえる」
「は、はあ」

「五月雨結君——たとえば君の場合、脚に自信があるようだね。靴にかける金額が他より多い。しかし靴のすり減り方に、特定のスポーツによる特徴はみられない。天性の脚を持ちながら、探偵の道を選んだといったところか。その年齢で探偵を目指すということは、おそらく君の過去には——」
「わ、わかりました」
　わたしは両手を突っ張るようにして、七村の言葉を遮る。これ以上、何を云われるかわかったものではない。
　七村は不敵な微笑を浮かべると、片手を広げて窓を示した。
「——７４４５万。ここから見える夜景の値段だ。この方角に存在する建造物の電気代を合計した。物事の本質とはかくも美しい」
　七村は気障っぽくウインクしてみせる。
　探偵という生き物は、まったくもって理解し難い。
　七村彗星——ダブルゼロクラスの探偵だ。探偵図書館によるＤＳＣ（探偵図書館分類）ナンバーは『９００』。主に殺人事件を扱う『９』ナンバーにして、その頂点を極めた証である『０』を二つ持つ者。かつて、自分で事件を起こし自分で解決するというせこいやり方で『３』までランクを上げた探偵がいたけれど、その男がキャリア二十年以上かけても手に入れられなかった『０』を、七村彗星という男は、三十七歳という若さで二つも手に入れているのだから、はっきりいってすごい。中途半端な能力で得られる栄誉ではない。
「さて、食事をしながら仕事の話を進めよう」
　七村が指を鳴らす。
　すると彼の斜め後ろに控えていたウェイターがグラスに赤ワインを注いだ。他に二人のウェイターが彼の傍にいて、まるで王様に仕える召使いみたいにかしこまっている。
　わたしと霧切は未成年なので、専用のドリンクメニューが手渡された。わたしはオレンジジュースを選ぶ。霧切はコーヒー。
「我々の出会いを祝して乾杯——といきたいところだが、後回しにさせてもらおう。我々の世界では、乾杯は始まりではなく終わりにするものだからね」
　七村は赤ワインを一口飲む。
　ウェイターが七村の前に皿を並べ始めた。普通、フレンチなら順番に料理が出てくるけれど、何故だか彼の前にだけ、次々に料理が運ばれてくる。
「10時間と28分49秒」
　七村がまたしても唐突に数字を口にする。

「私が挑戦状の封（ふう）を開けてから経過した時間だ。『黒の挑戦（デュエル・ノワール）』は開封から168時間のうちに行（おこ）なわれ、勝敗が決する。タイムリミットをわかりやすくするために、私は今日の午前十時きっかりに開封した」

　深刻そうな表情で七村は云う。しかし食事の手が止まることはない。気づくと彼の皿からは、すでにほとんどの料理が消えていた。

　一体、いつの間に……

　わたしと霧切の前には、一皿ずつ料理が運ばれてくる。七村のペースに合わせていたら、せっかくの料理があっという間に終わってしまいそうだ。

「七村さんは今までに何回、『黒の挑戦』を受けたんですか？」

「今回で五回目だ」

「ご、五回も？」

「不運だとしか云いようがないな。探偵の仲間のなかには、『黒の挑戦』を知らない者もいる。いや、知らない者の方が圧倒的に多いな」

　もちろんわたしたちは『黒の挑戦』を知っている。

　わたしと霧切響子はついこの前、それに巻き込まれた。

『黒の挑戦』とは犯罪被害者救済委員会（はんざいひがいしゃきゅうさいいいんかい）という組織（そしき）が行なっているゲームのことだ。探偵と犯人による決闘（けっとう）とでもいうべきもので、犯人から挑戦状を叩（たた）きつけられた探偵が、リアルタイムで進行する事件を解決するというものだ。

　犯罪被害者救済委員会は、その名が示しているような慈善（じぜん）団体ではない。彼らは犯罪被害者に救済の名目（めいもく）で近づき、ゲームへの参加をそそのかす。彼らが挑戦者となる犯罪被害者を選ぶ際には、とくに復讐（ふくしゅう）の火種（ひだね）を抱（かか）えている者に限られるようだ。要するに人を殺す動機のある者を利用し、ゲームのプレイヤーとなる犯人として仕立てるのだ。

　一方、挑戦者＝犯人と敵対する探偵は、探偵図書館に登録されている探偵の中から選ばれる。

　探偵図書館には約六万五千五百人の探偵が登録されており、一般に情報が公開されている。犯罪被害者救済委員会は『黒の挑戦』の難易度（なんいど）に応じて、召喚（しょうかん）する探偵を選んでいると思われる。その際には、探偵図書館によるDSCのランクを参考にしているようだ。

「ランクが上がれば上がるほど、分母となる探偵の数は少なくなる。確率的に『黒の挑戦』に当たりやすくなるのも当然といえば当然だ」

　七村はフォークを皿の上に置くと、ナプキンで口元を拭（ふ）き、それを丸めて背後に放り投げた。ウェイターの一人が動じることなくキャッチする。そして七村はすでに空（から）になった皿を払いのけるようにして、テーブルにスペースを作ると、両手の指を組んでそこに置いた。

七村はわたしと霧切を観察するように交互に眺め始めた。
「君たちが解決した事件をファイルで読んだよ。新人の入門編としてはちょうどいい事件だったかもしれないな」
　あのシリウス天文台の殺人事件が入門編？
　わたしは未だにあの日のことを思い出しては、絶望的な気分になっているというのに。
「しかし次はそうもいかないだろう。挑戦状の内容からみて、今回の犯人は『黒の挑戦』の趣旨を十分に理解したうえで、勝ちにきている。厄介なのはその精神性だな。まるでゲームを楽しもうとしているかのようだ。観客もさぞ盛り上がることだろう」
「観客？」
「おや、知らなかったのか。『黒の挑戦』は映像として配信されている。観客たちはこれを『クローズド・サーキット』と呼ばれるイベントで、飲み食いしながら楽しむというわけだ。いわゆるライブ・ビューイングというものだな」
　そういえば前の事件の犯人が教えてくれたっけ。
　犯罪被害者救済委員会はただゲームを開催するだけではなく、一部の観客にそれをショウとして提供しているのだと。
「信じ難い話ですけど……一体どんな人たちが『黒の挑戦』を観ているんですか？」
「具体的なメンバーは私の知るところではない。しかし高額なマネーが動いていることは間違いない。『クローズド・サーキット』に参加するには、発展途上国に学校を一万校建てられるだけの金額を払う必要があるという」
　なんともわかりづらくて無慈悲なたとえ……
　結局のところ、金持ちの道楽なのだろう。
　殺し合いを楽しむ……その原型がローマ時代のコロッセオにあると考えれば、理解できなくもない。もちろんわたしは人が殺されていく光景を生で観たいなんて思わないけれど。
「ところで君たちはどうして犯罪被害者救済委員会を追っている？」
　七村が尋ねる。
「それは……犯罪組織を野放しにしておくわけにはいかないからです！」
　わたしは胸を張って云う。
「ふうむ」
　七村は含みのある笑みを浮かべながら肯く。

それから霧切に視線を向けた。
「君は？」
　霧切は小さく首を竦める。
「私は別に。依頼があったわけではないし」
「ちょ、ちょっと、そこは足並み揃えようよ」わたしは思わず霧切に突っ掛かる。「というか、君だって犯罪被害者救済委員会と闘うことに乗り気だっただろ」
「いいえ。私が興味あるのは、探偵として認められることだけ」
「……ランク上げが目的？　本当にそう割り切れるの？　君は連中にいいように扱われたんだよ。悔しくないの？」
「……悔しいわ」
　意外な返事が――いつもと変わらない表情で返ってくる。つくづく感情を表に出すのが下手というか、あくまでポーカーフェイスというか……
「それならわたしと一緒に悪の組織に立ち向かおうよ！　ただ目の前の事件を解決することだけが、探偵の仕事じゃないでしょう？」
「結お姉さまがその件について私に依頼するのなら、調査を手伝うわ」
「君って子は……」わたしは下唇を噛んで、焦れる気持ちをやり過ごそうとする。「君自身の意志はないの？　君は依頼がなきゃ動けないお人形さんなの？」
　わたしの言葉に対して、霧切はゆっくりとこちらを向き、冷ややかな目で見返した。
　怒った……？
「依頼者のいない探偵活動に意味があるのかしら。それはただの自己満足というものよ」
　霧切は云いながら、そっぽを向く。
「そうだね、確かに自己満足かもしれない。でもそれが真実を追い求めるということでしょっ？」
　わたしは思わず立ち上がって云う。
「真実を追い求める――ね。随分子供っぽいことを云うのね、お姉さま」
「君の方が子供だろ！」
　わたしが大声を上げると――
　次の瞬間、突然クラクションみたいな音が部屋中に響き渡った。
　びっくりして音のした方を見ると、七村がいつの間にかトランペットを手に持っていた。
「はいはい、けんかはやめなさい。私から見ればどちらも子供だ。いや、子供どころかひよっこだよ」

七村は呆れたような苦笑を浮かべながら、トランペットを背後に放り投げた。例によってウェイターがキャッチする。

「探偵は自己実現の手段ではない。しかし主義をもたない探偵は信用ならない。思うに、君たち二人を足して二で割れば、ちょうどいい探偵になるかもしれないな」

　七村はそう云って肩を竦める。

　わたしと霧切はお互いに無言のまま顔を見合った。

「ごめん……大きな声出して」

　わたしは気まずさに顔を火照らせながら、椅子に座り直す。

　霧切は顔を逸らしたまま無言だ。

「では話を戻そうか」七村が云う。「私の知る限り、犯罪被害者救済委員会の調査を始めてから行方をくらました探偵は二桁に上る」

「ふ、二桁？」

「それがどういう意味かわかるかね？　彼らに手を出せば、君たちもただでは済まないかもしれないという意味だ」

「そんな危険な組織を、みんな黙って見過ごしているんですか？　もしもそれが事実なら、一刻も早く壊滅させるべきだと思います」

「勇ましいね、五月雨君。行方不明になった探偵たちも同じようなことを云っていたに違いない。しかし君たち以上に優秀な探偵たちが二桁も動いていながら、未だにそれができていないということは、そう簡単にはいかないということだ。一つ、驚くべき事実を教えてあげよう。犯罪被害者救済委員会は、あるビルのフロアにNPO団体としてオフィスを構えている。誰もが自由に出入りできる場所にね」

「ええっ、どういうことですか？」

「表向きはあくまでオープンなボランティア組織。彼らに関する情報は簡単に拾えるが、どれだけ調べても、表向きの情報しか出てこない。おそらく探偵対策だろうな。無駄な情報を無数にちりばめることで、真に隠しておきたい情報から目を逸らさせる。木の葉を隠すなら森に、というやつだ。『ブラウン神父』もなかなかいいことを云う」

「彼らの目的は？　復讐劇をショウにすることなんですか？」

「いや――」七村はワイングラスを手に取って、赤い液体を見つめながら続けた。「組織を追っていた探偵から聞いた話では、彼らには真の目的があるらしい」

「真の目的？」

「私にそのことを伝えた探偵は今も行方不明になっている。はたして彼は、犯罪被害者救済委員会の

真の目的を知ってしまったのか、それとも……」
「まさか本当に救済が目的だなんてことはありませんよね」
「どうかな。五月雨君、君は犯罪被害者救済委員会のことを『悪の組織』と云っていたが、本当にそう思うかい？」
「当然ですよ！　だって善良な市民に殺人をそそのかしているんですから」
「しかし殺す相手は犯罪者だ。君たちも『黒の挑戦』を経験しているならわかるだろう。挑戦者たちは皆、過去になんらかの犯罪被害を受けている。彼らは理不尽に奪われた人生を、奪ったやつらから取り返そうとしているだけだ」
　わたしと霧切が巻き込まれた事件の犯人も、過去に家族を殺害されていた。彼は『黒の挑戦』において、家族の命を奪った者に対し復讐を決行したのだ。
「この世には、罪を犯しながら裁かれることなく、日常を謳歌している連中がいる。一方で、奪われた側はみじめな人生を送り、社会の底辺をさまよっている。この不公平な現実に泣く彼らの叫び声が、君たちには聞こえたかい」
「気持ちは理解できます。それでも……仇討ちや私刑は許されないことですし、無関係な人を巻き込んでまで復讐を果たすなんてことを認めていいわけがありません」
「それは探偵の云い分だ。悪か正義かを分けるのは、立場の違いでしかない。そう——一部の人間にとっては、『黒の挑戦』は紛れもなく救済であり、聖戦だ。挑戦者たちのなかには、悪を討つ世直しだと考える者もいる」
　犯罪被害者救済委員会は必要悪なのか？
　それこそが彼らの真の目的なのか？
「たとえそうだとしても……人を殺す決意をした時点で、人としての道を踏み外しています。罰を受けなければならないと思います」
「なかなか正義感の強いお嬢さんだ」七村は穏やかに笑う。「しかし鉄は折れにくい一方で、一度曲がると元に戻りにくい。君みたいな子が一番危ういかもしれないな」
「危ういって……」
　まさかわたしがそんなふうに指摘されるとは思ってもみなかった。
「私情を挟まないことね、結お姉さま」
「ぐぐ……」
　わたしは何も云い返せなかった。

普段から感情を探偵というヴェールに隠している霧切にとっては、仕事に自分の主義主張を持ち込まないというのは当たり前のことなのだろう。
　だからといって、犯罪被害者救済委員会を放っておけるわけがない。
「どんな事情があるにしても、犯罪組織の力を借りて自分の境遇を変えようなんて、身勝手な話だと思います」わたしは背筋を伸ばして云う。「どんな絶望だろうと、自分で乗り越えなければ意味がないはずです！」
「なるほど、美しいね。君の青さは傷口にしてナイフといったところか」
「七村さんは……どうなんですか？」わたしはむきになって尋ねる。「『黒の挑戦』の犯人たちのことを、気の毒な犠牲者だとお考えですか？」
「確かに気の毒だとは思うが、そんなことは私にはどうでもいいことだ」七村は両手を広げて即答する。「探偵として私が相手にしているのは人間ではない——mysteryだ。私は目の前にある謎を解く、そのために存在している」
「そうですか……」
　よかった。
　さすがダブルゼロクラスだ。迷いがない。彼には本当のキャリアに裏打ちされた自信が窺える。
「まさか私が犯人に手心を加えるような探偵に見えたかい。ふふ、私はそんなに甘くはない」
「疑うようなことを訊いてしまってすみません」
「構わんさ」
「犯罪被害者救済委員会について、他に何か知っていることはありませんか？」
「私が知っていることはそう多くない。しかし他に一つだけ——組織を追っていた探偵から聞いた話がある。犯罪被害者救済委員会は、実質的にたった一人の人間によって取りまとめられているという」
「たった一人……？」
「会長と呼ばれる男だ。いや——女かもしれないな。その素性はまったくの謎に包まれている。そいつが十年ほど前に犯罪被害者救済委員会を設立し、現在も『黒の挑戦』をプロデュースしているそうだ」
「犯罪組織のボスですね？」
　会長の正体を暴くことができれば、犯罪被害者救済委員会を犯罪組織として告発することができるかもしれない。
　今までおぼろげだった組織の姿が、一人の人間のシルエットとして実体を現し始めてきた。
　はたして会長とは何者だろう。

「その会長という人物は元探偵ではないかしら？」
霧切が唐突に、口を開いた。
驚くべきその言葉に、七村が反応を示す。
彼はテーブルに片肘をつくと、顎を支えるようにして、霧切を見返した。
「ふむ、どうしてそう思う？」
「『黒の挑戦』で挑戦者が標的にするのは未解決事件や、冤罪事件の真犯人。それは事実上、警察がたどりつけなかった真犯人を組織が暴き、それを標的としたゲームを提供しているということ。こんなことができるのは……名探偵クラスの人間だけ」
「そ、そっか……確かに云われてみたらその通りだね」わたしは感心して云った。「でも真犯人をあっさり見つけてしまうほどすごい名探偵なら、当然ランクはかなり高かったはず……」
わたしは云いながら、自分の言葉にはっとする。
ランクが高いといえば……
霧切は肯いて、続けた。
「探偵図書館の『000』ナンバー、探偵の頂点ともいえるトリプルゼロクラスの探偵は過去に四人いたそうね。けれどそのうち一人は記録を抹消されている。もしも犯罪被害者救済委員会の会長として考えられる人物がいるとしたら――その人ではないかしら」
「素晴らしい」七村は霧切に拍手を送る。「説明の手間が省けて助かるよ。無駄な時間を省略するということは、財産を手に入れることと同じだ。霧切君、君なら私の速度についてこられそうだな」
「それで、記録を抹消された探偵というのは誰？」
霧切は七村には取り合わずに問う。
「残念ながら私は知らない」七村はわたしたちの顔色を窺いながら、両手を広げた。「本当だ。私が探偵図書館に登録した時にはもうファイルが存在しなかったからな。もしその人物を知る者がいるとしたら、同じトリプルの称号を持つ三人の探偵か……探偵図書館の創立メンバーだけだろう。聞くところによると、その元探偵は探偵図書館の創立にも関わっていたらしい」
創立メンバーといえば、確か霧切の祖父もその一人だと聞いたことがある。
――まさか霧切のお祖父さんが記録を抹消された探偵？
いやいや、さすがに考えすぎか。
わたしは霧切の反応をこっそり窺ったが、さすがに彼女は取り乱した様子はなかった。
「そこまで特定ができているのなら、どうして誰も手を出せずにいるの？」
霧切はナイフとフォークを置いて、腕組みしながら尋ねる。

「すべて憶測に過ぎないからだ。そもそも——仮にその消えたトリプルゼロの元探偵が会長だとしたら、誰も手を出すことはできないだろうな」
「どうしてですか？」
　わたしは尋ねる。
「この世には時間でも金でも才能でも埋められない差というものがある。それが我々とトリプルたちとの差だ。彼らがもし犯罪者として堕天したとなれば、国家レベルの対策が必要になるだろう。これは冗談ではない。事実だ。我々にどうこうできる問題ではない」
　それは紛れもない敗北宣言だった。
　わたしにとっては雲の上のダブルゼロクラスであり、プライドの高そうな七村でさえ、あっさり負けを認めてしまうなんて。
　ひょっとしてわたしはとんでもない相手に喧嘩を売ろうとしていたのではないだろうか……
「しかし犯罪被害者救済委員会に近づく方法は一つだけある」
「えっ？」
「『黒の挑戦』の犯人を捕まえることだ。犯人は組織のエージェントと接触し、少なからず説明を受けている。すなわち犯人の存在こそ、数少ない手がかりの一つということだ。『黒の挑戦』をクリアして、犯人から情報を引き出すことができれば、君たちにとっては前進となるのではないかな？」
「そうですね！」わたしは肯く。「そうでなくとも、犯人に負けるわけにはいきませんけど」
「力強い言葉だ」
　七村は腕時計を確認すると、椅子から立ち上がった。
「時間だ」
「あれっ？　もう行っちゃうんですか？」
　というかわたしたちはまだ食事中なんですけど……
「時は金なり。そして金は時なり。私は金で時を買い、時で金を得る」七村は云いながら、ウェイターに何やら合図を送っている。「さて、一つ確認だが、今回の『黒の挑戦』に君たちも参加するという前提で話を進めても構わないのだね？」
「はい」
　わたしは即答する。
　霧切はわたしの顔をちらりと窺ってから、肯いた。
「よろしい、では今回の『黒の挑戦』について、おさらいしておきたまえ」
　犯人＝挑戦者は事前に、犯罪に用いるトリックや凶器を組織からの立て替え金で購入し、これを

『デッキ』としてセットしている。その内容は挑戦状（次参照）に記(しる)されている。

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場所	ノーマンズ・ホテル	8000万
凶器	ナイフ	500万
凶器	拳銃(リボルバー)	15000万
凶器	ハンマー	300万
凶器	ロープ	300万
凶器	自動車	10000万
トリック	密室	1億
トリック	消失	1億
その他	現金	10億
	総コスト	13億1600万

以上のコストから、次の探偵を召喚する

七村彗星

今回の犯人は凶器やトリックを惜しみなく取り揃え、手札（てふだ）を充実させて事件に臨（のぞ）もうとしている。七村が『勝ちにきている』と犯人を評（ひょう）したのはそういうことだろう。金額の合計が高ければ高いほど、高ランクの探偵が召喚されることになるらしい。

「それから、一つ重要なことを先に伝えておく」

七村は云いながら、ウェイターが何処（どこ）からか持ってきたリュックサックをいそいそと背負っている。腰や胸にベルトを通し、ロックする。

というか、この人は突然何をやっているのだろう？

「『黒の挑戦』において、犯人は召喚された探偵を殺害してはならないというルールがある。探偵が不在ではゲームにならないからだ。ここでいう探偵とは、挑戦状によって召喚された探偵のことだ。つまり君たちはルール上、探偵ではなく、ただの同行者に過ぎない。ゆえに被害者になる可能性もあるということだ」

「ひ、被害者ですか……」

思いがけず、上擦（うわず）った声が出た。

そうだ、考えてみればわたしたちは犯人の仕掛けた罠（わな）に自（みずか）ら飛び込もうとしているのだ。邪魔（じゃま）をすれば、無事ではいられないかもしれない。

「怖気（おじけ）づいたかね？」

「い、いえっ、平気です……」

素直じゃないわたし。

霧切は相変わらず冷静な顔つきのまま小さく肯くだけ。

「犯人の勝利条件は、復讐相手を全員殺害し、探偵役から告発されずに168時間逃げ切ること。『黒の挑戦』に勝てば、ゲームに使用した金額を賞金として手に入れることができ、希望すればまったくの新しい人生を歩（あゆ）むことができるという。どん底からの一発逆転を狙（ねら）う挑戦者にとって、そのことは大きなモチベーションになっている」

「死に物狂（ものぐる）い……というわけですね」

「いかにも。逆に敗北すれば、彼らはゲームに使用した立て替え金を全額支払わなければならない。支払い不能となれば、その命をもって支払うことになる。すなわち、我々の闘う相手は、命をかけている」

命をかけるという点では、わたしは負けていないつもりだ。

わたしは誰かの助けを求める声に応（こた）えたくて探偵になった。探偵として正義をまっとうするためなら、命だってかける。

一方霧切はというと――彼女は生まれながらの探偵だ。探偵としての意味や目的など持たない。幼少の頃から探偵教育を施され、いまや死をも恐れない探偵機械になりつつある。

けれどわたしは知っている。いくら頭脳に探偵マニュアルを詰め込んだところで、彼女の心は中学一年生の女の子に過ぎないことを。

「『黒の挑戦』は、必ずしも閉鎖空間で行なわれるとは限らない。しかし警察の介入を避け、探偵の自由を奪うという意味でも、クローズドな環境が選ばれることが多い。今回、ゲームの舞台に選ばれたノーマンズ・ホテルは、人里離れた山奥にある廃墟ホテルだ。我々はそこに100時間以上隔離されると考えていいだろう。その備えを怠らないように」

七村はもう一度腕時計を確認すると、片手を上げて別れの挨拶をする。

「ではそろそろ失礼するよ」七村は立ち去りかけて、思い出したように振り返る。「おっと、その前に今後の予定を確認しておこう。ノーマンズ・ホテルに向かうのは明後日だ。明日はどうしても外せない私用があってね。集合は明後日の午前七時、駅前のロータリーで。午前十時にはホテルに到着できる算段だ」

「あの……明後日からで大丈夫なんですか？　一日無駄になっちゃいますけど……」

ただでさえタイムリミットのあるゲームなのに。

「私の速度をもってすれば問題ない。君たちもせいぜい私に遅れを取るなよ」

「は、はい……」

「では、我々の勝利を祈って――」

個室の出口に向かうのかと思いきや、七村は何故か窓に向かって歩き出す。

まさか……

さっきから彼が一生懸命背負っていたものって。

七村は突然、窓を開け放した。

細く開いた窓の隙間から、高層階の強い風が吹き込んでくる。

七村は窓枠にひらりと飛び乗る。

「グッドラック！」

彼はこちらに向かって親指を立てると、窓の隙間からダイブした。

「七村さんっ！」

わたしはとっさに椅子から立ち上がり、窓へ駆け寄る。

すると、きらめく街へとパラシュート降下していく彼の姿が見えた。

大きく開いた七色のパラシュートが、夜景に華を添えている。

「名探偵ってみんなこうなの……？」
　わたしは茫然と、ネオンの海へと沈んでいく七色の華を見送った。さすがの霧切も、思わずフォークを持つ手を止めてしまうほどだった。
　ウェイターが窓を閉めて強風を遮断する。
「……さ、わたしたちはゆっくりディナーの続きを楽しみましょ。焦っても本番は明後日からだし」
「そうね」霧切は魚料理を上品に食べている。「これが最後のクリスマスかもしれないし」
「またそんな他人事のように云う」
「もちろん私はそう簡単には殺されないけど」
「当たり前でしょ！　簡単に死なれちゃ困る。この先何度だって、クリスマスは来るよ」
　もしもの時には――わたしが君を守る。
　その言葉は、あえて口には出さなかった。
　誘拐事件に巻き込まれて死んだ妹のことを、霧切に重ね合わせて見ている……そう彼女に思われたくなかったからだ。
　それにわたし自身、妹の幻影に囚われていないという自信はなかった。やはり心の何処かに、贖罪の気持ちがあるのかもしれない。
　助けを求める声……それはいつも妹の声だ。
　次は必ず助ける。
　必ず――
「次の『黒の挑戦』もがんばろう！　ね、霧切ちゃん」
「ランクを上げるためには仕方ないわね」
　霧切は幼い顔して、大人ぶったような口調で云う。
　わたしたちにとっては二回目の『黒の挑戦』。
　はたしてどんな事件になるのか……
「お会計はこちらになります」
　突然ウェイターが近づいてきて、分厚い手帳のようなものを手渡してきた。開くとそこには今夜のディナーの料金が記されていた。
　￥62248
「えっ……ええっ？　七村さんが払ってくれたんじゃない……んですかっ？」
　ウェイターは有無を云わせぬ笑顔で、首を横に振る。

「う、ううっ」

　わたしは慌てて自分の財布（さいふ）を覗（のぞ）く。

　千円札が二枚しか入っていない……

「どうしよう」霧切に小声でささやく。「あのぶっ飛んでる探偵にやられた！　あの人、お金持ちだけどケチだ、きっと！」

「慌てないで、お姉さま」

　霧切は財布からカードを抜いて、ウェイターに渡した。

「一括（いっかつ）で」

「かしこまりました」

　ウェイターは奥へ下がる。

「き、霧切ちゃん……かっこいい……」

　ディナーを終（お）えて、わたしたちは高層ビルを出た。

　さっきまではるか眼下に見えていたネオンが、いつの間にか周囲を取り囲んでいる。まるで深海の楽園にたどりついたかのような気分で、わたしと霧切は冷えた道を並んで歩く。

　クリスマスの夜が更（ふ）けていく。

　ライトアップされた並木道では、神秘的な輝きが行き交（か）う人々を照らしていた。

「それじゃあ、私はこっちだから」

　霧切は分かれ道の片側を指して云った。

　夜気に白く霞（かす）む息を残して、彼女は背を向け、一人で歩きだす。

「待って、家まで送るよ。もう時間も遅いし……」

「必要ないわ」霧切は振り返ると、肩にかかった三つ編（あ）みを払って云った。「外国ならともかく、この国の夜道で私を脅（おびや）かすものなんて存在しないもの」

「そんなこと云っちゃってさ、男の人が本気で襲（おそ）いかかってきたら、君みたいなロリっ子は何されるかわかったもんじゃないよ。たとえばこうやって――」

　わたしは霧切に背後から襲いかかるようにして、細い首元に手を伸ばそうとした。

　次の瞬間――

　彼女の姿が視界から消えていた。

　彼女はいつの間にか斜め後ろにいて、わたしの右手を捻（ひね）りあげている。

「痛いっ痛いっ」

「証明してみせるのは推理だけにしたいものね」霧切はわたしの手を離して云う。「結お姉さまこそ気をつけて。垂直跳(すいちょくと)びだけでは、本気で襲ってくる男の人には敵(かな)わないわよ」

「うう……今の何？　護身術(ごしんじゅつ)？　わたしにも教えてよー」

「今日はもう帰らないと」

　霧切は街頭の時計を気にしながら云った。

「ねえ、とにかく一緒に帰ろうよ。もうちょっと話がしたいなあっていう空気、わたしから感じない？　そういうとこ鈍(にぶ)いんだねえ、君」

　霧切は眉間(みけん)に幼い皺(しわ)を寄せて、わたしを見上げてから、無言で歩きだした。

　わたしは彼女の隣を歩く。

「さっきの話の続きなんだけど……」

「護身術のこと？」

「ううん、もっと前。犯罪被害者救済委員会の会長のこと」

「それが何？」

「元探偵で、高ランクで、探偵図書館の設立にも関わっていた……って、まさか君のお祖父さんのことじゃないよね？」

「もしそうだったら劇的な展開だけど、それはないわ」

「どうしてそう云いきれるの？」

「お祖父さまは探偵図書館に登録したことがないの。この前教えてくれたわ。登録していない以上、トリプルゼロになることはないし、記録を抹消されることもない」

「失礼なことを云うようだけど……お祖父さんが君に嘘(うそ)を云っている可能性は？」

　仮に霧切の祖父が、犯罪組織の会長として暗躍(あんやく)しているとしたら、孫にその素性を明かすはずがない。

「お祖父さまは誰よりも霧切の名に誇(ほこ)りを持っているから……探偵としてランクづけさせられるなんてことを許すはずがない。DSCの導入についても、唯一(ゆいいつ)反対を表明していたらしいわ」

「霧切の名の誇り……か」

　わたしには途方(とほう)もない世界の話に聞こえる。

　霧切の祖父が偉大な名探偵であるということは、孫の響子をみれば一目瞭然(いちもくりょうぜん)だ。彼女がわずか十三歳にして、探偵として才能を発揮しているのは、霧切の血と歴史があるからだろう。

しかし今まで出会った探偵たちは誰一人として、霧切の名に反応を示さなかった。ダブルゼロクラスの七村でさえ、霧切のことを「ちょっと賢いお嬢さん」くらいにしか見ていなかったように思う。

おそらく霧切家の探偵は、表立って活動することを良しとせず、あくまで陰に生きてきたのだろう。だから普通の探偵たちは霧切の名を知らない。

もしそうだとすれば、霧切の誇りを守るために、祖父自身が探偵図書館に登録しなかったという話には信憑性がもてる。

……あれ？

それなら霧切響子は何故、探偵図書館に登録したのだろう。確か以前に、登録は祖父にやってもらったと云ってなかっただろうか。それは霧切家の誇りに背く行為になるのではないだろうか……

「そもそもお祖父さまは基本的に海外暮らしよ。外国の国々を相手に仕事をしているお祖父さまからすれば、犯罪被害者救済委員会も所詮、一国の小規模な犯罪組織に過ぎないわ。そんなものにこだわっている余裕はないはずよ」

「さすがにスケールが違うね……」

わたしはあらためて霧切響子の祖父に畏怖を覚える。そんな大人物が世間の評価や公的な称号とも無関係に、人知れず犯罪と闘っているのだ。

「でも少なくとも、お祖父さんは犯罪被害者救済委員会の会長になった人のことを知っているんじゃない？　かつては探偵仲間だったんでしょう？」

「どうかしら」霧切は難しそうな顔をしながら、冷えた指先を温めるように息をはきかける。「知っていようと知っていまいと、私たちにはどうすることもできないわ」

「名前を聞き出したら、オフィスに行ってそいつを呼び出せばいいじゃない。意外とあっさり姿を見せるかもよ」

「姿を見せたとして、そのあとはどうするの？　ボランティア団体の会長をどう告発するの？」

「そんなのどうにでもなるよ！　アル・カポネみたいに脱税でもなんでもいいから、とりあえず捕まえておけばいいんだ。これ以上『黒の挑戦』なんかさせないことが重要だから」

「結お姉さま、極端な正義は邪悪と変わらないわ」

「う……」

「とりあえず会長のことは脇に置いておくべきよ。今は目の前にあるものを片づけることに集中しましょう」

「……そうだね」

年下の子に諭されてしまった。

七村を探偵役とする『黒の挑戦』は、すでに十二時間近くが経過している。

ゲームはもう始まっているのだ。
　今こそ冷静にならなければならない。組織のラスボスをやっつけるのは、この『黒の挑戦』が終わったあとでいい。
　無事、生きて帰れたら……だけど。
　あれこれと悩みながら歩いていると、ふと霧切が足を止めた。
「ん？　どうしたの？」
「家、着いた」
　ゆったりとした坂道の上には、仰々しい和風の屋敷門が口を閉ざして構えていた。街灯はすべて、この門への道しるべであるかのように、点々と坂の上へと続いている。白い塀が敷地を覆い隠しており、その先に存在するであろう屋敷の姿は見えない。
「想像通りというかなんというか……」わたしは羨望の眼差しで霧切を見つめる。「やっぱり、お嬢さまなんだね」
「もうすでに門限を過ぎているわ」霧切は肩を落として云う。「いくら探偵に会っていたといっても、相手が男の人だと知ったら、おじいさまはきっと怒ると思う……どうしよう」
　霧切は珍しく動揺したように云う。
「門限があるなら早く云ってよ、もっと早く君を帰らせてあげたのに」
「お姉さまと一緒に歩いていたから遅くなったのよ」霧切は口を尖らせて迷惑そうに云った。「空気を読んだから……」
「ご、ごめん、わたしのせいだね」わたしは平謝りする。「わたしが説明すればなんとかなる？」
「そうしてもらえると助かる」
　いつもより殊勝な彼女に、わたしは不覚にもときめいてしまった。
　霧切は坂道を上がると、門の手前で立ち止まる。
　分厚い木製の門扉には、ごつごつとした鋲飾りが施されている。訪れる者を歓迎するというより、拒むような雰囲気だ。見たところ表札はなく、あからさまなほど大きなレンズのついたインターホンが備えつけられているだけだった。
「入らないの？」
「ここから入るのは部外者だけよ」霧切は道を折れて、塀に沿って歩き始める。「身内が出入りに使うのは裏口」
「なんか……本格的だね……」

塀の向こうには杉の木が植えられており、その向こう側にあるものを隠している。荘厳（そうごん）な屋敷のシルエットがかろうじて見てとれるが、人の気配（けはい）は感じられない。

事情を知らない人間からすれば、この塀に囲まれた敷地は、相当な謎だろう。

「ここにはお祖父さんと二人で住んでるの？」

「ええ。でもお手伝いさんが三人いて、交代で必ず一人は住み込みで働いてくれているわ」

「お手伝いさん？　現実に存在するの？　そういう人たちって」

わたしたちの通う学校はお嬢さま学校なので、ごく一部には、メイドやら家政婦やらを雇（やと）っている家庭の子もいると聞く。そのなかの一人が、霧切響子というわけだ。

しかし幸せな家庭かというと、そうでもないようだ。彼女には父も母もいないらしい。あえて詳（くわ）しい話を聞いていないので、事情はよくわからないけれど、彼女にとって大きな問題の一つであることは間違いない。

「そういえば最近まで海外に住んでたんだっけ？」

「そうよ。この家には二ヶ月くらい前から住んでいるの。それまでは五年くらいの間、お祖父さまと一緒に海外のいろいろなところを回っていたわ。でも学業をきちんと受ける必要があったから、仕事が一段落したついでに、私だけ一人、帰国したの」

「つくづくわたしとは住む世界が違うなあ」

「そうかしら」

霧切は涼（すず）しい顔をして云う。

塀に沿ってしばらく歩いていると、やがて霧切が立ち止まって、塀の一部を指差した。

そこには人が一人くぐれる程度の小さな門が備えつけられていた。

霧切はポケットから鍵を取り出すと、戸の鍵穴に差して回す。

あっさりと戸が開いた。

「なんだ、鍵持ってるじゃない」

「鍵くらいどうにでもなるわ。問題はこのあと」

「こっそり部屋まで帰ったら？」

「ばれるにきまってるでしょう」

霧切は怒ったように云う。

「じゃあわたしは何をすればいいわけ？」

「ここで待っていて。おじいさまを呼んでくるから」

「はいはい、わかったよ」

「すぐ戻るわ」

「あ、霧切ちゃん、ちょっと待って」

「何？」

「頭のそれ、取っておいた方がいいんじゃない？」

　霧切の頭に載っているサンタ帽を指差すと、彼女は無言でそれを払いのけた。

　足元に落ちたそれを不思議そうに見つめる。

「これは何？」

　――気づいてなかったのか。

　わたしは帽子を拾って、霧切を促す。

「ほら、急いだ方がいいよ」

「あっ、うん」

　霧切は戸の向こうに消えた。

　わたしは霧切を見送ると、コートのポケットに両手を突っ込んで、塀に寄り掛かる。

　霧切がここまで慌てるのは珍しい。彼女にとって祖父は絶対的な存在なのだろう。それとも単にお祖父ちゃんっ子なだけだろうか。両親がいない彼女にとって、祖父は支えであったに違いない。

　いずれにしても彼女の慌てっぷりを思い浮かべると、それだけでにやにや笑いが止まらない。いつも冷静な彼女が、門限一つで大騒ぎなんて……

　ふと、街灯を見上げると、きらきらと何かが輝いて見えた。

　雪――

　ホワイト・クリスマスか。

　こんな夜に、わたしは一人でにやにやして……一体何をやっているんだろう。

　孤独でどうしようもない気持ちがわき上がってくる。

　けれど今年は去年とは違う。わたしは霧切響子という少女と出会った。彼女の存在が、わたしの探偵としての孤独や虚無感を和らげてくれているのは、紛れもない事実だ。

　来年もまた一緒にいられるだろうか。

　わたしは二人一緒の未来を想像する。

　何故だか、真っ暗な闇しか思い浮かべることができなかった。

　それもまた、探偵の宿命だろうか――

「結お姉さま」

　声がして、門を見ると戸が開いていた。

そこには困ったような顔をした霧切が一人。
「あれ？　お祖父さんは？」
　わたしはコートのボタンを合わせながら、塀から離れる。霧切に近づき、彼女の背後を探したが、誰もいなかった。
「私の響子をたぶらかしているというのはお前か！」
　その声は、わたしの頭上から聞こえてきた。
　雪の降る夜空を背景にして、塀の上に羽織（はおり）を着た老人が立っている——
　気づいた時には遅かった。
　老人はわたしの背後に降り立つと、手に持っていた杖（つえ）の先でわたしの膝裏（ひざうら）を突き、肩に手をかけた。抵抗する間もなく、わたしの身体（からだ）はすとんとその場に沈められていた。
　いつの間にか仰向（あおむ）けの状態だ。
　そこに老人の杖が降ってくる。
　わたしはただそれをなすすべなく見上げていた——
「待って、その人は違うわ！」
　霧切が慌てて止めに入る。
　杖がぴたりと止まった。
　わたしは冷たいアスファルトの上に仰向けになったまま、両手を上げる。
「こ、降参です……」
「おじいさま、よく見て、その人は女の人よ」
「なんだと？」老人はわたしを覗き込むと、いっさいの遠慮（えんりょ）なくわたしの胸をわし摑（づか）みにした。「むっ……確かに……」
「ちょ、ちょっ！」
　意外とたくましい老人の手を振り払って、わたしは飛び跳ねるようにして立ち上がった。
　急いで老人から離れる。
「五月雨結お姉さま。同じ学校の探偵よ」
「ああ、あんたがそうか」老人は白髪頭を搔（か）きながら云った。「すまんすまん、孫が男と食事しているという情報が入ったものだから、つい勘違いして——」
　何処の情報だ。
　というか、この人が——
　見た目は随分と若々しく見える。銀髪（ぎんぱつ）はつやつやとして、皺も浅く、腰は曲がらずまっすぐだし、瞳（ひとみ）に

生き生きとした輝きが見受けられる。彼は右手に杖をついていたが、それが必要なほど足腰が弱っているようには見えなかった。おそらくその杖は、彼にとって武器の一種なのではないだろうか。
「あの……は、はじめまして」わたしはとりあえず頭を下げる。「えーっと……その、霧切ちゃん……響子ちゃんとは学校とかそのへんで仲良くさせてもらっています」
「あんた、この前電話をくれた人だね？」老人はさっきまでとは別人のような穏やかな笑みを浮かべていた。「こちらこそ孫の響子が世話になって申し訳ない。響子はここでの生活には馴染（なじ）めない様子で、いつもひとりぼっちでどうしたものかと私も心を痛めておったところなんだが、あんたのような仲間ができて一安心しているのだよ。なあ、響子？」
「はい」
　霧切は老人の背中に隠れるようにして、やや顔を伏（ふ）せながら肯く。なんだかいつもよりかしこまった様子だ。まさしく借りてきた猫（ねこ）状態であった。
　お祖父さんの前ではこんなにしおらしくなるのか……
「響子ちゃんと事件のことを話していたらこんな時間になってしまって……門限があるとは知らずに、申し訳ありませんでした！」わたしはもう一度頭を下げる。「今度からはちゃんとお家にお返ししますので、今日のところはどうか……叱（しか）らないであげてください」
「はっはっは……響子が連れてくる子はどんな子かと思ったが、なるほど、なるほど。五月雨君、どんなルールにも例外はあるのだよ。たとえばそう、探偵活動に関わることなら、私はどんなことであろうと響子を許すつもりでいる」
「それじゃあ……」
「門限など――くそくらえじゃ！」
　彼はそう云って、豪快（ごうかい）に笑った。
　ああ……思っていたよりも話が通じる人でよかった。
　いきなり組み伏せられて胸まで触られてどうなることかと思ったけど、思っていたよりも心の広い人のようだ。あるいは孫に甘いだけだろうか？
　ともかく鬼瓦（おにがわら）みたいな顔をした頑固（がんこ）じじいでも出てくるんじゃないかとひやひやしていただけに、わたしは心底ほっとしていた。
「はっはっ……私のことを鬼瓦みたいな顔をした頑固じじいだとでも思っていたのかね？　顔にそう書いてあるぞ」
「す、すみません」
「霧切の名のもとでは、探偵こそが絶対。『家族の死に目に会うことよりも、探偵活動を優先させよ』

──響子よ、これが霧切家に伝わる言葉の一つだったね？」

「はい、おじいさま」

「うむ。私も響子が一流の探偵になってほしいと心から思っている。そのためなら、門限など撤廃しても構わん！」

「本当ですか？」

　霧切は驚いた様子で尋ねる。

「そのうちな。響子が立派になったら」

「はい、私、立派な探偵になります」

　霧切は目を輝かせて応じた。

「よしよし、いい子だ」

　孫の頭を撫でる祖父。

　霧切は嬉しそうに目を細めている。

　なんだか……異様な関係だけど、とても幸せそうに見える。

「ついでなんですけど」わたしは二人に水をさすように口を挟む。「明後日から『黒の挑戦』の事件を解決するために、外泊することになりそうなんです……あっ、もちろんわたしも一緒です。構いませんか？」

　わたしは尋ねる。

「ああ、構わんとも」

　あっさりと許可が下りた。

　場合によっては死の危険性もある場所へ、孫を送り出すことにはなんのためらいもないようだ。それに彼は『黒の挑戦』という言葉に対して、特に反応を示さなかった。

　はたして霧切の祖父は犯罪被害者救済委員会について、何処まで知っているのだろう。

　少なくとも『黒の挑戦』については、霧切から聞いているはずだ。それ以上に、根幹に関わる部分を知っている可能性がある。

　名探偵であり、探偵図書館の設立に関わっているという条件が合致する人間は、そう多くないはずだ。

　それとも他に該当する人物がいるのだろうか？

　わたしはそのことについて尋ねるべきかどうか迷っていた。

　逡巡しているうちに、老人が先に口を開いた。

「それじゃあ五月雨君も事件に備えてそろそろ帰りなさい。今夜は冷えるぞ。車を出そうか？」

「あ、いえ、大丈夫です」

「そうか。ではくれぐれも――響子をよろしく頼む」
「はい」わたしは深々と頭を下げ、心を決める。「あのっ、もう一つお尋ねしたいことが……」
　顔を上げると、そこにはもう老人の姿はなかった。
「あれっ？」
　周囲を見回しても、何処にもいない。
　消えた……
「何しているの、結お姉さま。おじいさまなら家に戻ったわ」
　門の傍に立っていた霧切が云った。
「……まったく気づかなかった。もっと聞きたいことがあったのに」
　自然と重たい息が零（こぼ）れる。
　緊張が解けて、一気に疲労感に襲われた。
「ごめんなさい、お姉さま。迷惑をかけたわ」
「ひどい目にあった……ま、君のためなら胸くらい揉（も）ませてやるよ」わたしはコートの汚れを払いながら云う。「でも理解あるお祖父さんでよかったじゃない。教育熱心なのは想像通りだけど」
「ねえ、結お姉さま。一つ、訊いてもいい？」
「なあに？」
「『家族の死に目に会うことよりも、探偵活動を優先させよ』……これって、おかしなこと？」
「え？　う、うーん……」わたしは首を傾（かし）げる。「おかしいというか、厳しいなあって思うけど」
「厳しい？」
「それくらい探偵活動に打ち込めっていう意味でしょ？」
「ううん、違うの。霧切家の人間にとって、探偵としての仕事は家族の死よりも重要なことなの。たとえや言葉のあやではなくて、遵守（じゅんしゅ）すべき教えなの」
「そっか……」
「おかしい？」
「ちょっと普通じゃないかもしれないけど……でもすごいと思うよ。それだけ探偵であることに誇りを持っているということでしょう？」
「普通じゃない？」
　霧切はしつこく食い下がる。
　どうしたんだろう。
　霧切家の教えに疑問を抱いている？

探偵であることに誰よりも確固としたプライドを持っている彼女が、自分を探偵として育てた教えに疑問を感じることなどあるのだろうか。

「君はどう思うの？」

尋ねると、霧切は時間をかけて考え込み、ようやく口を開いた。

「私は……おかしいとは思わない」

「そうか。やっぱり君はかっこいいね。そういうふうに云えるんだから」

「でも……そう思い込んでいるだけなのかもしれない」霧切は顔を逸らして云った。「そうしないと自分が空っぽになってしまうから……」

探偵として生きる彼女。

彼女にとって、生きることと探偵であることは同じ。

それこそが彼女のすべて。

けれど――

「大丈夫だよ。わたしがいる限り、君は空っぽになんかならないし、させないよ」

わたしは彼女の腕を引いて、彼女を抱きとめ、小さな背中をぽんぽんと叩いた。

「私、このままでもいいの？」

霧切はわたしを見上げて云う。

「もちろん。君はこの世でもっともクールで純粋(ピュア)な探偵だ。そうでしょう？　明日からまたわたしと一緒に頑張ろう」

「……うん」

霧切はわたしから離れると、門の戸に手をかけた。

「またね」

わたしが手を振ると、霧切は少しだけはにかむように目を伏せて、門の向こうへ消えた。

わたしは雪の降る道を、寮(りょう)へ急ぐ。

門限といえば……

すっかり寮の門限が過ぎている。

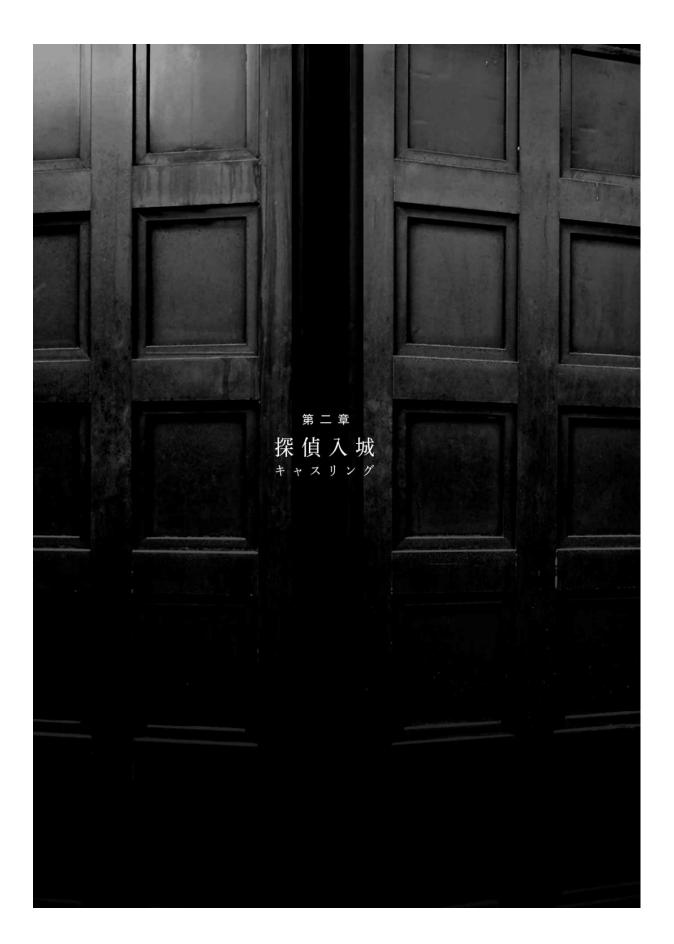
寮の管理人さんにばれないように、わたしはこっそりと窓から部屋に入った。

クリスマスの夜に門限を破(やぶ)るなんて……

なかなか素敵だ。

第二章

探偵入城

キャスリング

ノーマンズ・ホテルは、周囲を山林に囲まれた大自然の中に、孤立するように建てられている。外観はゴシック風で、いかにも場違いな過剰装飾でごつごつとして、重厚な印象だ。槍のような鉄柵に敷地を囲われ、庭には生気を欠いた木々が点々と植樹されている。

ホテルとして創業が始まったのは二十年前。豪華な客室に、地元の食材を使った料理は、旅行客を楽しませていたらしい。しかし営業は五年ほどしか続かず、たちまち廃業する。人里離れた立地のせいだろうか――あるいは何かひきつけるものがあったのだろうか――宿泊客の自殺が何件か続き、ホテルの評判は最悪だったという。

しかし実際にホテルを廃業に追い込んだのは、ある殺人事件だった。

ある夜、宿泊客の男が突然叫び声を上げながら、次々に客室を襲撃した。男は手にした巨大なハンマーで扉を破壊すると、ベッドで寝ている客の頭部を潰して回り、一晩の間に十三人を殺害した。

後日、逮捕された男は語った。

『壁の中から誰かがこっちを覗いていやがったんだ！　俺が悲鳴を上げると、そいつは俺の首を絞めてきやがった。だから俺は反撃しただけなんだ。正当防衛なんだ！』

男は『壁の向こうにいる誰かに襲われる』という妄想を抱いており、部屋を一つ一つ移動しては、壁の向こうの人間――すなわち隣室の人間を殺したようだ。結果的に十三人も殺害したのは、『壁の向こうにいる誰か』の妄想を最後まで拭い去ることができなかったからだと考えられる。

この奇怪な殺人事件により、ホテルは営業停止を余儀なくされた。経営は破綻し、やがてホテルから人が消えた。

それから建物は十五年近く放置されたまま、不気味な廃墟となっている。

そして――

今にも雪が降り出しそうな空の下、わたしと霧切響子と七村彗星の三人は、『黒の挑戦』の舞台として姿を変えたノーマンズ・ホテルの前に立っていた。

ホテルはそのおぞましい過去を隠すように、エントランスの入り口を固く閉ざして、わたしたちを待ち構えている。

ここまでわたしたちを運んでくれたタクシー運転手は、逃げるように帰ってしまった。地元の人間にとって、この廃墟ホテルは忌まわしい存在になっているようだ。

「午前十時ジャスト。きりのいい数字は美しい」七村は腕時計を確認して云った。「残り１２０時間」

「今から計算すると、新年明けて元日の午前十時が、タイムリミットなんですよね」わたしは云った。「最

悪の場合、こんな物騒（ぶっそう）なところで年越しするわけですけど……」

「最悪はないと考えていただこう。この私の異名（いみょう）をお忘れかね？　『激情にして最速（アレグロ・アジタート）』――事件を解決する速度に関しては、私に並ぶ探偵はいない」

「期待しています」

　本音だ。

「では、いざ参（まい）ろうか」

　指揮者のように腕を振りながら、七村は鉄柵に設けられた門を開け、エントランスに続く飛び石の歩道を歩く。わたしと霧切も彼に続いた。

　途中、歩道の脇にポールスタンドの小さな看板（かんばん）が立てられているのに気づいた。わたしはなんとなくそれを覗き込み――息を呑んだ。

「霧切ちゃん、これ」

　霧切と一緒に、金属製のプレートに書かれているその文字を読む。

　ノーマンズ・ホテルにようこそ

我々はお客さまの
いかなる要望にも
お応えいたします。

　一見すると普通だが、よく見ると『要望』の『要』の字が、赤いマジックで塗り潰され、その横に『絶』の字が書き込まれていた。

　ノーマンズ・ホテルにようこそ

我々はお客さまの
いかなる絶望にも
お応えいたします。

ノーマンズ・ホテルにようこそ
我々はお客さまの
いかなる望にも
絶
お応えいたします

「前の事件の時にも同じようなものがあったよね。どういうことなのかな、これ」
「犯罪被害者救済委員会のゲームだということを示しているのではないかしら。あるいは……」
「あるいは？」
「ただの遊び心」
　霧切はそっけなく云って、看板には興味をなくしたように歩き出した。
　こちらは命を懸けているというのに、主催している連中にとってはあくまでゲームということか。こうしてわたしたちが驚いている様子を見て、彼らは大いに笑っているのかもしれない。
　二度と彼らの思い通りにさせるものか。
　でも……はたして巧くいくだろうか。そもそも今回は、わたしは探偵役ではなく、ただの同行者にすぎない。
　しかも予習の時間は一日しかなかった。寮にいる子からパソコンを借りて、インターネットで情報を検索してみたけれど、ホテルの経歴以外のことは何もわからなかった。犯人がこの廃墟ホテルで何を企んでいるのか、想像すらできない。
「凶器の中に拳銃や車まであったけど、犯人はどうやって人を殺すつもりなんだろう？」
　わたしはそれとなく霧切に話しかけてみる。
　霧切は肩を竦めて首を振るだけで、何も答えなかった。彼女はいつもの制服姿に、いつもの冷静な顔つきで、まるで登校するのと変わらない様子だ。わたしのように気負うこともなく、緊張している雰囲気もない。まったく、頼もしいロリっ子だ。
　エントランスまでの歩道を抜け、わたしたちはいよいよ扉の前に立つ。
　太い取っ手のついた両開きの扉だ。現代的なホテルにはおよそ見られないタイプの玄関扉だろう。もしかしたら、犯罪被害者救済委員会の手で改造が施されている可能性もある。
　七村が扉に手をかけた。
「ここから先は、何があってもおかしくない。罠が仕掛けられているかもしれないし、すでに屍体が山ほど転がっているかもしれない。諸君、ハートのスタンバイはオーケイかね？」
「はい！」
　わたしは精一杯強がって答える。
　七村はウインクで応じて、扉を開けた。
　そこは――玄関用の小部屋だろうか、三人も入れば一杯のごく狭いスペースになっていた。すぐ正面にまた別の両開きの扉がある。一体なんのための部屋だろうか。靴を履き替えるわけでもなさそうだ。
「ふむ、先へ進むぞ」

七村はさらに正面の扉の取っ手を摑む。
　扉が開くと、急に視界が開けた。
　ホテルのロビーだ。天井（てんじょう）から巨大なシャンデリアがぶら下がっていて、眩（まぶ）しいほどに輝いている。広さとしては、体育館くらいといえばいいだろうか。かなり広い。床には赤々とした絨毯（じゅうたん）が敷（し）かれ、片隅には待ち合い用のソファやテーブルも置かれている。廃墟というわりには、荒廃している箇所はなく、かなり清掃されている印象だ。
　わたしたちが周囲に目を配（くば）りながら、中へと歩みを進めると――
「ああーっ！　待て待て！　ドアを閉めるんじゃないっ！」
　ロビーじゅうに声が響き渡る。
　仰々しいタキシードを着た白髪の男性がソファの近くに立っていて、わたしたちの方を指差しながらわめいていた。
「な、なんですか？」
　わたしは大声で尋ね返す。わたしと男との距離は、十五メートルくらいはあるだろうか。
「ドアじゃ！」
「ドア？」
　振り返って、今入ってきた扉を見る。
　特に異変はない。
　両開きの扉は、しっかりと閉じられている。
「……遅かったか！」
　タキシードの男性はわたしたちに向かって伸ばしていた手を、力なく下ろした。
　ソファには他にも数名の客が座っているようだ。
「結お姉さま」
　霧切が扉の取っ手を摑み、前後に揺（ゆ）すっている。
「どうしたの？」
「扉が開かないわ」
「えっ？」
　わたしも一緒に取っ手を引いてみる。
　扉は鍵がかかったように開かなくなっていた。見たところ鍵穴は見当たらない。オートロックというやつだろうか。
「そのドアは、こちら側からは開けられないみたいなんじゃ。わしらは閉じ込められておったんじゃよ。もし

開けたままにしておいてくれれば、出られたかもしれんというのに」
　タキシードの男性が恨（うら）みがましく云いながら、わたしたちの方へ近づいてきた。
　白髪に長いあごひげが印象的な高齢の男性だ。タキシードがよく似合っていて、古い時代の写真から抜け出してきたかのような趣（おもむき）がある。
「ひぃ、ふぅ、みぃ……これで十人か」
　ソファから別の男性が立ち上がる。
　スーツに蝶（ちょう）ネクタイの気取った男だ。中肉中背（ちゅうにくちゅうぜい）で若々しい。おそらく二十代だろう。
「もしかしてお前らの中に、探偵がいるんじゃねえのか？」
　蝶ネクタイの男はわたしたちを指差して云う。
「どうしてわかったんですか？」
　わたしは思わず反応する。
「やっぱりそうか」男は得心（とくしん）がいったように、にやりと笑う。「いよいよこれで、準備が整（ととの）ったというわけだな」
「あの……一体どういうことなのか、説明してもらえますか」
「これを見なさい」
　タキシードの男が、わたしに紙切れを突き出した。
　そこには赤い文字で、何かの説明のようなものが書かれていた。

『オークションに参加される皆さまへ

　このたび、我々の開催する秘密オークションへのご参加、ありがとうございます。今回出品される品は、前代未聞（ぜんだいみもん）、唯一無二の代物（しろもの）となっておりますので、どうかご期待ください。
　なお、ご参加いただく皆さまにご注意があります。
　オークションを開催するには、規定となる人数――『十人』が必要となります。それ以上でも、それ以下でも、オークションは開催されませんのでご注意ください。
　また、十人の中に一人、探偵が必要となります。
　以上、二つの条件が整い次第、その日の午後六時に最初のオークションが開催されます。
　条件が整うまで、開催は順延（じゅんえん）されますのでご注意ください。お早いご到着の方々は、それまでの間、このロビーでお待ちください。

エルカッサムズ・オークション』

「オークション……？」
　わたしが首を傾げると、同時にタキシードの男も首を傾げた。
「うむ？　君たちはオークションに参加するためにここを訪れたのではないのかね？　ほら、こういうものを受け取らなかったか？」
　男は上着の内ポケットから、真っ黒な封筒を取り出した。
　その封筒と封蠟には見覚えがある！
　奇妙なマークの施された封蠟――犯罪被害者救済委員会だ。
「ちょ、ちょっとそれ見せてください」
「ああ、構わんぞ」
　わたしはひったくるようにして男から封筒を受け取り、中を検(あらた)める。中には黒くて分厚いカードのようなものが入れられていた。

『ご招待

　このたび、鳥屋尾(とやのお) 充(みつる)さまにエルカッサムズ・オークションへの参加が認められたことをお伝えいたします。つきましては、所定の日時に、オークション会場へと足をお運びください。

　日時　十二月二十六日　午後五時
　場所　ノーマンズ・ホテル
　ドレスコード　フォーマル

　なお、最大で七日間にわたるオークションとなりますので、宿泊の準備をご用意ください。宿泊費は無料となります。

エルカッサムズ・オークション』

わたしと霧切は一緒にカードを覗き込み、それから状況を理解したように、お互いに肯き合った。

　どうやら彼らはオークションへの参加という名目で、『黒の挑戦』の舞台に誘き出されたようだ。偽りの招待状で被害者を集めるのは、前回の事件と同じ手口だ。

「あ、英語の苦手なわたしでも気づいちゃった。エルカッサムはmassacre（皆殺し）の逆さ綴りのつもりなんでしょ。つまり——皆殺しオークション」

「な、何を云っておるんだね、君」白髪のタキシード男は動揺している。「エルカッサムズというのは、サザビーズやクリスティーズに次いで有名なオークショニアじゃ。田舎もんは知らんかもしれんがな。少なくともわしはそう聞いとる！」

「どういう経緯で、この招待状が届いたんですか？」

　わたしは男の言葉には取り合わずに、質問する。

「この前、ある場所で小規模なオークションが行なわれたんじゃが、その時にエルカッサムズの代理人から誘われたんじゃ。何しろ他では扱わない逸品を競売にかけるというもんじゃから、楽しみにしておったんじゃが……わしは昔からオークションで骨董品を物色するのが趣味でな」

「えーと……鳥屋尾さん？　あなた、騙されていますよ」わたしははっきりと告げる。「こんな廃墟ホテルで、サザビーズみたいなオークションが行なわれるわけないじゃないですか」

「秘密オークションだというもんじゃから！」鳥屋尾はむきになっているようだ。「こういう怪しげな場所でやるもんかと納得しとったんじゃ！　しかし……状況から考えて、わしらは騙されたんじゃないかと、さっきまでみんなで話し合っていたところじゃった」

　鳥屋尾の他にも、蝶ネクタイの男をはじめ、着飾った男女が数名いる。彼らは全員、秘密オークションの誘いに騙されて集まったのだろうか。

「何しろ、一度入ったらアウト、イノシシ捕りの罠みたいに、建物の外へ出られなくなってるじゃねえか。こりゃあ、いよいよしゃべえことになったと途方に暮れていたところに、あんたらが来たってわけだ」

　蝶ネクタイの若い男が近づいてきて、訛りのある喋り方で云う。

「出られないって……窓から出ることもできないんですか？」

「まずここにある窓にはすべて頑丈な鎧戸が下ろされていて、どうにもならねえ。俺の剛腕も受けつけねえくらいだ」

　彼は色白の細い腕を見せつける。

「他の部屋の窓とか、裏口とかは？」

「残念だが、ここ以外の場所には行けねえようになっている。このロビーには扉が四つあるが、どれも開

かねえんだ」
「じゃあ、みなさんは昨日からずっとここに閉じ込められていたということですか？」
「そうだよ。なんだかんだで一晩明かしちまったってわけ」
　蝶ネクタイの男は両手を広げて、嘆息（たんそく）する。
「しかしようやく十人集まったということは、ついにオークションが開催されるのではないか？」
　鳥屋尾は目を輝かしながら云う。
「招待状が嘘なら、オークション自体が嘘かもしれねえぜ？」
　蝶ネクタイの男が応える。
　招待状の送り主が『黒の挑戦』の犯人であることは間違いない。しかし実際にオークションを開催するかどうかはわからない。ただの誘い文句の可能性もあるだろう。
「オークションがないのなら、なんでわしらはここに閉じ込められているんじゃ」
「んなこと、俺にわかるわけねえだろ」
　二人の男が口論を始める。
　わたしはうんざりした気分で二人を眺めながら、仲裁（ちゅうさい）の言葉を探していた。
　するとそこに、七村が一歩踏み出す。
「落ち着きなさい、諸君」
　彼はわたしたちの注目が自分に集まるのを充分待ってから、続けた。
「我々が閉じ込められたのは事実のようだ。それならもはやすべきことはただ一つ、ここから出ること。そうではないかね？」
　七村は広いロビーを悠然（ゆうぜん）と歩き回りながら、誰にともなく尋ねる。演劇めかした口調は、主導権を握（にぎ）るための手法だろうか。
「出る方法はいろいろ試（ため）した」鳥屋尾が白いあごひげを撫でながら云う。「しかしいずれも叶わぬから、わしらは昨日からここで一晩待ったんじゃ」
「いやいや、諸君らはまだ本気ではないようだ。おそらくはまだ、命の危険を感じてはいない」
　七村はソファに座っている人たちの前を通り抜けると、そこに置いてあるテーブルに近づいた。天板の分厚いローテーブルだ。
　何を思ったのか、彼は突然テーブルを持ち上げた。かなり重そうだが、苦心している様子はない。意外と力持ちだ。
　そして壁際までそれを運ぶと――
　壁に向かって投げつけた！

ちょっとした事故でも起きたかのようなクラッシュ音と、飛び散る破片。そして女子たちから上がる悲鳴と、男たちの動揺の声。
　重々しいテーブルを叩きつけられた壁には、巨大な穴が開いていた。
　しかし――
「ふうむ、コンクリートの内壁か」
　七村は穴の中に手を突っ込んで云う。
「あ、あんた、いきなりしゃべえことしてんじゃねえよ！」蝶ネクタイの男が七村に駆け寄っていく。「何ぶち切れてんだよ！」
「壁を壊して抜け出すのは無理そうだな」
　七村は腕組みしながら、壁から離れる。
　さすが『激情にして最速』の七村彗星、やることが急で過激だ。
「我々を逃がさない工夫が徹底されているようだ。なるほど、一事が万事この調子だとすれば、脱出は難しい。どうやら犯人は目的を果たすまで、我々を閉じ込めておくつもりのようだね」
「だからさっきからそう云ってるだろ！　つうか犯人……？　犯人ってなんだよ、おい」
「説明は省く」七村は空いているソファの一つに腰かけると、足を組んだ。「午後六時まで……あと七時間以上あるな。これも犯人の作戦の一つか。私は待つということがこの世でもっとも苦手なのだよ」
「オークションが開催されるのを待つんですか？」
　わたしは尋ねた。
「そうする他あるまい。すでに犯人によってレールは敷かれている。我々は何処へ運ばれていくのか……お手並み拝見といこうじゃないか」
「そんな、悠長な……」わたしは七村の傍に近づき、小声で耳打ちする。「ここのこと、警察には連絡していないんですか？」
「当然だ」七村は鼻白んだ様子でわたしを見返す。「これは探偵と犯人の真剣勝負。そんな無粋なことはしないよ」
「人の命が懸かっているんですよ！」
　わたしは反発するように云って、コートから携帯電話を引っ張り出した。
　七村が頼りにならないなら、自分で警察に通報するしかない。
　ところが画面を見ると、『圏外』の文字。
「あ、あれ……？　タクシーから降りた時にはアンテナマークが立っていたのを見たんだけど……」
「この建物内では、ケータイがジャミングされているみたいだ」

ソファに座っていた男の一人が口を開いた。
　さっきからずっと気になっていたのだけど、その男は野球帽に大型のサングラス、そして上下とも野球のユニフォームを着用していた。他の人たちが全員、フォーマルな服装なので、余計に浮いて見える。サングラスのせいで顔は見えないが、渋（しぶ）い顔つきの中年男性だ。
「ジャミング……？」
「電波妨害のことさ。基地局と同じ周波数でケータイをだまして『圏外』にさせる……一般に劇場や病院、公共施設で利用されている。電波というものは目に見えないからね、意外と気づかないうちに、僕らは権力に弄（もてあそ）ばれているのだよ。ふふ……」
　男はサングラスを押し上げながら云う。
「ここではケータイは役に立たないということですか？」
「役に立っていたら、一晩もここでこうしてないさ」
　野球帽の男は肩を竦めた。
　外から応援を呼ぶことは不可能。
　犯人はわたしたちをここに閉じ込めて、事件をコントロールするつもりなのだろう。
　すでにゲームは始まっている。
「皆さん全員、オークションに参加するために集まったんですか？」
　わたしは用心深く全員の顔を窺いながら尋ねた。
　彼らは肯く。
「そうだな……新入りが増えたことだし、自己紹介をやっとこうか。前に一度やったんだが、新入りのためにもう一回な」
　蝶ネクタイの男が云った。
「すみません、お願いします」
「そんじゃ、俺から」
　そのまま蝶ネクタイの男が続ける。

水無瀬有全（みなせゆうぜん）（25）　フリーター

「俺は水無瀬有全、二十五歳、フリーターだ。実家は旧華族（きゅうかぞく）の大地主……だったが今では、都会にしがないマンションを建てて、その管理をやってる。俺は仕送りでバイト生活。それでも俺には旧華族のしゃべえ血が流れているんだ。いつか必ず、ビッグに返り咲いてやるつもりだ」

「オークションにはどうして参加することになったんですか？」

「俺は普段、ネットオークションの転売で小銭を稼いでいるんだが……この前取引したやつが、この秘密オークションのことを教えてくれたんだ。もちろん招待状もくれたぜ。ま、正直オークションは怪しいと思ってたけど、ちょっとしたオフ会のつもりで来てみたら、このザマさ。まったく、しゃべえよな」

　見た目は気取り屋の青年といった風貌。けれど何処か軽薄そうな印象を拭えない。いわゆるドラ息子という言葉が似合いそうだ。蝶ネクタイ姿も、なんとなくコメディの衣装に見えてきた。

「んじゃ、次、時計回りでじいさんの番」

「じいさんとは何かね、じいさんとは」

　水無瀬の指名を受けて、タキシードの鳥屋尾が応じる。

鳥屋尾青雲斎（59）　脱出マジシャン

「わしは鳥屋尾青雲斎――齢五十九の手品師じゃ」

「手品師？」

「まさかフーディーニ以来の世紀の脱出王を知らんとは云わせんぞ。水中逆さ拘束脱出、空中炎上小屋脱出、鉄球落下自動車脱出……全部わしの輝かしい功績じゃ！　こう見えて、数々の奇跡を成功させてきた、脱出イリュージョンの第一人者なんじゃ」

「第一人者って自分で云うかあ？」水無瀬がツッコミを入れる。「笑点とか出たことあんのかよ？　つうか脱出王っていうくらいなら、ここから脱出してみせてくれよ」

「こら、茶化すでない」

　五十九歳という年齢以上に、見た目はもっと老けて見える。白髪とあごひげのせいだろうか。あるいは自らそういうキャラになりきっているだけかもしれない。ステージを降りてもエンターティナーの心がけを忘れてないということだろうか。

「あの……ところでさっきの招待状には、『鳥屋尾充』と書いてありましたけど」

　わたしは尋ねる。

「そっちが本名じゃ。青雲斎は芸名」

　なるほど。

茶下昭雄（ちゃげあきお）（42）　オカルト研究家（けんきゅうか）

「僕は茶下昭雄。四十二歳。特に語るべきこともない男さ……強（し）いて云うなら、この世の陰謀（いんぼう）についてちょっとばかり詳しい男――」

　茶下は野球帽のつばに触れて、意味ありげに顔を伏せる。体型は標準的で、身長もそこそこ高い。ただしスポーツマンに見えず、むしろ不健康そうな印象だった。

「どうしてオークションに？」

「あまり多くのことは云えないんだが……ある夜、僕は仕事場のビルの屋上でUFOを見たんだ」

「は、はあ……？」

「もちろんデジカメで何枚も写真を撮（と）った。UFOを目撃するのは初めてじゃなかったが、ばっちり写真に収めることができて、柄（がら）にもなく興奮したものさ。早速（さっそく）記事にして何処かに送りつけようかと考えているうちに、うとうとしてしまったんだが……気づくと、黒づくめの二人組の男が僕を覗き込むようにして立っていた」

「誰なんですか？」

「さあ、あえて云えば、黒づくめの男たち（メン・イン・ブラック）といったところだ。彼らは僕からデジカメを奪うと、このことは他言しないようにと釘をさしたうえで、オークションの招待状を差し出した。『代わりにいいものをやろう』――男たちはそう云って、姿を消した」

「それ、本当の話ですか？」

　わたしは半信半疑の顔つきで尋ねる。

「信じるも信じないも、君次第さ」

「ところで……どうして野球のユニフォームを？」

　最大の謎に触れる。

「ふふ、これが僕のフォーマルなのさ」

「そ、そうですか……」

　やばい人か？

　あんまり関わらない方がいいかもしれない……

「はい、次、あたしの番！」

美舟（みふね）メルコ（22）　元超能力少女

薄緑色のワンピースドレスを着た女の子が右手を挙（あ）げて云う。ボブカットの朗（ほが）らかな女性だ。少女といってもいいだろうか？　身体つきは幼く、身長も低い。
「あたし美舟メルコ。確か二十二歳、趣味は真空管集め。アンプ作って聞くんだあ。特別な真空管が手に入るって聞いて、喜んでここまで来たのに、こんなことになってしまって……困ってるの！」
　彼女もまた独特な個性を持っているようだ。見た目同様、喋り方も幼い。わたしより年上にはとても見えない。
「彼女は十年ほど前、マスコミを賑（にぎ）わせた元超能力少女だよ」
　茶下が補足する。
「超能力少女……？」
「よくわかんないんだけど、みんなからそう呼ばれてたの」美舟は笑顔で認める。「ちっちゃい頃ね、プリンを食べてたら、いつの間にかスプーンがぐにゃぐにゃに曲がってたの。ママとパパが面白（おもしろ）がって、それからたくさんのスプーンを曲げたんだ。テレビカメラの前でやってみせたこともあるんだけど……あたしはずっと、どうしてスプーンを曲げなきゃいけないんだろうって考えてた……だってプリンが食べづらいじゃん！　なははっ」
「彼女が表舞台で輝いていたのは半年間ほど。それ以降は、インチキだのトリックだの、マスコミは手のひらを返したように彼女を叩き始めた」茶下はサングラスのブリッジを押さえながら云う。「祭りあげて落とすのが庶民（しょみん）の楽しみの一つとはいえ、気の毒なことだ」
「今でもスプーン曲げができるんですか？」
　わたしは興味津々で美舟に尋ねる。
　彼女は小首を傾げながら、しばらく難しそうな顔をして、急にぱっと明るい顔に戻る。
「あっ、できそう！」
「できそう？」
「できそうな感じがしてる。ちょっと見てて」美舟は自分の旅行鞄から、スプーンを取り出した。「いつも持ち歩いてるんだ。こういう時のために」
「お、今度は成功しそうか？」
　水無瀬が覗き込んでくる。
　今度、ということは前にも披露（ひろう）して失敗しているのか。
　美舟はスプーンを右手に持って、親指の腹で真ん中あたりを擦（こす）り始めた。顔は真剣そのものだ。
「うーん……むにゃむにゃむにゃ……」

わたしたちは固唾を呑んで彼女を見守る。
「んなっ！」
　美舟は妙な掛け声とともに、目を見開いた。
　スプーンに変化はない。
「やっぱりだめみたい……」
　彼女はがっくりと肩を落とす。
　彼女と同じように、わたしも脱力感で一杯だった。

新仙帝（30代？）　会社員

「さて、次は私ですね」
　落ち着いた声で、スーツの男性が発言する。
　長身痩軀、しっかりと後ろに撫でつけられたヘアスタイルに、ナイーブさと知的さが垣間見える。一見すると、この中で彼が一番まともそうに見えるが、眉間にしっかりと刻まれた皺に、誰よりも秘密を隠していそうに見えた。
「新仙帝、会社員です」
「新仙さんも、何か目当てがあって、このオークションに？」
「いいえ、私はオークションには興味ありません」
「それなら、何故ここに……」
「見えてしまったからです」
「見えてしまった？」
「運命――とでも云うのでしょうか。あるいは不吉な兆し、うつし世の夢……私は占い師や予言者ではありませんが、見えてしまうのです。その場に起きた死と、その場に起きるであろう死が。つい気になってしまいまして、立ち寄ってみた結果が、この通りです」
「死が――見える？」
「必ずしも死とは限りません。しかし多くの場合それは恐るべき凶兆……」
　彼は穏やかな声と、穏やかな表情で、不気味なことを淡々と口にする。
「一体、何が見えたんですか？」
「具体的に何かが見えたというわけではありません。それはあくまで実体を伴うものではなく……しかしあ

えて視覚的に説明するとすれば、黒い影を思い浮かべてください――あなたにとってもっとも恐ろしい形をした黒い影を」
　新仙の言葉を聞きながら、茶下が冷や汗を浮かべて、小刻みに震え出した。他の者たちは、話半分といった顔つきで新仙を遠巻きに見ている。
　わたしは新仙の言葉を完全に否定することはできなかった。
　何故なら、同じような感覚を持つ者を知っているからだ。
　霧切響子――彼女もまた、身の回りに起きる危険や死を事前に察知（さっち）する能力を持っている。彼女はそれを『死神の足音を聞く』と説明していた。実際に聴覚として感じる音なのかどうかはわからないが、新仙の場合はそれの視覚バージョンとでもいうべきものなのかもしれない。
　そして彼の感覚は正しい。この廃墟ホテルは、かつて陰惨（いんさん）な殺人事件の舞台になった場所であり、これから『黒の挑戦』の舞台として殺人事件が起きるかもしれない場所なのだ。
「杞憂（きゆう）ですめばいいのですが」
　新仙は俯（うつむ）きながら、髪（かみ）を後ろへと撫でつける。彼自身は否定していたが、こうして見ると占い師どころか、シャーマンの風格だ。この世の闇や負を多く目の当たりにしてきたかのような、深刻そうな顔つきだった。
「彼はオークション参加者じゃないわけじゃが、はたして人数としてカウントされるんじゃろうか」
　鳥屋尾が困ったような顔で云う。
　その答えは、この状況を陰で支配している犯人しか知り得ない。
　当然ながら、答える者はいなかった。

夜鶴冴（よづるさえ）（21）　未亡人（みぼうじん）

　ソファの肘掛けにしなだれかかるようにして、彼女はだらしなく座っていた。時計回りの自己紹介は彼女の番だったが、眠っているのか、顔を伏せたままだ。ロングの黒髪が美しく、はだけた胸元と太ももが妖艶（ようえん）だ。よく見ると彼女が着ているのは喪服（もふく）のようだ。
「夜鶴さん、あなたの番ですよ」
　新仙が話しかける。
　すると彼女はけだるそうに上半身を起こして、髪をかきあげた。
「んん……ありがとう、起こしてくれて。もう少しで死にたい気分が最高潮（ちょう）になるところだったわ……」夜

鶴は寝ぼけたような目つきでわたしを見やる。「また新しい人が増えたのね。……あ、また死にたくなってきた」
「彼女たちを合わせて十人になりました」
「オークション、始まるの？」
「おそらく」
　新仙は夜鶴とは目を合わせずに答える。
「そう……これで死んだ主人も浮かばれるかしら」
「あの……」
　わたしが言葉に困っていると、夜鶴は察したように口を開いた。
「私は夜鶴冴。この前、主人が亡くなって、今は独りなの。彼はここの招待状を遺して逝ったわ」
「ご主人から何か説明を受けていたんですか？」
「いいえ」夜鶴はつらそうに目を閉じて云う。「主人は無口な人でした。だからこそ、主人が何を求めていたのか知りたくて、ここに足を運んだの」
　彼女は云いながら、眠るように沈黙してしまった。しどけなく伸ばした腕の、喪服から覗いて見える手首に、リストカットの痕がいくつも見えた。その傷痕こそが、彼女のすべてを物語っているように感じられた。
　これで六人の自己紹介が終わった。
　残り一人――

魚住絶姫（20）　メイド

　七人目は女性で、いかにもメイドっぽいエプロンドレスを着ていた。肩にかかるくらいのセミロングに、ぱっつんの前髪。長いまつげに白い肌。一見するとゴスロリ風だが、化粧や装飾品が質素なので、あくまで業務上の恰好に見える。
「ボクはオークショニアから依頼されて、ゲストの身の回りの世話をするためにここに来た。魚住絶姫、二十歳」
　ハスキーボイスのボクっ子だ。
　わりと嫌いじゃない。
「オークションの招待客じゃないんですね？」

「そうだ。ただし、オークションには参加しても構わないと聞いている」
「依頼というのは？」
「文面で届いた。ボクのすべきことは二つ、食事の用意と部屋の掃除。これだけだ」
　おそらく『黒の挑戦』の犯人が、メイドを一人雇ったのだろう。犯行計画を円滑（えんかつ）に進めるために必要な駒（こま）なのかもしれない。
　廃墟ホテルとはいえ、どうやら寝食（しんしょく）は確保されているようだ。わたしはほっとする。万一のことを考えて、リュックに大量のカロリーメイトを詰めてきたけれど、今回は必要なさそうだ。
『黒の挑戦』は残酷（ざんこく）な殺人推理ゲームである一方、あくまでエンターテインメントショウとしての公正さが根底にある。そもそも復讐を果たすだけなら、犯人はいくらでも卑怯（ひきょう）な行為に出られるはずだ。食事に毒を混入させて全滅させるのもいいだろう。何処かに閉じ込めて餓死（がし）させるのもいい。あるいは夜道でこっそり殴（なぐ）り殺して立ち去るのもいいかもしれない。しかし観客はそれでは熱狂しない。ショウとして提供する以上、ゲームバランスは調整されていなければならない。わざわざ探偵が召喚されるのも、そういう公正さによるものだろう。
　わたしはふと気づいて、周囲を見回す。
『黒の挑戦』の一部始終は、隠しカメラによって撮影されているらしい。生放送なのか、それとも録画して編集するのか、どちらなのかはわからないが、たった今もわたしたちはゲームの登場人物として観察されている。
　当然ながら、カメラは何処にも見当たらない。極小のカメラで、なおかつ巧妙に隠されているらしい。願わくは、トイレやバスルームには仕掛けられていないことを祈る。
「次はお前らの番だぜ、新入りさんたちよ」
　水無瀬がわたしを指して云う。
「あ、そっか。わたしたちも自己紹介しなきゃいけませんね。その前に、ちょっと……」
　わたしは七村の近くに駆け寄り、ひそひそと話しかける。
「事情を話しちゃってもいいんでしょうか？」
「構わないよ。むしろ私の手間が省けるから、君にお願いしたいね」
「了解です」

五月雨結（16）　女子高生　DSCナンバー『８８７』

「――というわけで、わたしたちは犯人を捕まえるために来た探偵です」
　ノーマンズ・ホテルに来た理由を全員の前で説明する。ただし『黒の挑戦』や犯罪被害者救済委員会については、わざと説明を省いた。犯人しか知り得ない情報を残しておいた方がいいと判断したからだ。
　簡潔（かんけつ）に『殺人をほのめかす犯行予告があった』というふうに伝える。
「よ、よく意味がわかんねえんだけどさ……うーん……」水無瀬が唸（うな）りながら云う。「要するにお前らは俺らを助けに来てくれたってこと？」
「簡単に云えばそういうことになります」
「でもお前らも一緒に閉じ込められてるじゃねえか」
「うっ……それは……まさかこんな状況になっているなんて思わなかったので……」
「それでも探偵かよ」
　水無瀬の言葉が胸に刺さる。おそらく彼に悪意はないと思うけれど、確かにわたしたちはもっと慎重に行動すべきだったかもしれない。
「その犯行予告がいたずらだったという可能性は？」
　茶下が尋ねる。
「あいにく、その可能性はないと思います。犯人は年明けまでの間に、絶対になんらかの行動を起こします」
「年明けといったら……あと五日くらいあるじゃないか」鳥屋尾を指折り数えながら云った。「まさかそんな先まで、ここに閉じ込められるかもしれないというのかね？」
「はい」
　極力、冷静を装（よそお）って答える。
　彼らを混乱させるわけにはいかない。
「で、でも安心してください。わたしたちが来たからには、事件なんて起こさせません。わたしはともかく……七村さんも、そこにいる彼女も、とっても優秀な探偵なんです！」
「まさかそのちびっ子も探偵なのか？」

霧切響子（13）　女子中学生　DSCナンバー『９１７』

「そうなんです」わたしは不機嫌（ふきげん）そうな顔をして黙り込んでいる霧切に代わって云う。「彼女がいる限り

犯人に好き勝手なことはさせません！」
「えー？　その子、頼りになるのお？　あたしの超能力の方がまだ頼りになるんじゃない？」
　美舟はソファで足をぶらぶらさせながら云う。未だにスプーン曲げに挑戦している。
「彼女の才能はわたしが保証します」
「お前に保証されても」水無瀬が口を挟む。「そもそもお前ら信用できるのかよ。まさかお前ら、オークションをぶち壊しに来ただけなんじゃないのか？」
「そ、そんなことありません！　わたしはこれでもDSCのランクでは『7』ですよ。探偵図書館のカードだって持ってます！　それに彼女は由緒（ゆいしょ）正しい霧切家の――」
「結お姉さま、云わなくてもいいわ」
　霧切がわたしを遮る。
　彼女は耳にかかった髪を後ろに流しながら続けた。
「忘れたの？　今回、私たちはゲームの参加者の一人に過ぎない。ただの高校生と中学生でしかないのよ」
「そ、そうだけど……」
「本当の探偵はそこにいる人よ」霧切は七村を指して、みんなに向けて云う。「もし何かあった時、頼るなら私たちよりも、彼を選んだ方がいいと思うわ」
「ちょっと、霧切ちゃん。職務放棄（しょくむほうき）するようなこと云わないでよ」
「いいえ、事実よ。彼には探偵の特権があるのだから」
　探偵の特権――それは『黒の挑戦』におけるルールのことだろう。探偵はゲームにおいて重要な役なので、排除されることはない。つまり殺害されることはないので、唯一安全が確保されている人物ということになる。
「いかにも！　すべてこの私に任せておけ」

七村彗星（37）　名探偵　DSCナンバー『９００』

　七村は腕を掲（かか）げると、高らかに指をパチンと鳴らした。
　一瞬で注目が彼に集まる。
　懐疑（かいぎ）的だった水無瀬たちでさえ、七村には何も口出しできずにいた。
　これがカリスマというやつだろうか。

「これからどうするんだよ。探偵さんよ」
　水無瀬は落ち着かない様子で尋ねる。
「予定通り、オークションを待つ」
「六時までこうしてろっていうのか？」
「退屈ならバスケでもするかね？　広さは充分だし、ちょうど五人ずつだ。もちろん私はバスケでも負けるつもりはないよ」
「ゴールがないだろ」水無瀬は鼻で笑って返す。「ったく、こちとら一日こうして時間潰して待ってるんだぜ。そろそろ気が狂いそうだ」
「それならやはり、身体を動かすことをお勧めするよ。一日中ソファに腰かけていたのだとしたら健康を害しかねない。それに君が素早く動くことにより、君から見える世界はそれだけ早く時が流れる。相対性理論のうえではそういうことになっているのだから、試す価値はあると思うね」
「は？　意味がわからん。何しゃべえこと云ってんだ、お前」
　七村と水無瀬の会話は成り立っていないようだ。
　そうしている間にも、着実に時間は過ぎている。無駄話も時間を潰すうえでは有効かもしれない。
「みなさんは昨日からここに来ているんですよね？」わたしは誰にともなく尋ねる。「食事はどうしたんですか？」
「非常用食糧がフロントの戸棚に用意されている」メイド服の魚住が答える。「一人につき七日分の蓄えがある。昨晩、ボクたちはそれを一食分ずつ食べた」
「もともとはどのように指示されていたんですか？」
「『現地で指示を待て』とだけ。しかしここにはボクに対する具体的な指示はなく、例の赤文字の紙切れが一枚用意されているだけだった」
「うーん……異様な状況ですね」
　わたしは腕組みして云う。
　今回の『黒の挑戦』は不気味だ。犯人は確実に自分のペースで事件を展開させようとしている。わたしにはまだ、一体何が起きているのか想像もつかない。
　わたしはソファの並べられているエリアから離れて、霧切の隣に立つ。
「どう？　霧切ちゃん」
「まだ何もわからないわ」霧切は首を竦めて、ため息を零す。「七村さんの云う通り、六時になるのを待つしかないわね」
　彼女はそう云うと、その場にぺたんと座り込む。他の人たちと交わるつもりはないらしい。協調性がない

のは、彼女の弱点かもしれない。

わたしはじっとしていられず、一人でロビーの中を調べてみることにした。

水無瀬が云っていた通り、数ヶ所に扉があったが、いずれも固く閉ざされていた。鍵穴も見当たらない。扉自体が頑丈そうなので、斧(おの)やハンマーなどの大きな道具でもなければ破壊は無理そうだ。

フロントをチェックする。

魚住が云っていた通り、食糧はたくさんあるので、餓死することはなさそうだ。ペットボトルのミネラルウォーターも二十四本入りケースが五つあった。

フロントのうしろの壁には、このホテルの構造(こうぞう)を表示したパネルが取りつけられている。

ノーマンズ・ホテル

5F　展望室

4F　客室 401～412

3F　客室 301～312

2F　客室 201～212

1F　ロビー
　　フロント
　　食堂

五階には展望室まであるらしい。もっとも、ロビーから出られないので、行きようもないけれど。

　フロントの奥に小さく区切られた小部屋がある。覗いてみると、小さな事務机が一つ置かれていた。スタッフの待機室だったのだろうか。机の他には何もない。

　そこからさらに奥に小さな扉を見つけた。

　どうせ開かないだろうと思いつつ、ノブに手をかけると、あっさり開いた。

　トイレだ。

　よかった、わたしの懸念（けねん）は一つ解消された。

　トイレから戻ろうとすると、突然、誰かが近づいてきて、わたしを強引（ごういん）にトイレに押し込んだ。そしてその人物は、後ろ手に扉を閉じ、鍵をかけてしまった。

「ちょ、ちょっと！」

　閉じ込められた……！

「静かに」

　魅力（みりょく）的なハスキーボイス。

　メイド服の魚住絶姫だ。

「な、なんのつもりですかっ」

　わたしは小声で抗議する。

　小さな空間の中で、わたしたちはほとんど密着するようにして対峙（たいじ）する。

「危害を加えるつもりはない」

　彼女はエプロンのポケットから、小さなカードを取り出す。

　それは探偵図書館の登録カードだった。

魚住絶姫　DSCナンバー『７５６』

「えっ？　えっ？」

「ボクも探偵だ」

「そ、そうだったんですか……」

「一応、キミのカードも見せてくれ」

「は、はい……」

　わたしはパスケースに入れておいた探偵図書館のカードを提示した。

「確認した。もうしまっていい」
　わたしは云われた通りにする。
「ボクが探偵であることは他の連中は知らない。あの赤文字の指示書に書かれていた探偵というのはボクのことかと思っていたが、違ったようだ。十人集まるまで素性を明かさないでおいてよかった」
「潜入調査(せんにゅうちょうさ)ですか？」
「まあ、そんなところだ。このエプロンドレスも、ここにあった指定のものを着ている。けっしてボクの趣味じゃないからな」
　魚住はエプロンの裾を正(ただ)すように伸ばす。
「『黒の挑戦』を調べているんですか？」
「ん？　そんなものは知らない」
「じゃあ、一体何を……？」
　探偵図書館による分類番号は、頭の数字がその探偵の得意分野を示している。『7』は確か、芸術犯罪だっただろうか。
「ボクは主に贋作(がんさく)にまつわる詐欺(さぎ)事件などを専門にしている」
「贋作……ですか」
「ここ数ヶ月、鳥屋尾を追っている」
「えっ、あのおじいさんを？」
「あの男には気をつけろ。好々爺(こうこうや)ぶっているが、あまたの被害者から巨額の金をだまし取ってきた詐欺師だ」
「詐欺師？」
「ああ、手品師というのは表の顔。裏では贋作を売りつける詐欺師。やつがオークションに参加することを知って、オークショニアにかけ合い、こうしてメイドとして潜入した。しかしまさか、オークションそのものが仕組まれたものだったとは思いもしなかった。キミがさっき云っていた犯行予告というのは本当なのか？」
「はい……」
　わたしはかいつまんで『黒の挑戦』について説明した。同業者なら話しても構わないだろう。
「犯罪組織が一枚嚙んでいるのか――」魚住は口元に手を当てて、しばらく考え込む。「もしかしたら鳥屋尾が犯人という可能性もあるな」
「それなら話は早いですけど……最近、鳥屋尾さんに怪しい動きはありましたか？」
「いや――目立った動きはない」
「もし鳥屋尾さんが犯人だったら、少なくとも何度かここに訪れていると思います。他にもいろいろと『黒

の挑戦』の準備をしていたと思うし……」
「この一ヶ月、二十四時間やつを追ってきたが、やつがここを訪れるのは初めてだ。もっとも、ボクが目をつける前から『黒の挑戦』の準備を行なっていた可能性もある」
「それもそうですね」
「とにかく――鳥屋尾はボクの仕事だ。キミたちは手を出すな。それを伝えたくて、キミを捕まえた」
「わ、わかりました。手出しはしません」
「お互い、有効な情報は共有しよう」
　魚住は右手を差し出す。
　わたしはそれを受けて、握手(あくしゅ)した。
　彼女の手は、まぎれもなく女の子の手だった。
「一緒に出たら怪しまれるかもしれない。キミが先に行け」
　わたしは肯いて、トイレから出た。
　何食わぬ顔でフロントに出て、ロビーに戻る。ソファの置かれているエリアはかなり離れているためか、こちらに注目している人間は誰もいなかった。
　わたしはますます混乱する頭を抱えながら、あてもなくロビーを歩き回る。
『黒の挑戦』に紛れ込んだもう一人の探偵と、詐欺師――これは何か関係があるのだろうか。それとも偶然なのか。
　わたしは霧切のいるところに戻り、彼女の隣に座り込んだ。
「何か見つかった？」
　霧切が試すような目で尋ねる。
　わたしは苦々しい思いで、負けを認めるように首を横に振った。
　霧切は膝を抱えるようにして座り直すと、「ほら、やっぱり」という顔で膝の上に顎を載せた。
　憎(にく)たらしいけど……かわいいから許す。
　魚住という探偵については、あえて黙っておいた。潜入調査をしている探偵のことを云いふらすのもどうかと思ったからだ。
　閉じ込められてからまだ一時間くらいしか過ぎていない。
　まだまだ先は長い。
　はたしてオークションは行なわれるのだろうか？
　そして犯人の目的は――

第三章

探偵の黒い死

ペインティット・ブラック

運命の午後六時が近づいていた。

わたしは霧切の隣で文庫本を読んで時間を過ごした。『十角館の殺人』――大学生が孤島に閉じ込められて次々に殺されていくというミステリ小説だ。物騒な状況で、物騒な小説を読んでいながら、わたしはなんともいえない心の静けさを感じていた。独特の緊張感と焦燥感に、精神が麻痺しつつあるのかもしれない。

七村はソファで足を組んで座ったまま、沈思黙考を続けている。彼が動かずにじっとしている姿はなかなか貴重かもしれない。

その周りで、鳥屋尾と水無瀬と茶下と美舟の四人がトランプで遊んでいた。大富豪がかなり盛り上がっているようだ。

新仙は何か難しそうな本を読んでいる。彼の表情はいつも穏やかで、悟りきっているかのようだ。精神的な懐の深さを感じさせる。

夜鶴は相変わらずだるそうにソファにしなだれかかっている。眠っているのだろうか。時々、喘ぐような声で、意味不明の独り言を呟くのが怖い。

魚住はメイドっぽさをアピールするためか、さっきからフロントの辺りで忙しそうに動き回っている。彼女が探偵だったのは意外だけど……いっそう話がややこしくなった気がする。

七村が腕時計を確認した。

つられて、わたしもケータイの時計を見る。

五分前だ。

トランプで遊んでいた鳥屋尾たちも、そわそわし始める。

「そろそろだよ」

わたしは霧切にささやきかける。

霧切は三つ編みのリボンを結び直しながら、小さく肯いた。

やがてその時が訪れる。

――ガチャリ。

六時を迎えた瞬間、奇妙な音がロビーじゅうに響き渡った。

どうやら他の人たちにも聞こえたらしい。

わたしは首を伸ばして、周囲を確認する。

「何処かのドアが開いたな」七村が立ち上がった。「諸君、私に続け」

七村は音のした方角へ向かっていく。
　そちらには重々しい両開きの扉がある。
　わたしたちはぞろぞろと彼のあとを追った。
　七村が扉に手をかける。
「鍵が開いているな」
　そう云って、ノブを掴む。
　彼は勢いよく、扉を押し開けた。
　いよいよ始まるのだ。
　はたして何が待ち受けているのか……
　そこは、食堂とでもいうべき部屋だった。
　中央に白いクロスのかけられた食卓が置かれ、五対の椅子が対面するように並べられている。椅子の前にはそれぞれ白い皿と、一組のフォークとナイフ。
　天井が高く、二階まで吹き抜け構造になっているようだ。二階ではバルコニー状の廊下(ろうか)が、一階フロアを見下ろすようなかたちで、ぐるりと部屋を一周している。扉を入って正面、食卓を挟んだ向こう側に、そのバルコニーへ上がるための階段があった。
　見たところ窓はすべて封鎖されている。外の様子は窺えない。室内は天井の照明によって煌々(こうこう)と照らしだされている。
　室内に人影はない。
　わたしたちは揃って食堂に入り、観察するように首を巡(めぐ)らした。
　入って左手奥に、奇妙なものが二つある。
　一つは電光掲示板(けいじばん)。デジタルの赤い数字が、現在進行形で変化している。

111:57:48

　最後の数字が『48……47……46……』と減り続けている。水無瀬たちには理解できなかったようだが、わたしにはそれがなんの数字かすぐにわかった。
『黒の挑戦』の残り時間だ。
　そして電光掲示板の横には、電話ボックスほどの箱型ブースが設置されている。正面側が扉になって

いるので、箱の中に出入りできるようだ。

「なんだろ……これ」

「危(あぶ)ないですよ、下手に触らない方が……」

　わたしは水無瀬に注意を促す。水無瀬はびくっと肩を震わせて、箱型ブースから離れた。

　箱型ブースのさらに奥の壁には、暖炉(だんろ)があった。薪(まき)がくべられており、火をつければいつでも使えそうだ。ただし、室内は暖房が効いているので使う機会はないだろう。

『ようこそ、お集まりの皆さん』

　突如(とつじょ)として部屋中に機械音声が響き渡る。

　ホテル全体に放送されているみたいだ。

「だ、誰だっ？」

　水無瀬が狼狽(ろうばい)した様子できょろきょろと周囲を見回す。

　しかしわたしたちの他に人の姿はない。

『私はここだよ、ここ』

　声はするが、姿は見えない。館内放送を使っているということは、放送室のような場所にいるのではないか――

『私はここだよ。少し視線を上に向けてごらん』

　わたしは二階のバルコニーを見上げる。

　室内に向かって突き出したバルコニーの壁に、大きな肖像画(しょうぞうが)がかけられていた。ブラウンの髪の外国人が描かれている。肖像画として描かれているわりには、田舎くさい地味な服装の青年だ。青年はうつろな目で斜め正面を見つめていて――

『そう、正解！』

　その口元が動く。

「ぎゃっ」

　わたしは思わず悲鳴(ひめい)を上げる。

　絵の中の青年が喋った！

「き、霧切ちゃん！　あれ！　あれ！　絵が動いた！」

　わたしは霧切の服を引っ張って云う。

　全員の注目が肖像画に注(そそ)がれるなか、絵の青年は再び口を開いた。

『やあ、私はノーマン。半世紀も前に死んだ殺人鬼だ』
　殺人鬼――？
　なんでそんな人物の肖像画が、食堂の上に飾られているのだろうか。
　というか、どうして絵が喋るのだろう。
　わたしは夢でも見ているのだろうか。
「これは肖像画ではない。液晶パネルだ。このサイズなら25000といったところか」
　七村がいつの間にかバルコニーに上がり、肖像画の横に立って調べていた。つくづく彼の行動の速さには驚嘆させられる。
「なんだ……液晶画面に額縁をかけているだけか」
　水無瀬が安堵の息を零しながら云う。
「よくわかんないんだけど……どういうこと？」
　美舟が首を傾げて云う。
「液晶画面に映し出されている画像が喋っているように見えるということじゃな。喋りに合わせて口パクするアニメーションじゃろ」
「よくわかんないけど怖い！」
　美舟は怯えたようにあとずさりする。
『そんなに怖がる必要はないよ。何故なら私は半世紀前に死んでいるし、絵の中にいるからね。ところで、そろそろ時間になったようだ。お待ちかねのオークションを始めたいと思うんだけど、みんな準備はいいかな？』
「いやいや、待て待て待て。さんざん待たされて、はいそうですかとオークションやる気分になれっか、つうの。というか、お前誰だよ」
『では説明を始めよう』
　喋る肖像画――ノーマンはわたしたちの意見などお構いなしに話を続ける。
　画面の向こうで犯人が操作しているのだろうか？
『とりあえず席は全員分用意してある。座ったらどうだい？』
　わたしたちはお互いに顔色を窺いながら、身動きできずにいた。この何処か奇妙で滑稽な出来事を目の前にして、あらゆる感覚が鈍っている状態だった。
『説明は一度しかしないから、早く席に着いた方がいいよ』
　ノーマンが云う。
　わたしたちは適当に椅子に座る。

席順はノーマンの絵を右手頭上に見て、絵に近い側から魚住、霧切、わたし、鳥屋尾、水無瀬。そしてその正面に、七村、夜鶴、茶下、美舟、新仙。わたしたちの方が、ロビー側に当たる。
『あらためて、このエキサイティングで神秘的なオークション・ハウスにようこそ。お送りするのはこの死んでいる殺人鬼、ノーマンだ。よろしく』
何処からともなく、効果音っぽい拍手の音が聞こえてくる。
つられてわたしたちは拍手していた。
完全に空気に呑まれている。
『ゲストが揃ったようなので、これから行なわれるオークションについて話そう』
わたしたちは無言のまま、絵を見上げている。
『まずはみんな、手持ちの現金があったら、テーブルの上に置いてもらえるかい。当オークションは現金の持ち込みがNGなんだ』
ざわつく客たち。
わたしはポケットから財布を抜き出して、現金を確認する。やっぱり紙幣は千円札が二枚。あとは小銭が少量。わたしは云われるまま、それらをテーブルの上に置いた。
隣の霧切は何も置かない。彼女はカードしか持っていないからだ。ちなみにここまでのタクシー代を彼女がカードで支払ったのだけれど、やはり現金はいっさい持っていなかった。
他のメンバーは次々に現金をテーブルに置いていく。
「お金……」
夜鶴が具合悪そうに呟いている。
「大丈夫ですか？」
わたしが尋ねると、夜鶴はこめかみを押さえるようにして机に伏してしまった。
「お金がないと私……死にたい気分になるの……ああ、死にそう」
「俺だって死にてえよ！　サラ金から借りてきた二十万を持ち込めないってどういうことだよ」
『みんないいかな？　おっと、ズルはいけないよ、ズルは。現金を隠し持っている者がいないか、隣の人同士、ボディチェックしてくれるかな。女子諸君はおじさんに触られるのが嫌なら、女子同士でチェックしてくれ。五分だけ時間をあげるから、手早く頼むよ』
わたしたちは顔を見合って、誰からともなく椅子から立ち上がり始めた。女性と男性に分かれて、ボディチェックを始める。
「あっ、じじい、てめえ！」水無瀬が騒ぎ出す。「パンツの中に札束隠してやがった！」
「こ、これはわしのかあちゃんの形見なんじゃ！」

「インチキしてんじゃねえよ。ルール違反でオークションが台無しになってもいいのかよ」
「わかった、わかった」
　鳥屋尾の前には、およそ五十万になるのではないかと思われるほどの紙幣が積んである。やはりあの男、詐欺師というのは本当なのかもしれない。
　それぞれの身体検査により、誰も現金を所持していないことが確認された。
『よろしい。これでみんな、やっとスタートラインに立ったというわけだ』
　絵の中のノーマンが楽しげに云う。
　肖像画が喋るという光景にはまだ慣れない。
『それではメイド君、テーブルに置かれた現金を集めてくれるかい』
　魚住が命令されるまま立った。
　エプロンの裾を両手で広げて袋状にすると、そこに現金を大雑把（おおざっぱ）に投げ入れていく。
「ああ……お金……」
　夜鶴は今にも死にそうな声で云う。
「わしのは55万３２４５円じゃからな！」
　鳥屋尾の声が魚住の背中に投げかけられる。
　魚住はそれを無視して、全員分の現金を回収し終えた。
『次にメイド君、暖炉の前まで移動してくれないか』
　――暖炉？
　嫌な予感がする。
『よし、それでは回収した現金を暖炉の中に投げ込むんだ』
　魚住は一瞬ためらったのち……命令されるままに現金を暖炉の中にぶちまけた。
『マントルピースの上にマッチと着火剤がある。それで火をつけるんだ』
「おいおいおいおいおい！」とうとう水無瀬が立ち上がった。「俺の二十万！」
「えー？　あなたのじゃなくって、サラ金の二十万でしょおー？」
　美舟がくすくす笑いながら云う。
「うっさいぞカボチャ頭！　お前は三百円だからいいかもしれねえが、俺は二十万だぞ！　この野郎！　二十万稼ぐのがどれだけ大変かわかってんのか！　火をつけるってなんだよ、火をつけるって。紙幣を燃やすのは犯罪だぞ！」
「そうじゃそうじゃ！　わしは反対じゃ！」
「ああ……死にたい……お金……」

「カボチャ頭？　ねー、カボチャ頭って？」
「これは政府の陰謀か？」
　食卓では大騒ぎだが、魚住は淡々と暖炉に火をくべ始めた。
「おい、やめろ！」水無瀬は暖炉まで駆けていくと、魚住の肩を掴んだ「さてはお前、あのノーマンとかいうやつの手下だな？　こんな狂ったオークションを開いてる連中の仲間なんだろ？」
「違う」
　魚住は短く答えて、水無瀬の手を振りほどくと、暖炉から立ち去る。
　暖炉の中ではすでに、薪とともに紙幣が盛大に燃えていた。
　わたしの二千円……
「なんてことじゃ……」
　鳥屋尾の痛ましい声が空しく響く。
『肩を落とすなよ、みんな。いずれにしろここのオークションでは、十万や二十万なんてはした金、なんの役にも立たないんだから』
「てめえ……」
　水無瀬はノーマンの絵をにらみつける。
『では次のステップに移ろうか。椅子に座っている君たち、そのままちょっと無理して足を伸ばしてごらん。ほら、爪先に何か当たらないか？』
　わたしたちは云われたままに行動する。
　事実、爪先に何か硬いものが当たった。
　わたしは食卓の下にもぐりこんで、それを確認する。
　そこにあったのは、大きめのナップザックだった。わたしはそれを食卓の下から引っ張り出した。とんでもなく重い。
「す、すげえ！　なんだこりゃあ！」
　真っ先に水無瀬が声を震わせる。
　各自に一個ずつ、全部で十個のナップザックが用意されているようだ。
　わたしはナップザックを開けてみた。
　中には帯封によってきつく束にされたお金——一万円紙幣の束が入っていた。しかもその札束が分厚く重ねられて、ビニール袋でブロック状にパッケージングされている。
　それが一つだけではなく、たくさん——
『一パック一千万。それが十個入っているはずだ。確認してくれ』

見たこともないような大金。

「い、い……一億……」

何故だか水無瀬は涙交じりの声になっていた。

わたしも他人事ではない。ナップザックを持つ手が、無意識のうちに震えていた。

「どうやら全部本物だ」

魚住がパッケージを破って、中の札束を確認していた。

『それが諸君の資金だ。これから行なわれるオークションに先立ち、それぞれ一億円ずつ用意させてもらった。金持ちだけが勝つゲームなどつまらないだろう。あくまで公平にオークションを楽しんでもらいたい。そう思って、ささやかだけど私からの贈り物をしたんだよ』

「あ、ああ、ありがとうございます！」

水無瀬は絵に向かって拝み始めた。

そういえば確か、『黒の挑戦』に『現金　10億』と書かれていたっけ。それが、これか。

「生きたい！　生きたくなってきた！」夜鶴が今までにないくらい、つやっぽく輝いて見えた。「こんなにお金があるなら、いつまでも生きていける！　早く誰かと再婚して子供作って幸せな家庭を築きたい！」

さっきまでとは別人のようだ。

「でもさあ、オークションであたしのほしいもの出てくるのお？　いらないものばっかりじゃ、一億円持ってても意味ないですよう」

美舟は食卓に肘をついて、首を傾げている。

「これだけの資金が配られるなんて信じられませんね」新仙が腕組みしたまま云う。「はたしてオークションに出品される品はなんでしょうか」

『準備が整ったところで、本題に入ろうかと思う。いいかい、私のことは忘れてもらっても構わないが、私の云ったことはよく覚えておくように。ルールを説明するのは一度きりだからね。よく聞いてくれ』

わたしは慌ててメモ帳を取り出す。

『このオークション・ハウスでは、そこの電光掲示板に表示されている数字がゼロになるまでの間、毎日午後六時にオークションが行なわれる。遅刻して参加できないなんてことがないように、気をつけることだ』

タイムリミットは五日後の午前十時。その日は午後六時のオークションが行なわれないから、つまり今日の回を含めて最大であと五回、オークションが行なわれるということになる。

『ちなみに、オークションが終了するまでは、このオークション・ハウスから出ることはできない。なあに、心配することはない。水いらずのオークションを楽しんでくれってことさ。ああ、水いらずといっても、水も食糧

もちゃんと用意してあるから安心してくれ』
　わたしたちは誰一人口を挟まず、ノーマンの異常なルール説明を黙って聞いている。『一度しか云わない』という宣言が、わたしたちの行動を制限しているのだろう。
『さて、いよいよ競売品の説明だ。このオークション・ハウスで出品される品は、一日につき、たった一つ。シンプルだろう？　しかも毎回同じものが出品されるから、前回買い逃しても、次の回に手に入れることができるかもしれない。諦（あきら）めずに、何度も挑戦してほしい』
　――毎回同じもの？
　一体、何を競売にかけるつもりだ？

『それでは発表しよう。みんなのために我々が用意した品、それは――探偵になるための権利、すなわち《探偵権》だ』

「はああ？」
　あからさまな不満の声が上がる。
　水無瀬や鳥屋尾たちの表情には落胆（らくたん）と困惑（こんわく）が見える。どうやら彼らの期待していたものとはかけ離れていたようだ。
　一方、霧切と七村は、険しい顔つきでノーマンを見ていた。
『そろそろこのオークションを理解してもらえたかな？』
　ノーマンの絵が突如、暗い影のかかった不気味な顔に変わった。顔の下からライトを当てているみたいに、おぞましい顔が闇に浮いて見える。
　まさに殺人鬼にふさわしい狂気に満ちた表情だ。
　美舟が悲鳴を上げる。
　わたしも全身に鳥肌が立っていた。
『これはただのオークションではない。ただじゃ終わらない皆殺しオークションだ』
「どういうことじゃ！」
　鳥屋尾が狼狽した様子で尋ねる。
　しかしノーマンは答える様子もない。
　いつの間にかノーマンは元の地味な青年の絵に戻っていた。
『そうそう、このオークション・ハウスについての説明が抜けていたね。実はこの古ぼけたオークション・ハウスには、殺人鬼がひそんでいる。いやいや、私のことではない。私はすでに死んでいるし、絵の中にいる

だけだからね。その殺人鬼は、このホテルの何処かにいて、いつでもみんなを殺すことができる。だがそいつは慎重な殺人鬼だ。けっして無茶はしない。そいつは夜になると、一晩につき一人だけ、誰かを殺す』

　いよいよ犯人が牙をむき始めてきた。

　異様な状況に、頭がくらくらしてくる。

『そんな恐ろしい殺人鬼だが、弱点がある。それが探偵だ。殺人鬼は探偵を殺せない。また、正体がばれるのを避けるため、探偵の前では殺人を犯さない』

「い、一体なんの話をしてるんだよっ？　殺人鬼？　探偵？」

　水無瀬と美舟の二人だけが、話についていけていないようだ。困り切った顔でうろたえている。

　他の者たちは大体理解したらしい。

　この恐ろしいオークションの趣旨を。

『そろそろわかってもらえたかな。オークションで《探偵権》を落札することができれば、その日一日だけ、探偵になることができる。そして《探偵権》を落札した者だけが、その晩、殺人鬼の標的にならずに済むというわけだ』

「な、なんなんだよ……それ……」

　水無瀬の顔は青ざめている。

「まさかこれが、犯行予告にあった事柄なのか？」

　鳥屋尾が非難するような目で、わたしを見る。

　わたしはぶるぶると首を振って応える。

「何が《探偵権》じゃ！　結局のところ《殺されない権利》じゃろうが！　落札できなかったら死ぬのか？　わし、死ぬのか？　いやじゃあ！」

「あたし死にたくないよう！」

「私は生きるわ！　こんなにお金があるんだもの！」

「さてはCIAか、それともまさか……NASA？」

《探偵権》をかけたオークション……

　犯人は一体何を企んでいるのか？

　探偵が殺されない、というルールは『黒の挑戦』に似ている。わたしたちが探偵の特権と呼んでいたやつだ。狡猾な犯人は、その特権を競売にかけようとしている。

　なんのために？

　お金さえ出せば探偵になれる――

それはつまり、才能がなくても、たとえ無力でも、探偵になれるということ。
——探偵を無力化するため？
そんなこと……させてはいけない。
「みなさん、落ち着いてください！」
わたしは立ち上がって云う。
ざわついていた客たちの視線がわたしに集まった。
わたしは彼らが静かになるのを待ってから、続ける。
「《探偵権》を競(きそ)って手に入れようとする必要はありません！」
「はあ？　落札できなきゃ殺されるかもしれねえんだぞ？」
水無瀬がわたしを睨(にら)みつける。
「いいえ、そんな心配はいりません！　さっき『殺人鬼は探偵の前では殺人を犯さない』と云っていました。つまり《探偵権》を買った人がみんなを集めて守ればいいんですよ！」
「あ……そっか」
美舟はあっさり泣きやむ。
しかし他の者たちは、わたしの言葉に懐疑的なようだった。
何故？
どうして賛同してくれないのだろう。
みんなを守るために《探偵権》を率先して買うゲームではないの？
「あなたが探偵としてみんなを守るのは結構(けっこう)。しかし他の人たちの立場から考えてみてください」新仙が静かに口を開く。「自分以外の人間に、生死を委ねることになるのですよ。そんなことが簡単にできますか？」
「それは……」わたしは戸惑う。「お互いに信用し合っていれば……」
「出会ったばかりの私たちに、そういう信頼関係があるでしょうか。事実、私はあなたのことをよく知りません。あなたに《探偵権》を委ねても、ちゃんと守ってもらえないかもしれない。裏切られるかもしれない。それならいっそ、自分が探偵になった方がいい。何より安全ですからね。これは一般論として喋っています。あなたを信頼できないという話ではありません」
「はい……」わたしは俯く。「短絡(たんらく)的でした。すみません」
「っていうかさあ、なんなんだよこれ。タチの悪いドッキリ番組か何かか？　こんな馬鹿(ばか)げた話、聞いたトキねえよ。マジしゃべえって」
水無瀬がノーマンに向かってわめき散らしている。

このオークションが犯人の仕掛けた『黒の挑戦』だとしたら……とてつもなく厄介だ。
『ちなみに！』ノーマンが再び喋り始める。『《探偵権》が有効なのは一日限りだ。翌日のオークションで別の人に落札されてしまった場合、《探偵権》は移動する』
　探偵であり続けるためには、毎回オークションで《探偵権》を落札しなければならない……というわけか。
『さあ、私の説明は理解できたかい。うっとうしくて聞き流していた人や話がまったく理解できない人のために、要点を三つにまとめてあげよう。この三つを理解していれば、話についてこられるだろう』

　ルール1
　オークションでは毎回《探偵権》が出品される。

　ルール2
　殺人鬼が一晩に一人、誰かを殺す。
　ただし《探偵権》を持つ者は殺されない。
　また《探偵権》を持つ者の前では殺人は実行されない。

　ルール3
《探偵権》が有効なのは、次のオークションまで。

「一つ確認したいことがある」七村が右手を低く挙げて云った。「あとからルールを足されたり、変更されたりすると困る。今後ルールに変更はないということを保証してもらいたい」
　しかし七村の発言に対して、ノーマンは沈黙したままだった。
「おい！　返事しろよ！」
　水無瀬が声を上げる。
　それでもノーマンは口を開かない。
「答えろって云ってんだよ！」
「結構だ」七村がそれを遮った。「理解した」
「はあ？　何を……？」
「私が思うに、犯人は自らルールを破るようなことはしないはずだ。これだけ周到に準備しているのが何よりの証拠。犯人自身、このゲームを楽しんでいる節がある。自らゲームを台無しにするような真似は

しないだろう」
「な、何がゲームだよ……」
『話し合いは落ち着いたかい』ノーマンが喋り始めた。『オークションの基本的な説明は終わりだ。次に、このオークション・ハウスの一日のタイムスケジュールを伝えておく。メモの準備はいいかい？』

　AM7:00　起床（きしょう）
　PM6:00　オークション開始
　PM10:00　就寝（しゅうしん）

『ああ、メモを取るまでもなかったな。覚えやすいだろう。ちなみに食事を用意するのは今夜のディナーだけだ。あとは各自、好きにとってくれ』
　今夜のディナー？
　これから魚住が用意することになるのだろうか。
　それともすでに用意されている？
　たとえそうだとしてもわたしは口にしないだろう。毒が入れられているかもしれない。
『ちなみに毒なんて無粋（ぶすい）なものは用意していないから、安心してくれ』
　見透（みす）かしたかのようにノーマンが云う。
　確かに挑戦状には、凶器として『毒物』の文字はなかった。
　だからといって毒が使用されないとは限らない。挑戦状には犯罪被害者救済委員会から購入されたものがリストアップされているだけで、犯人自身が用意したものは記（しる）されていない。
『さて、オークションに連日参加してもらうみんなには、素敵な客室を用意している。ただし客室について、注意事項があるからよく聞いてくれ。まず前提として、夜十時から朝七時までの夜時間、みんなの部屋は完全にロックされる。扉は外側からも内側からも開かない状態になる』
　内側からも？
　それって事実上、監禁（かんきん）状態ではないだろうか。
『そういうルールだから、従ってほしい。それから、扉がロックされる夜十時の時点で必ず自室にいるように。門限だ。これを破った時のペナルティは大きいぞ。オークション参加の放棄（ほうき）とみなし、以降の入札する権利を失う。みんな、そんなことにはならないように、門限だけには気をつけてくれ』
　夜の間は、自分の部屋に閉じ込められた状態で、何もできないということか。
『もう一つ、重要なことを話すぞ。さっき、夜の間部屋はロックされると云ったけれど、実はマスターキーを

持っている者がいる』
　マスターキー……
　まさか！
『そう、殺人鬼だ』
「おいおいおい、めちゃくちゃじゃねえか！　殺人鬼だけは自由に行動できるっつうのかよ！」
『ヘイ、慌てるなよ。確かに殺人鬼は夜の間、自由に館内を移動し、自由に人を殺すことができる。ただし……探偵の存在を忘れてもらっては困るな。マスターキーを所有するのは殺人鬼だけではない。その日、オークションで《探偵権》を落札した者にもまた、マスターキーが手渡される』
　やっぱり、そういうことか……
　他の人を守れるのは探偵だけ。探偵の前では、殺人鬼は人を殺せない。
　つまりマスターキーを使って、殺人鬼が来る前に被害者のところへ駆けつければ、犯行を防げる。
　紛れもなくそれは、探偵にのみ許された権利——いや、義務(ぎむ)なのだ。
『そうそう、探偵も門限は守らなければならないよ。扉がロックされる夜十時の時点で自室にいなかった場合、せっかくの《探偵権》が失われるから注意してくれ。ただし門限といっても、夜十時以降もずっと室内にいなければならないという意味ではないよ。マスターキーがなければ結果的にそうなるというだけで、もし探偵が望むなら、部屋を出て自由に行動して構わない。他のメンバーを部屋から連れ出すのもいいだろう。門限というのは要するに、扉がロックされる時点で室内にいなければならないというルールであって、そのあとの行動はすべて探偵と殺人鬼次第というわけだ』
　わたしのメモ帳はすでに、書き込みで一杯になっている。
　こんなにややこしい『黒の挑戦』になるなんて……
　前と比べてかなり回りくどい犯人だ。
　だからこそ——不気味でならない。
『長々と説明してきたが、そろそろ終わりだ。伝えるべきことはだいたい伝えたかな……あ、そうそう、一番重要なことを忘れていた』
　ノーマンは冗談(じょうだん)めかして云う。しかし機械音声なので、言葉に感情は感じられない。
『電光掲示板の数字がゼロになってもまだ生き残っていた者は、その時所有している資金をそのまま持って帰っていいんだ。どうだい？　みるみるやる気がわいてくるような素敵なルールだろう』
　手元にある金をいっさい使わずに、あと１１０時間ちょっと生き延びれば、まるまる一億円もらえるということか。
『そろそろルールのおさらいをしておきたい？　しょうがないな。それじゃあ簡潔にまとめてあげよう』

ルール4

夜十時から朝七時までの夜時間、客室はロックされる。

夜十時の時点で、全員自室にいなければならない。

ルール5

殺人鬼はマスターキーを持っている。

また、《探偵権》の所有者もマスターキーを持っている。

ルール6

無事に生き残れたら、残った資金はすべてあなたのもの。

『どうだい？　みんなもう探偵オークションのとりこだろう。ゲームを楽しんで、しかもお金までもらえるのだから、みんなはラッキーだな』
「何がラッキーだ！　ふざけんな！」
　水無瀬が絵に向かって威嚇（いかく）する。
『さて、最後にオークションの形式についての説明だ。これから行なうオークションは、一般に非公開入札方式と呼ばれるやり方で進行する。オークションが始まったら、順番に一人ずつ、そこのブースに入ってくれ。そして入札だ。誰がいくら入札したのかは、結果が出るまでわからないようになっている。支払いの最小単位は百万から。百万円の帯封は破らないように気をつけてくれよ。きっちり耳を揃えて入札してもらうからな。なお、一度支払った金は戻ってこないから注意してくれ。落札できなかったら、支払った分は無駄になるから』
「ひどいオークションじゃな。落札できなければ損失だけが残るというわけか」
　鳥屋尾は周りの顔を窺っている。彼の目つきが今までと違う。他人を出し抜いてやろうという目つきだ。
『それから、万が一最高入札者が複数いた場合、入札に使った金は破棄され、さらにもう一度最初から入札をやり直すことになる。はっきりいって無駄だから、そうならないようにな。せっかくの金が無駄に消えていくのはごめんだろう？』
　わたしは自分の手の中にある大金を見下ろす。
　本当にこれから《探偵権》をかけてオークションに参加しなければならないのか？

探偵というのは才能であり生き方だ。けっして売り買いできるようなものではない。
『オークションの終了はブザーで知らせる。直前にブースに入った人間が外に出たあと、次に誰もブースに入らない状態が十分続くと、自動的に終了となるから気をつけてくれ』
誰か一人がブースに入ったら、続けて全員が入らないといけないというわけか。
『おっと、だいぶ時間がおしてきているようだ。ではいよいよオークションを始めるぞ……と云いたいところだが、さっきも云ったように、今夜だけはみんなにディナーを用意している。緊張をほぐすためにも、食事でもどうかな。ではメイド君、準備があるから私の前まで来てくれ』
魚住は一瞬顔をしかめたが、すぐに思い直したように立ち上がり、命令されるままバルコニーへ上がっていった。あくまでメイドとして振る舞わなければ、探偵であることがばれてしまうと考えているのかもしれない。
魚住はノーマンの絵の前に移動する。
『では今夜のディナーを用意しよう』
次の瞬間、ノーマンの絵があの不気味な殺人鬼の顔に変わった。
続けて――何かが弾(はじ)けるような炸裂音(さくれつおん)。
一体何が起きた？
バルコニーにいる魚住が身体を屈(かが)めながら、よろけている。
わたしたちは彼女の奇妙な動きに釘づけになっていた。それは何処か滑稽で、非現実的なダンスだった。わたしたちはステージの上の踊り子を、ただ観賞(かんしょう)することしかできなかった。
そこに追い打ちをかけるように、さらにもう一度――
銃声(じゅうせい)。
それは銃声に違いなかった。
魚住はついに自分の身体を支えられなくなったのか、バルコニーの手すりに寄り掛かり、そのまま倒れ込むようにして、こちら側に落下してきた。
派手な音を立てて、バルコニーからテーブルの上に魚住が落ちる。
彼女が着地した場所には、ちょうど彼女のナップザックがあった。
彼女はあおむけのまま、両手で腹を抱えている。
白いエプロンが血で真っ赤に染まっていた。明らかに二ヶ所、彼女の身体に穴が開いていた。顔は真っ青になり、目がうつろだ。
「魚住さんっ」
彼女に手を伸ばそうとした瞬間――

彼女の全身が突然、燃え上がった。

　魚住は巨大な火の塊（かたまり）となり、わたしは思わずあとずさった。魚住はもはや身動きすらしていない。生理的な嫌悪（けんお）感をもたらすにおいが立ち込め、黒煙（こくえん）が室内に立ち上り始める。

　圧倒的な炎を前に、わたしたちはなすすべなく見つめるだけだった。思考が完全に停止し、夢を見ているようでさえあった。

「火を消すんだ」七村が大声で云う。「上着を広げて彼女を包（つつ）め！」

　その声にはっとして、わたしは云われるままコートを脱（ぬ）ぎ、火に向かって投げた。同じようにしているのは、霧切と七村だけだった。

　三枚の上着が魚住を包み込み、炎の勢いが弱まった。わたしたちの上着が燃焼（ねんしょう）の元となる酸素を遮断（しゃだん）したのだ。そのあと七村が、上着を叩きつけて、くすぶる炎を叩き消す。

　結局十分近くは燃えていただろうか。

　すべてが終わったあとで、あらためて魚住を確認すると……そこには真っ黒に焦（こ）げ上がった小さな身体があった。

　確かめるまでもなく、彼女は死んでいた。

『本日のメニューはメイドの丸焼きでございます』

　ノーマンの無慈悲な声が響く。

　殺人鬼の絵は、元の地味な青年に戻っていた。

「ひ、ひどい……」

　美舟は嗚咽（おえつ）しながら魚住を見つめている。

「こ、これは間違いなく国家的陰謀だ」

　茶下はうろたえている。

　さすがに夜鶴も目を丸くして、言葉を失っていた。

『身体を張ってディナーを提供してくれたメイド君は、残念ながらオークションには参加できないみたいだ。ライバルが減ってよかったな』

「なんでこんなこと……」

　水無瀬はその場に膝をついて、涙を流しながら呟いていた。

『このオークションが冗談だと思われたら困るからね。本気のゲームだってこと、知ってもらいたくて、つい半世紀ぶりに人を殺してしまったよ。どうせみんな、半信半疑（はんしんはんぎ）だっただろう？』

「……殺さなくともいいものを」

　鳥屋尾は目を細めて魚住の焼屍体を見つめる。

「オークションなんかやらないから、おうちに帰してくださいっ……うう、もう帰りたいよう！」

　美舟は悲痛な声を上げる。

　その横で、水無瀬も泣き喚いている。

　茶下はお経のような奇妙な呪文を口にし始めた。

　わたしたちは混乱していた。

　それまでなんとなく場のなりゆきに流されてきたわたしたちは、魚住の死を目の当たりにして、いまやはっきりと、引き返せない闇の中に迷い込んでしまったことを知った。

『ついでに云っておくと、メイド君の死は一夜一殺のルールからは外れるから。これは例外だよ。だって彼女は殺されたんじゃなくて、料理されたのだからね。なお死者はオークションには参加できない。当然だね。不正がないように、死んだ者の資金は没収させてもらうよ。誰でもいいから、彼女のナップザックを暖炉に投げ込んでくれ』

　七村が魚住の屍体の下になっているナップザックを引っ張り出した。

　しかし当然ながら、暖炉に投げ込むまでもなく、ナップザックは黒焦げになっている。中身も一枚残らず灰になってしまっていた。

　七村はノーマンの言葉に従い、ナップザックを暖炉に運んだ。

　こうして魚住の資金は、彼女の魂と同様に、すべて燃え尽きた。

　いきなりオークションの参加者が十人から九人になってしまった。

『さあ！　それじゃあ最初のオークションを始めようか。門限の夜十時までに、入札は済ませてくれ。ちなみに私はこれ以降、君たちの前に姿を現すことはない。どうせ大したキャラじゃないしね。私はママのところに帰らなきゃいけない。あとは簡単な指示文だけが、みんなを導くだろう。健闘を祈る』

　ノーマンの絵が消え、真っ黒な液晶画面になった。

　わたしは呆然と魚住の屍体を見つめる。

　魚住さん……

　漫然と空気に流され、ゲームに参加しているうちに、もう被害者が出てしまった。

　これが『黒の挑戦』なのか。

　わたしは犯人をなめすぎていたかもしれない。

　命がけの意味を軽んじていたかもしれない。

　驚くほど簡単に人が殺される。

　死はすぐそこにある。

　わたしは震える足を、自分ではどうすることもできなかった。

第四章

探偵と殺人鬼

マサカー・オークション

111:14:27

　しばらくの間、わたしたちは誰一人として口を開くことなく、電光掲示板の数字が減っていくのを眺めていた。わたしたちの置かれている状況がイタズラだとか、ドッキリだとか、そういう議論はもはや意味がない。目の前には現実に、魚住の屍体がある。犯人の用意した現実（ルール）のもとにこの世界が成り立っていることは、証明の必要がないほどはっきりしていた。
「魚住さんの遺体を片づけましょう」
　最初に提案したのは霧切だった。
　中学一年生の少女は、黒焦げの屍体を目の前にしても平然としている。
　わたしと霧切が作業を始めると、誰からともなく手伝い始めた。
　食卓のクロスに魚住を包んで、ロビーの片隅に横たえる。
　食堂に戻る前に、霧切は魚住の遺体に両手を合わせていた。目を閉じて祈る彼女の横顔はとても清らかだった。
　霧切と一緒に食堂に戻る。
　焼け焦げた食卓は放棄され、みんなそれぞれ椅子を置いて思い思いの場所に座っていた。室内にはまだ異様なにおいが漂（ただよ）っていたが、窓が開かないので換気（かんき）することもできない。
「おい、おめえら」水無瀬がわたしと霧切に詰め寄る。「大金を手放してほっつき歩くなよ。気をつけな」
　空いている椅子の上に、わたしと霧切のナップザックが置かれていた。
　そっか……あまり現実感がないけれど、わたしは今、一億円を持っているのだ。
　ナップザックの中身を確認する。ちゃんとある。さすがにみんなの監視があるなかで、盗む人などいなかったようだ。
「それにしても……大変なことになったな」茶下が野球帽のつばに触れながら云う。「僕が思うに、これはCIAでもNASAでもなく、軍産複合体の仕業（しわざ）だな。軍の心理実験だよ。極限状況における人間の行動心理を研究している機関があると聞くからな……」
「軍ってなんだよ？」
「決まっているだろう、アメリカ軍だ」

茶下はにやりと笑う。
「はあ？」水無瀬は眉をひそめて云った。「どっからアメリカ軍が出てくるんだよ。さっきそこの眼鏡っ子探偵が、犯行予告があったって云ってただろ？　何処の誰か知らねえが、狂った犯罪者が予告通り行動に出始めたんだよ。軍なんか関係ねえ」
「ではこの資金についてはどう説明する？」茶下はナップザックを示す。「単なる一般人が、おいそれと用意できる金額ではない……なんらかの組織が動いているのは間違いないと思うね」
　鋭（するど）い。
　組織の手助けがなければ、今回のような犯行は計画すら成り立たないだろう。
　彼らはまだ、犯罪被害者救済委員会の存在を知らない。伝えるべきだろうか。伝えたところで、理解してもらえるだろうか。
「で、どうするのかね？」鳥屋尾が誰にともなく尋ねる。「オークションは始まっているようだが、入札を始めるかね？」
「午後十時まではあと三時間ほどあります」新仙が云った。「もう少し話し合いをしてからでも遅くはありません」
「話し合い？　一体何を話し合うというんじゃ」
「みんなで協力すべきだと思います！」
　わたしはここぞとばかりに、椅子から立ち上がって発言する。
「また出たよ、眼鏡っ子探偵」
　うんざりした様子で水無瀬が云う。
「ええ、また出ました。このオークションについて、ちょっと考えたんですけど、みんなで協力すれば、全員無事に生きて帰れると思います」
「へえ、そりゃどうやって？」
「一日ごとに、持ち回りで順番に《探偵権》を買うんです。その日探偵になった人は、夜になったら全員の部屋を回って、鍵を開けて一人ずつ集めます。殺人鬼は探偵の前では人を殺せないので、犯行を防ぐことができます。それに持ち回りなら、お互いがお互いの命を約束し合うことになりますから、裏切りを恐れる必要もないと思います」
「あー、ガキの発想だね。だめだめ」
「どうしてですか？　じゃあ、あえてお金の話をしますけど……仮に探偵役が最低落札価格の百万円で《探偵権》を買って、それを五回繰（く）り返せば、全体でたった五百万の出費で終わります。全員確実に九千万円以上のお金を持って帰れるんですよ」

「殺されないって保証があるのかよ？」水無瀬はわたしを指差して云う。「客室のあるエリアがどういう構造になってるかまだわかんねえけどよ、探偵が部屋を回り終わらないうちに、殺人鬼に殺される可能性だってあるんじゃねえの？　探偵は自分以外の八つの部屋を回ることになるだろ？　八番目の部屋にいるやつは、かなり危ないんじゃね？」

「そんな……」

「それに持ち回りで探偵やるとしても、九人のうち四人は一回も探偵になれないんだぜ？　誰がそのハズレをやる？　お前、進んで手を挙げられるのか？」

「そ、それは……」

「ほら見ろ。そもそも『探偵がみんなを集めて守る』つう作戦は安全でもなんでもないんだよ。探偵も門限を守れってルールがあっただろ？　殺人鬼にはそのルールがねえ。つまり夜の行動においては、殺人鬼の方が一手早く行動できるんだよ」

　その一手の差が命運をわけるかもしれない。

　そして標的になるのは、自分かもしれない。

　少しでもその可能性があるとしたら、絶対安全の《探偵権》は他人には譲(ゆず)れない。

　オークションにおいて、そういう心理が働くとすれば……『みんな仲良く』なんてできるはずない。

「魚住の殺され方見てたら、はいそうですかって、権利を譲れるわけがねえ」

　水無瀬はか細い声で云った。

　そうだ、わたしたちはまだ彼女の死から立ち直れずにいる。統率(とうそつ)なんかとれるはずがない。

「銃弾(じゅうだん)は壁の向こう側から発射されたみたいだ」

　頭上から七村の声が聞こえる。

　彼はいつの間にか、バルコニーで肖像画の周辺を調べていた。

「額縁の下に小さな穴が空いている。これは着弾の跡ではなく、発射口とみるべきだろう。もう弾切れだと思うが、諸君も射線(しゃせん)に入らないように気をつけたまえ」

　七村は袖(そで)まくりしながら、バルコニーから降りてくる。

「本物の探偵さん」美舟が云う。「なんでこんなことになったのかよくわかんないけど……オークションなんか中止でいいから、犯人捕まえてよお！　あたしもう帰りたい！」

「ナイスアイディアだね、かわいらしいお嬢さん。犯人を捕まえてしまえば、オークションなどやる必要はない」

「犯人を捕まえられるのか？」

　鳥屋尾が立ち上がって問う。

しかし七村は首を横に振った。

「残念ながらまだ犯人を捕まえることはできない。私にはやるべきことが残されているからね」

七村は意味深なことを云って、椅子に腰掛けた。

結局、誰も入札しないまま時間だけが過ぎていく。

皆それぞれ時計と他人を気にしながら、どうすべきかと思案しているようだった。

わたしと霧切は、他の人たちから少し離れた場所に並んで座っていた。

「残り三時間切ったのに、誰も入札ブースに行かないね」

わたしは霧切に話しかける。

彼女は三つ編みの髪に指先で触れながら、床を見つめていた。

「オークションは今日だけではないから……いかに損失なく、連続して自分が《探偵権》を落札するか、計算しているのではないかしら」

霧切は云う。

「そっか……もし一日でも落札できなければ、その日に殺されてしまうかもしれないもんね」

「私は結お姉さまの意見に賛成よ」

「ん？」

「みんなで協力し合うという方法。こういうゲームは、一見ふざけているとしか思えない正攻法が、攻略法だったりするものよ」

「でも一人でも和を乱す人間がいたら、余計破綻してしまうかもしれない」

「ええ、そして必ず和を乱す人間が出てくるでしょうね」

「そうだよね……他人を殺してでも自分の身を守るというのは、けっして野蛮だとは思わない。それが生き物の本能だと思うし……」

「結お姉さまも、そっち側の人間？」

「どうかな……そういう時になってみないとわからないな」

「今がそういう時だと思うけれど」

霧切はくすりと笑って云った。

「あ、今笑わなかった？」

「いいえ」

「いや、絶対笑ったでしょ。君が笑うところ初めて見た」

「ところで結お姉さまは気づいてる？」

霧切は華麗に話題を変える。

「何を？」
「犯人はこの中にいるわ」
「ああ、そのこと――って、ええっ？」
　思わず大声が出てしまった。
　全員が一瞬、こちらを向いたが、迷惑そうな顔をするだけですぐに興味をなくしたようだった。
「いや、まさかとは思ってたけどさ」わたしは霧切に顔を寄せて、小声で云う。「どうしてそう思うわけ？根拠は？」
「ノーマンよ。あれは録画した映像を自動再生していただけ。もし犯人が別の場所にいて、私たちを何処かから監視しているのなら、リアルタイムに交信すればいいのに、そうしなかった。正確には、しなかったのではなく、できなかった。何故なら、犯人は私たちと同じ場所にいたから。答え――犯人はこの中にいる」
「でもあいつ、わたしたちのリアクションに応えてなかった？」
「聞き手の反応を意図的に引き出して、会話を誘導するなんて簡単なことよ。まったく、そんなことも知らないなんて、結お姉さまはどうしようもない馬鹿ね」
「なっ、何よ突然！　どうせわたしは馬鹿ですけど！」
「ほら、簡単に反応を引き出せるわ。あとはそれに対する受け答えをあらかじめ用意しておくの。たとえば――そんなに怒らないで、結お姉さま――というふうに」
「え？　え？」
「ノーマンのやり方を実演しただけよ」
「う、うん。なんだかよくわからないけど、わかった」
「そもそもノーマンは話の進め方が一方的で強引だったし、ところどころ受け答えがおかしかったわ」
「そうかなあ……」
「七村さんが質問した時が顕著だったわね。あの人は、それを確かめるためにわざと質問したのかもしれないけれど」
　そういえば七村の質問を無視して、ノーマンが話を進めていたような気がする。
「もしかしたら再生と停止を操作するリモコンくらいは犯人が隠し持っていたかもしれない。でもそれ以上の複雑な操作はできなかったと思うわ」
「魚住さんを撃ったのは？」
「自動発射装置を仕掛けてあったんじゃないかしら。壁の向こうに銃があるのか、あるいは銃本体がなくとも、固定された弾丸と、雷管を叩く針、そして針を発動させるバネ状のものがあれば、自動発射装

置になるわ」
「そうか……でもどうして魚住さんは撃たれたあと、燃えだしたんだろう？」
「弾丸を外した場合でも、確実に殺害できるように、魚住さんに発火装置が仕掛けられていたのだと思う。たとえばペンダントとか、時計、携帯電話……」
「あっ、そういえば彼女が着ていた服は、ここに用意されていた指定のものだって云ってた！」
「それなら服の何処かに発火装置が仕込まれていたのかもしれないわね。あの急で激しい燃え方をみると、服が燃焼しやすい素材で作られていたのではないかと思うわ。犯人は私たちの目の前でメイドを派手に殺して、オークションの導入にするつもりだったのよ」
「そこまでしてゲームに引きずり込みたいのか……」
　わたしは腕組みして、食堂にいるメンバーを順に眺める。
　この中の誰が犯人なのか——
「そういえば魚住さんのことで、重要なことを君に云い忘れてた」
　わたしは思い出して云う。
「何？」
「実は彼女、探偵だったんだ」
「……本当？」
　さすがに霧切も驚いたようだ。
「うん、探偵図書館の登録カードも見せてもらった。偽物ではないと思う。DSCナンバーは『756』」わたしは声をひそめる。「贋作にまつわる詐欺事件で、鳥屋尾さんを追っているって云ってた」
「そう……」
　霧切は自分の指先を見つめた。あえて鳥屋尾の方に視線を向けることはしない。
「もしあの人が犯人なら、最初に魚住さんが殺されたのも納得いくよ。自分を追っている一番厄介な探偵を殺したんだ」わたしは思いついて云う。「きっとこのオークションも、壮大な詐欺の目的で……」
「それはおかしいわ。『黒の挑戦』は犯罪者に対する復讐が動機よ」
「あ、そうだった」
「魚住さんが殺害されたのは、彼女が探偵であることとは無関係ではないかしら。きっと犯人も、彼女が探偵だったとは知らなかったと思うわ」
　鳥屋尾は今回の『黒の挑戦』とは無関係なのか？
『黒の挑戦』に集められた人間全員が、事件の関係者とは限らない。トリックの都合で、まったく無関係な人間が巻き込まれることもある。

「この中に犯人がいると同時に……犯人に復讐されるだけの罪を過去に犯した人――標的がいるんだよね。そっちの点から事件を暴いていくのはどうかな。きっとよほどのことをしているはずだから……」
「そう簡単に過去の罪を暴露(ばくろ)してくれる人がいるかしら」
「たぶん……いないだろうね」
「それより、私たちもそろそろオークション対策を考えるべきじゃないかしら」
　霧切は電光掲示板に目をやって云った。
「やっぱり競(せ)り合うしかない？」
「悔しいけれど、今の状況では仕方ないわ」
　門限となる午後十時まで、すでに残り三時間を切っている。入札の時間や、部屋への移動などを考えたら、実質二時間くらいしかない。
　さすがに焦ってきた。
「オークションは全部で五回、資金は一億。単純計算すると、一回につき、だいたい2000万までが限度額だね」
　なんだか自分の口から出るのが信じられないような金額だ。これだけのお金があれば、欲しい服だって買えるし、眼鏡も新しいのに替えられるし、バッグだって……
「結お姉さま？」
「はっ！　邪悪な妄想をしていた。だめだめ、こんなお金……『人生ゲーム』のお金と変わらないんだ」
　わたしはぶるぶると頭を振る。
「ところで結お姉さま。次のオークションで《探偵権》を落札するつもり？」
「当然だよ。落札しなきゃ、他の人を守れないでしょ？　マスターキーがなければ、君を助けに行くことだってできないんだから」
「そう」
　霧切は少し照れたように、視線を床に落とした。
「他の人たちも間違いなく本気でオークションに臨んでくると思う。他人を守るためじゃなくて、自分を守るためにね。そのことを非難するつもりはない。でもまずはオークションで勝たなきゃ、なんにもできないんだ」
　勝てなければ、無力のまま。
　探偵であり続けるためには、強い意志で、勝たなければならない。
《探偵権》を奪い合うなんてこと、本望じゃないけれど、それが誰かに無駄に利用されるくらいなら、わたしが取りにいくしかない。

「というか……霧切ちゃんこそ《探偵権》が必要じゃない？　生まれながらの探偵である君が、『探偵であること』それ自体を奪われてしまってはどうにもならないでしょう？」
　尋ねると、霧切は胸に手を当てて、顔を上げた。
「そうね。でも意外と、この状況に馴染んでいる自分がいて、驚いているの」
「馴染んでいる？」
「私は……探偵でなければ自分は存在する意味なんてないと思っていたわ。それこそ、探偵であることをやめた時、人魚姫みたいに泡(あわ)になって消えてしまうのではないかと思っていた。でもこうして、探偵として無力にさせられた今でも、私はここにいる。泡になって消えてしまうなんて、ただの思い過ごしだったのかもしれない」
「そりゃ思い過ごしにきまってるって」
　わたしは笑って返したけれど、霧切の表情は真剣だった。
「この前の『黒の挑戦』のあとでも少し考えたのだけれど……私は探偵であることに固執(こしつ)しすぎているのだと思う。もちろん私は霧切の名を継(つ)ぐ探偵であることに誇りを持っている。でも……気負わなくていいって結お姉さまが云ってくれたこと……忘れてないわ」
「そ、そっか」
　きっと彼女は感情を隠しながらも、彼女なりに悩(なや)んでいるのだろう。普段から何を考えているのかわからないような子だから、わたしも気づけなかったのだけれど……
「《探偵権》が奪われている今、不思議といつもより落ち着いているわ。いつもより冴えているし、いつもより非情(ひじょう)になれそう」
　霧切は指先で口元を隠すようにして微笑(ほほえ)んでいた。
　──なんかよくわからないけれど、今回の『黒の挑戦』が彼女に火をつけてしまったようだ。
　珍しく饒舌(じょうぜつ)に語る彼女の表情からも、何処か高揚(こうよう)した感じが伝わってくる。不謹慎(ふきんしん)な言葉でいえば──彼女はわくわくしているようだ。
　探偵であることは、彼女にとって存在理由であると同時に、とてつもない重圧だったのだろう。彼女は普段、その小さな背中と細い足で、重圧を受けながら生きてきた。けれど皮肉にも、この隔離された空間が彼女を普段の重圧から解放したのだ。それで彼女はより素の自分自身を見直すことができるようになったのかもしれない。
「これも結お姉さまのおかげだわ」
「え？　わたしはなんもしてないけど……」
「私のこと、空っぽじゃないって云ってくれる人が傍にいてくれる。それだけで……」

彼女はそこまで云って、急に恥ずかしがるように慌てて口を閉ざしてしまった。

彼女が再び喋るまで、しばらく待ってみたけれど、何か複雑な気持ちが働いているのか、彼女はもう自分から口を開いてはくれそうになかった。

「でもさ、《探偵権》が奪われているのはこのクローズド・サークルに限ったことだし、あくまで犯人のルール上でそうなってるだけだから……実際のところ君は今でも探偵だよ」

「そうだといいけど」彼女はそっけなく云って、両手を制服のポケットに突っ込んだ。「でも私は結お姉さまみたいに、誰かを守るとか、みんなで生き残るとか、そういうふうには考えるつもりはないわ。場合によっては他人を犠牲にしてでも目的を果たす……それが霧切の探偵だから」

「わかってるよ。名探偵のお嬢さん」

わたしは霧切の頭をよしよしと撫でる。

彼女は怒ったような目つきでわたしを見返した。

「で、オークションはどうする？」

彼女の視線をやり過ごすように尋ねる。

「《探偵権》を五回連続して落札することなら可能よ」

「えっ？　他の人に落とされずに、落札し続ける方法があるの？」

「ええ」

「どうやるの？」

「私と結お姉さまとで協力するの。《探偵権》を落札するのは、私たちどちらでもいい。要するに私たちは二人で一人、資金は合わせて二億、他の人たちの二倍の資金を使うのよ。他の人たちが一回当たり2000万しか使えないところを、私たちは4000万まで使える。資金の貸し借りは禁止されていないはずよ」

まさか彼女の口から『協力』なんて言葉が出てくるとは考えもしなかった。理屈のうえではそれが攻略法の一つだとしても、信頼関係がなければ成立しない作戦だろう。

わたしはもちろん霧切のことを信頼している。

彼女も同じように、わたしのことを信頼してくれているのだろうか。

「どう？　結お姉さま」

「一回目、二回目は資金で圧倒できるかもしれないけど……三回目辺りから、他の人たちも『誰かと協力しないと勝てない』っていう心理が働くでしょ。そしたら他の人たちが三人組になるかもしれない。もう資金では勝てなくなるよ」

「とりあえず三回目までは勝てると思う。特に三回目は多少、資金を多く使っても構わない。そこまで巧

くいけば、四回目からは、他の人たちには別の心理が働くようになるわ」
「どういうこと？」
「まず三回目まで、私たちが《探偵権》を使って全員を生存させることが前提ね。そうすれば他の人たちは、『探偵はあの二人に任せておけばいい』と考えるようになるでしょう。そして彼らが次に考えるのは、『生きて帰った時に持ち帰れる金額を少しでも多く残そう』――こうなればもう私たちの全勝は約束されているも同然ね」
「そう巧くいくのかな……んー」
　わたしは椅子の背もたれに背を預けて反り返る。今日は一日ずっと座ってばかりいるから、身体がなまってきた。
「ただし、この作戦には問題が二つあるわ」霧切は白い指を立てて云う。「一つは、『全員の命を守る』ことを前提にしている点ね。ノーマンの云っていた殺人鬼が、夜中にどんな手段で殺しに来るかわからない今、確実に全員を救うことができるかどうかはわからない」
「だめだよ、全員守らなきゃ」
「問題はそれだけじゃないわ。ここで云う『全員』の中に、おそらく『殺人鬼＝犯人』が交じっているということ」
「そっか……犯人もオークションに参加しているんだ！」
「そう、しかも犯人はマスターキーを持っているから、オークションで勝つ必要がない。つまり、場を荒らしてくる可能性がある。むしろそのためにここにいるのかもしれない」
「じゃあ協力作戦もだめだ」
「いいえ、それでもやる価値はあると思うわ」
「どうして？」
「少なくとも一回目、二回目までは協力作戦でいく。三回目辺りで、空気が変わってくるでしょう。もしかしたら私たちは落札できずに終わるかもしれない。でもそれでいいの。問題は、誰がどんなふうに入札したのかということ。おかしな入札がないか調べるの。私たちが追い込めば追い込むほど、なりふり構わず邪魔してくるはずよ」
　犯人の用意したルールを逆手に取って、犯人を見つけ出すための罠として利用する――
　この緊迫した状況で、そんなことを思いつくなんて、さすが霧切響子だ。彼女がこの場にいなかったらと思うと、ぞっとする。
「見たところ他の人たちはまだ、協力して闘おうという気配はないわ。昨日初めて会ったような人と、信頼関係を結べるはずがないものね」

「この作戦、いけるよ！」わたしは興奮して云う。「そもそも五回もオークションをやる必要なんてないんだよね。途中で『黒の挑戦』の犯人を見つけ出してしまえば、それでゲームは終わりだ」
「そういうこと」
「じゃあ……霧切ちゃんにわたしのお金を譲るよ。君が《探偵権》を落札して」
「……私でいいの？」
「わたしが探偵になるよりはマシでしょ」笑って応える。「まずは一回目のオークション、確実に勝とう」
「――わかったわ」
　わたしはナップザックを開けて、中身を検める。
　その時、誰かが立ち上がる気配がした。
　七村だ。
「さて諸君」七村はいつもの演技がかった立ち振る舞いで喋り始める。「入札に一人五分かけると、四十五分かかる。時間的に、そろそろあとがない状況だ。いつまでもこうしているわけにもいかないだろう」
「だ、誰も入札しねえのかよ」
　水無瀬はすでに憔悴しきった様子だ。
「ま、待て、まだ計算が足らん！」
　鳥屋尾は指折りながら何かを数えている。
　茶下は部屋の隅っこで、ぶつぶつと壁に向かって何か呟いている。見えない相手と喋っているかのようだ。
「あたし別に探偵になんかなりたくない！　アンプ買いに来ただけなのに、なんでこんなことになるのよう……うわあん！」
　美舟は子供のように泣き出す。
　新仙は足を組んで片手に持った本を読んでいた。話し合いを諦め、自分の世界に没入しているようだ。確か彼はオークションに興味がないと云っていたけれど、状況が変わった今でもそう考えているのだろうか。
　夜鶴はナップザックを抱きしめて、恍惚の表情を浮かべながら目を閉じている。まるで我が子のように大金を撫でている。異様な光景だ。
「ねえ、霧切ちゃん」わたしは小声で話しかける。「あの人……七村さんはどうする？　わたしたちの作戦を教えておく？」
「その必要はないと思うわ。一回目の入札で理解してくれるでしょう」
　仮にもダブルゼロクラスの名探偵だ。きっと彼も、犯人を迎え撃つ手段を考えているだろう。

「では私が先陣（せんじん）を切ろうか。異存のある者は挙手してくれ」
　当然ながら、反対する者はいなかった。
　七村はそれを確認すると、ナップザックを持ち上げて、入札ブースへ向かって歩き始めた。
「私が入札している間に、順番を決めておくといい。時間の短縮になるだろう」
　七村はそう云いながら、入札ブースの扉を開けた。
　扉の隙間に見えたのは、銀行のATMみたいな機械だった。七村はその機械の前に立ち、扉を後ろ手に閉める。
　いよいよオークションが始まる――
「じゃ、じゃあ順番を決めましょうか。みなさん」わたしは立ち上がって云う。「決め方は探偵ジャンケンでいいですか？」
「探偵ジャンケンってなーに？」
　美舟が首を傾げる。
「えっ、知らないんですか？　探偵は犯人に強いけど、猫（ねこ）に弱い。犯人は猫に強いけど、探偵に弱い。猫は探偵に強いけど、犯人に弱い――っていうやつです」
「どうやって表現するんだよそれ。いや、やらなくていいから。普通のジャンケンでいいだろうが」
　水無瀬が抗議する。
　結局、全員でジャンケンをした結果、順番は――鳥屋尾、霧切、夜鶴、新仙、茶下、美舟、水無瀬、わたし、になった。
　ちょうど順番が決まったところに、七村が出てきた。彼は右手に小さなカードを持ち――左手に小さくなったナップザックを持っていた。
　全員の視線が、そのナップザックに集まる。
　随分と……いや、かなり軽そうだ。
　見たところ彼が何処かに現金を隠し持っている様子はない。さっきの焼死騒ぎでコートをだめにしているので、隠し場所がないのだ。
「さあ、次は誰かね？　ちょっとした手続きがあるから、やはり五分くらいは時間を見た方がいいぞ」
　七村はそう云って右手のカードを示しながら、近くの椅子を引き寄せ、悠然と腰掛けた。彼が投げ捨てるようにして置いたナップザックは……ぺしゃんこになっている。
　騒然（そうぜん）とする室内。
　わたしは慌てて霧切の腕を引いて、他の人たちから離れた場所へ移動する。
「ねえねえ、七村さんが何か企んでるよ！」

「動揺しすぎよ、結お姉さま」
「だって！　あの人、明らかに何かやったよ」
「そうね、こうくるとは思わなかった……さすがダブルといったところね」
「感心している場合じゃないって。《探偵権》を落札できないよ！」
　わたしと霧切がひそひそと話している間に、鳥屋尾が入札ブースに入っていった。
　彼が終わったら、すぐに霧切の番になってしまう。
「どうする？　作戦の練り直し？」
「そうね……」霧切は両腕を組んで、考え込む。「今回のオークションは回避しましょう」
「回避？　入札しないってこと？」
「ええ。おそらく七村さんには勝てないわ」
「勝てないって……そんな！」
「慌てないで、お姉さま。何も問題はないわ。だって、七村さんはこちら側の人間よ」
「でもなんかあの人信用できないんだよ」わたしは思わず云ってしまう。「だってケチだし！　タクシー代だって、なんだかんだで霧切ちゃんが出すことになったじゃない」
「論理的とは云えないわね。事実、彼は大金を入札したわ」
「何かトリックを使ったんじゃ……」
「もちろんその可能性もあるわね。けれどそれならなおさら、今のタイミングで何千万と消費することはできない。あのナップザックが嘘で、入札額の吊り上げが目的なら、払った分だけ損をするわ……」
「どうする、もう時間ないよ」
　入札ブースから鳥屋尾が出てくるのが見えた。彼のナップザックの大きさは、入った時とほとんど変わっていないように見える。
「ここはキープよ」
「うう……大丈夫かなあ……」
　鳥屋尾に代わり、霧切が入札ブースに向かう。ナップザックを重そうに両手に提げている。一万円札一万枚分の重さは相当なもので、彼女の細腕にはつらそうだ。
　霧切が入札している間、わたしは七村に近づいた。
「あの……それ、もしかして……」
　わたしはナップザックを指差しながら云う。
「おっと、入札額の公開はルール違反だよ。いくらお嬢さんの頼みとは云え、口には出せないな」
「そんなこと云ってる場合じゃないですよ！」わたしはついつい声を荒らげる。「もし何か考えがあるなら

教えてもらえませんか？　わたしたちも行動しやすいし……」

「五月雨君」七村は腕組みすると、わたしに向き合った。「私は君のことを探偵として認めている。だからあえて云わないのだよ。それとも、ただの女子高生として接してもらいたいかね？」

　甘えるな、と云われているのかもしれない。

　なんでもかんでも「教えてください」なんて、探偵としては失格だ。

　はたして七村には勝算があるのだろうか？

　彼の余裕ぶりを見ると、すでに勝ちを確信しているかのようだ。

　わたしがとぼとぼと部屋の片隅に戻ると、ちょうど入札ブースから霧切が出てきた。わたしは飛びつくように彼女のもとに駆け寄る。

「どうだった？」

「問題ないわ」霧切は頬にかかった髪を払う。「入札せずに出てきた。ゼロ円でもいいみたい」

　彼女はそう云って、小さなカードを見せる。

「それは？」

「入札カードね。登録証みたいなものかしら」

　わたしたちが話している間にも、入札は続く。

　霧切に続いてブースに入った夜鶴は、五分どころか十分以上かけてようやく出てきた。相変わらずナップザックを我が子のように胸に抱いている。金か命かの究極の選択にきっと悩んだことだろう。

　そのあと新仙がブースに入り、すぐに出てきた。カードを持っているので、一応手続きはしたらしい。夜鶴とは対照的だ。やはりオークションに執着はないのだろうか。

　茶下、美舟、水無瀬と続く。一番時間がかかったのは美舟だった。まず大金の入ったナップザックをブースに運ぶのも一苦労なようだった。それから機械の操作にかなり手間取ったらしい。

　いよいよ最後——わたしの番だ。

　わたしは重たいナップザックを提げて、入札ブースへ向かう。予定の時間をかなり過ぎているので、急がないといけない。

　電話ボックスのような箱の前に立ち、扉を開ける。

　正面にタッチパネル式の機械がある。このゲームのために、犯罪被害者救済委員会がわざわざ用意したのだろうか。いちいち手の込んだ人たちだ。

　ブースに入って、扉を閉める。扉を閉めてしまえば、外からはもう何をしているか誰にも見えない。

　タッチパネルには、操作説明が書かれていた。

『ナマエ　ヲ　ニユウリヨク　シテクダサイ』

なんでこの時代に8ビット風なんだろう。
とにかくわたしは指示に従った。偽名を使うことも考えたが、意味はないと思い素直に入力する。
『サミダレ　ユイ』
操作はATMと変わらない。
名前を入力し終わると、今度は指紋(しもん)を登録する画面になった。
指示の通り、指紋認証装置(にんしょうそうち)に親指を載(の)せる。
『トウロク　デキマシタ』
次に数字を入力する画面に切り替わった。
わたしは『0円』のまま『OK』ボタンを押そうとして――ふと思い留(とど)まる。
もし七村のナップザックがブラフだったら？
彼はなんらかのトリックを使い、一時的に何処かに資金を隠しているのではないか。大金を入札したように見せかけ、実際には入札最低単価の百万円を入れる。たった百万円で《探偵権》を手に入れることができるのだ。
七村が《探偵権》を獲得するのは問題ない。
問題なのは、今までの入札者の中に、七村のブラフに気づいた者がいたのではないか、ということ。
いや――気づいて当然だ。
あんなにあからさまに空っぽに見えるナップザックを見せつけていたのだから、誰だって怪しいと思うだろう。
ブラフに気づいたら、みんなはどういう行動に出る？
裏をかいて自分が《探偵権》を取りにいこうと考えるだろう。
二百万出せばいいのだ。二百万払えば勝てる。
そう考えて二百万を入札した者がいるだろう。
――待てよ、そう考える人間が、二人、三人いたら？
二百万じゃ足りない。
三百万？
四百万？
……ああっ、どうしたらいいんだ。
門限の十時が迫っている。
早くしなきゃ。
みんな待っている。

わたしはナップザックの中にある札束のビニールパックを破る。帯封一束が百万円だ。
　わたしは悩んだ末に、それを五つ――五百万円を手に取った。

『５００万円』

『OK』のボタンを押すと、お金を入れるための投入口が自動的に開いた。わたしはそこに札束を五つ、帯封をつけたまま詰め込む。
　やがて画面が切り替わる。
『ニュウサツ　カンリョウ　シマシタ』
　すると画面の下にあるスリットから、カードが排出された。他の人たちも持っていたやつだ。わたしはカードを抜き取り、観察する。カードの裏側に注意書きがある。

『※注意
　オークション終了後、落札者のみ、このカードが自動的にマスターキーとなります。このカードは紛失しないようにご注意ください』

　わたしはカードを手に、入札ブースを出た。
　みんなの視線がこちらに向けられる。
　長い十分間が経過した。
　すると突然、何処からともなくブザー音が鳴り響く。
　オークション終了の合図か。
　わたしたちは視線を宙にさまよわせる。
「おい、あれを見ろ！」
　水無瀬がバルコニーの上を指差す。
　さっきまでノーマンの肖像画だったところに文字が表示されていた。下からではよく見えないので、わたしたちは揃って二階バルコニーへ確認しに行く。
　そこにはオークションの結果が表示されていた。

　本日のオークションの結果

ナナムラ　スイセイ　　　１００００万

サミダレ　ユイ　　　　５００万

キリギリ　キョウコ　　０万

シンセン　ミカド　　　０万

チャゲ　アキオ　　　　０万

トヤノオ　セイウンサイ　０万

ミナセ　ユウゼン　　　０万

ミフネ　メルコ　　　　０万

ヨヅル　サエ　　　　　０万

　その結果に一番驚いていたのは、たぶんわたしだろう。

　正直云って、「やられた！」と頭を抱えたいところだったけれど——わたしはなんとかそれをこらえた。ポーカーフェイス。実際には、かなり顔が引きつっていたかもしれない。

「本物の探偵さん、たったの一万円？　あれえ？　百万円からじゃなかった？」

　美舟が頬に手を当てながら首を傾げる。

「ちげえよ、カボチャ頭。よく見ろ、単位が『万』になってるだろ。一億だよ、一億」

「えええっ？」

「いかにも」

　七村はバルコニーの手すりに身体を預けながら、片手を広げて云う。

「あんた、正気か？」鳥屋尾の声は裏返っていた。「初回に全額って、あとあとどうするつもりなんじゃ」

「というか、みんなゼロって！」わたしは思わず抗議の声を上げていた。「どういうことですか」

「どういうことも何も……」水無瀬は眉をひそめる。「あんただって、探偵のナップザック見ただろ。あれ見せられて、無駄な入札するか？　フツー」

「落札できなければ入札した金は没収されるんじゃぞ？　説明を聞いてなかったのかね？」

「大切なお金を手放せるわけないでしょ」

　夜鶴にまで突っ込まれた。

　わたしは何も云い返せなかった。

　深読みしすぎた……

　ちらりと霧切の方を見ると、彼女は冷たい視線をこちらに向けていた。

　ごめんなさい……

「今夜は探偵に任せるしかないな」
　茶下は何故か汗だくで、それを拭うのに必死だった。
「お、俺たちを殺人鬼から守ってくれんのかよ？」
　水無瀬が七村に尋ねる。
「もちろんだ。私がなんのためにここに来たと思っているのかね。さあ、諸君。私についてこい。おそらくこのカードはすでにマスターキーになっているはずだ」
　七村はカードをひらひらと見せびらかすと、手すりを乗り越えて、ひらりと下の食堂に着地した。一人で先に部屋を出ていってしまう。
「お、おい、みんな急ごうぜ」
　水無瀬が階段を下りて七村を追いかける。わたしたちも彼に続いた。
　食堂からロビーに出る。
　わたしは霧切に小声で話しかける。
「霧切ちゃん、ごめん。失敗しちゃった……こんなことになるとは思わなくて……」
「結お姉さまがどういう心理過程を経（へ）て、あの５００万という数字を出したのか、容易（ようい）に想像できるわ」霧切は落ち着いた声で云う。「結果的に失敗だったけど、結お姉さまらしいと思う」
「それってほめてるの？」
「いいえ」
「……そ、そうだよね」わたしは肩を落とす。「それにしても七村さん、何考えているんだろう。今日一億全部使っちゃったら、明日以降どうするの」
「今夜で終わらせるつもりなのかもしれない」
「そんなまさか……」
　ダブルゼロクラスの探偵なら可能なのか。もしかして、もう犯人が誰なのかわかってたりして……
　七村はロビーにある他の扉を調べているようだ。
　わたしたちは彼の周りに集まる。
「ここにスリットがあるな」
　扉の横に、細長い穴が開いていた。
　そこに七村のカードを半分だけ差し入れると、ピーという機械音のあとに、鍵が開いた。
　おおっ、とみんなが声を上げる。
「夜十時まであと四十七分。早いところ我々の客室を探さなければならない」
「七村さん」

珍しく霧切が話しかける。
「どうした？」
「そのカードを貸してくれるかしら」
「ああ、やってみなさい」
　一億の価値があるカードを、七村はあっさりと手渡す。
　霧切はカードを受け取ると、七村と同じようにスリットにカードを差し込んだ。
　しかし反応しない。
　霧切は無言でカードを七村に返した。
「使用者の指紋をカードが感知しているようだな。薄いのによくできてる」
　七村はカードをポケットにしまった。
　マスターキーが落札者以外にも使えるかどうか確認したのだろう。結果は、不可。探偵同士のやり取りは説明不足で困る。
　わたしたちは扉を開け、新しいエリアに足を踏み入れる。
　正面に向かって真っすぐ廊下が伸びている。見たところ扉が五つほどある。また、すぐ左手に階段があり、上へ続いているようだ。
　七村は近くの扉へ歩いていく。
　カードを差し込むスリットはない。ノブを摑んで引くと、扉は開いた。
　しかしそこには、コンクリートで塗り固められた壁があるだけだった。冗談みたいな光景だが、ゲームと無関係な場所は物理的に遮断されているのかもしれない。
　他の扉を開けてみたが、すべてコンクリートによって埋められていた。なんの変哲もないコンクリート壁で、隠し扉や、隠し装置の類は見当たらない。
「行ける場所が限られているなら、迷わずに済みそうだな」
　七村は気楽そうに云う。
　わたしたちは階段を上ることにした。廃墟ホテルのはずだけれど、廊下や階段は埃一つなく、何者かの手によって整備されていることがわかる。しかし階段はやたらと急で、客に対して全然優しくない。わたしたちに嫌がらせするために、こんなに急な階段を造ったとしか思えない。
　踊り場に『2F』の文字。
　二階フロアの入り口も、コンクリートで完全に塗り固められていた。水無瀬が試しに壁を蹴飛ばしてみたが、当然ながら開いたりすることはなかった。
　そこからさらに階段を上る。

『3F』の文字。

　三階へ移動すると、今度はやっと入り口が開放されていた。

　階段はさらに上に続いており、踊り場に『4F』の文字が見える。けれど足場が途中から完全に崩壊しており、それ以上、上に行くことはできそうになかった。ぽっかりと空いた穴から、下の踊り場が見えた。うっかりしていたら、ここから転落しかねない。

「危ねえなあ……『工事中』って立て看板でも置いとけよ」

　水無瀬が毒づく。

　仕方なく三階のフロアを進む。

　赤い絨毯の廊下が、二、三十メートル先で左に九十度折れている。廊下に窓はなく、薄暗い照明がぼんやりと足元を照らす。廊下の左側に扉が等間隔で並んでいた。全部で五つ。一番近い扉には『301』のプレートが貼られていた。

「客室か」

　七村は近くの扉のノブを掴む。ノブの下にはカードを差し込むスリットがあるが、どうやらこの時間はまだ鍵はかかっていないようだった。

　七村が扉を開けた。

　わたしたちは揃って室内を覗き込む。

　確かにそこは客室らしい……けれどはっきりいって最悪の部屋だった。

　わたしが真っ先に思い浮かべたのは、牢獄だった。

　部屋の中央に簡素なパイプベッドがある。ホテル営業時に使われていたものではなく、おそらくこの日のために運び入れられたものだろう。どう見ても安っぽい。ベッドの頭側の縦板――ヘッドボードには無造作に毛布とシーツがかけられている。メイドがいない今、自分でベッドメイキングをしろということか。

　明かりは天井に埋め込まれた蛍光灯のみ。

　室内に窓はなく、入って正面の壁、やや上方に明かり取り程度の小さな横長の穴があるだけだった。しかも硝子戸など外気を遮断するものはなく、開放された状態で、鉄格子が嵌められている。そこから容赦なく冷気が吹き込んできている。

　どうりで寒いわけだ。部屋の隅にパネルヒーターが設置されているけれど、はたしてこれだけで暖が取れるだろうか。

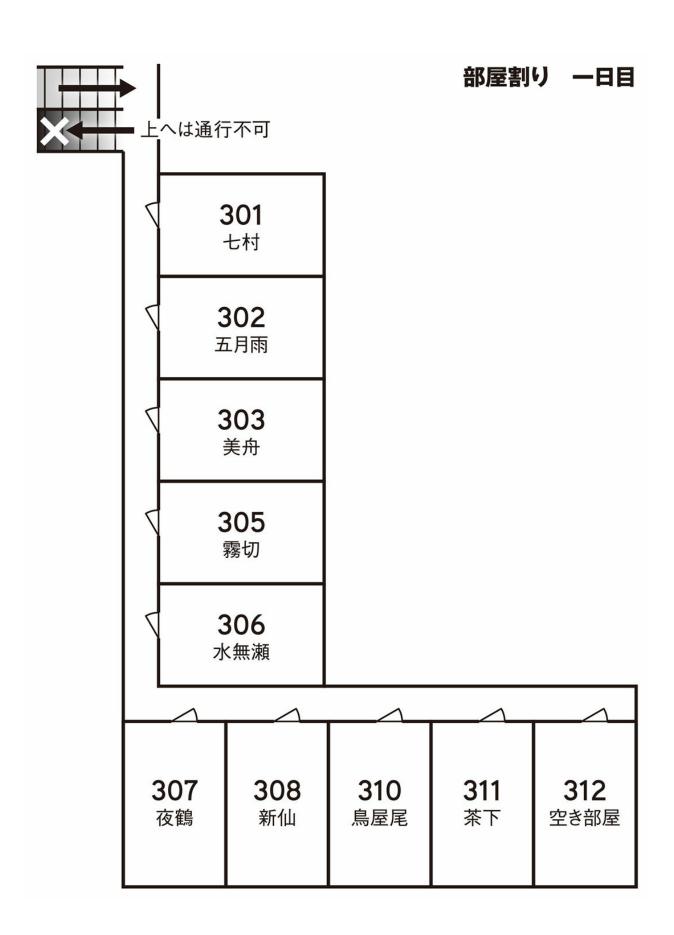
　部屋に入って左側に、ユニットバスがある。お湯はちゃんと出るようだ。絶望的な環境のなかで、それだけが唯一希望に思えた。

　部屋にあるのはそれで全部。

「マジかよ……これじゃ俺たち、囚人（しゅうじん）じゃねえか……」
「今時、囚人の方がまだマシじゃ」鳥屋尾が顔をしかめながら云う。「寒さが足腰に響くぞ、これは……」
「ロビーで寝泊まりしたいよう」
　美舟は今にも泣き出しそうな顔をしている。
「同感ですね。しかし門限は守らなければなりません」
　新仙は嘆（なげ）きながらも、すべてを受け入れるかのような穏やかさで云った。
「探偵さん、頼むわね。私たちを救いに来て」
　夜鶴が七村に身体を擦（す）り寄せながら、猫撫で声を上げる。相当身体をくっつけてますけど、未成年の前でそういうのはいいんでしょうか。
「見たところ部屋は五つしかないが、残りは？」
　水無瀬が廊下を見渡して云う。
「曲がり角の先にあるんじゃないですか？」
　わたしたちは一度部屋を離れ、曲がり角まで移動してみた。廊下を左に曲がる。するとさっきまでとは逆に、廊下の右側に五つ、扉が並んでいた。
　廊下はその先で行き止まりになっていて、窓や非常口などは存在しない。
　どうやら三階のフロアはL字型の構造で、客室の他には何もないようだ。おそらくもともとのホテルをベースに、『黒の挑戦』の舞台として改造されているのだろう。
「部屋割（わ）りはどうする？」
　七村は平然としている。
「適当でいいだろ」
　水無瀬が近くの扉を開ける。
「ま、待て。部屋の順番は重要だ」茶下が声を上げる。「考えてもみろ、《探偵権》を持つ者の部屋に近い方が、助かる確率は高いだろう」
　彼の言葉に、わたしたちは沈黙する。
　確かにそうだ。探偵が一つ一つ部屋を回っているうちに、殺人鬼＝犯人がこっそりと犯行に及ぶとも限らない。
「このフロアの構造を考えたら、探偵はフロア入り口の一番端がいいんじゃないかね？」
　鳥屋尾が提案する。
　三階客室フロアは、構造上、廊下が行き止まりの袋小路（ふくろこうじ）になっている。《探偵権》を持つ者がフロア

の入り口に陣取れば、たとえ犯人が姿を現したとしても、逃がすことはない。
「では私は『３０１』にしよう」
　七村は云った。
「探偵の隣の部屋は誰にする？」
　水無瀬が尋ねる。
「やっぱりここは探偵ジャンケンで……」
「だから誰も知らねえって、それ。誰も立候補しないなら、俺が入るけど、構わないな？」
「おい、抜け駆けはよせ」
　茶下が水無瀬の肩を掴む。
「何すんだよ、おっさん！」
「公平に決めよう、公平に」
「はあ？　どうやって」
「入札額で決めるというのはどうでしょうか」新仙が間に入る。「その日のオークションで入札した金額が多い人ほど、探偵の部屋の近くに入れる、というのは」
「なるほど、それなら今後の入札も損ばかりではなくなるな」鳥屋尾が白いあごひげを撫でながら云う。「そうしよう、わしは賛成じゃ」
　異論を唱える者はいなかった。
　結果的に、わたしが七村の隣の部屋に決まった。
「しかし……よく考えたら他は全員ゼロじゃったな」
「もうジャンケンで決めようぜ、面倒くせえ」
「まあ待て、ここは趣向を凝らして」
　鳥屋尾はタキシードの胸ポケットから、トランプを取り出した。マジシャンがよく使うバイスクルというやつだ。
「ええと……残り七人だな。カードはハートのエースから七までを使おう。若い数字を引いた者から順番に探偵に近い部屋に入るというのでどうじゃ」
　鳥屋尾は七枚のカードを抜き、他をポケットにしまった。
「ちょっと待って、何かインチキするつもりじゃないの、おじいさん」
　夜鶴が咎めるように云って、鳥屋尾からカードを奪った。明かりに透かしたり、何度もひっくり返したりして、インチキがないことを確認する。
「わしがディーラーをやったら怪しいというのなら、誰か他の人がやったらいい」

「じゃあ俺がやるぜ」
　今度は水無瀬が、夜鶴からカードを奪った。
　不器用なシャッフルのあと、彼はしゃがみ込んで、床に七枚のカードを並べる。
「早い者勝ち！　好きなカードを取れ」
　みんな次々にカードを拾っていく。
　その結果、エースを引いたのは美舟だった。それ以降は順番に、霧切、水無瀬、夜鶴、新仙、鳥屋尾、茶下となった。
「……なんで僕が最後になる？　……はっ、もしかして君たちも陰謀に加担しているわけではあるまいな？」

部屋割り　一日目
上へは通行不可
301
七村
302
五月雨
303
美舟
305
霧切
306
水無瀬
307
夜鶴
308
新仙
310
鳥屋尾
311
茶下
312
空き部屋

「なんなんですか、さっきから陰謀陰謀って」
　わたしは呆れて云う。まあ確かに、ある組織の陰謀には違いないのだけど。
　廊下の一番奥にある『３１２』号室は、十人目の魚住が死んでいるため空き部屋となる。
　ちなみに部屋番号において、4と9の数字は使われていないらしい。古いホテルではよく、そういう慣習が見られる。どちらも縁起の悪い数字とされているためだ。
　わたしは時計を確認する。
　九時四十五分。
「早めに部屋に入っておいた方がいいだろう。少なくとも十時を過ぎるまでは安全なはずだ」
　七村が云った。
　廊下に集まっていたわたしたちは、それぞれの部屋へと向かう。
「十時を過ぎたら、私が順番に扉を開けていく。それまでの間、誰かが訪れても扉を開けないことだ。くれぐれも用心するように」
　わたしたちは七村の言葉に肯き、廊下で別れ、それぞれ無事を祈りながら部屋に入っていった。
「霧切ちゃん」
　わたしは彼女を呼び止めた。
「何？」
「またすぐ会えるよね？」
「……どうかしら」
　彼女はそっけなく云って、振り返らずに部屋へ入っていく。
　扉が閉じられた。
　何故か彼女との別れは、いつもそれが最後になりそうな気がしてならない。
　一人取り残されたわたしは、ぼんやりと彼女の部屋の扉を見つめていた――
　ふと気配がして、廊下の先を見ると、向こうから茶下が歩いてきた。古ぼけたホテルの廊下を、野球ユニフォームの男が近づいてくる光景は、奇妙としか云いようがない。
「どうしたんですか？　茶下さん」
「いや……」茶下は周りに誰もいないことを確認するように、一度振り返った。「今、君一人か？」
「はい、見ての通りです」
　他の人たちはもう部屋に入ってしまったようだ。
「君、探偵なんだろ？　君に話しておきたいことがある」
「……陰謀の話ですか？」

「そうかもしれないし、そうではないかもしれない。実に恐ろしい話なんだが……」茶下はわたしに近づくと、急に小声になる。「このわけのわからない心理実験をしているのは、新仙帝という男かもしれない」
「えっ」わたしもつられて小声になる。「新仙さんが？　どういうことですか？」
「僕、あの男を見たことがあるんだよ。二年前に起きた事故……覚えてるか？　トンネルが崩落（ほうらく）して、中に閉じ込められた十五人が亡くなった……」
「あ、はい、ありましたね。三日後に救助隊が中に入った時は、全員がすでに亡くなっていたという」
「そう、あのトンネルは昔から心霊（しんれい）の目撃が多くて、僕も取材したことがあるんだ。あの事故の際にも、心霊現象と関わりがあるかもしれないと思って、僕は現場に駆けつけたんだ。家がたまたま近かったというのもある。そこで何枚か現場写真を撮ったんだが……そのうちの一枚に写ってたんだよ」
「し、心霊ですか？」
「違う違う、あの男だよ。新仙だ。マスコミに紛れるようにして、あの男はトンネルの方を見つめていた」
「……そんなの偶然じゃないですか？　もしかしたら仕事関係で来ていただけかもしれないし」
「仕事？　マスコミか？　そうだな、そうかもしれない。だがそうではないかもしれない。実はまだ話は続くんだ。ある一家惨殺（ざんさつ）事件が起きた家を調査している時に、何気なく周辺の風景を写真に撮影した。事件から一週間経（た）ったあとだから、マスコミはもういなかった。だが……写真の中に、新仙と思（おぼ）しき男が、家の方を向いて立っている姿が写っていたんだ」
「よく似た人では？」
「何度も見比べた。どう見ても同じだったよ」茶下は小刻みに震え出す。「ここに来て、あいつと会った時……それこそ最初はよく似たやつだろうと思った。しかしあいつの話を聞いてわかったんだ。あいつは……死神そのものなんだ。あいつは死をもたらす存在だ。このわけのわからない心理実験も、死を前にした人間たちを観察するために、死神が遊んでいるだけなのかもしれない」
　新仙が死神？
　幽霊だとか死神だとか、そういう超常現象的なもので物事を片づけるのは、探偵としては認められない。けれど茶下の怯えた様子は、本気でそれを信じているとしか思えなかった。
「ああ、もう時間がないな。部屋には戻りたくないが……仕方ない。僕はそろそろ行くよ」
　茶下は野球帽の位置を直しながら、廊下を引き返す。
「どうしてわたしにその話を？」
　彼の背中に問いかける。
「なんとなく。虫の知らせというやつかな」
　九時五十分。

わたしたちは別れた。

わたしは自分の部屋に向かい、扉を開けた。

心を決めるように、大きく深呼吸してから、部屋に入る。

部屋に一歩踏み込み、ノブから手を離すと、扉が勝手に閉じてしまった。オートロックだ。

怖くなって扉を開けようとすると、あっさりと開いた。夜時間が訪れるまでは自由に開け閉めできるようだ。しかし門限の時間にうっかり開いていたらペナルティを受けてしまうかもしれないので、わたしは用心深く扉を閉め直した。

室内を観察する。

さっき見た七村の部屋と構造は何一つ変わらない。天井、床、四方の壁とも、コンクリートの打ちっ放しで、心まで暗くなりそうなグレーで統一されている。

がらんとして何もないのはともかく、寒さだけは我慢できない。あの鉄格子の窓を塞いでしまえば、いくらかましになるだろうか。

わたしは部屋の奥に移動し、鉄格子の窓を見上げる。頭三つ分くらい頭上にあるため、外を窺うことはできない。高さにして、２メートルくらいはあるだろうか。

窓に毛布でも詰め込んでしまおうか。

そう考え、ベッドを見る。毛布を取ろうとして、ふと足元が気になった。

パイプベッドの脚が、ネジで床に固定されている。

ベッドを動かすことはできないらしい。ベッドをバリケードにして殺人鬼の侵入を防ぐという行為をさせないためだろうか。絶対に安全を確保させまいとする意地悪さを感じる。安全なのは《探偵権》だけ。そう思わせたいのかもしれない。もっとも、扉は外開きなので、ベッドがバリケードになるかどうかは怪しいけれど……

毛布を手に、窓の傍で飛び跳ねているうちに、とうとう夜十時が訪れた。

特にチャイムなどはなく、鍵がロックされる鈍重な音で、わたしはその時を知った。

その瞬間、わたしは硬直し、意味もなく扉を見つめた。

――殺人鬼が動き出す時間。

建物全体の空気が変わったような気がする。

壁のコンクリートは途端にひんやりとした冷気を放ち、いっそう灰色を濃くしたかのようだった。物音一つ聞こえてこない。世界中の生き物が死に絶えてしまったのではないか……そんな不気味な静けさだった。

十時一分……二分……

扉を確認する。前後に揺すっても動かない。

本当に閉じ込められてしまった……

急に心細くなる。

いくら自分から飛び込んだとはいえ、こんな恐ろしい『黒の挑戦』はもういやだ。

今にもこの扉を開けて、殺人鬼がやって来るかもしれない。

本当に殺人鬼＝犯人は、オークションの参加者の中にいるのか？

わたしはこのホテルを訪れる前に、ネットで見た記事を思い出した。一人の宿泊客が突然狂ったように、他の客を次々に殺害したという事件だ。その男は、『壁の向こうにいる誰かに襲われる』妄想を抱いていたらしい。

壁の向こうに……

わたしは急に鳥肌を感じた。

四方(しほう)の壁すべてが、わたしを見ている。

事実、わたしたちは見られている。『黒の挑戦』を楽しむ金持ちたちによって……

いや、それよりももっと恐ろしい何か。

──死。

その壁の冷たさは、死の温度だったのだ。

茶下の話を聞いたせいだろうか。死という言葉が頭から離れない。

わたしは閉塞感(へいそくかん)に叫び出しそうになりながらも、なんとかこらえる。

大丈夫。

……大丈夫？

何を根拠に？

この状況で、唯一の救いは《探偵権》を持つ者──探偵の存在だけ。

今、わたしは探偵でもなんでもなく、無力な女子高生。

探偵としての力がほしい。

闇に立ち向かう、犯罪に立ち向かう力が。

その時、扉をノックする音が聞こえた。

「私だ、七村だ」

間違いない、その声は七村彗星！

「開けるぞ」

ピーという音とともに、扉のロックが外れる音。

扉が開く――

わたしは思わず部屋の隅で身構えていた。

扉を開けたのが、もしも七村じゃなかったら？

あるいは……七村こそが殺人鬼だったら？

そんなことありえるはずがないのに、冷たい空気がわたしを疑心暗鬼にさせる。

「無事かね？」

そこに姿を見せたのは、七村に違いなかった。

右手に持っているのは、ナイフや銃ではなく、カードキーだ。

わたしは冷や汗を拭いながら、肯く。

「よし、では次の部屋に行くぞ。ついてきたまえ」

わたしはよろよろと七村のあとに続く。廊下はさっきよりも照明が暗くなっていて、夜時間が演出されていた。

隣は確か、美舟だ。

七村がドアノブの下にあるスリットにカードを差し込む。

鍵が開いた。

閉じ込められた人を解放する。それだけのことなのに、わたしには七村が救世主のように思えてならなかった。

「わあーっ、助かったあ！　ありがとう！」

元超能力少女の美舟が飛び出してくる。わたしと美舟は意味もなく抱き合った。

「再会を喜ぶのはあとだ、次に行くぞ」

七村が廊下を進む。

次の部屋は霧切だ。

時計を確認すると、十時五分。

この調子でいけば、全員を解放するのに十五分はかからないだろう。

七村が霧切の部屋のスリットに、カードを差し込もうとした時――

わたしの視界の隅で、何かが動いた。

廊下の先、直角に左に折れる場所に、誰かがいた。

「七村さんっ！　あれっ！」

わたしは悲鳴に近い声で、七村を呼ぶ。

人影はさっと廊下の角に消えてしまった。

ばたばたと足音が遠ざかる。
七村はいったん扉から離れ、わたしの指差す廊下の先を見た。
しかし七村が顔を上げた時にはもう、そこには誰もいなかった。
「誰かいたんです！」
「誰か？」
「あたしも見た！」
美舟が同意するようにこくこくと肯いている。
「暗くて遠くて……よくわからなかったんですけど……確実に、誰かいました！」
わたしは云いながら、走り出していた。
すぐに七村と美舟がついてくる。
廊下の角にたどりついた。
その先を見る。
薄闇となった廊下の奥で——
今まさに、扉の一つが閉まろうとしているところだった。
「見ましたかっ？」
「ああ」七村は目つきを鋭くして肯く。「一番奥の空き部屋だな」
扉の陰に引っ込む黒い影。
そして扉は閉ざされた。
「夜十時を過ぎた今、扉を開け閉めできるのはマスターキーを持つ者だけだ」七村は自分のカードを示しながら云う。「《探偵権》を持つ私以外に、マスターキーを持っているのは、殺人鬼だけ」
「つまり犯人ですね！」
「追いかけるっちゃ！」
わたしと美舟は走り出す。
「いや、待て」七村はわたしたちを制する。「君たちはここで待て。ここなら廊下も見渡せる。見張りを頼む」
わたしたちが立っているのは、廊下の角にあたる場所だ。確かにここならすべての部屋の扉を確認できる。
「じゃあ、あたし、ここで待ってる。探偵さんたち、犯人をやっつけてきて！」
美舟は廊下の隅に移動して、壁に張りつくようにしゃがみ込む。
「一人で大丈夫ですか？」

「うんっ」
「万が一、誰かが姿を見せたら、大声でその人物の名前を叫ぶんだ。いいね、お嬢ちゃん」
「あたし、成人してますけど！」
「頼んだよ。では急ぐぞ、五月雨君」
「はいっ」
　七村とともに、わたしは廊下の奥へ駆け出す。
　わたしたちは空き部屋の前に立った。
　七村が静止し、扉の向こうに耳を澄(す)ますようにしてから、カードキーを差し込んだ。
　七村は勢いをつけて扉を引く。
　犯人が飛び出してくるのではないか――
　あるいは銃を構えて待ち伏せしているのではないか――
　そんな想像をして思わず身構える。

　しかし室内には誰もいなかった。

　部屋の照明がつけられたままになっているため、扉を開けた瞬間に、狭い室内を一望できる。少なくとも目に見える範囲には、犯人はおろか、何者も存在しなかった。
　そんなはずがない！
　わたしは間違いなく、この扉が閉じて、何者かが部屋に入るのを見た。わたしだけではない。七村も、美舟も見ている。
　部屋は他と同じで、真ん中にベッドがあるだけ。使用者のいない空き部屋なので、毛布や布団がベッドのヘッドボードにかけられたままになっている。見たところ、ベッドの陰にも、その下にも、誰もいない。
　わたしたちは部屋に踏み込む。
　ユニットバスを覗いた。もちろんそこにも誰もいない。
　犯人は何処に消えた？
　人間消失――
　しかも異常はそれだけではなかった。

　部屋に入って右手の壁に、蛍光(けいこう)ピンクの塗料(とりょう)で、大きく『×』が描(えが)かれていた。

「これ……なんなんでしょう？」
「犯人が描いたのだろうな」
　七村は指先で塗料に触れながら云う。
　犯人がここに逃げ込んだあと描いたのか、それともこれを描いたあとで帰る途中、わたしたちと鉢合わせしたのか。どちらなのかはわからない。
「犯人がここに入ったのは間違いありません。だとしたら、きっとこの部屋の何処かに隠し通路があるんじゃないでしょうか」
「ふむ……」
　七村は何か考え込むようにして、壁を見つめている。
　わたしはベッドの下や周囲の壁、ユニットバスの天井、思いつく限りの場所を叩いて回った。けれど隠し通路の入り口らしきところは何処にもない。
　まさか犯人はまだ室内に？
　しかし隠れられる場所なんてない。ベッドのマットはとても人が隠れられるほど、厚くはなかった。
　窓は？
　わたしはジャンプして窓の縁に手をかけた。なんとかよじ登るようにして、鉄格子を摑む。手が痛くなるほど冷えていた。当然のことながら、鉄格子が外れたりはしない。そもそも窓の大きさは横四十センチ×縦二十センチ程度で、わたしでもつっかえて出入りできそうにない。鉄格子の向こうは、深淵のような夜の闇――
　この部屋は完全な密室だ。
　七村は壁から離れると、わたしと同じように室内を調べ始めた。
　時間をかけて、すべての場所を仔細に調査する。こうしている間も、廊下では美舟が一人で座っているので、犯人に襲われないか心配だった。
　やがて七村はスーツの上着の埃を払うようにしながら云った。
「人が出入りできる箇所はないな」
　彼の結論もわたしと一緒だった。
「犯人は何処に消えたのでしょうか……」
「おそらく」
　七村は『×』の描かれた壁を指差した。
「壁？　まさか壁を通り抜けたなんてこと……」

もし犯人が壁を通り抜けたとしたら？
　隣は茶下の部屋だ。
「調べてくる」
　七村は扉にカードを差し込み、廊下に出ていってしまった。わたしの目の前で扉が閉じられる。
「わたしも行きますっ」
　追いかけようと、扉に手をかける。
　――開かない。
　この時間はオートロックになっているのだ。
　ああっ、また閉じ込められた。
　廊下では遠くから「探偵さーん」という美舟の大声が聞こえてきた。たぶん、『誰かが姿を見せたら、大声でその人物の名前を叫ぶ』という命令を忠実に実行したのだろう。
「すみません、七村さん！　わたし、閉じ込められちゃったんですけど……」
　扉を叩きながら云う。
　七村は二、三分してすぐに戻ってきた。
　扉が開けられ、わたしは廊下に出る。
「五月雨さーん！」
　廊下の角で、美舟が手を振っている。
　わたしも振り返した。
「どうやら、やられたようだ」
　七村は顎でしゃくるようにして隣の部屋を示した。
　やられた？
　隣の部屋の扉は閉じている。七村が一度室内を確認したあと、その場を離れたために自動的に閉まったのだろう。
　七村が再び、カードを差し込み、扉を開ける。
　そこには信じられない光景があった。
　茶下昭雄がベッドの右サイドにずり落ち、頭をベッドの上に預けるようにして、天井を見つめていた。その目はびっくりしているみたいに見開かれ、口元はだらしなく開きっ放しになっている。両腕はだらりと身体の左右に投げ出された状態だ。また同じように、両足は弛緩して、やや部屋の奥へ向けて伸びている。
　彼のトレードマークである野球帽はベッドの奥に落ちていた。サングラスはずれかけたまま、顔にかかっ

ている。ベッドの手前に落ちているボストンバッグは、彼の荷物だろう。

「茶下さんっ……」

「死んでいる」

　七村が普段と同じ口調で死を告げる。

「本当に死んでいるんですか？」

「ああ、脈も呼吸もない。さっき確かめた。しかも首に扼殺痕がある。誰かに首を絞められて殺されたようだ」

「扼殺……」

　当然ながら、室内には他に誰もいない。

　わたしはケータイで時間を確認する。

　十時三十分。

　十時の門限から、犯人はたった三十分の間に、茶下を殺害して逃げた。

　犯人は何処から来て、何処へ逃げた？

　確かにわたしはさっき、犯人らしき人影を目撃した。

　けれど犯人は一つ隣の空き部屋に入ったのではなかったか？

　事実、隣の空き部屋には犯人が入ったと思しき痕跡があった。

　壁の『×』――

　それは隣室の茶下の死を暗示していたのだろうか。

　わたしは恐る恐る室内に足を踏み入れる。

　屍体を観察する。

　呼吸はない。脈は……わたしには無理だ。触れられない。そもそもわたしは殺人事件を専門にしたことはない。検視なんてできない。けれど茶下がすでに死んでいることは、開ききったまま静止した瞳孔を見れば一目瞭然だった。

　ユニットバスを覗く。

　誰もいない。

　ベッドの下を覗く。

　誰もいない。

　窓を確認する。

　鉄格子は硬く、外れない。

　この部屋もまた、完全な密室だ。

ベッドの上で毛布が丸まっているが、とても人が入る大きさではない。

「五月雨君、見たまえ。屍体の首の部分だ。しっかりと人間の指の形が残っている。直接、手で絞め殺されたようだな。被害者が抵抗した際にできる痕も見られる」

「それなら犯人は手を引っかかれて、怪我しているかもしれませんね」

「手袋をしていなければな」

「あれ？　茶下さんの口の中に何かあります」

　わたしは気づいて云った。

　口の中に異物が押し込められている。

　七村がスーツの内側からピンセットを取り出し、茶下の口の中にあるものを採取した。

　丸まった紙片だ。

　それをベッドの上に置き、触れないようにしながら広げる。

　何か書かれている。

『第一の標的　復讐せいこう！』

口の中に『第一の標的 復讐せいこう!』と書かれた紙片
第一の殺人現場
第一の標的
復讐せいこう!
パネルヒーター
帽子
旅行バッグ
鉄格子の窓
ベッド
ユニットバス

やられた。

完全に犯人に出し抜かれた。

わたしと七村は現場をそのまま保存し、部屋を出た。

美舟のところまで戻る。事情を簡単に説明すると、美舟はなんのことかわからないといった表情でおろおろするばかりだった。

「君たちは先にロビーに戻っていなさい。私は閉じ込められている他の者たちを解放する」

「わかりました……」

わたしと美舟は一緒に一階まで階段を下りた。ロビーに入ろうとして、その扉もカードキーが必要なことに気づいた。

わたしと美舟は廊下に座って、みんなを待つことにした。身の危険を感じることはなかった。殺されるのは一夜につき一人というルールがある。

少なくとも今夜は、これ以上誰も死なないはずだ。

誰かの死により安心感が生まれる……

こんな環境に何日もいたら、心が壊れてしまうだろう。

犯人は一体どうやって茶下を殺害し、そして何処へ消えたのだろうか……

第五章

探偵の奏鳴曲

ディテクティブ・ソナタ

死亡した茶下を除く全員が合流し、わたしたちはロビーの待ち合いエリアに移動した。わたしと美舟、霧切と七村以外は、全員が大金の詰まったナップザックをしっかりと抱えていた。みんな恐怖に疲弊したような顔でソファに座る。

霧切との再会は、あっけないものだった。

「大丈夫？」

「ええ」

会話はそれだけ。

わたしはついさっき見た屍体のことで気持ちが沈んでいたし、霧切は事件を前にして表情を硬くしていた。会話が続かないのも無理はない。

茶下が殺害されたことは、七村から説明があったらしい。

それ以上の説明を省略しようとする七村に代わり、わたしが事の顛末を話した。

「空き部屋で人が消えた？」

水無瀬は信じられないといった顔つきだ。

「空き部屋に人が入っていくの、あたしも見た。本当だよ」

美舟が云う。

「殺人鬼がなんだって空き部屋なんかに用があるんだよ」

「わかりません」

わたしは首を振る。

「ほーら、やっぱりだ！」水無瀬は興奮気味に声を上げる。「やっぱり探偵なんて役に立ちやしねえ。自分が《探偵権》を落札しなきゃ、命の保証なんかねえんだよ。殺人鬼は見事にそれを証明してみせたんだ」

「そんなっ……」

わたしは反論の言葉を探す。

けれども何も云えなかった。

「確かに今回は私の負けだ」

七村はソファに足を組んで座ったまま云う。

あっさりと負けを認めるわりに、態度はでかい。立ち直りの速さも最速なのか。

「美舟さん、訊いてもいいかしら」

唐突に、霧切が口を開く。
「なになに？」
「美舟さんが廊下にいる間、部屋を出入りする人はいなかったの？」
「うーんとお……最初から思い出すから待ってね……まず探偵さんと、五月雨さんが二人で空き部屋に入ったでしょお？　それから二十分くらいかな……空き部屋から探偵さんが一人で出てきたの。それであたし、呼んだんだ。探偵さーんって。誰か出てきたら呼べっていうから」
「それで？」
「探偵さんは隣の部屋に入っていったんだよね。野球帽の人の部屋ね。でも二分くらいですぐ出てきて、また空き部屋に戻っていったの。空き部屋から五月雨さんが出てきて、今度は二人で野球帽の人の部屋に入っていった」
「他は？　他の扉が開いた様子はなかった？」
「うーん……そうだね、ドアが開いたのは探偵さんたちのいるところだけ。他には誰も出入りしなかった」
あの時点で、七村のマスターキーによって解放されたのは、わたしと美舟だけ。美舟は廊下の角で見張りとして座っていた。
美舟の証言（しょうげん）が確かなら、わたしたち以外のみんなは自室に閉じ込められたままだったと考えられる。
けれど——茶下の首に残されていた扼殺の痕は、直接人の手で絞められたことを示している。誰かが部屋を出入りしていなければ、首を絞めに行くことさえできないはずだ。
「つまりこういうことでしょうか」新仙が膝の上で指先を組んで云う。「殺人鬼は夜十時になると同時に茶下さんを殺害し、帰ろうとしたところで七村さんたちと鉢合わせした。そのため逃亡し、空き部屋に逃げ込む。七村さんたちが追いかけたところ、殺人鬼は空き部屋で消え失せた——」
「おそらくそういうことじゃな」
鳥屋尾が賛同（さんどう）するように云う。
「ねえ、おじいさん」夜鶴が甘ったるい声をかける。「密室から消えるといえば、脱出マジシャンのオハコよね。おじいさんには、そのトリックがわかるんじゃなくて？」
「誰がおじいさんじゃ。まだそんなふうに云われる年ではないわい」鳥屋尾は髪をくしゃくしゃと掻きまわしながら云った。「そうじゃな……和製カッパーフィールドと呼ばれたわしに、抜け出せない密室などないからな！」
「まさかそれって、犯人宣言ってことかしら」
夜鶴がにやりと笑う。
「な、なな、何を云うか！　わしはずっと部屋に閉じ込められておったんじゃぞ。なんでわしが殺人鬼なん

じゃ」
「ふふふ、随分と慌てるのね。冗談ですわ、おじいさん。ねー？」
　夜鶴は胸に抱えたナップザックに話しかけていた。
　鳥屋尾は眉をひそめてソファに腰を沈める。
　本当にこの中に犯人がいるのか？
　客室に閉じ込められていた人間に、茶下を殺害することは不可能に思える。
　犯人が探偵より先に標的の部屋に向かい、殺害すること自体は難しくないだろう。殺人鬼＝犯人には門限のルールがないからだ。しかし今回に限っては、犯人は犯行後、部屋に帰れなかったはずだ。何故なら、美舟という見張りが廊下にいたからだ。彼女の証言が正しいとすれば、犯人は空き部屋で消えたあと、部屋には帰っていない。
　しかし七村は全員を部屋から解放させてきた。つまり全員が客室にいたことになる。そのことは、犯人が部屋には帰れなかったという事実と矛盾(むじゅん)する。
　それはつまり——犯人はこの中にいない、ということにならないだろうか。
　やはり今回の『黒の挑戦』の犯人は、このホテルの何処かにひそんでいて、わたしたちを遠くから監視しながらコントロールしているのではないだろうか。
「ねえ、霧切ちゃん」
　わたしは隣のソファに座る彼女に声をかける。
「『犯人はこの中にはいない』と云いたいのでしょう？　お姉さま」
　霧切は周りには聞こえないように、わたしの耳元で囁(ささや)く。
「う……なんでわかったの」
「結お姉さまの目を見れば簡単よ。それに私も、もしかしたらそうかもしれないと考え始めているの」
「えっ、それじゃあやっぱり……」
「まだわからないわ。そもそも犯人が消えたこととか、密室の謎とか、解かなければならない謎がたくさんあるものね」
　何故だか霧切の目が輝いて見える。
　探偵として純粋培養されてきた彼女が、事件現場で生き生きとしないはずがないのだ。何故ならそこが彼女の戦場なのだから。今までは、そういう感情さえセーブしてきたのだろう。しかし今、彼女はしがらみから解き放たれている。
　なんだかとても心強い。
「一つ、確認しておきたいのですが」

新仙が前屈みに座ったまま、右手を挙げて発言する。
「なんだよ、おっさん。発言を許可する」
水無瀬が指差して云う。
「七村さんと五月雨さんの二人は、空き部屋に二十分もいたそうですね。一体、何をしていたのですか？」
「えっ？」まさか怪(あや)しまれてる？「ええと……犯人が消えたことにびっくりして、室内を調べていたんです。本当ですよ。ねえ、七村さん」
七村に問いかけると、彼は右手を軽く挙げて応えた。
「二十分も？　廊下にいる美舟さんをほったらかしにして？」
「わ、わたしだって美舟さんのこと心配してましたよ！　でも彼女のいる位置なら、誰かが近づいてきてもすぐにわかるし……」
「いや、それについて咎めるつもりはありません。むしろ問題は美舟さんの方なんです」
「えっ？」
「あ、あたし？　あたしが何っ？」
「美舟さんは二十分間一人きりだった。そうですね？」
「はい……そうですけど……」
わたしは新仙の質問の意図をはかりかねて、首を傾げる。
「こういう推測が成り立たないでしょうか。五月雨さんたちが廊下で目撃した人影は殺人鬼ではなく、このホテルの何処かに隠れている共犯者だった。実際の殺人鬼は、美舟さんです」
「んなっ？　あたしー？　どーいうことっ？」
「共犯者は探偵を誘き出すために、探偵たちにわざと姿を見せ、空き部屋に逃げ込んだのです。そしてなんらかのトリックを用いて姿を消す。それに驚いた探偵たちは、室内を調べるでしょう。事実、二十分もその場にいた。この二十分間が問題なのです。さて、この時間、探偵によって一人だけ解放されている人物が、自由な状態で廊下に存在していた――それが美舟さんです」
「でもカボチャちゃんが殺人鬼なら、マスターキーを持っているのだから、わざわざ探偵から解放してもらうのを待つ必要はなかったんじゃないかしら。ねえ？」
夜鶴はナップザックに問いかける。
「いえ、探偵に解放してもらい、自ら見張りを名乗り出ることで、廊下にいたということを印象づけようとしたのです。しかし彼女は探偵たちが空き部屋を調べている間、実際には廊下にはいなかった」
「それじゃ何処にいたっつうんだよ？」

水無瀬が突っ掛かる。
「『３１１』号室、すなわち殺された茶下さんの部屋ですよ」
「わたしたちが空き部屋を調べている間に、美舟さんが茶下さんを殺害したというんですか？」
わたしは愕然（がくぜん）として云う。
確かに——可能かもしれない。
彼女が犯人なら、茶下の部屋に侵入することができる。そして二十分の間に茶下を殺害し、何食わぬ顔で廊下の隅に戻れば……
「あ、あたし、犯人じゃないよう！　うううっ！」
美舟はぶるぶると震え出した。怯えた小動物のような有様（ありさま）を見ると、彼女にそんな大胆な犯行ができたとは思えない。
「しかし理論上、あなたしかありえないように思えます」
新仙は追及をやめない。
「待ってください。その理屈だと、美舟さんはかなり早い段階で自室から解放される必要がありますよね」わたしは反論を試（こころ）みる。「でも部屋割りを決めたのはトランプだったじゃないですか。彼女が必ずしも目当ての——探偵に近い部屋に入れたとは思えないのですが……」
「その場合には、その日の犯行を見送ればいいでしょう。オークションはあと四回もあるのですから、いずれ探偵の部屋の近くに入れる時がくるはずです」
あっさり論破（ろんぱ）されてしまった。
犯人はやはり……美舟なのか？
「待て待て、カボチャ頭が犯人っつうのはありえねえよ」
水無瀬が口を挟む。
「どういうことですか？」
新仙はあくまで落ち着いた態度で返す。
「新仙さん、要するにあんたは、そのカボチャ頭が『見張りしているふりをして実際は廊下にはいなかった』と云いたいんだろ？　残念だがそれはないぜ」
「何故でしょうか」
「あの時、廊下にいるそいつと俺はドア越しに話をしていたからだ」
「あーっ、そうそう、そうだよ！」
美舟は思い出したように云う。
「なんか外がばたばたしてうるせえし、探偵がいつまで経っても来ねえし、あの時俺、ドアを叩いて騒いで

たんだよ。『早くこっから出せ！』って。そしたら外からカボチャ頭の声が聞こえてきた。んでいろいろ事情を聞いてたってわけ」
　美舟がいた場所と、水無瀬の部屋は確かに近い。扉越しに会話することもできただろう。
「二十分間、ずっと話をしていたのですか？」
　新仙は尋ねる。
「いや……十分くらいか？」
　美舟はこくこくと肯いている。
「では残りの十分で犯行を済ませたのでは」
「それはないわ」夜鶴がすかさず反論する。「カボチャちゃんが『探偵さーん』って叫び出すまで……だいたい五分くらいかしら、私も彼女と話をしていたわ。部屋の外から声が聞こえてきたから、扉越しに声をかけてみたの。そうしたら彼女が返してくれたのよ。ねー？」
　夜鶴の部屋も廊下の角にある。充分に会話のできる範囲だろう。
「トランシーバーや無線機を使っていたという可能性は？　美舟さんが床にそれを置いておけば、本人がいなくても会話できたかもしれません」
　新仙は冷静だ。とっさにそんな反論を思いつくのだから、彼もなかなかあなどれない。
「どうかしらねえ、カボチャちゃんの声が近づいたり遠ざかったりするのが扉越しにわかったから、彼女がそこにいたのは間違いないと思うけど」
　夜鶴は色っぽく微笑みながら云う。
「同感だな」
　水無瀬が肯く。
「そうですか――」新仙は考え込んだあと、口を開く。「わかりました。美舟さんによる犯行は限りなく不可能と云わざるを得ません。美舟さんが殺人鬼だという説は撤回しましょう。どうやら私の間違いでした。申し訳ありません」
　新仙は立ち上がって、頭を下げる。
　美舟は口を尖らして、新仙を睨みつけたが、それ以上非難するつもりはないようだ。
　水無瀬と夜鶴によって美舟のアリバイは証明されたといっていいだろう。
　美舟は間違いなく、廊下の角で、見張りをしていた。彼女がこっそりと茶下を殺しに行ったという推論は成り立たない。
　そして同時に彼女の証言――『見張っている間、誰も部屋を出入りしていない』ということが、事実であると考えなければならない。

「しかしこれで殺人鬼が何者かわからなくなってしまったぞ」鳥屋尾は疲れたように肩を落とす。「わしが思うに、ノーマンを操っていたやつが、このホテルの何処かに隠れておるんじゃろう。きっとそいつしか知らない抜け道を使って茶下氏を殺したんじゃ」

「部屋を念入りに調べましたけど、抜け道なんてありませんでした」

　わたしは云う。

「それなら捜査が足りなかったんじゃろ。よいか、脱出トリックには必ずネタがある。マジシャンの鎖はすぐ外れるようになっているし、一見何もないところに抜け穴や隠れ場所が存在するものじゃ」

「そんなに云うなら鳥屋尾さんが部屋を調べてきてくださいよ」わたしは投げやりに云う。「専門家にしかわからないことが判明するかもしれません」

「そうじゃな……一休みしたらな」

　鳥屋尾はあくびをしながら云う。のんきなものだ。少なくとも明日のオークションまでは何も危険はないと考えているのだろう。

　あるいは彼が脱出トリックを駆使して、茶下を殺害した可能性はないだろうか？

　茶下と鳥屋尾の部屋は隣り合っている。もしもわたしたちの知らない『壁抜けトリック』があるとしたら──

　空き部屋に駆け込んだ鳥屋尾が、×印のある壁をすり抜けて茶下の部屋に移動する。そこで不意をついて茶下を殺害。次にもう一つ壁をすり抜けて、鳥屋尾の部屋『３１０』号室に戻る。

　──そんなこと、あり得るだろうか。

　かつてこのホテルで大量殺人を犯した男は、こう云っていた。

『壁の中から誰かがこっちを覗いていやがったんだ！』

　あの壁の×印といい、壁に何か秘密があるのではないだろうか……

　いずれにしても、現場を詳細に調べる必要があるだろう。

「ねえ、霧切ちゃん、三階を調べに行こうよ」

「そうね。私も調べたいと思っていたところよ。でもそれは朝になってからにしましょう」

「どうして？」

「七村さんを連れて行かないと鍵を開けられないから。いちいちあの人にお願いするのは面倒だわ。朝七時を過ぎれば、自由に動けるのだから、それを待ちましょう」

「でもその間に、犯人に重要な証拠を消されたりするかも……」

「このロビーを出て行く人がいないか、見張っておく必要があるかもしれないわね」

　霧切はソファから立ち上がると、突然ロビーの隅へ向かって歩き出す。

「ちょっと、何処行くの」
　わたしは慌てて追いかける。
「彼らと一緒にいる必要はないわ」
　霧切はロビーの片隅で、スカートを畳(たた)んで体育座(たいいくずわ)りをする。すぐ近くに、ロビーを出る扉があるので、出入りする人間を見張るにはちょうどいい場所だろう。
　仕方なくわたしは彼女の隣に座った。
「君ってほんと協調性ないな」
「そんなことない」霧切はむっとした表情で云い返す。「人を選んでいるだけ」
「まあ確かにあの中に犯人がいるのだとしたら、協調なんてできないけど」わたしはソファに座る彼らを眺める。「霧切ちゃんにはもう犯人の目星(めぼし)がついているの？」
「まだ屍体も調べていないのに、犯人なんてわかるわけないわ。早く屍体を見に行きたいところね」霧切は中学生らしからぬことを云って、首を竦めた。「ねえ、結お姉さま、訊きたいことがあるのだけれど」
「うん？」
「廊下で見た人影のことだけど……姿形(すがたかたち)はどれくらいはっきりと見えたの？」
「うーん……夜時間になったら廊下の照明がかなり暗くなっていたでしょ。だからほとんど見えなかったんだよね。わたし、そんなに視力よくないし。でも廊下の先に誰かがいたのは間違いないよ。美舟さんも見ているし」
「男性か女性かもわからない？」
「そうだね……一瞬で角に消えちゃったから」
「服装は？　スカートかパンツかくらいわからなかったの？」
「少なくともひらひらとはしていなかったと思う……あ、でも『３１２』の空き部屋に入っていく時には、服の裾がひらめいていた気がする」
「それはたとえば、コートや上着の裾である可能性は？」
「……そう云われればそうかもしれない。ちょっとはっきりとはわからないな」
「何もわからないのね。結お姉さまは一体何を見ていたの」
「しょうがないでしょ、状況が状況なんだから」
「もしお姉さまがしっかり犯人を見ていたら、もう事件は解決していたのかもしれないのよ」
「そうだけど……」
　わたしは何も云い返せなかった。
　今のところ、『黒の挑戦』は犯人の思い通りに進んでいるといっていいだろう。悔しいけれど、わたした

ちは完全に後手に回っている。
　早く犯人を捕まえて、『黒の挑戦』を終わりにしなければ。
「そういえば……」わたしは思い出して云う。「十時になって部屋に入る直前に、茶下さんに呼び止められて、変な話を聞かされたんだ。なんかまたおかしなことを云ってるのかと思ってたけど、今にして思えば、何かのメッセージを伝えようとしていたのかもしれない……」
「なんの話だったの？」
　わたしは聞いた話をそのまま霧切に伝えた。
「新仙さんが死神？」
「でたらめな話だと思うけど」
「でも新仙さん本人が自己紹介で云っていたことと矛盾しないと思うわ」霧切は真っ直ぐに床を見つめたまま云う。「本人が望むと望まぬとにかかわらず、死に関連する場所に引きつけられてしまうのではないかしら。その感覚はわからなくもないわ」
「わたしにはさっぱりだよ」力なく首を振る。「でもあの人だけが『黒の挑戦』の招待状を受け取ってないのが気になるな。想定外の訪問者なのか、それとも……」
　犯人？
　もしそうだとしたら、かなりわかりやすすぎるだろう。一番怪しそうな人物は犯人ではないと相場が決まっているけれど――
「彼はのちのち私たちの運命を左右する存在になるかもしれないわね」
「珍しく抽象的なこと云うんだね。運命だなんて」
「そうかしら。結お姉さまが思っているより、私はそういう言葉が好きよ」
「へえ、運命だとか希望だとか、そういうのって『論理的じゃない』って切り捨てるのかと思ってた」
「必ずしも論理だけでは片づけられないことに興味を覚えるだけよ」
　霧切はそっけなく云って、そっぽを向く。
　時計を確認すると、すでに零時を回ろうとしていた。
　ソファに座るメンバーは、さすがに神経が張り詰めた様子で、黙り込んだままうなだれていた。その中で唯一、《探偵権》を持つ七村だけがいつもと変わらない表情で、足を組んで座っていた。犯人によって一敗を喫したというのに、何故あんなに冷静でいられるのだろう。
　とにかくこうして朝まで待つしかない。
　霧切とお喋りでもしていようかと思ったが、気づくと彼女は自分の膝に顎を載せて、寝息を立てていた。

きっと疲れていたのだろう。

眠る彼女の横顔を見ていると、まつげがとても長いことに気がついた。何処からどう見ても、十三歳の女の子の寝顔だ。白いほっぺたがとても柔（やわら）かそう。薄く開いた唇（くちびる）は、冷えきったような色白の肌に、唯一控え目な紅色（べにいろ）を添えていた。

無防備（むぼうび）になると、こんなにあどけない顔つきになるのか……

きっと彼女が普段見せる大人ぶった表情は、探偵だとか事件だとか、血なまぐさい出来事と向き合う決意に満ちたものなのだろう。彼女の宿命が、いかに彼女を縛（しば）りつけているのかを想像すると、胸が痛い。彼女がこの前ふと見せた、探偵であることへの戸惑いも、けっして理解できないものではない。

彼女はこの先も探偵として生き続けられるだろうか。

それともいつか辞（や）める時が来るのだろうか。

どちらにしても……その寝顔くらいはかわいらしいままでいてほしいものだ。

わたしは彼女を起こさないようにリュックから文庫本を取り出して、読書することにした。

ロビーを出ていく者がいないか見張っておく必要がある。徹夜（てつや）は得意だ。中学生の頃は、ポエムを書いているうちに朝を迎えたことが何度もある。もちろんそのノートは焼き捨てたけど。

ちなみにロビーの扉は今後の利便性を考えて、開けたままドアストッパー（七村のボールペン）を噛ましてあるので、鍵を持っていなくても出入りできる状態だ。

眠気（ねむけ）をこらえながら本を読んでいると、ふと右肩にかすかな重みを感じた。

霧切がわたしに寄りかかって寝ていた。

思わず頭をナデナデしてあげようかと思ったがやめておいた。

わたしは彼女の重みを感じながら、読書を続けた。

……気づくとわたしは床にうつ伏せになっていた。

眼鏡が外れて目の前に落ちている。

はっとして身体を起こし、慌てて眼鏡をかけた。

「そんなに慌てなくても大丈夫よ、お姉さま」

すぐ横に霧切がいた。

「あ……あれ？　わたし……」

今までのこと全部が夢だったらいいのに……そう思いながら周囲を見回す。もちろん目の前には廃墟ホテルという現実があり、見慣れた顔ぶれがソファで休んでいる様子が見えた。

「寝相（ねぞう）悪いのね、結お姉さまって」

霧切はくすくすと笑いながら云う。

彼女は片手に、わたしの文庫本を持っていた。

「わたし、寝ちゃった？」

「ええ」

「びっくりした……また誰かに襲われて気絶してたのかと思った……」

ケータイを確認する。

もう午前七時前だった。

「そろそろ夜時間が終わるわ」

「かなり長い時間寝ちゃった……」わたしは目を擦りながら云う。「霧切ちゃんごめんね」

「ううん、いいの。意外とこの本、面白かったし」

霧切は文庫本を閉じてわたしの横に置く。タイトルは『長い家の殺人』。たとえどんな状況でもミステリを読むのが探偵の宿命か。

「じゃあ今度、続き貸してあげる」わたしは立ち上がって、屈伸運動する。「なんだかここで時間を過ごしていると、生命力をじわじわ削られていく気分だ」

「早めに解決したいところね」

霧切も立ち上がって、わたしの真似をして屈伸運動をした。

待ち合いエリアの方を見ると、彼らはそれぞれソファで眠っていた。美舟はソファから落ちて床に伸びている。まさか殺されてはいないと思うけど……彼らはすでに二日間ここで過ごしているので、疲労度はわたしたち以上だろう。

「少なくとも私が見張っている間、ロビーを出入りした人はいなかったわ」

霧切は早速ロビーを出ていく。

わたしも急いで彼女のあとに続いた。

階段を上がり、三階の客室フロアに入る。照明はまだ暗いままで、夜の不気味さがそのまま残されていた。わたしは廊下の角に見た犯人の黒い影を思い出して、身震いする。

霧切は真っ直ぐ廊下の奥へと向かう。ちょうど角を曲がった辺りで、突然照明が明るくなった。

時間を確認すると午前七時になっていた。おそらく照明は所定の時間に自動的に切り替わるようになっているのだろう。

「まず茶下さんの屍体を確認するわ」

霧切は廊下の奥から二番目、『３１１』号室の扉を開けた。扉はカードキーがなくても開いた。

「部屋の状況は変わっていない？」

霧切に問われ、わたしは室内を確認する。
　茶下の屍体はわたしが見た時のまま、ベッドの右側に座り込むようにして置かれていた。驚愕したような表情もそのままで、唯一変化しているのは、顔面がいっそう土気（つちけ）色になったということくらいだろうか。
　見たところ、変化はない。
「発見時とまったく同じだよ」
「そう、それならいいわ」
　霧切は制服のポケットから黒い手袋を取り出して、両手にはめた。指紋を残さないようにするためだろう。
「黒い手袋って珍しいね。警察や鑑識は白い手袋を使うけど……」
「私は探偵だから」
　霧切はそう云って屍体に近づく。
　彼女が屍体を調べている間、わたしは漫然と室内を調べて回った。しかし新しい発見など何一つない。せめてボタンの一つでも落ちていれば……と思ったけれど、そんな都合のいい話はなかった。怪しいものは何も落ちていない。
　ベッドの手前に置かれているボストンバッグには、着替えが詰め込まれていた。すべて野球のユニフォームだ。
「扼殺というのは間違いなさそうね。手で首を絞められたことが直接の死因よ」
　霧切は屍体を覗き込んでいる。
　よく平気だな……さすが『９』ナンバーの探偵。
　わたしは遠巻き（とおま）きに相槌（あいづち）を打つ。
「ただ、気になる点がいくつかあるわね」
「なあに？」
「扼殺痕の他に、顎に近い部分にロープ状のもので絞められたような痕もあるわ」
「被害者は二回、首を絞められたということ？」
「二回か、同時かわからないけれど」霧切は肩に落ちた三つ編みを払うようにして云う。「それから扼殺痕の方だけど……これはとても異常だわ」
「異常――？」
「普通、手で直接絞め殺されると、少なからず犯人の指の痕が、被害者の首に残るの」
「うん」
「たとえば私が結お姉さまを絞め殺そうとした場合――」

霧切はわたしに近づくと、ちょっとだけ爪先立ちになりながら、首元に両手を伸ばしてくる。彼女の手袋をした指先がわたしの首に触れ、くすぐったかった。変な声が出そうになるのを我慢する。
「正面からこうやって絞めるか、あるいはうしろからこっそり絞めるか……」
「被害者に接近しなければ犯行は不可能だね」
「そう、でも問題はそこじゃないの」霧切は屍体の扼殺痕を指差して云う。「今私がやったみたいに首を絞めると、親指が必ず上にくる。でも茶下さんの屍体に残された痕跡は、親指が下にきているの」
「ど、どういうこと？」
指が上下さかさまの人間？
う、宇宙人？
「つまりこうね」
霧切はベッドの反対側に回る。そしてベッドに膝立ちの状態で乗って、屍体に近づく。茶下の頭はベッドの縁を枕にするようにして載せられており、天井を見上げている。霧切は屍体の頭を覗き込むことのできる位置まで移動した。
そして両手を屍体に向かって伸ばす。
「こんなふうに、頭越しに首を絞める」
霧切は首を絞めるようなふりをしてから、ベッドを下りた。
確かに、仰向けになっている人間に頭の方から近づいて首を絞めれば扼殺痕は上下逆になる。
「じゃあ……茶下さんはベッドに頭をもたれて休んでいるところを、こっそりとベッドの反対側から近づいてきた犯人に絞め殺されたということ？」
「この状況だけを見れば、そういうことになるわね」
「それはおかしいよ」わたしはあらためて室内を見回す。「仮に茶下さんがベッドの横で休んでいたとして……扉から部屋に入って来た犯人に気づかないはずがない。気づかないほど熟睡していた？　もしそうなら、犯人がわざわざベッドの左側に回り込んで首を絞めるというのは変だ。気づかれていないなら、正面から首を絞めればいいんだから」
「そうね。そもそも、あの状況で茶下さんが平然と寝ていられるはずもないわ。いつ犯人が襲ってくるとも限らないのに」
わたしはふと思い当たる。
犯人が扉から入ってきたらさすがに茶下も気づいたはずだ。そもそも扉を出入りした者はいないということが、美舟の証言により確定している。
それなら犯人が左の壁からすり抜けてきたのだとしたら……

茶下の背後にこっそり近づき、絞め殺すことが可能だったのではないだろうか。

　左の壁――

　その隣は、犯人が消えた密室『３１２』号室だ。

「霧切ちゃん……人間って、壁を通り抜けられるかな……」

「どうしたの、結お姉さま。しっかりして。人間どころか、カピバラだって壁を通り抜けられないわ」

「でも壁を抜けなきゃ、この殺人は成り立たないんだ！」

　わたしは壁を調べ始める。

　もちろん以前にも充分調べた。けれど何か見落としがあるかもしれない……

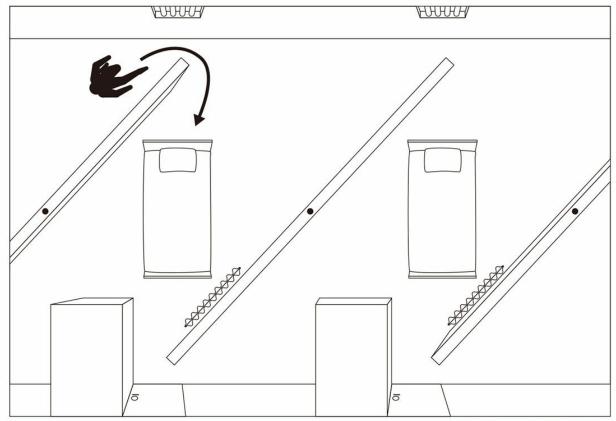
「忍者屋敷みたいに、壁全体がくるって回転しないかな」

「そういう仕掛けはなさそうね」

「絶対に何処かに秘密があるはずだ。だいたい、この部屋っておかしいでしょ」わたしは壁を見渡して云う。「明らかに犯罪被害者救済委員会の匠によって改築されているよ。だってホテルにこんな牢獄みたいな部屋があるわけないもの」

「そうね……今回のゲームのためにこの建物が改造されているのは間違いない」霧切は賛同する。「けれど壁を調べても何もないなら、答えは別の場所にあるはずよ」

「別の場所……か」

　確かに、壁に秘密の隠し扉があるとして、その開閉スイッチが近くにあるとは限らない。もしかしたらバスルームかもしれないし、天井の片隅かもしれない。

間違った推理例

いくら探してもそんなものは見つからないけれど……

　霧切は茶下の荷物を調べ始めた。携帯電話が出てくる。しかし彼女は興味なさそうにそれを戻した。次に手帳を発見する。わたしは霧切と一緒になって、手帳の中身を確認した。

　取材ネタだろうか……何処の国でUFOが発見されたとか、隕石が落下したとか、新兵器が確認されたとか、わたしには意味のわからないことが書き込まれている。

「この人の書き込みによると、人類は過去に何度も滅亡の危機に遭遇していることになっているわね」

　霧切はうんざりしたように云う。

「例の陰謀がどうとかってやつ？」

「そうね。かなり熱心に『人類滅亡』の取材をしていたみたい」

　霧切は手帳を戻す。

　人類滅亡か——はたして将来、そんなことが起こり得るだろうか。

　そういえば前に七村が、トリプルゼロクラスの探偵たちが犯罪者になった場合、国家レベルの対応が必要になると云っていたけれど……それなら犯罪被害者救済委員会の会長がトリプルゼロクラスだったら、破局的事態が進行中ということにならないだろうか。

　ふと霧切がベッドの上に置かれている紙切れを手に取った。

「ところで、この紙切れは最初からベッドの上にあったの？」

　——『第一の標的　復讐せいこう！』と書かれている。

「ううん、それが実は屍体の口の中に丸めて入れられていたんだよ。猟奇的だね」

「口の中に？」

「間違いないよ、わたしが見つけたんだ」

「そう……ますます不可解ね」霧切は腕組みして云う。「一つ確認したいのだけれど、結お姉さまがこの部屋に踏み込んだ時点で、茶下さんは間違いなく死んでいたの？」

「うん、七村さんが『死んでいる』って云っていたし」

「彼の言葉はどうでもいいわ。結お姉さまから見て、茶下さんは死んでいた？」

「わからないよ。云っておくけど、わたしは君みたいに屍体慣れしてないんだ。本当に死んでるのか、死んだふりなのか……でもあえて云えば、死んでいたと思うよ。瞳孔に反応が見られなかったから」

「充分よ、お姉さま。『９』ナンバーに変更してもやっていけるわ、きっと」

「殺人事件なんてうんざりだよ」

　わたしは苦笑して云う。

「最初の発見時に茶下さんが実は生きていた——という可能性もないわね。なんらかの理由で死んだふ

りをしてみせたあと、みんながいなくなってから本当に犯人に殺されてしまった、ということはなさそうね」
　霧切は一人で可能性を立て、一人で否定する。独り言が止まらない。
「結お姉さま、本当に部屋の状況は変わっていない？」
「うん、それについては保証するよ」
「そう……」
　霧切は腕組みしながら部屋を見渡す。
　わたしも彼女と一緒に室内を眺めながら、事件について思い返す。
「ねえねえ、霧切ちゃん。まさか七村さんが犯人ってことはないよね？」
　我ながらとんでもないことを云っていると思う。
　けれど状況から考えると——誰よりも先に一人で現場に踏み込んだ七村が犯人である可能性は高い、と云わざるを得ない。
　彼は茶下のいる部屋に《探偵権》のマスターキーで入り殺害、その後、第一発見者を装(よそお)い、わたしに彼の死を告げる——
　動機はわからない。ただ、『黒の挑戦』の流れに便乗(びんじょう)して殺した可能性はある。わたしたちが廊下で見た人影は、実際に犯人のものだったのだろう。七村はその状況を利用し、犯人に罪を被せることを前提に茶下を殺害する。
「それはないわ」
　霧切に一蹴(いっしゅう)されてしまった。
「でもそれしか考えられないよ。動機はともかく、殺害が可能なのは七村さんしか——」
「いいえ、七村さんにも殺害は不可能よ。何故なら、時間が足りないの。七村さんが現場に踏み込んでいたのはわずか二、三分でしょう？　そんな短時間では人間を絞め殺すことはできないわ」
「あ、そうか……」
「大人の男性を絞め殺すには、最低でも十分前後、窒息(ちっそく)状態を続ける必要がある。七村さんにはそんな時間はなかったはずよ」
「——確かに」
　探偵を少しでも疑った自分が恥ずかしい。
　だとしたら——犯人は誰だ？
　わたしたちの中に本当にいるのか？
　わたしと七村は夜時間が始まってから、ほぼずっと一緒に行動しているため、犯行は不可能といっていいだろう。もちろんわたしは犯人ではない。

美舟は二十分間ほど一人で廊下にいる時間があったけれど、近くの部屋にいる水無瀬と夜鶴によって、アリバイは証明されている。そして逆に、美舟の証言により、水無瀬と夜鶴の二人が部屋にいたことは証明されたといっていいだろう。
　問題は鳥屋尾、新仙、霧切の三人だ。
　事件後、彼らは七村によって自室から解放されている。けれど解放されるまでの間、ずっと部屋にいたかどうかは証明されていない。
「結お姉さま、難しい顔してどうしたの？」霧切がわたしに近づいて、顔を覗き込みながら云う。「まさかまた、私が犯人だなんて考えているのかしら？」
「そんなことあるわけないだろ」
　彼女を疑う気持ちは、これっぽっちもない。
　わたしは彼女を信頼している。
「だとしたら、探偵失格ね。お姉さま、たとえ身内でも疑うのが探偵よ。可能性が論理的に否定されない限り、追及をやめてはいけない」
「それも霧切家の教え？」
「そうよ」
　霧切は胸を張って誇らしげに云う。
「じゃあ君は、わたしのことも犯人だと考えているんだ」
「違うわ」霧切は少し焦ったように云う。「結お姉さまは論理的に犯人である可能性が否定されているからいいの」
「本当？」
「本当よ。信じて」
　霧切は困ったような顔で云う。
　あまりしつこくしても仕方ないので、わたしはそれ以上訊かなかった。
　身内でも疑うのが探偵——
　彼女にそれができるのだろうか。
　いや、できてこそ霧切響子だろう。
　仮にわたしが犯人だったとしたら？
　彼女ならきっと、正しくわたしを疑うだろう。
「結局『黒の挑戦』の予告にあった通り、『消失』と『密室』が実行されてしまったね。本当にこの部屋は完全な密室だ」

わたしは話題を変えるように、霧切から顔を背(そむ)けて云った。
「完全な密室かしら」
「これ以上完全な密室がある？　扉は施錠(せじょう)され、外には見張りがいる。抜け道はいっさいなし。窓は小さくて通り抜けるのも困難、おまけに鉄格子がはめられている。純度百パーセントの密室じゃないか」
「せいぜい九十パーセントくらいだと思うわ」霧切は窓を指して云う。「少なくともこの密室には穴が空いている」
　鉄格子の窓——
　夜が明けたせいか、窓の外が白んでいるのが見えた。けれど爽快(そうかい)な晴れ模様(もよう)というわけにはいかず、どんよりとした灰色の空が窺える。
「それこそカピバラだってあの鉄格子は抜けられないよ」
　子供のカピバラなら通り抜けられそうだけど。
「でもあそこが唯一の穴だから」
「ちょっと見てみようか」
　わたしは奥の壁に近づき、窓を見上げる。
　ベッドを足場にすれば外を窺えそうだが、ベッドは床に脚を固定されているため、壁際に引き寄せることができない。
　そこでわたしは得意のジャンプで鉄格子を掴み、懸垂(けんすい)の要領(ようりょう)で身体を引き上げ外を窺う。
　昨夜までは真っ暗で何も見えなかったが、今では外に広がる山々が朝もやの中に見えた。周囲には人家はおろか、人工物一つ見当たらない。
　鉄格子に顔を近づけて、下を覗く。しかしまるで地面は見えない。
「何もないね」
「鉄格子は硬い？　外れない？」
「無理だよ……んーっ」
　わたしは力尽きて、その場に足をつく。
「すぐ向かいに建物とか、部屋とかなかった？」
「そんなものがあれば覗くまでもないでしょ。見渡す限り大自然だよ」
　なお、あとで『３０１』号室側の窓も調べたが、近くに建物などは存在しなかった。窓はいずれもコンクリートの壁に穿(うが)たれた小さな穴に過ぎず、そこから見えるのは何百年と姿を変えていないであろう山々だけだった。

次にわたしたちは一番奥の部屋、『３１２』号室に移動した。

霧切は一時間かけて、室内を調べた。しかし抜け道や、謎のスイッチなどは見つけられなかった。犯人はこの部屋で煙のように消えてしまったが、調べれば調べるほど、不可能にしか思えなくなっていくのだった。

わたしは釈然（しゃくぜん）としないまま、壁の×印を見つめる。

「お手上げだ」わたしは両手を挙げる。「この×印は一体なんなんだろう」

「見ての通り、死者の存在を示すマークでしょうね」

「『第一の標的　復讐せいこう！』か……」

わたしはベッドに腰掛けて、力なく首を振る。

今回の『黒の挑戦』の標的はあと何人なんだろう。

指折り数えながら、ふと気づく。

生き残りは八名。

そのうち挑戦状によって呼ばれた探偵七村は、標的から除外していいだろう。彼についてきたわたしと霧切も、標的であるはずがない。

残り五名。

この中に犯人がいるとすれば、それを除外して、残り四名。

あと四回のオークションで、四名を殺す……今回の犯人なら不可能ではないかもしれない。しかし標的に《探偵権》を落札されることや、標的が探偵に守られる可能性を考慮（こうりょ）したら、他の無関係な人間を殺している余裕はない。

ということは、わたしと霧切は安全圏内にいると云えるのではないだろうか……

いや、わからない。

標的はあと一人だけかもしれない。その場合、邪魔なわたしたちを排除するために、犯人が動き出す可能性だってある。

まだ命がけの挑戦は続いているのだ。

わたしと霧切は一緒に部屋を出た。

すでに夜時間は終わっているので、ルール上は安全が確保されている。少なくともオークションが行なわれる午後六時までは、自由時間といえるだろう。

「霧切ちゃん、今のうちにシャワー浴（あ）びてこない？　夜の間は危なくてシャワーなんか使ってる場合じゃないし、今のうちしか……」

「シャワーなんか浴びなくても一週間は――」

「だめ！　女の子がそういう訓練するもんじゃないよ！」

　結局わたしたちは、『３０２』号室のバスルームを使うことにした。洗ってあげようか、と霧切に云うと、あからさまに嫌がったので、順番にシャワーを浴びた。

　室内にはドライヤーを使うコンセントがなかったので、わたしはタオルで霧切の髪を乾（かわ）かしてあげた。霧切の髪は、神様によってこの世でもっとも精巧（せいこう）につくられた糸のようで、柔らかくつやつやとしていた。

「わたしが三つ編みにしてあげるね。一度やってみたかったんだ」

「自分でできるわ」

「いいからいいから」

　ベッドに並んで座り、霧切の髪を編んでいく。彼女はわたしにされるがままになっていた。

「次のオークションはどうする？」

「慎重に入札しなければならないわね。《探偵権》を持つ者が、持たない者を救うという構図は成り立たないと証明されてしまったから……みんな自分の身を守るために《探偵権》を落としにくる」

「今度こそ《探偵権》を落札して探偵にならなきゃ」

「そうね……もし仮に殺人事件が起こってしまっても、《探偵権》があれば一番に現場に踏み込める……」

　なるほど、そういう役割もあるか。

　死者の声を聞くのも探偵の仕事だ。

　けれど可能なら、死者など出さない方がいいに決まっている。

　これが『９』ナンバーと『８』ナンバーの違いだろうか。『９』は殺人専門だけど、『８』は殺人の一歩手前、不自由な状態にある者を救う探偵だ。

「そういえば七村さんはどうするつもりなんだろう。あの人、昨日のオークションで一億全部使っちゃったでしょ」

「そのことなんだけど」霧切は髪をいじられているので、視線だけをこちらに向ける。「もともと『黒の挑戦』のルールでは、召喚された探偵はゲームの駒として排除されないことが約束されているでしょう？　では今回のゲームではどうなのかしら。《探偵権》オークションで、探偵の役割が移動するようにルールが決められているけれど、もとの『召喚された探偵は排除されない』ルールも生きていると思うの」

「つまり……《探偵権》を得られなくても、七村さんだけは危険が及ばない？」

「そう思うわ。今回だけ探偵を殺してもいい、なんてルールを適用させたら、『黒の挑戦』の根幹（こんかん）が揺らぐから」

「うーん、確かに組織の連中はそういうところ厳格そうだ」

「七村さんはそのことを理解しているから、オークションで無茶ができたのではないかしら」
「なるほどね。考えなしに大金投入したわけじゃないんだ」
……でもこのあとは？
ゲームの駒として安全が保証されているからといっても、《探偵権》を得なければ夜時間の行動は制限される。探偵としての役目は完全に封印されるといっていい。
七村は一体、何を考えているのだろう。《探偵権》を勝ちとるのも最速なら、オークションから退場するのも最速だった。わけがわからない。
本当に名探偵と呼ばれる人種は厄介だ。
「次のオークションで勝つにはどうしたらいいだろう？　例の協力作戦でいく？」
「あの作戦は、全員の命を守るという条件においてのみ成立するものよ。すでにそれは破綻している。最初は資金力で勝てても、連続して勝ち続けることは不可能ね。それどころか、後半で資金が尽きて何もできない状態になりかねないわ」
「そうか……じゃあどうしたらいいんだろう……」
わたしは昨日のオークションで５００万無駄にしている。一方他の全員は、手元に一億まるまる残っている。
オークションは残り四回。２５００万が限度額といったところか。２５００万以上の額で落札してしまった場合、のちのオークションで負ける可能性が増す。だから2５００万以下で、極力少ない額で落札するのが勝ち続ける方法だ。
もっとも、わたしはこの計算にも当てはまらない状態だけれど。
「このオークションで必ず勝てる方法なんてあるのかな」
「どうかしら……」
霧切は考え込むようにして云う。
「あー、ややこしい事件になったなあ」
わたしは倒れ込むようにして、ベッドの上に仰向けになる。照明が一つついただけの、何もないコンクリートの天井――
今回の『黒の挑戦』は、徹底的に探偵対策が練られている。探偵をクローズドな環境に拘束し、一日一回という緩慢（かんまん）な進行でオークションを開いて《探偵権》を奪いつつ、タイムアップを狙っているのだろう。
『黒の挑戦』で犯人が勝つには、探偵から告発されずに逃げ切るしかない。ただし物理的な逃亡には意味がない。定められた１６８時間、探偵を思考の迷路（めいろ）にさまよわせ続けること。それが勝つための方

法だ。
　そうして出来上がったのが、今回の『黒の挑戦』なのだろう。
「ねえ、結お姉さま、もう片方も」
　霧切がベッドに横たわるわたしを見下ろしながら、髪を振ってみせる。
　両サイドを三つ編みにしてほしいらしい。
「ああ、ごめんごめん」
　わたしは身体を起こし、髪を編むのを再開した。
「オークションで勝つことより、事件を解決することの方が、私たちには向いているかもしれないわ」
　霧切はそう云ったが、わたしには事件の方もさっぱりだった。
　やっぱりわたしは探偵には向かないのかな……

　わたしと霧切がロビーに戻ると、待ち合いエリアから数名がいなくなっていた。ソファで眠っているのは美舟と夜鶴の女性二人だけで、男性陣の姿がない。
　七村、水無瀬、鳥屋尾、新仙の四人は、食堂に車座になって食事をとっていた。なんだかピクニックみたいでほほえましい。こんな状況でなければ、食事の時間は楽しいはずだ。しかし彼らは一様に憔悴しきった顔をしていた。
「ああ、お前ら何処行ってたんだ？」
　水無瀬がわたしたちに気づいて云った。
「上の部屋で一休みしてました」
「君らも今のうちに食事をとっておくべきじゃぞ」
　鳥屋尾がレトルトのごはんにがっつきながら云う。
　やはり夜時間が終わって、彼らもほっとしているのだろう。
　七村と今後の相談をしたいところだったが、彼が一人になる機会は訪れそうになかったので、わたしと霧切は諦めてロビーに戻った。
　わたしと霧切はそれぞれ食糧と水を持って、『３０２』号室に戻った。やはりここが一番落ち着く。わたしたちは物音一つしない静かな密室で、二人仲良く味気（あじけ）ないごはんを食べた。
　並んでベッドに座り、とりとめもなく時間を過ごす。
　わたしたちはまるで、何年も前から一緒の友だちのように、沈黙を共有することができた。
　命の危険と隣り合わせの状況を、ともに乗り越えてきたせいだろうか。わたしは霧切と一緒にいることが、ごく当たり前の感覚になっていた。事実、このひと月における彼女とわたしの関係は、奇妙にして濃

密だったといえるだろう。
　だからこそ――
　わたしは彼女のもっとも触れてはいけない部分について、今こそ知っておくべきかもしれないと考えていた。
「霧切ちゃん」
「なあに、結お姉さま」
「君のお父さまのことだけど……」
　彼女の目もとがにわかに厳しくなる。
　けれどさすがは霧切響子だ。あくまで無表情を保ち、震えの一つも感じさせない。
「お姉さまの想像通りよ。彼も霧切の血を引く探偵――になるべき男だった。でも今はもういない」
「それじゃやっぱり、事件に巻き込まれて……」
　霧切家の謎の一つ。
　霧切の名を継ぐ者が、祖父から孫へと一世代分スキップしている理由――それは。
「殉職（じゅんしょく）した」
「そうなんだ……」
「嘘よ」霧切は無表情で云って、続ける。「もしそうなら、まだよかったかもしれない。尊敬こそすれ、軽蔑（けいべつ）しないで済んだものね。でも現実には、彼はまだ生きている」
「な、なんだ、生きてるんだ。びっくりしちゃった」わたしは取り乱さないように冷静を装う。「それにしても軽蔑って……」
「霧切の名を捨て、家を捨て、私を捨てた人のことを、軽蔑するなというのが無理な話よ」
「君のお父さまは家を出ていったの？」
「そう。彼は逃げたのよ。霧切家に生まれながら、探偵になることを拒否し続けた。その結果、すべてを捨てて出ていったの」
「そっか……それからは君が、霧切家を継ぐ探偵になったんだね」
「そうよ」
「お父さまは今何処で何をしているの？」
「希望ヶ峰学園で教師をしているわ」
「ええっ？　あの希望ヶ峰学園？」
　全国から超高校級（ちょうこうこうきゅう）の才能を持った高校生をスカウトして集め、国の将来を担（にな）う人材を育成する政府公認の特権的学園――

家を捨てたとはいえ、すごいところに落ち着いたものだ。

　霧切家の才能に背いた人物が、才能を育成する機関に所属するというのは皮肉めいている。才能の重みを知る者だからこそ、人に教えるものがあるということだろうか。

「でもお父さまは君のことを嫌っていたわけじゃないんでしょう？」

「さあ、どうかしら。ただ彼はよく私のことでお祖父さまと云い争いしていた。私の教育を巡って口論が絶えなかった」

　自分のことで大人たちが云い争っているところなんて普通は見たくはない。彼女が大人ぶった態度を見せるのも、そうした環境で『大人でいること』を強いられてきたからかもしれない。

　彼女が優れた探偵の才能を持っているのは間違いないだろう。けれどその才能に囚われているのも事実だ。

　彼女が探偵という概念に依存的で、従順なのは、複雑な霧切家において『順応する』ことを選択し続けてきたからではないだろうか。

　彼女は確かに生まれながらの探偵だ。

　けれど同時に、探偵でしかいられなかった女の子でもある。

「それでもまだ……母が生きている間は、お祖父さまもあの人も云い争うことなんてなかった。たぶん、母の存在が緩衝材となっていたのね」霧切は目を伏せて、ため息を零した。「今にして思えば、母が亡くなったことで、あの人は家を出るしかなくなったのかもしれない。探偵でない人間は、霧切家にはいられないから」

「お母さまはどうして亡くなったの？」

「病気よ。ずっと病気がちだった。亡くなったのは私が七歳の時。私の中にある母のイメージは、病院のベッドで青白い顔に頬笑みを浮かべている姿――」霧切は過去を思い浮かべるように、壁を見つめる。「結局、私は母の最期には立ち会えなかった。その時ちょうど、私はお祖父さまと一緒に海外にいたのだけど、お祖父さまは探偵の仕事を優先させるために帰国しなかった。そして私も……それに従った」

「――従ったの？」

　彼女は肯く。

『家族の死に目に会うことよりも、探偵活動を優先させよ』――彼女は七歳の時点で、霧切家の教えと向き合っていたのだ。

「あの人は当然、お祖父さまを否定したわ。そして決定的に霧切家を否定するようになった。あの人は自分の中にある霧切の血を否定したかったのかもしれないわね」

　彼女はいつものように、感情のこもっていない口調で云う。

「君のお父さまは、一度も探偵としては活動しなかったの？」
「お祖父さまに連れられて仕事に携（たずさ）わったことはあるみたいだけど、自身が探偵を志（こころざ）したことは一度もなかったそうよ」
「じゃあ探偵図書館に登録したこともない？」
「あるはずがないわ。彼にとっては、探偵図書館はこの世でもっともおぞましい場所じゃないかしら」霧切はそう云って、探るような目でわたしを見た。「まさかとは思うけど、抹消された四人目のトリプルゼロクラスの探偵が、あの人ではないかと考えていない？」
「いや……うん、まあ、話を聞いているうちにふとそう思っただけなんだけど……」
「ないわ」彼女は即答する。「あの人が探偵になったとしても、せいぜいクラス『５』とか『６』止まりでしょうね」
　ひどい云われようだ。
「仮にも霧切家の血を引いているなら、秘（ひ）められた才能を持っているかもしれないじゃないか」
「あの人は探偵を忌み嫌っているの。だからまず探偵図書館に登録するということがあり得ない」
　いくら霧切家の血を引く人間だとしても、彼女の父親が抹消されたトリプルゼロクラスの元探偵ということはなさそうだ。
　一体、消えた元探偵は何者なのだろう。
「そういえば元探偵について、君のお祖父さまに何か尋ねなかった？」
「──尋ねたわ」
「答えは？」
「教えてもらえなかった。自分で探しなさいって」
「……それも探偵修行ってことなのかな」
「そうね。でも一つだけ──その元探偵の通り名を教えてもらえたわ」
「通り名？」
「ええ、その元探偵がもっとも得意としたのは、偽装と変装。神出鬼没（しんしゅつきぼつ）で誰にも正体を見せない、正体不明のその人は、探偵たちからこう呼ばれていたそうよ──『変奏探偵（ヴァリエーショニスト）』」
「またたいそうなネーミングが出てきたな」
「探偵として身につけた能力が、犯罪に活（い）かされた場合にもっとも厄介になるパターンね。もしその元探偵が本気で『おにごっこ』や『かくれんぼ』をしたら、敵（かな）う人間なんているはずがないわ」
「でもわたしたちはここまで知ることができたじゃない」主に彼女の力によるものだけど。「わたしたちだってやればできるよ！」

「前向きなのね、結お姉さま」
「わたしには才能なんてないからね、せめて前を向いていないと」
「とにかく——今回の『黒の挑戦』を解決しなければ、何も始まらないわ」
　その通りだ。
　だんだんと今日のオークションの時間が迫ってきている。事件もオークションも同時にこなしていかなければならない。
　ああ、頭が混乱するよ……

　わたしと霧切はオークションの時間になるまで、二人きりでその部屋に閉じこもって、対策を練った。
　結論からいえば、ろくな対策など思いつかなかった。
　オークションはリアルタイムで進行する場の空気が、結果を大きく左右する。昨日のオークションがいい例だろう。
　結局のところ、その時になってみなければわからない。
　反射的な推理力がなければ、オークションを攻略することもできないのだ。
　やがて、午後六時がやってくる。

87:58:30

　時間になったので、オークション会場となる食堂に足を運ぶと、バルコニーの上の方からざわつく声が聞こえてきた。
　見上げると、参加者たちが真っ暗な肖像画の周りに集まっている。
「皆さん、どうしたんですか？」
　下から声をかけると、新仙が反応した。
「ここにへんな人形が置かれているんです。昼にはなかったはずなのですが……」
　わたしと霧切は一緒にバルコニーへ上がった。
　人形は肖像画の真下に置かれていた。身長が五十センチくらいはありそうなフランス人形だ。水色のフリルのついた服がかわいらしい。
　しかし——何故か顔が老婆(ろうば)だった。

普通、こういう人形は愛らしい子供の顔をしているものだ。しかしその人形はどう見ても老婆だった。
人形は壁に寄りかかるようにして座っていた。

『みなさんこんばんは。六時を過ぎました。そろそろ今日のオークションを始めたいと思います』

例によって機械音声が、何処かに設置されているスピーカーから聞こえてくる。
「おい、何処にいるんだてめえ！　出てこいや！」
水無瀬が天井に向けて大声を上げる。
「ノーマンはもう出てこないと云っておったはずじゃが……」
鳥屋尾が振り返って、肖像画を見る。昨日までノーマンの絵があった液晶画面は、ずっと真っ暗なままだ。
『私はここにおります』
「はあ？　何処だよ！」
『皆さんの目の前に座っております』
「このババアの人形か？　誰だてめえ！」
『ノーマンの母です。今日は息子に代わって、オークションの進行をさせていただきます』
「うるせえ！　ぶち壊すぞ！」
水無瀬が人形を蹴飛ばそうとする。
それをわたしたちが全員で慌てて止めた。
「そんな乱暴したら、何をされるかわかりませんよ」新仙が云った。「人形の中に爆弾が仕掛けられているかもしれません」
「んなもん、あるわけねえだろ」
「いや、嫌な予感がするのです。昨日は実際に、魚住さんが撃たれて死んでいます。どんな形で殺人鬼が攻撃してくるかわかりません」
「……うぐぐ、あんたの『嫌な予感』は信じるぜ……くそっ。引き下がるしかねえな。クソババアが！」
水無瀬は人形に悪態をついて、背を向ける。
「ノーマン一家総出演するつもりなのかしらねえ」夜鶴は相変わらず大金を胸に抱いたままだ。「ここに集まっていてもしょうがないから、みなさん下に降りましょうよ」
夜鶴がバルコニーを下りて食堂の椅子に座る。
わたしたちも彼女に続いた。

ノーマンの母を名乗る人形は置き去りのまま。
『では今回も《探偵権》を競って、みなさんオークションにはげんでください。私の案内はここまでです。それではごきげんよう』
　機械音声が止まる。
　これも犯人があらかじめ仕掛けたタイマーによって作動しているだけなのだろうか。それともやはりわたしたち以外に犯人がいて、何処かで音声を操作しているのだろうか。
「では誰から行くかね？」
　七村が司会者のようにオークションを進行する。
「なあ、みんな、わしから提案があるんじゃが……」
　タキシードの鳥屋尾が立ち上がる。
「なんだよじいさん」
「やはりここはみんなで協力して、《探偵権》を放棄していく方向で考えんかね？」
「放棄……？」
　わたしはびっくりして聞き返す。
「そうじゃ。云うなれば、オークションのボイコットじゃ。わしらは正体の見えぬ殺人鬼を恐れるあまり、そいつの作ったルールに従順になりすぎているのかもしれん。よくよく考えたら、わしらが殺人鬼の云いなりになる筋合(すじあ)いなどなかろう？　オークションを続ける意味もない。夜時間になったら、門限など無視して全員でロビーに集まって、一致団結して身を守るというのはどうかね」
「なるほど……全員で一ヶ所にいれば、犯人が襲ってきても返り討(う)ちにしてやれるな！」
　水無瀬が閃(ひらめ)いたように云う。
「えーっ、でもお、殺人鬼って銃を持ってるんじゃない？　ルール違反したせいで、撃たれちゃうかもしれないよう」
　美舟が怯えたような顔で云う。
　確かに銃を持って出てこられたら、防ぎようがない。
「ロビーならバリケードが作れるじゃろ。客室だとドアが外開きで役に立たんが、ここなら扉を封印できる。ソファでもなんでも並べて……」
「はたしてその程度のバリケードが有効でしょうか……真っ暗な未来しか想像できませんね」
　新仙は眉間に皺を寄せる。
「なあに、銃に対する対策は考えてある」
「ほう、どうするんだじいさん」

水無瀬は懐疑的な目つきで尋ねた。
「ロビーは窓も完全に封鎖されてるじゃろ。つまり日の光も差さないというわけじゃ。もし照明を落としたらどうなると思う？　真っ暗で銃の狙いなどつきやせんよ。ましてあの広いロビーなら、まず弾は当たりはせん」
　一理ある——かもしれない。
　どうやって照明を落とすのか、そして真っ暗になったあとどうやって犯人を撃退するのか、考えるべきことはまだあるけれど、理に適（かな）っている——かもしれない。
「諸君、いつまで殺人鬼の云いなりになるのかね？　わしはごめんじゃ。こんな子供じみた犯行をするやつに、もっとも有効な対応はシカトすることじゃ。わしらをおちょくるのは退屈だ……そう思わせてやるんじゃ！　残り87時間、ロビーで飲み食いしながら過ごせば、わしらは全員無事に帰れるんじゃ！」
　鳥屋尾の言葉は次第に熱を帯（お）びてくる。
　わたしたちはいつの間にか、彼の演説に聞き入っていた。
「ボイコットか。なるほど、それは新しい試みかもしれないな」
　七村が腕組みして云う。
「じゃあ今回は入札しなくていいのね？」美舟が誰にともなく尋ねる。「あの機械めんどくさいんだもん」
「一応、ブースには入った方がいいんじゃねえの？」水無瀬が云った。「少なくとも誰か一人は入らないと、終了ブザーも十時まで鳴らないんじゃねえか？」
「……そうじゃな、では全員、順番に入札ブースに入ろう。一人だけブースに入ったら、抜け駆けされそうで心配じゃろ。みんなで入れば怖くない、じゃ」
　こうしてわたしたちは、入札ブースに近い人から順に入っていった。オークション自体は二回目なので、みんな要領を覚えており、順番が早く回ってくる。
　あっという間にわたしの番だ。
　わたしはなるべく時間をかけないように、ブースを手早く出入りする。
　これでよし……
　本当に？
　ボイコット作戦——はたして巧くいくだろうか。
　最後に入札ブースに入ったのは霧切だった。
　彼女がブースを出ると、十分後にオークション終了を告げるブザー音が鳴る。
　いよいよだ。
　結果が肖像画の液晶に映し出された。

本日のオークションの結果

　ミナセ　ユウゼン　　　　５０００万
　トヤノオ　セイウンサイ　３０００万
　サミダレ　ユイ　　　　　１５００万
　ミフネ　メルコ　　　　　１１００万
　シンセン　ミカド　　　　１０００万
　ヨヅル　サエ　　　　　　７００万
　キリギリ　キョウコ　　　０万

「お、お前ら……わしをだましおったな！」
　鳥屋尾は顔を真っ赤にして怒りだした。
　完全に荒れたオークションとなった。
　すべては鳥屋尾のせいだろう。
「だましたのはおめえだろ、じいさん！　何がボイコットだよ！　ちゃっかり3000万も入れてるじゃねえかっ」
　霧切を除く全員が、少なからず大金を入札している。
　鳥屋尾の話に乗ろうと考えていた者は一人もいなかったといっていいだろう。
「おじいさん、あなたうさんくさすぎるわ」夜鶴は手をひらひらさせながら、甘ったるい声で云う。「お金より信頼できるものなんて、この世には存在しないということが証明されたわね、うふっ」
　けれどまさか、みんなこんなに多額の入札をするとは思ってもみなかった。
　１500万も出せば、絶対に《探偵権》を落とせると思ったのに……
「よし、今夜の探偵は俺だな」
　水無瀬がガッツポーズして云う。
「貴様……許さんぞ！」
「往生際（おうじょうぎわ）が悪いぜ、じいさん。結果は覆（くつがえ）らねえんだ。おやおやおや……いいのかい、俺にそんな態度とって」水無瀬は入札カードを見せびらかす。「あんたのこと、助けてやらねえぜ？」
「ぐ……何処まで卑怯なんじゃ！」
「お互いさまだろ、嘘つきじじい！」水無瀬は鳥屋尾の襟（えり）を掴むと、突き飛ばすように押した。「みんな

にも云っておくが、俺は探偵なんかやらねえぜ。俺は自分の身を守るためにこれを買ったんだ。俺がどう使おうと、俺の勝手だよな？」

　満面(まんめん)の笑みを浮かべて、水無瀬は云う。

　やっぱりこの人も品性下劣(ひんせいげれつ)だった……

　このままだと人間嫌いになりそう。

「ちなみに俺はこのオークションで必ず勝つ方法を思いついた。ここに宣言しておくぜ。次も必ず勝って、しかも生きて大金を持ってここを出る。お前らの命なんてどーーーでもいい！」

「ま、待ってよう、あたしたちのこと助けてくんないの？」

　美舟がおろおろとし始める。

「そうだな……カボチャ頭、お前、今晩俺にいいことしてくれるっつうなら、お前だけ助けてやってもいいぜ」

「する！　いいことする！」

「こらっ」夜鶴が美舟の頭を小突(こづ)いた。「男に利用されてどうするの、カボチャちゃん。逆でしょ、女が男を利用するのよ。それがこの世の生き方……ということで、水無瀬さん。１０００万くれたら、あなたに一晩じゅういいことしてあげるけど、どうする？」

「はあ？　俺が金払うのかよ」

「世の中、そういうシステムになっているでしょう？　宇宙の真理(しんり)に逆らうものじゃないわ、ねえハンサムさん」

「うう……」

　まさか迷ってる？

　このゲームもうイヤっ。

　わたしは彼らから目を背け、七村に近づく。

「七村さん、そろそろ犯人を告発する予定が立ちましたか？」

「ん？　ああ、もう少しで事件解決だ」

「本当ですか？」わたしはやっと救いを見出(みいだ)したような気がした。「いつですか？　いつ『犯人はお前だ！』ってやるんですか？」

「そうだな……時満(ときみ)ちるまで待て、といったところだな」

　なんだか要領を得ない。

　あれだけ最速の解決を宣言していた七村が、ここに来て二の足を踏んでいるように見える。

こんなにのんびりしているということは……何かを待っている？
　それともまだ犯人がわかっていないのかも……
　だめだ、いずれにしても七村に頼ってばかりもいられない。彼はわたしたちの引率（いんそつ）でもなんでもないのだから。
「霧切ちゃん、また《探偵権》を落とせなかったね……どうしたらいいんだろう」
「うろたえる必要はないわ、お姉さま。私に考えがある」
「さ、さすが霧切ちゃん！　一体どうするの？」
「犯人を罠にかける」
　霧切は不敵（ふてき）な笑みを浮かべて云った。

第六章

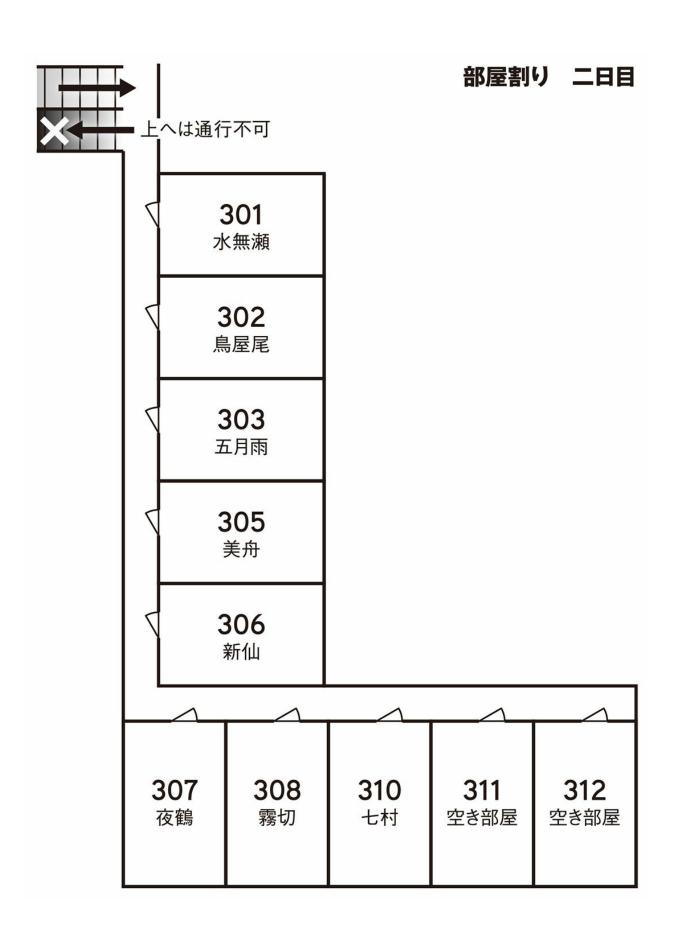
探偵への供物

アンチ・ミステリ

二日目の夜時間が近づいてくる。

夜の部屋割りは簡単に決まった。

入札額が多い人から順に、探偵に近い部屋に入るというルールを適用する。残った部屋に霧切と七村が入る。二人はジャンケンすることなく、それぞれ好きな方に入った。

部屋割り　二日目
上へは通行不可
301
水無瀬
302
鳥屋尾
303
五月雨
305
美舟
306
新仙
307
夜鶴
308
霧切
310
七村
311
空き部屋
312
空き部屋

しかし今夜の部屋割りには、あまり意味がないかもしれない。《探偵権》を持つ水無瀬が、誰も助けないと宣言しているからだ。
　このままでは、誰かが犯人に一方的に殺されてしまう。
　今夜は誰が殺される？
　犯人の標的は誰なのか？
《探偵権》を持たないわたしにはどうすることもできない。圧倒的に無力だ。人を助けたくて探偵になったのに、それもできないなんて。
　あるいは犯人は、次にわたしを狙ってくるかもしれない。
　それとも霧切を狙うだろうか。
　そのことを考えると、いてもたってもいられない。
　どうしたらいいのだろう。
　三階へ向かう階段の途中で、霧切がわたしに小声で話しかけてきた。
「結お姉さま、あれの用意はできた？」
「もちろん」
　霧切はさっき、飲料水のペットボトルをできるだけリュックに詰め込んでくるようにわたしに指示した。わたしは意味もわからず彼女の言葉に従い、リュックを水で一杯にしてきた。
「みんなが部屋に入ったあとで、廊下に出てきて」
　彼女には何か考えがあるようだ。
　こんな絶望的な状況でも諦めない。そんな彼女がわたしには希望に見える。
　十時になる前に、水無瀬は部屋に引きこもってしまった。《探偵権》を持つ彼は、命の安全が保証された夜を満喫（まんきつ）するのだろう。
　一方、オークションで負けた人たちは、不安な表情をしながら、それぞれ門限を守るために部屋に入っていく。
　九時五十分。
　すでにみんな部屋に入ったようだ。
　わたしはこっそりと廊下に出た。
　すると廊下の角から、霧切が現れた。
　わたしは思わず抱きしめたい気持ちに駆られたが、なんとか自分を落ち着かせる。
「霧切ちゃん、これからどうするの？」
　小声で尋ねる。

「私たちは今晩ずっと、部屋に閉じ込められたままになるわ。誰かの悲鳴が聞こえても、助けに行くことはできない」

　いつになく真剣な目つきで、彼女は云った。

　わたしは肯く。

「だから今のうちに、できる限りのことをする」

「みんなを守るんだね」

「……お姉さま、前にも云ったけれど、私は誰かを守るためだとか、真実を追求するためだとか、そういうことのために探偵をやっているのではないから」

「わかってるよ」

　――君がなんと云おうと、誰かを守りたい気持ちや、真実を追求する気持ちが、君にはちゃんとあるんだってことくらい、ね。

　わたしはリュックを下ろす。中には５００ミリリットルのペットボトルが六本入っている。

　霧切はその一つを手に取って、キャップを開けた。

　当然それを飲み始めるのかと思いきや、彼女は『３０１』号室の前の廊下にぶちまけ始めた。

「ちょ、ちょっと」わたしは小声で彼女を咎める。「何やってるのっ」

「云ったでしょう。罠よ」

　霧切は赤い絨毯にところどころ水たまりを作りながら、廊下の奥に向かって移動する。

　――そうか！

　この水浸しの廊下を歩けば、必ず靴が濡れる。

　そしてその靴で濡れていない場所を歩けば、必ず足跡が残る。

「こうして廊下にまばらに水を撒いておけば、足跡を残さずに歩くことは不可能になるわ。タオルで足跡一つ一つを拭い去るのは時間がかかるし、朝までに完全に足跡が乾いて消えるという保証はない。私が犯人なら、今夜は絶対に殺人をやめておくわ」

「霧切ちゃん！　君ってやっぱりすごいよ」

「いいえ、よくある手よ。本当は小麦粉や片栗粉みたいな粉を使いたかったけれど、ここにはないみたいだから水で代用するの」

　それにしたって、ただの水だけで、犯行を予防することができるなんて。

　これならさすがの犯人も、どうしようもないだろう。

「さあ、結お姉さまは先に部屋に入って。もう時間がないわ」

「わたしも手伝うよ」

「だめよ、お姉さまの部屋は廊下の途中にあるんだから。結お姉さまの足跡も残ってしまうわ」
「あ、そうか」
「あとは私に任せて」
「ごめんね、君にやらせてばかり」
「いいの」霧切はふるふると首を振る。「その代わり……朝になったら一番に私のところに来てくれる？」
「もちろん」
　霧切は嬉しそうに微笑むと、廊下の角の向こうへ消えていった。
　どうか無事で。
　どうか——

　そして夜時間が始まる。

　ひどく寒い夜だった。
　室内なのに息が白い。
　わたしは毛布を被って、ヒーターの前に丸まっていた。
　いつ犯人がそこの扉を開けて、襲いかかってくるかわからない恐怖……
　探偵として死ぬ覚悟はある。けれど今の状況で死ぬことが、はたして『探偵として死ぬ』ことに当たるだろうか。
　そんなことを考えながら、夜が更けていくのをひたすら待つ。
　ふいに誰かの声が聞こえた。
　幻聴（げんちょう）だろうか。
　ここのところ、精神的に追いつめられると、記憶の底から妹の声が聞こえてくる。
　助けを求める声だ。
　そう、ただの幻聴——
　違う。
　隣の部屋から、助けを求める声がする。
　右隣にいるのは、美舟だっただろうか。
　扉を叩きながら、彼女が泣き声を上げている。
　彼女は探偵が扉を開けて、部屋から解放してくれるのを待っているのだ。けれど今夜の探偵は動かない。探偵としての資質も覚悟もない人間が、《探偵権》を持っているからだ。

美舟の助けを求める声は、しばらく続いた。
しかし気づいた時には彼女の声は途絶(とだ)えていた。
疲れて休んでいるだけならいいけれど。
まさか犯人に殺されてしまったのでは……
わたしは身体を震わせながら、聞き耳を立てる。
みしみしと家鳴りが聞こえる。
小さい頃は、家鳴りが不思議でならなかった。妹と一緒に、その音の原因を確かめるために、屋根裏に上ったことがあったっけ。きっと天井の向こう側に、何かがいるんだとわたしたちは思い込んでいた。
みしっ。
みしっ。
何か聞こえる。
くぐもったような声。
いや、それは——うめき声？
やがて聞こえてきたのは……
ずるっ……
ずるっ……
何かを引きずるような音が、暗闇の向こうから聞こえてきた。
ずるっ……
ずるっ……
一体誰が、何を……
闇の中で引きずっているというのか。
想像するのも恐ろしい。
部屋の隅にある暗闇が怖い。
わたしは自分の部屋の中で、振り返ることもできず、現実から目を背けるようにひたすらヒーターを見つめ続けた。
叫び出したい。
そんな気持ちをひたすら自制しながら、朝を待つ。
試験勉強が終わらない夜は、あっという間に朝が来てしまうのに。
その夜は朝が遅かった。
霧切は今頃どうしているだろう。

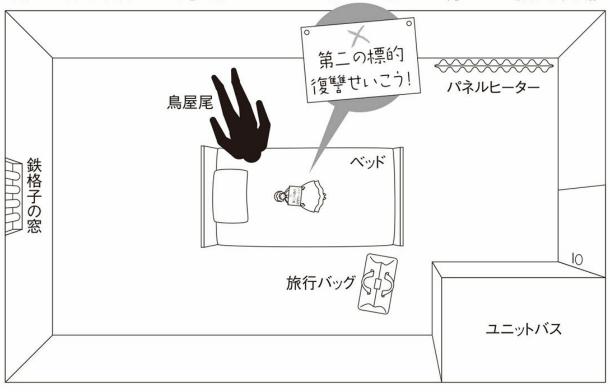
彼女はこんな状況でも平然としていられるのだろうか。
廊下の水浸しの罠は、功(こう)を奏(そう)しただろうか。
廊下の状態を見たら、犯人は必ず驚くはずだ。
そしてそれが、自分を網(あみ)にかけようとする罠であることに気づくだろう。
できることなら殺人を諦めてほしい。

やがて窓の外が仄(ほの)かに明るくなり始めた。
結局一睡(いっすい)もできなかった。
朝が来る。
ケータイの時計を確認する。
六時五十五分。
人生でもっとも長い五分間。
その間、わたしが考えていたのは、霧切響子のことだった。
生きてここを出られたら、彼女のところに行く。
わたしは立ち上がり、扉を揺さぶった。
まだ開かない。
やがて——扉のロックが外れる音。
同時に、わたしは扉を開ける。
やはり廊下は濡れたままだ。見たところ、足跡らしきものはない。
わたしは用心深く足元を確認しながら、霧切の部屋がある廊下の奥へ向かった。
『308』号室にたどりつく。
ここに来るまでの間に、足跡など一つもなかった。
つまり誰も廊下を歩いていないということになる。やはり犯人は犯行を諦めたのではないか。
わたしたちは勝ったのかもしれない。
扉をノックする。
目の前の扉が開き、少しだけ腫(は)れぼったい眼(め)をした霧切が、毛布を頭から被ったおばけの状態で現れた。
わたしは思わず彼女に抱きついていた。
彼女の毛布が足元に落ちる。
自然と涙があふれ、わたしの頰と、彼女の髪が少し濡れた。

「よかったあ！　無事だったんだね！」
「大げさよ、結お姉さま」
　彼女は困ったような顔で云う。
「夢じゃないよね？　生きてるよね？」
「寝ぼけたことを云っている場合ではないわ。結お姉さま、誰よりも先にここに来た？」
「うん、一番だった」
「足跡は？」
「なかった」
「なかった？」
「ちゃんと確認して来たよ。なんなら君も一緒に見に行こう」
「ええ」
　わたしたちは部屋を出て、フロアの入り口へ向かって移動する。なお霧切の部屋より奥の廊下にも、足跡はいっさいなかった。
　廊下を歩いていると、夜鶴と新仙がそれぞれの部屋から姿を現した。
「すがすがしい朝ね」夜鶴は大金を抱いたまま伸びをする。「昨日も手首を切らなかったし、一昨日も切らなかったわ！　なんて生き生きとした毎日なのかしら。なんだか廊下もみずみずしく見えるわ！」
　臨死体験のような夜を経て、生の朝を迎えた喜び。夜鶴はまさに今、生を実感しているようだが、わたしも少なからず彼女と同じ気持ちだった。皮肉にもこの『黒の挑戦』が、生きていることを実感させてくれる。
「おはようございます。皆さんも無事でしたか」
　落ち着き払ったような挨拶。
　新仙帝——彼はとても不思議な人物だ。深い深い闇を携えているように見えて、実は秘密めかしただけの普通の人のようにも見える。死神と呼ばれた男。はたして彼はこの場所に何を見たのだろう。
　わたしたちは一緒に廊下を移動し、美舟の部屋まで移動した。
　扉をノックする。
「美舟さん、大丈夫ですか？」
　返事がない。
　もう夜時間は終わったのだから、いつまでも部屋にいる必要はない。すぐにでも外に出たいはずだ。それなのにまだ、姿を見せないということは……
　まさか！

「開けますよ」
　わたしは扉を開ける。
　美舟は扉のすぐ近くの床に、うつ伏せになって伸びていた。
「美舟さん！　大丈夫ですかっ」
　彼女の肩を揺さぶる。
　触れた感触は……温かい。
「わあっ」
　美舟は突然、声を上げて飛び起きた。
「無事だったようですね」
　新仙が廊下から室内を覗き込んで云う。
「気づいたら寝ちゃってた！」
「よかった……」わたしは安堵の息を零す。「さんざん泣き叫んでいたから、疲れて寝てしまったんですね。心配しましたよ」
「みんなも無事？　よかった」美舟は嬉しそうにわたしたちを見回しながら、部屋から出てくる。「わっ、なんか廊下濡れてるよう。雨漏(あまも)りしたのかなあ？」
　そこへ遅れて七村が姿を見せた。相変わらずスーツはぱりっとして、見た目に隙のない男だ。
「この廊下は君たちの仕業だな」
　七村がわたしと霧切を見て云う。さすがに理解が早い。その説明はあと回しにして、わたしたちは揃って廊下を移動した。
『302』号室。
　そこで異変に気づく。
「見て、足跡がある」
　霧切が廊下を指差した。
　扉の前に、確かに部屋を出入りしたような足跡が残されていた。
　その足跡は『302』号室と『301』号室を行き来しているようだ。見たところ、足跡は一人分だけ。
「さっきは脇目も振らずに霧切ちゃんのいる方へ向かったから、こっち側の足跡に気づかなかったよ」
「確認しましょう」
　霧切が『302』号室を開ける。
　鳥屋尾の部屋だ。
　そこでわたしたちが見たのは……

ベッドの右側に座り込み、頭をマットに載せた状態で、こと切れている鳥屋尾だった。
　身体の位置や状態は、茶下の時とほとんど同じだった。
　ただし一つだけ違うのは、ベッドの上に奇妙な人形が置かれている点だ。
　その不気味な人形には見覚えがある。
　ノーマンの母を名乗っていた老婆のフランス人形だった。一体、いつの間に部屋に入り込んだのだろう。
　その人形は、首から看板のようなものを提げていた。そこには蛍光ピンクの×印が描かれている。
　さらにその下に、『第二の標的　復讐せいこう！』と書かれていた。

第二の殺人現場
『第二の標的 復讐せいこう!』と書かれたプレートを持った人形
第二の標的
復讐せいこう!
パネルヒーター
鳥屋尾
鉄格子の窓
ベッド
旅行バッグ
ユニットバス
10

「うう……し、死んでるの？」
　美舟が掠(かす)れたような声で尋ねる。
　七村と霧切が部屋に入り、鳥屋尾に近づいた。さすがに二人の探偵の行動は速かった。霧切は黒い手袋をつけたあとで、身体のあちこちを触り、彼が死んでいることを確認した。二人は手際よく状況を確認していく。
「死後数時間は経過しているわね。死因は扼殺。首を絞められて死んでいるわ」
「茶下さんの時と同じ……」
　わたしは呟く。
「昨夜、俺が部屋に入った時には死んでいたぜ」
　背後から声がする。
　振り返ると、水無瀬が腕を組んで廊下に立っていた。
　美舟はあからさまな敵意を持って、彼をにらんでいた。無理もない。あれだけ助けを求めても、《探偵権》を持つ水無瀬は何もしなかったのだから。
「隣の部屋からしゃべえ物音が聞こえてきたから、気になって覗きに来てみたんだ。マスターキーを一度使ってみたかったという理由もある。時刻は……午前三時くらいかな。扉を開けてみたら、じいさんはすでに死んでた。部屋の状況は、あの時と今とで何も変わってない。人形も置いてあったぜ。そのあと俺は部屋に帰って寝た」
「妙な物音というのは……何かを引きずるような音ではありませんでしたか？」
　わたしは尋ねる。
「そうだな……そうかもしれない。いや、むしろ俺が気になったのはうめき声だったな」
　うめき声！
　そういえばわたしも聞いたような気がする。
　わたしの部屋と、水無瀬の部屋は、この殺害現場となった部屋を挟むようにして並んでいる。つまり水無瀬の聞いた異音は、わたしの聞いたものと同じ可能性が高い。
　あれは鳥屋尾がまさに首を絞められている時のうめき声だったのではないだろうか……
　そう考えると、急に怖くなってくる。
　何かを引きずるような音は、屍体を動かした際の音ではないだろうか。屍体の状況が茶下の時とそっくり同じということから考えて、あえてそのように配置された可能性が高い。
　何故犯人がわざわざ、屍体をこのような状況にする必要があったのか……それは謎だ。
「水無瀬さん」霧切が質問する。「あなたがこの部屋に入る際、廊下に誰かの足跡を見なかった？」

「足跡……？　いや全然気づかねえな」
　廊下の足跡は、水無瀬の部屋と鳥屋尾の部屋を往復（おうふく）した一組しかない。水無瀬の証言から考えると、これは水無瀬の足跡としか考えられない。
　足跡はその他に存在しなかった。昨夜は誰も部屋を出ていないということが証明されている。
「水無瀬さん、あなたが殺人鬼じゃないの？」
　夜鶴が指摘する。
　遅かれ早かれ、誰かがそのことを云い出すに違いなかった。
「な、なんで俺が？」
「『３０２』号室を出入りすることができたのは、あなただけだからよ」
「待てよっ、そりゃ確かに俺は《探偵権》のマスターキーを持ってる。でもマスターキーを持ってるのは俺だけじゃない、殺人鬼もだろ？　殺人鬼が来てじいさんを殺したんだ」
「その殺人鬼とやらは、何処から来たのかしら」
「知らねえよ！」
「昨晩、わたしと霧切ちゃんが、廊下に水を撒きました」わたしは二人の会話に割り込むようにして云う。「昨晩は、廊下を歩いたら絶対に足跡が残るようになっていました。その状況のなか、唯一残されていた足跡は、水無瀬さんが鳥屋尾さんの部屋に向かった時のものと、帰る時のもの。これだけなんです」
「だから俺が殺したっつうのか？　冗談じゃねえよ！　俺が部屋に入った時にはもうじいさんは死んでた。これが真実だ！」
「本当かしらね」夜鶴は信じていないようだ。「あなた、犯人のくせに、水浸しの廊下に気づかなかったんでしょう？　だから足跡を残してしまったことも気づかなかった。ああ、もしかしてそのことをごまかすのに必死なのかしら？　うふふ」
「ち、違う！　俺はやってない！」
　水無瀬は声を荒らげる。
　猜疑心に満ちた視線が、彼のもとに集まっていく。
「ものわかりの悪い馬鹿どもがっ！」水無瀬はとうとう激高（げきこう）したように叫んだ。「死ね！　死ね死ね死ね！　お前ら全員、殺人鬼に殺されて死んじまえ！　俺は今日のオークションも、必ず《探偵権》を落札する。俺にはできるんだ！　俺は絶対に勝つ方法を知っているからな！」
　水無瀬はわめき立てると、『３０１』号室に引っ込んでしまった。
「み、水無瀬さんっ」

わたしは扉越しに呼び掛ける。
「お前らなんかと一緒にいられるか！　俺は一人でここにいる。誰も近寄るんじゃねえ！」
とりつくしまもない。
「今なんとなく、彼の死が見えました」
新仙が呟く。
これ以上、死人が出るのはごめんだ。このままでは本当に『黒の挑戦』が犯人側の勝利で終わってしまう。
わたしたちは水無瀬を残し、一階ロビーまで移動した。
それぞれソファに座り、うなだれる。ソファの空きが多くなってきた。あらためてその事実に、恐怖を覚える。
「七村さん」わたしは小声で話しかける。「犯人はわかりましたか？」
「五月雨君、この私を誰だとお思いかね。探偵図書館に登録された六万五千五百人の中で、もっとも解決速度に優れた男、七村彗星だぞ」
「それはよく知っているのですけど……」
「犯人は最初からわかっている」
「ええっ？」思わず大声が出てしまった。「それならどうして告発しないんですか？　早くこんなゲーム終わらせましょう」
「残念だが、そういうわけにもいかなくてね。今回の『黒の挑戦』のルール上、私には動けない理由があるんだ」
「動けない理由……ですか」
「だがそろそろ、ステージを一つ進めてもいい頃だろう」
七村はそう云うと、突然立ち上がった。
例の演劇ぶった立ち振る舞いでみんなの前に出る。
「さて諸君、私が探偵であることはすでに伝えてあるな。そしてこの事件が、予告されたものであったことも、伝えたはずだ」
「ど、どうしたんですか、急に」美舟が目を丸くして七村を見上げている。「もしかして解決編っていうやつですかあ？」
「まあ、最後まで聞きたまえ。三国(さんごく)一美しいお嬢さん」七村は右手を上げて、美舟を制する。「実は今回、このノーマンズ・ホテルで行なわれている一連の殺人事件には、ある組織が関わっている」
七村はとうとう犯罪被害者救済委員会と、彼らが行なっている『黒の挑戦』というゲームについて、説

明を始めた。そして今まさに、そのゲームが進行中であるということも。

　美舟、新仙、夜鶴の三人はそれぞれ驚きや疑問の表情を浮かべながら、七村の話を聞いている。

「『黒の挑戦』において被害者となるのは、過去になんらかの犯罪を行ない、その罪を償（つぐな）っていない人間に限られる。そこで諸君に問いたい。過去に少しでも犯罪に加担したことはないかね？　安心したまえ、ここでの発言は外には漏らさないと誓（ちか）おう。探偵ほどこの世で口の堅（かた）い生き物はいないからな」

「ちょっと待ってください」新仙が髪を後ろに撫でつけながら云う。「探偵さんのおっしゃることが本当なら、すでに殺されている魚住さん、茶下さん、鳥屋尾さんも、犯罪者だったということでしょうか」

「その可能性は高い。ただし状況に応じて、犯人は無関係な人間も殺害することがある。今回の例でいえば、魚住絶姫は犯罪者ではなく、犯人の都合で殺されたとみていい」

　事実、魚住は探偵だった。

　もちろん探偵の中には犯罪者もいるけれど、おそらく彼女は違う。彼女の場合、犯人による『復讐せいこう！』のメッセージがなかったので、標的ではなかったと考えられる。

「あの……」

　美舟が顔を伏せながら、右手を挙げる。

「君か、さあ罪を告白したまえ」

「小さい頃……『銀のエンゼル』が一枚足りなかったので……自分でそっくりに描いたものを足して、送りました。そしたらおもちゃのカンヅメが届いて……」

「君は何を云っているのだね？　私は犯罪について尋ねているのだが。犯人はおそらく、犯罪に巻き込まれたことにより多大な被害を受けている。ちゃちな犯罪ではない。もし諸君の中に次の標的がいるのなら……少なからず心当たりがあるはずだ」

「私には心当たりがありませんね」

　新仙はきっぱりと云う。彼の目つきに嘘っぽさはみじんも感じられなかった。むしろ聖人（せいじん）のような顔つきだ。演技にも見えない。

「美舟君はどうだ？」

「うーん……エンゼルじゃないとしたら……もしかしたらスプーンをたくさん曲げたことかなあ……スプーンを作ってる人たちは、たぶんわたしのことが憎かったんじゃないかなあ……」

　どうも美舟にも心当たりはなさそうだ。

　彼女のカボチャちゃんぶりが完全な演技だとしたら、もう拍手を送るしかない。

「夜鶴君、君は？」

「云わなきゃだめ……かしら？」

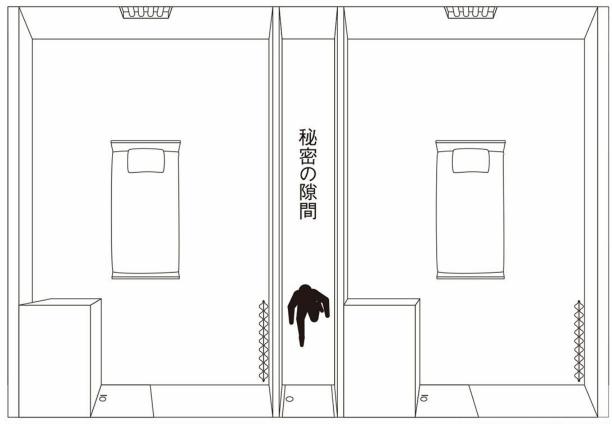
彼女は媚びるような目つきで七村に云う。
　七村は黙ったままだ。
「わかったわ、全部云います。実は私……今までに三回結婚しているの。でも戸籍はきれいなまま。意味がおわかりかしら？」
「結婚詐欺か」
「あら、詐欺だなんて、聞こえが悪いわ。私、相手の男の人を愛していたわよ。だって、お金をたくさんくれるんだもの。そのうちお金がないって云い始めたら、別れるだけ。世の中の男女が、普通にしていることじゃない」
「自己紹介の時に云っていた、死んだ旦那さんというのは……？」
「籍を入れる前に死んじゃったのよ」
「どうして亡くなったのですか？」
「お薬をたくさん飲んで、眠るように死んでしまったの。もう払えるお金がないって。でもそれって、犯罪？　私は何も悪いことをしていないわ」
　……寒気がした。
　この人なら犯人の標的にされかねない。
「ふむ、なるほど。告白ありがとう」七村は腕組みして、ソファに座った。「今の情報通りに考えれば、夜鶴君が標的になる可能性が高いな」
「ええ？　どうして私が？」
　夜鶴は首を傾げている。本気だろうか。
「水無瀬さんはどうでしょうか」
　新仙が云う。
「あの人、ニートでしょ。絶対そうだよ」美舟は完全に彼を嫌っているようだ。「あたしもニートだけど、あの人は悪いニートだよ。悪いニートはたくさんの人から恨まれる運命なのだ」
「彼が犯人よ、きっと」
　夜鶴は足を組み直しながら云う。
　本当にそうなのだろうか……
「今日のオークションはどうしましょうか」新仙が口を開く。「このまま水無瀬さんに《探偵権》を落札させてはいけないでしょう。しかし彼はとても自信がある様子でした」
「オークションで勝ち続ける方法なんてあるのかなあ？」
　美舟は難しそうな顔で云う。

「彼は何かわかったようでしたが……」
「あのとっちゃん坊や、残りいくら持っているのかしら」
　夜鶴が云う。
　わたしは自分のメモ帳を確認する。オークションで誰がいくら払ったのか記録したものだ。それによると、ええと……
「彼は前回、５０００万で落札しているわ」霧切が云った。「一回目はゼロだから、手元には５０００万残っている」
「５０００万か……でもみんなそれ以上持っているわよね？」
　わたしでさえ、現時点で残り８０００万も持っている。
　これがこのオークションの難しいところだろう。高い金額を払えば、一度は《探偵権》を落札することができる。しかし資金が少なくなるので、それ以降のオークションでは不利になる。
　現在、参加者の中で水無瀬がもっとも資金が少ない状態だ。
　それなのに、彼は勝利宣言をしていた。
　一体、どういうことだ？
「今日のオークション、私に任せてくれないかしら」
　霧切が唐突に云った。
「何か考えがあるの？」
　わたしが尋ねると、彼女は肯いた。
「もちろん、オークションでそれぞれいくら入札するかは、みんなの意思に任せるわ。ただし無駄遣いはやめておくべきだと忠告する。次のオークションは私と水無瀬さんとの闘いになるから……巻き込まれないようにすることね」
　霧切は宣言する。
　また次のオークションも荒れそうだ……

　わたしたちはみんなで一緒にロビーで食事をとり、それぞれシャワーを浴びに客室に向かったり、ソファで仮眠をとったりした。
　わたしと霧切の二人は『３０３』号室を今日のアジトにすることにした。交代でシャワーを浴びて、昨日と同じように髪を乾かし、霧切の三つ編みを結ってあげる。
　すぐ隣の部屋には、鳥屋尾の屍体がある。そんな状況とは思えないほど、穏やかで物静かな時間が流れる。

「昨夜、結お姉さまも隣の部屋から何か聞こえた？」
「うん、うめき声を聞いたよ。気のせいかと思ってたけど、あの時……」
　鳥屋尾は首を直接手で絞められて死んでいる。つまり隣の部屋に犯人がいたということになる。
「他にも屍体を引きずるような音が聞こえたんだ。たぶん、犯人が屍体をベッドの脇まで動かしたんだろうね。なんでわざわざ、屍体をあんな格好にさせる必要があるのかわからないけど」
　屍体をベッドの右端に座らせ、頭をマットに載せる。この屍体の体勢に、何か意味があるのだろうか。
「現場を確認しに行きましょう。確かめたいことがあるわ」
　霧切はリボンを結び終えると、隣の部屋へ移動した。わたしも続く。
　鳥屋尾の屍体はそのままの状態で置かれている。感覚が麻痺してきたせいか、屍体を目にしても怖いとか不気味だとか思わなくなってきていた。けれどやはりまだ、近づくのはためらわれる。
　霧切はベッドの上の人形を手に取った。それを持って、窓に近づく。
　すると彼女は突然、鉄格子の窓に向かって人形を投げた。
　しかし当然ながら、人形は鉄格子にぶつかって、床に落ちた。どう見ても鉄格子の隙間より、人形の身体の方が大きい。
　霧切は人形を拾うと、次にその服を脱がし始めた。
「な、何やってるの、霧切ちゃん」
「お人形遊びに見える？」
　霧切は人形の服を脱がし終えると、満足したようにベッドにそれを戻した。
　人形に興味をなくした彼女は、次に部屋の中を壁から壁へと往復し始めた。歩数を数えながら歩いているようだ。
「ねえ、霧切ちゃん。犯人は水無瀬さんなのかな」
「どうかしら」
「だって廊下には水無瀬さんの部屋と、この部屋を往復する足跡しかなかったんだよ？　他の人には絶対犯行が不可能じゃない？」
「その点については、事実以上のことを考えても仕方ないわね。水無瀬さん以外の人間は、誰も廊下に出なかった」
「じゃあやっぱり……」
「けれど謎は残るわ」霧切は屍体を指差す。「鳥屋尾さんの首に残された扼殺の痕も、指の向きが上下逆になっていたわ。もし水無瀬さんが犯人で、そこの扉を開けて中に入ってきたのだとしたら、どういう理屈で上下逆の扼殺痕になったのかしら」

「それは簡単な話だよ。鳥屋尾さんは寝てたんだ。床の上か、ベッドかわからないけど。寝ている鳥屋尾さんに、頭の方からこっそり近づいて、首を絞めた」
「ではそのあとで、屍体をわざわざベッドの脇に座らせたのは何故？」
「うーん……」
　わたしは唸ることしかできなかった。
「見て、やっぱり手で絞められた痕以外に、ロープ状の痕跡もあるわ」
「見てと云われても……」
　わたしは遠めに屍体を眺める。わたしにはその痕跡を見分けることはできない。
「どうしてこんなに厳重に首を絞める必要があるのかしら」
「確実に殺すためじゃない？　臆病(おくびょう)な人ほど、被害者を何度も傷つけるというし」
「二度手間だわ。何か意味があるのかしら……」
　霧切は呟きながら、一人で廊下に出ていってしまった。わたしは慌てて彼女を追いかける。なんだか落ち着きのない子のあとを追いまわしている気分だ。
　霧切は歩数を数えながら、廊下を往復する。
「さっきから何をやってるの、霧切ちゃん」
「部屋の大きさを測(はか)っているのよ」
「それならメジャーを使えばいいのに」
　わたしはリュックから巻き取り式のメジャーを取り出す。
　霧切はわたしの方を向いて、怒ったような顔をした。
「あるなら早く云って」
「必要だなんて一言も云わなかったじゃないか」
「わたしのやっていることを見てたらわかるでしょ」
「君の行動の意図なんか、そうそうわかるわけないだろ」
「……いいわ、いらない」
　霧切は拗(す)ねたように、メジャーを無視して、歩幅で距離を測り続ける。
「霧切ちゃん」わたしは彼女を呼び止め、その細い手首を掴む。「君の頭の中は、いつもわたしよりずっと先に進んでて、追いかけるので精一杯だよ。でも必要なことがあればわたしを頼って。わたしにできることなんて、そんなにたくさんはないかもしれないけど」
　わたしは彼女の手に、メジャーを置いた。
　彼女は顔を背けて云う。

「……ごめんなさい」
「いいのいいの、わたしも強く云い過ぎた。ごめんね」
　霧切はしょんぼりと肩を落としたまま『302』号室に戻っていく。
　彼女といる時間が長くなればなるほど、彼女はいろんな表情を見せてくれるようになった気がする。最初はとんでもない冷徹（れいてつ）な人間かと思ったけど、実は人間らしい感情の起伏（きふく）を持った女の子だ。
　わたしは彼女を追って、部屋に戻る。
「で、何を調べていたの？」
「壁の厚さよ」霧切は壁に手を触れながら云う。「もしかしたら、部屋と部屋の間に、人が入れるだけの隙間があるのではないかと思ったけれど、それもないみたいね」

秘密の隙間
間違った推理例

壁の中に人が……

昔ここで起きた殺人事件を連想するけれど、壁の厚みを計算したうえでは、そんなことはありえないようだ。

霧切は着実に、可能性を潰していっている。

そうして最後に残ったものが、きっと真実だ。

わたしたちは鳥屋尾の荷物を調べる。大きめの革のバッグには、着替えや旅行道具一式が入れてあるだけで、特別なものは何もなかった。驚くほど普通の荷物だ。

仮にもマジシャンを名乗っていたくらいなのだから、何か手品道具でも詰め込んであるかと思ったけれど、それらしいものは何一つなかった。

「この人、本当にマジシャンだったのかな……」

「結局、一度もそれらしい手品を見せてもらえなかったわね」霧切はゆるゆると首を振りながら云う。「もしも魚住さんの云っていたことが確かなら、マジシャンというのも、まったくの嘘だったかもしれないわ」

『手品師というのは表の顔。裏では贋作を売りつける詐欺師』

魚住がそのことを教えてくれていなかったら、わたしたちは未だに鳥屋尾のことをマジシャンだと思っていたかもしれない。

それから霧切はメジャーを手に、部屋の様々な場所の長さを調べ始めた。メモもせずにあちこち測っているが、全部記憶できているのだろうか。わたしには無理だ。最終的に彼女は屍体の身長まで測っていた。

「身長は約１７５センチ……体重は60キロもないかしら。体格は、茶下さんとほとんど同じね。床から窓の下端まで約2メートル……背伸びしても届かない……手を上げれば指先がかろうじて届くかしら。あ、届かない……」

霧切は独り言を呟くと、納得したようにメジャーを制服のポケットにしまう。

「結お姉さま、最後に一つだけ、実験していい？」

「何をするの？」

「お姉さまのリュックの中で、一番いらないものを私にちょうだい」

「また変なことを云い出すね、この子は」わたしはリュックを開けて中を確かめる。「昨日使った空のペットボトルがいらないな」

「それでいいわ」

霧切はペットボトルを受け取ると、窓の前に移動する。無言で鉄格子の窓を見上げ、何か思い直したように、わたしの方に振り返る。

「結お姉さま、もう一つお願いしていい？」
「何？」
「肩車して」
「……窓の外が見たいの？」
　霧切は肯く。
　わたしは霧切の傍にしゃがんだ。霧切はスカートをたくしあげながら、わたしの両肩にまたがる。なんだか柔らかいぬいぐるみかと思うくらい、彼女の身体は軽々としていた。ひんやりとした太ももが頬に触れる。わたしはそのまま立ち上がって、壁に近づいた。ちょうど霧切の視線が、窓と同じくらいの位置にある。
「よく見えるわ」
「満足ですか、お嬢さん」
「そのまま、もうちょっと近づいて」霧切は窓に向かって腕を伸ばしている。「耳を澄ましていて、お姉さま」
　霧切はペットボトルを持った手を、鉄格子の隙間に通した。
「ペットボトルを離すわ」
　霧切は宣言する。
　その数秒後、はるか下の地面に落下したペットボトルが、音を立てて跳ねていた。
「ありがとう、もう下ろして」
　わたしは云われるまま、霧切をその場に下ろす。
「なんの実験？」
「もしかしたら、窓のすぐ外に、足場でもあるのではないかと思ったの。工事現場で組み上げられているようなやつね」
「足場？」
　確かに窓から外を覗いただけでは、そのすぐ下に足場が組んであったとしても、見ることはできない。意外な盲点（もうてん）だ。
「でもペットボトルは真っ直ぐ地面に落ちていったわ。もし足場があれば、何かにぶつかっていたはず」
　……結局、足場がないことは確認できたらしい。
　けれど足場があったとしても、意味があるとは思えない。霧切は一体何を考えているのだろうか。やはりわたしの頭は、彼女にまだ追いついていないようだった。

63:58:45

　午後六時──
　三回目のオークションの時間がやってきた。
　今回、肖像画のディスプレイには、古い自動車が映っていた。
『やあ、みんなこんばんは。六時を過ぎたから、そろそろ今日のオークションを始めるよ。ちなみにおいらは沼（ぬま）に沈められた車だ。ノーマンたちに代わって、オークションの進行を務めるよ。おいらにはあんまり深い意味はないから、頭を悩ますなよ』
「さっさと始めるぞ」
　水無瀬が少し小さくなったナップザックを肩に担いで、食堂に入ってきた。
　いまやオークションは、水無瀬対他全員という構図になりつつある。
　水無瀬の態度や主張を考えれば、仕方ないだろう。自業自得というやつかもしれない。彼が探偵として全員を守ると約束してくれるなら対決する意味はないが、昨夜の繰り返しになるのなら、真っ向勝負で《探偵権》を奪い返さなければならない。
　しかし水無瀬は自信たっぷりだ。
　どうしてそんなに余裕なのだろう？
　彼はどうがんばっても５０００万以上の入札ができない。そしてここにいる参加者たちは、全員がそれ以上の資金を保有している。
　もちろん、あとのことを考えたら、その半分以下の金額で争われることになるだろう。しかしそうだとしても、水無瀬が資金的に不利なことにはかわりない。
　彼は一体、どうやって勝つつもりなのだろう。
　そしてわたしたちはどうやって勝てばいいのか。
　霧切は『任せてほしい』といった。
　だからわたしは霧切を信じてみる。
　入札が始まる。
「悪いけど、今回も俺が《探偵権》をもらうぜ」
　水無瀬は高らかに宣言して、入札ブースへ向かう。他の参加者たちは、口を開けて見ているだけだった。
「水無瀬さん」

霧切が彼を呼び止める。

入札ブースの扉に手をかけたところで、彼は振り返った。

「残念だけど、今回は私の勝ちよ」

「……はんっ」水無瀬は鼻で笑って云う。「中学生のくせに学校サボってこんなとこ来てんじゃねえよ。しっかり義務教育終わらせてから、大人にたてつくんだな」

水無瀬は啖呵（たんか）を切って、さっそうと入札ブースに入っていく。

ちなみに中学生は今、冬休み中です。

「巧くいくの？　霧切ちゃん……」

「今の感じだと、巧くいきそうよ」

何をもってそう感じたのかわからないけれど、霧切は確信したように微笑んでいた。

五分ほど経って、水無瀬が出てくる。

見たところナップザックはほとんど空だ。

まさか可能な限り突っ込んだのか。

「私は最後でいいわ」

霧切が云う。

美舟、夜鶴、新仙が順番に入札ブースに入る。今回に限り、彼らはこちら側陣営といっていいだろう。一時的な共闘状態だ。ただし、資金の貸し借りはない。もし霧切が資金協力を依頼していたら、彼らも簡単には彼女を信じなかっただろう。

そもそも資金力で劣る水無瀬を相手に、資金額を増やしたところで、意味があるとは思えない。

「じゃあ……行ってくるね」

わたしは入札ブースに入る。

早く『黒の挑戦』を終わらせて、こんなくだらないオークションごっこなんかやめるべきなんだ。わたしはうんざりした気持ちで、機械を操作した。

わたしは入札を終えて、霧切のところに帰る。

霧切は満を持して、入札ブースへと入っていった。

「おい、中学生！　殺人鬼にコロコロされても、絶対に助けてやんねえからな！　百回コロコロされろ！」

水無瀬が霧切の背中に向かって声をかける。

いまいち意味のわからない野次だ。

まもなくして、霧切が出てくる。

オークション終了を告げるブザーが鳴った。
わたしたちは急いで肖像画ディスプレイのもとに集まった。
下から順に目を走らせる――

シンセン　ミカド　０万
ミフネ　メルコ　０万
ヨヅル　サエ　０万

ゼロ円入札だ。
統率が取れている。
そして――

キリギリ　キョウコ　５１００万

水無瀬の資金は残り5000万。霧切は相手が全額張ってくることを見越して、プラス100万の入札をする。相手の限度額より100万多いので、どう転んでも絶対に勝てる計算だ。
しかし――
「ざまあみろ！　俺の勝ちだな！」
水無瀬が大声で笑い出す。
……俺の勝ち？
入札結果の一覧において、彼の名前は霧切の一個上にあった。

ミナセ　ユウゼン　５２００万

どういうことだ？
何故5000万以上の資金を持っている？
わたしにはわけがわからなかった。
「だてに十年引きこもってねえんだよ、チュー坊が！　ガキの考えてることなんかお見通しなんだよ、ひゃっひゃっひゃ……」

サミダレ　ユイ　５３００万

「ひゃ？」
「霧切ちゃん！　勝ったよ！」
「思った通りね」
　霧切は頬にかかった髪を払って云った。

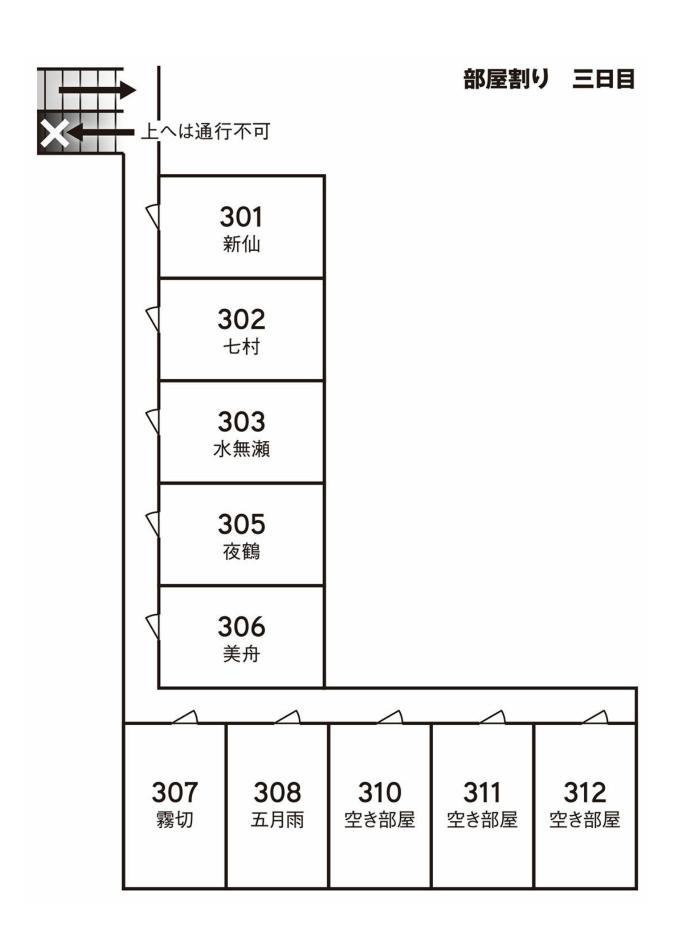
本日のオークションの結果

サミダレ　ユイ	５３００万
ミナセ　ユウゼン	５２００万
キリギリ　キョウコ	５１００万
シンセン　ミカド	０万
ミフネ　メルコ	０万
ヨヅル　サエ	０万

　今夜の探偵はわたしに決まった。
「な、ななな、なんだよこれ？」水無瀬は肖像画の額縁を摑んで揺すっている。「どういうことだよ！　なんで？　なんで？」
「あれだけ挑発しておけば、あなたの目は私にしか向かなくなると思ったわ。あなたが『限度額プラス１００万』に対抗して『限度額プラス２００万』を入札するのも想像通りだった」
「ちっ、ちくしょう……」
「安心して、水無瀬さん。あなたがどんな人間であろうと、今夜は結お姉さまがきっとあなたを守るわ。ねえ、結お姉さま」
　霧切はこちらを向いて、無邪気に笑ってみせる。
　当然だ。わたしが《探偵権》を手に入れた以上、誰も死なせない。
　けれどどうしてわたしが《探偵権》を手に入れられたのか、自分でもまだよくわからなかった。霧切を信じて、彼女の云う額を入札しただけだ。
　一体どんな方法を使って、水無瀬は所持金以上の額を入札したのだろう。
「これで私の推理が確かなものになったわ」

霧切は誰にも聞こえないような声で呟いた。
　どうやら彼女にはかなり真相が見えているようだ。

　夜時間を前に、わたしはロビーに全員を集めて、これからのことを話し合った。
「まず部屋割りから改善したいと思います。フロアの入り口に近い場所に探偵がいるパターンはもうやめます。わたしは一番奥、最後の部屋にいて、十時になると同時に、ドアを順番に開けていきます」
　探偵が『３０１』号室にいるパターンだと、最後の『３０８』号室にたどりつくまで、角の向こう側が死角になっている時間が長い。逆に奥の『３０８』号室からスタートすれば、死角時間はかなり短くなる。
「それから、誰がどの部屋に入るかは、わたしが決めます」
「おいっ、自由はないのか、自由は！」
　水無瀬が文句を垂れる。この人のダメ人間ぶりも、だんだんと愛らしく見えてきた。
「全員を守るためには仕方ないんです」
　わたしは断固として云う。
『３０１』号室から順に、新仙、水無瀬、七村、夜鶴、美舟、霧切、五月雨。
「ちょっと待った、俺の部屋って、じいさんの屍体があるところじゃねえか。絶対嫌だぜ、そんな部屋。嫌だ嫌だ嫌だ！」
「屍体は奥の空き部屋に移動させます」
「そういう問題じゃねえ！　屍体のあった部屋に閉じ込められるのなんかごめんだっつってんだろうが！」
「うるさいなあーっ、わがままいう子供には、成人済みのあたしが大人パンチするよ？」
　美舟はシャドーボクシングをするように、虚空にへろへろのパンチを繰り出す。
「おう、してみろや、カボチャ頭！」
「議論は時間の無駄だ。隣の私と部屋を替わろう」七村が云った。「こんなことで人生の貴重な時間を失っていられないからな」
「すみません、そうしてください」わたしは云う。「部屋割りについて、他に意見のある人は？　問題ありませんね？」
　皆、肯く。

部屋割り　三日目
上へは通行不可
301
新仙
302
七村
303
水無瀬
305
夜鶴
306
美舟
307
霧切
308
五月雨
310
空き部屋
311
空き部屋
312
空き部屋

「それじゃ、みなさん、待っていてください。今夜は必ず探偵が駆けつけます！　誰も死なせませんから！」
　夜時間が始まる。
　わたしたちは全員揃って三階へ移動した。水浸しだったフロアの廊下は、すでに乾いているようだ。
　不安そうな顔で部屋に入っていく人たちを背に、わたしと霧切は並んでフロアの奥へ向かって歩く。
　角を曲がったすぐのところが、霧切の部屋だ。
「十時になったら扉を開けて救い出す……とても簡単なことに思えるのに、どうして二人も殺されてしまったんだろう」
「場を乱している人間が私たちの中にいるからよ」
　霧切はそっけなく云って、自分の部屋の扉を開ける。
　九時五十八分。
　犯人側の時計との誤差を考えたら、そろそろ部屋に入っておいた方がいい。
「やっぱりオークションの参加者の中に犯人が？」
「ええ」霧切は肯く。「だからまだ気を抜いてはだめよ、お姉さま」
「わかってるよ」
　わたしたちは肯き合い、それぞれ扉を開けて部屋に入った。
　初めて《探偵権》を手に入れた夜。
　不安と焦りと、犯人を許さないという決意と、少しの万能感。
　そういえば探偵図書館に登録しに行った日も、そんな気持ちだったっけ。
　はっきりいってなんの才能も持たない凡人のわたしが、探偵図書館に登録したところで何ができるのか、最初はわからなかった。それでも探偵図書館の登録カードを手に入れたことで、ただ泣いているだけじゃなくて、闘わなきゃいけないんだという意志を手に入れることができた。探偵になったことで、わたしはこの世界で生きていく理由ができた。
　ちょっとした身内の恐喝（きょうかつ）事件とか、小さな子供の誘拐事件とか（結局子供の自演だったのだけれど）、ごく小規模な事件に関わっているうちに、ランクが一つだけ上がった。探偵として認められたことが嬉しかった。
　わたしのやってきたことなんて、霧切響子のやってきたことと比べれば、なんの意味もないだろう。それでも――『探偵であるということは、生きているということと同じ』。
　わたしだってそうなんだよ、霧切ちゃん。
　まずは君を助ける。

十時ジャスト。
　鍵のかかる音がして、とうとう夜時間が始まった。
　わたしは用意しておいたマスターキーを、ノブの下のスリットに差し込んだ。
　鍵が開く。
　扉を蹴飛ばすようにして、廊下に躍り出る。
　すぐ隣の部屋の扉を開錠。
　一分とかかっていない。
　扉を開けると、すぐに霧切が出てきた。
　たった数分の別れと再会。
　しかし再会を喜ぶより早く、わたしたちは廊下の角を曲がる。
　さっきより薄暗くなった廊下には、誰もいない。
　けれどこれで、すべての扉はわたしと霧切の監視下に入った。
『３０６』号室を開ける。美舟が飛び出してきた。
　彼女には構わず、次の部屋へ急ぐ。
『３０５』号室。夜鶴が扉のすぐ内側で待っていた。
　生存者の仲間が増えていく。
『３０３』号室。毒づきながら水無瀬が出てきた。
『３０２』号室。七村だ。
　最後の部屋、『３０１』号室。
　鍵を開けると、中から新仙が出てきた。
　これで全員──
「三分二十五秒」七村が腕時計を見て云う。「全員が解放されるまでの時間だ。想像以上に早かったな」
「やった！　全員無事だよ！」美舟が飛び跳ねて喜んでいた。「殺人鬼に勝ったあ！」
「な、なんだよ。やればできるじゃねえか」
　水無瀬が云う。
　オークション三回目の夜にして、ようやく全員が無事に朝を迎えられそうだ。
　たった三分二十五秒。
　わたしは肩で息をしながら、その時間の重みを感じていた。この異様な状況の中では、数分の出来事が、未来を大きく変え得るのかもしれない。

わたしたちは一階のロビーへと移動する。
「夜時間はまだ終わっていません」新仙はソファに座りながら云った。「朝七時になるまで、単独行動は避けるべきでしょうね」
「そうでした、まだ気は抜けません」
　探偵は眠れない。
　わたしはソファには座らず、意味もなくロビーをうろつき回った。ここのところの疲れもあり、じっとしていたら眠ってしまいそうだったからだ。できることならバスケでもやりたいところだ。人数が減ってしまったけれど。
　霧切は常にわたしの後ろをついてきていた。
「君は寝ててもいいんだよ」
「いいえ、私はお姉さまが寝たら起こす係よ」
「信用ない？」
「あんまりないわ」
　まあ確かに、この前は見張りをしている途中で爆睡してしまったから、信用ないのも仕方ない。
　わたしと霧切は散歩するように、ロビーの中をぐるぐると歩きながら話をする。
「ねえ、霧切ちゃん。君には犯人が誰かわかっているの？」
「ええ」
　霧切は肯く。
「そっか……って、ええっ？」
「声が大きいわ」
「ごめん、でも犯人がわかっているなら、早く『黒の挑戦』を終わらせようよ」
「結お姉さま、私たちは今回の探偵役ではないのよ。前の時は犯人が観念して自供(じきょう)してくれたから私たちの勝ちになったみたいだけど、今回も同じように犯人が負けを認めるとは限らないわ」
「その場合、霧切ちゃんの推理が正解でも、『黒の挑戦』は終わりにならないのかな」
「たぶん……ルール上は、召喚された探偵が解決に当たらなければならないのでしょうね」
「じゃあ七村さんと相談しよう」
「待って、それはやめておいた方がいいわ」
「ど、どうして？」
「まだ調べておきたいことがあるから、彼には黙っておきましょう」
「え、う、うん……」
　今こそ七村を頼るべきではないだろうか。

それにしても、霧切はすでに真相に達(たっ)しているらしい。わたしと彼女はほとんど同じものを見てきたはずなのに、何故彼女だけが答えにたどり着けるのだろう。

わたしにはさっぱり犯人がわからない。

というか……あの犯人消失や、二つの密室の謎を解き明かすことなんてできるのだろうか？

気の遠くなるような長い夜を経て、時計はようやく朝の七時を指した。

ソファに座るメンバーは誰一人として減っていない。

「結お姉さま、おめでとう。全員生還(せいかん)よ」

「ありがとう。全部君のおかげだけどね」

オークションで勝てたのは霧切のおかげだし、夜の部屋割りについてアドバイスしてくれたのも彼女だ。結局、わたしのやったことといえば、ダッシュで扉を開けて回っただけ。

手柄はともかく、全員生きて夜を明かすことができたのなら、それでいいか。

人を救う――そのことの意味や重大さ、大変さがわかった夜だった。

夜時間が終わり、再び安全が戻ってきたことで、ロビーの集まりは解散になった。

どっと疲労感が襲ってくる。

わたしは『３０１』号室で休むことにした。

また次のオークションに備えなければならない。

ルール上危険はないとはいえ、すでに三人も殺されている状況で、部屋で一人眠るなんてことはするべきではなかったかもしれない。それでもわたしはへとへとで、ベッドに倒れ込むなりすぐに眠ってしまった。

こんな時に妹の夢を見なければいいな。

死んだ妹の夢なんかもう――

第七章

探偵は霧を越えて

パーフェクト・プラン

寝ているわたしの顔を覗き込む何者かの気配を感じて、思わず飛び起きた。
　ベッドのすぐ脇に、水無瀬が立っていた。
「きゃーっ」
「ば、馬鹿っ！　襲われたような声出すんじゃねえ」
「何するつもりですかっ」
「何もするつもりねえよ！」
　水無瀬は動揺しながらあとずさる。
　彼の横に、霧切もいた。
「結お姉さまって、少女のような悲鳴を上げるのね」
「なんの用？　どういう二人組？」
　まだ頭がぼんやりとして、事態を呑み込めない。
　わたしは寝癖のついた髪をとかしながら、ベッドの外に足を投げ出して座る。
「お姉さまに用はないけど、水無瀬さんから話を聞くのに、何処か人目につかないところがよかったから」
「それでこの部屋にしたってわけね」わたしは腰に手を当てて云う。「じゃあどうぞ、二人で秘密の話をして。その間に、髪の毛とかしてるから」
　わたしはリュックから櫛を取り出して髪にあてる。
「なんなんだよ、一体」
　水無瀬は迷惑そうに顔をしかめた。
「あなたの犯罪歴をまだ聞いていなかったと思って」霧切は臆する様子もなく尋ねる。「水無瀬さん、過去に何か罪を犯したことはない？」
「は、はあ？」
「重要なことなの。答えて」
「し、知らねえよ」
「さしずめネットオークションで詐欺行為を働いたことがあるといった感じかしら」
「な、なんでお前、それをっ？」
「やはりそうなのね」
　霧切はため息をつくと、わたしの隣に腰掛けた。
「オークション詐欺？」わたしは動揺する水無瀬を見上げて尋ねる。「それって、どういうことするんです

か」
「た、大したことじゃあねえよ……ネットオークションにパソコンとかゲーム機とか、人気のありそうなものを出品して、金だけ受け取って商品を渡さなかったり……実際には手元にない商品を出品したり……あっ、俺がやってるわけじゃねえぞ、そういうやつがいるっていう話だからな！　断じて俺は——」
　せこい……
　犯罪は犯罪だし、被害に遭(あ)った人には気の毒だけど、彼がこの『黒の挑戦』に巻き込まれて標的とされるには、犯罪者としての格が足りない気がする。
「あなたは旧華族の人間だと云っていたけれど、両親が過去になんらかの犯罪や詐欺行為に加担したことはない？」
「あったらこんなに苦労してねえよ！　俺の両親は正直だけが取り柄の馬鹿親だ。おかげでネットオークションで小銭稼ぎでもしなきゃ、欲しいもんも買えねえ」
「正直な親から、何故あなたのような人が生まれてきたのか疑問ね」
　霧切は呆れたように云って、小さく首を横に振る。
「うっせーんだよ！　ガキどもが。俺を非難するために呼んだのかよ。いいか、今日のオークションではまた俺が勝つからな。昨日のようにはいかないぜ」
「水無瀬さん、そのことだけど」
「なんだ、泣いたって手加減しねえぞ」
「あなたに買ってほしいものがあるの」
「な……なんだよ」水無瀬はたじろぐ。「ま、まさか、お前ら……いくらなんでも未成年はやめとけ……やめとけ俺！」
「勘違いしないで」霧切は冷めた目で水無瀬を見返す。「あなたに買ってほしいのは、ここから生きて帰る方法。もう《探偵権》を奪い合う必要はないわ。ある方法を使えば、あなたはもう夜時間に殺されることはなくなる。その情報を買ってほしいの」
「しゃ、しゃべえこと云ってんじゃねえよ。この期に及んで情報商材なんかに手を出すかっつうの。ネット詐欺の常套手段じゃねえか、むしろ俺の得意分野……じゃねえよ？　そういうの知らねえから。っつうか、そもそも《探偵権》を落札するより絶対に安全な手段なんてあるのかよ」
「ええ。オークションは残り二回。残り資金をいかに有効に使うか、判断を試される状況になってきたわ。そんな今だからこそできる、ルールの裏をかいた生き残り方をあなたに教えてあげる。ただし、それを教えるには条件がある。あなたが今持っている資金を全部、私に渡すこと。どう？」
「中学生のクソガキが、いっちょまえに俺に取り引きを持ちかけようっつうのか……いい根性してるじゃね

えか。ネット詐欺界の神聖皇帝と呼ばれた俺に敵うと思っているのか」
「よく考えることね。今日のオークションが始まる一時間前まで、猶予をあげるわ。それまでに答えを出して」
「俺を詐欺ろうっていうんじゃねえだろうな」
「だますつもりはないわ」
「ああ？　本当か？　ネットの噂で聞いたことがあるぜ。中学生の天才詐欺師がいるって……まさかお前じゃねえだろうな？」
「私は詐欺師ではなくて、探偵よ」
「信じて……いいのか？」
「あなたの判断に任せる。もしかしたら、私の他にもあなたに取り引きを持ちかけてくる人がいるかもしれないけれど……私はあなたを信じているわ」
「く……」
　水無瀬は悩むように頭を抱えながら、部屋を出ていってしまった。
「霧切ちゃん、いいの？　あの人にあんな約束しちゃって。平気で人を裏切るタイプでしょ、あの人」
「大丈夫よ。昨日のオークションで、こちらの実力を見せているから。長いものに巻かれるタイプよ、あの人は」
　霧切は一体何を企んでいるのだろうか。
　彼女の頭の中では、すでに犯人と対峙する構図ができあがっているかのようだ。
「今回の『黒の挑戦』に集められたのは詐欺師ばかりのようね。全員が標的だとは思えないけれど、少なくとも彼らによって破滅させられた人がきっと存在するわ」
「鳥屋尾さんはともかく、茶下さんも詐欺師だったの？」
「厳密に詐欺師と呼べるかどうかはわからない。でも彼の手帳を見ると、終末思想を人心コントロールのネタに使っていた節があるわ。世の中には、世界の終わりが来ることを信じて、全財産をなげうつ人もいるというから……彼に影響されて、身を滅ぼした人間がいるかもしれない」
「なるほどね……そう考えると、犯人は詐欺師たちを相手に、大金を使ったゲームでやり返そうって考えてるのかな」
「そうね。自分をだました連中を思う存分手玉にとってやりたいという願望があるのかもしれないわ」
『黒の挑戦』は復讐であると同時に、挑戦者にとっては救済でもある。自分を破滅させた相手に、積年の恨みを晴らす――今回の犯人はそれをゲームとして挑み、標的たちを負かしてやろうとしているような気がする。

「このホテルで昔起きたという殺人事件は関係ないのかな？　十人以上殺されているらしいから、遺族が復讐でも企んでいるのかと……」
「その事件は明確に犯人が確定しているでしょう？　真犯人の存在する余地がない事件だから、『黒の挑戦』の題材にはならないわ」
「そっか……それじゃ次の標的は誰だろう？　夜鶴さん？　残っている人の中で、一番やばそうな過去を持ってるよ」
「それはどうかしら」霧切は立ち上がって、スカートの裾を払う。「オークションも残り少なくなってきたわ。犯人は多少、強引にでも標的を殺しにくると思う。だから次のオークションからは、被害者になりそうな人に《探偵権》を託すことが重要になってくるわ。そうすることで、他の誰かが探偵をやるよりも確実に犯行を防げる」
　犯人は必ずこのゲームのルールに則(のっと)って殺人を実行するはずだ。もしプレイヤーがルールを破るようなことをすれば、これを見ている金持ちやスポンサーたちから間違いなくクレームがくるだろう。それだけで敗者扱いになるかもしれない。アンフェアなルール破りは許されていないはずだ。
　だからわたしたちはルールを有効に使い、《探偵権》を使って標的を守る。それしかない。
「結論から云うわ。今日のオークションは、美舟さんと夜鶴さんの一騎打ちになる」
　どうしてそういうことになるのか、わたしにはよくわからない。
「で、わたしたちはどちらにつくの？」
「どちらの側につくべきか……それを説明する前に、今回の『黒の挑戦』のすべてを結お姉さまに話しておく必要があるわね。納得してもらわなければ、先に進めないわ」
「いいけど……七村さんと相談しなくてもいいの？」
「七村さんはもう使えないわ。説明はあとでするけど、とにかく私たちが今回の『黒の挑戦』に勝つためには、標的となる人間を守り抜き、タイムアップを狙うこと。探偵役の告発はないものとして考えるしかない。理解できたかしら、結お姉さま」
　理解なんか全然できない。
　七村さんが使えないってどういうこと？
「一つ確認しておきたいんだけど……『黒の挑戦』の犯人は、予定していた標的を全員殺さないと負けになるんだっけ？」
「そうよ。逆に云えば、標的となる人間を一人でも守り抜けば、こちらの勝ち」
　なるほど、そういう勝ち方もあるのか。
　しかしすでに魚住を含めて三人も殺害されているのだから、勝ちと云えるかどうかは微妙なところだけ

ど……
「うん、理解した」
「ではまず、一番簡単な現象から説明しておくわ」
「一番簡単って？」
「最初の夜、奥の空き部屋で犯人が消失した件よ」
「ええっ？　わたしにはとんでもなく不思議な出来事だったんだけど……」
「見せ方が巧かったのね。ささいなトリックでも、見せ方次第では奇妙な現象になるという典型かもしれないわ」
　あの夜、わたしは廊下の角に犯人らしき人影を見た。その人物を追いかけると、空き部屋に忍び込む影が見えた。追いかけてその部屋に入ると、そこにはすでに誰もいなかった……
　そして室内の壁には、蛍光ピンクの塗料で、大きな×印が描かれていた。
　部屋は完全な密室で、何処にも逃げ場などない。
「あの日、私たちは門限を守るために、夜十時より前に、それぞれ部屋に入っていたわね。少なくとも十分前には部屋にいた」
「うん」
「つまりそれだけ――約十分間――犯人には時間的な猶予があったのよ。犯人は門限なんて関係ないし、私たちが引きこもっている間も、自由に部屋を出入りできたでしょうね」
「……そうだね」
「犯人は門限を守るふりして自分の部屋に入ったあと、すぐに外に出る。そして奥の空き部屋に向かい、ちょっとした準備をした」
「準備？」
「ドアを半開きにして、ストッパーを噛ませる。ストッパーにはロープが結んであって、ロープの先は窓の外に出しておく。準備はこれだけよ。もしかしたら、ストッパーにひらひらとした布を被せて、いかにも誰かが部屋に入ったように見せかけるための工夫がされていたかもしれない。そしてそのストッパーは、ドアの下端ではなく、真ん中辺りに噛ませてあったのかもしれない。そしてロープを窓の外から引っ張ることで、ストッパーが外れ、布がひらめき、人影が部屋に入っていくように見えたかもしれない」
「ど、どういうこと？　空き部屋には誰も入らなかったの？」
「そう、現象としては、ストッパーが外れてドアが閉まっただけ。それだけなのに、結お姉さまたちは誰かが部屋に入ったと錯覚した」
「錯覚？　でも実際に壁に×印が描かれていたじゃないか。誰かが部屋に入らなきゃ、×印を描けるわ

けが……」
「×印は最初から部屋の壁に描かれていたとしか考えられないわ。それこそ、私たちが三階のフロアに足を踏み入れる前から。あの部屋が誰にも使用されることのない空き部屋になるのは予定通りだったのよ」
　そうか……もしかしたら空き部屋を用意するために、魚住は殺されたのではないだろうか。
「じゃあ、わたしたちが廊下の角に見た人影は？　あれは間違いなく人間だったし、美舟さんも目撃しているんだよ」
「その人影は、奥の空き部屋に逃げ込んだように見せて、他の部屋に逃げ込んだのよ。廊下の曲がり角より先が死角になっている間に」
「他の部屋？」
　廊下の角の向こうにある部屋は、『３０７』から『３１２』の五部屋。そのうち一番奥が空き部屋で、その隣が茶下の部屋だ。
「やっぱり犯人はその時に被害者の部屋に入って、殺したの？」
　しかし廊下で見張りをしていた美舟の証言では、わたしと七村が現場に踏み込むまでの間に、その部屋から出てきた者はいなかったという。つまり犯人はまだ被害者の部屋の中にいたことになる。
　その場合、わたしたちは犯人と鉢(はち)合わせしていなければおかしい。
　しかし現場に犯人はいなかった。
「実はこの消失トリックそのものはどうでもいいの。それはトリックというより、次の密室殺人を成立させるためのトラップだったのよ」
「トラップ？」
「事実、結お姉さまたちは消失現象に惑わされて、長い時間、空き部屋に足止めされたでしょう？」
「……長い時間といっても、二十分だけだよ？」
「二十分あれば、人を絞め殺すことはできるわ。実際には犯行時間は十分程度だったかもしれないけれど」
「やっぱりあの時……×印の壁の向こう側で、茶下さんが首を絞められている最中だったの？」
「そういうことになるわ」
　わたしは言葉を失う。
　あの時、部屋の異状に気を取られずに、すぐに隣の部屋に移動していたら、被害者を救うことができたかもしれない。
　わたしたちはまんまと消失トリックの罠にかかり、密室トリックを成立させる手助けをしてしまったのでは

ないか。
「でも……犯人はどうやって茶下さんを殺したの？　わたしたちが現場に入った時点で、犯人はいなかったんだよ？　犯人が密室をどうやって出入りしたのかという謎は残るじゃないか。それとも犯人だけが、密室を自由に出入りする方法があるの？」
「ないわ」
「ない？」
「結お姉さまは、あの部屋を『完全な密室』と云っていたわね。事実、扉は施錠されて、廊下には見張りもいて、窓には硬い鉄格子がはめられている。誰も出入りできないように見えるわ」
「やっぱり完全な密室なんだ」
「そう、あの密室は誰も出入りできない」
　誰も出入りできない室内で、被害者は直接首を絞められて殺された。
　そんなことが起こり得るのだろうか。
「よく考えてみて、お姉さま。密室はほとんど完璧なの。犯人は絶対に部屋を出入りすることはできなかった。それにもかかわらず、被害者は首を直接絞められて殺されている。どうすればそんなことが可能か？」
「──超能力でも使わなきゃ無理だよ」
　超能力？
　まさか……！
　元超能力しょ──
「違うわ」霧切はわたしの答えを聞く前に、否定する。「屍体の状況を思い出して。特に、致命傷となった扼殺の痕跡を」
　上下逆の扼殺痕。
　そんな痕跡がつくのは、被害者が寝ているところを、頭越しに絞めた時だけだ。
　しかしよくよく考えてみると……わざわざそんなふうに扼殺するのは不自然極まりない。
　本当に被害者は寝ていたのか？
　あの限界状況で寝ていられるのか？
　寝ていないとしたら……被害者は起きていた？
　仮に被害者が横にならず、立っていたとしたら……
　被害者は直立不動の状態だ。そこに犯人が現れる。犯人は今まさに、彼の首を絞めようとしている。しかしそのまま首を絞めたら、扼殺痕は上下逆さまにはならない。では上下逆さまの扼殺痕となる

ためには――
　ん？
　逆さま？
　わたしの頭の中で、奇妙な構図が浮かび上がってくる。
　犯人は逆さまの状態だったのか？
　天井からぶら下がるようにして、被害者の首を絞めたら、上下逆の扼殺痕になるのではないか？
　その構図が閃いた瞬間、わたしは不気味な妖怪（ようかい）を思い浮かべていた。突然天井から現れて、ぶら下がりながら人を脅（おど）かす妖怪だ。
　けれど天井はコンクリートで塗り固められている。ぶら下がりおばけが隠れられるような梁（はり）や、開閉できる天窓など存在しない。のっぺりとした天井だ。もちろん抜け穴や、隙間なども存在しなかった。
　では犯人は何処から現れたのか？
「密室にはいくつかのパターンがあるわ。けれど大きく分けると、二つのパターンしかないの。知っているかしら、結お姉さま」
「えっと……合鍵を使うパターンと使わないパターン？」
「全然違うわ」霧切は目を閉じて首を横に振る。「答えは、犯行時に犯人が部屋の中にいるパターンと、いないパターン」
「犯行時に犯人が部屋にいるのは当たり前だよね。でも犯人がいないパターンって……？」
「たとえば遠隔（えんかく）装置や罠を使った犯行ね。椅子に座ると棚の上からナイフが降ってくるとか……他にも、密室の隙間を利用して、外から被害者を殺害する方法があるわ。例としては、通気口から毒蛇（どくへび）を投げ入れるとか」
「そっか……犯人は必ずしも、密室内にいる必要はないんだね」
「そういうことよ」
　霧切は満足したように肯く。
　説明が続くと思いきや、それで終わりだった。
「そういうことって、どういうこと」
「まだ理解していなかったの？」
「う、うん」
「一見完璧に見える密室でも、何処かに隙間があるなら、それを利用して、外から被害者を殺すことができるということよ」
「うん」

「ねえ結お姉さま、さすがにここまで云えばわかるでしょう？」
「わからないよ！」
　わたしは抗議の声を上げる。
「……それなら実際に見に行ってみるしかないわね。私の推理もまだ、証拠のない机上（きじょう）の空論（くうろん）でしかない。答えを実際にその目で見た方が早いわ」
　霧切は頬にかかった髪を耳にかけて、部屋を出ていこうとする。
「ちょっ、ちょっと、何処行くの」
　まだ謎だらけなのに。
　霧切は答えないまま部屋を出ると、廊下を進み、階段へ向かう。
　彼女は階段の踊り場で立ち止まった。
　上に向かう階段を見上げる。
　階段は一段目から破壊されて、すっかり抜け落ちている。
「ゲームの進行上、関係ないところはコンクリートの壁で塗り込められていたわね。けれどここがコンクリートで埋められていなかったのは、たまたまではないと思うわ。たぶん、これもフェアプレイのつもりではないかしら」
「フェアプレイって……この先に何か秘密があるっていうの？」
　霧切は肯く。
　この先に何があるのだろう？
　しかし進みたくても進めそうにない。
　階段の抜け落ちている箇所を覗き込むと、一つ下の踊り場が見える。ぱらぱらと音を立てて、小さながれきが舞い落ちていった。死を予感させるほど高くはないが、少なからず恐怖を覚える。
　こんなところだけ廃墟然としていなくてもいいのに。
　どうやってこの抜け落ちた階段を越えたらいいのか。
　抜けている幅は、せいぜい二、三メートルだろう。けれど向こう岸の踊り場は、わたしの視線よりも高い場所にある。
「シーツを集めてきて、ロープ状にして向こう側に引っかけるというのはどうかしら」
　霧切が提案する。
　しかし見たところ向こう側にシーツを引っかける場所がない。
「ここはわたしの出番だね」
　跳び越えられない距離じゃない。

跳躍（ちょうやく）に関しては自信がある。問題は助走の取りづらい位置関係と、向こう岸（ぎし）がめちゃくちゃ高いということ。

　わたしは覚悟を決め、助走をとるために廊下まで下がった。

「待って、お姉さま。自力（じりき）で跳ぶつもり？　それはさすがに無理だと思うわ」

　霧切が心配そうに云う。

「まあ任しといてよ。先に進むためには、危険を避けては通れない。謎が解けるなら進むべきでしょ」

「だめよ、お姉さま。怪我してもすぐには病院に行けないのよ。無闇に動く前に、頭で考えましょう。何かいい方法があるわ。ねえ、お姉さま」

　霧切はおろおろし始める。

「大丈夫だよ、怪我したら君に面倒みてもらうから」

　屈伸運動する。

　ここ数日の監禁生活のせいで、足がなまっていなければいいけど。

　上り階段は廊下を真っ直ぐ行って左に九十度の位置にある。

　行くぞ。

　わたしは走り高跳びの要領で、弧（こ）を描くように助走をつける。

　そして階段が見えてきたところで。

　跳ぶ――

　向こう岸の段差は、視線とほぼ同じ。

　両足で着地できるなんて、最初から思ってない。

　なんとか上半身がたどりつけば、あとは腕の力で這（は）い上がるだけ。

　――わずかな滞空（たいくう）時間のあと。

　わたしは向こう側の崖（がけ）っぷちに、思いっきり胸から突っ込んでしまう。

「んぐっ」

　必死に縁にしがみつき、両腕でこらえる。

　足は宙ぶらりんの状態だ。

「お姉さま！」

「んんにゃあああ！」

　両腕にすべての力を込めて、上半身を引き上げる。

　足を上げると、どうにか縁に届いた。

　そのまま転がり込むようにして、踊り場に倒れ込む。

「すごい、すごい」
　霧切の黄色い歓声が聞こえる。
　なんだ、あの子もあんなふうに声を上げたりできるんだ。ここのところ、彼女のいろんな表情が見られて嬉しいな……
　わたしはそんなことを考えながら、踊り場に立ち上がる。服についた埃を払って、眼鏡の位置を直した。
　壁には『４F』の文字。
　階段の上を見上げると、正面は突き当たりになっていて、廊下が右へ続いているようだった。これは三階と同じ構造だ。
「……で、なんでわたしこっちに来たんだっけ」
　密室殺人の謎を解く答えがあるとかないとか……
「結お姉さま、そのまま行ける場所へ行ってみて。きっとすぐに答えがわかるから」
「わかった」
　未知の場所を一人で進むのは怖いけれど、霧切をこちら岸に連れてくるのは難しいだろう。
「私は『３０１』号室にいるわ」
　霧切は三階のフロアに引っ込んでしまった。
　わたしはあらためて階段を見上げ、上り始める。
　一人で進まなきゃ。
　今までそうしてきたはずなのに、今は霧切がいないと心細くて仕方ない。
　わたしは人を救いたくて探偵になったはずなのに、今では彼女に救われてばかりいる。
　誰かを救うことのできる人間こそが探偵というのなら、霧切は紛れもなく探偵だ。
　それでも彼女はきっと、そんな意義や目的を否定するだろう。霧切家の探偵に私情はいらない。そう教えられて育ったからだ。
　けれど彼女は今、そうした探偵教育によって作られた自我に疑問を感じているようでもあった。あるいは解けない謎を、自分の心の中に見つけたというべきだろうか。
　はたして彼女にその謎が解ける日は来るのだろうか。
　階段を上りきると、三階と同じようにフロアへ続く入り口があった。しかし三階とは違って、入り口は扉で閉ざされている。
　階段はここで終わっており、本来上り階段があるところは、コンクリートの壁になっていた。やはりゲームと関係ない場所はすべて、物理的にシャットアウトされているのだろう。

霧切が云ったように、ここは危険を乗り越えた者だけがたどり着ける場所として設定されているのかもしれない。
わたしはフロア入り口の扉の前に立つ。
この先にどんな秘密が隠されているのだろうか。
『一見完璧に見える密室でも、何処かに隙間があるなら、それを利用して、外から被害者を殺すことができる』
霧切はそう云っていた。
部屋にある隙間といえば……鉄格子の窓か。
このフロアに、そのことと関係する何かがあるのだろうか。
ドアノブを掴む。
開かない。
よく見ると、ノブの下にカードキー用のスリットがあった。
どうやら《探偵権》を持つ者しか、扉を開けられないらしい。
ここまで来て、まさか扉に阻(はば)まれるとは……
しょんぼりとして、どうしたものかと悩む。
……あっ、そういえば今はわたしが探偵だった。
わたしはカードをスリットに差し込む。
ピーという音がして、ロックが外れた。
やった！
わたしは扉を開ける。
すると——
いきなり冷たい風がわたしを包んだ。
ひんやりしたものが頬に当たる。
雪？
眩(まぶ)しさに目を細めながら、わたしは扉の向こうに一歩を踏み出した。
慣れない明かりに、わたしは恐る恐る目を開ける。
ここは？
——外だ。
わたしは冷たい風から身を守るように、自分の身体を抱きながら、見知らぬ世界へと歩き出す。
この場所を何かの言葉で表すとするなら——屋上だった。

四階のフロアは何処へ消えた？

足元は灰色のコンクリートで、屋根を思わせるような斜めの構造にはなっておらず、見渡す限り平坦（へいたん）だった。またフェンスや空調の室外機など余計なものはいっさいなく、建物と空の縁は、切り立った直角の崖のようになっている。視界の先は、ちらちらと雪の舞う、コンクリートよりはちょっと薄い灰色をした曇（くも）り空。

どうやらここは、三階客室フロアの真上に当たるようだ。わたしはちょうど、L字型のブロックの上を歩いているような状態だった。

そしてもう一つ、驚くべき物体が扉を出てすぐのところに置かれていた。

自動車だ。

何故こんなところに？

一体、何処からどうやって運んだかわからないけれど、まるでシュールレアリスム絵画を見た時のような奇妙な驚きを覚える。

残念ながら車種については詳しくない。見た目は小型の軽自動車だ。車内を覗き込んでみたが、特に気になるものはなかった。一応証拠として、ケータイのカメラで撮影しておいた。

わたしは足元に気をつけながら、屋上を進む。

もし足を滑（すべ）らせたら、地面まで真っ逆さまだ。それにしても、感覚的には三階よりもずっと高い場所にいるような気がする。

「結お姉さま」

何処からともなく霧切の声が聞こえた。姿は見えない。

「こっちよ」

声のする方へ近づいていく。

確か『301』号室にいると云っていたっけ。

わたしは切り立った屋上の縁に立ち、首を伸ばして、真下を覗いてみた。

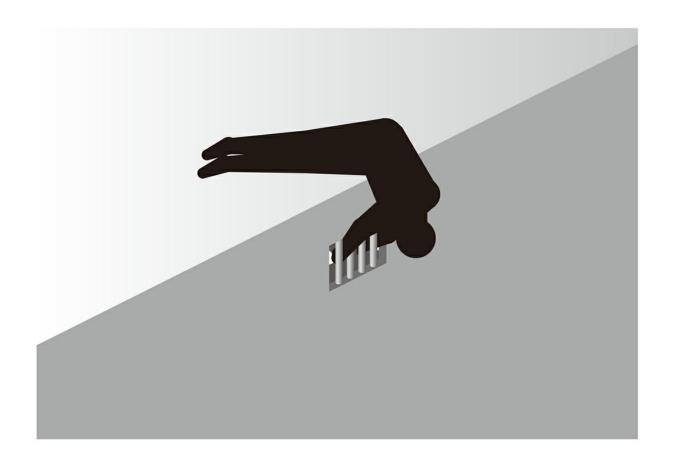
かなり高い。めまいがしそうだ。

コンクリートの断崖絶壁（だんがいぜっぺき）の途中に、鉄格子の窓が見える。その鉄格子の隙間から何かが外側に飛び出し、ちらちらと動いていた。

それはわたしの巻き取り式のメジャーだった。本体の方が窓の外に出ていて、引き伸ばしたメジャーはロープのように窓の中へ続いている。おそらく霧切が目印にするために、本体を外へ投げ出したのだろう。

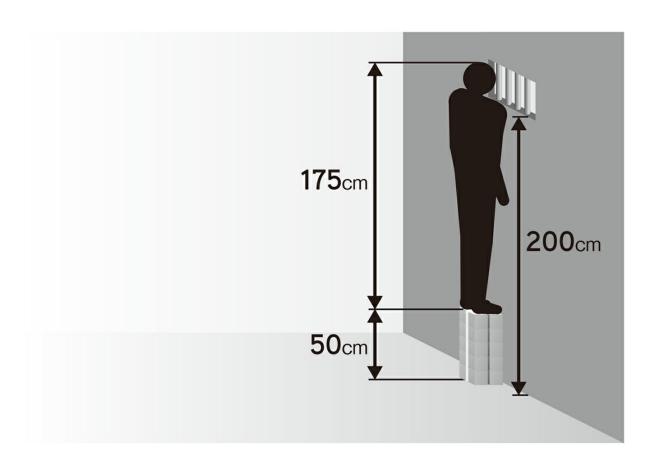
「霧切ちゃん？」

「お姉さま、そこはどうなってる？」
　彼女の声だけが聞こえてくる。
「よくわからないんだけど……何故か四階がなくなってて、屋上になってる」
「思った通りね」
　彼女の嬉しそうな声が聞こえる。
「一体どういうことなの、これは」
「それがすべての答えよ」
「この目で答えを見ているわたしが云うのもなんだけど……何がなんだかわからない」
「その位置から、窓に手は届く？」
　霧切はわたしに構わず問いかける。
　わたしはあらためて窓を覗き込む。窓は切り立った壁の、屋上にかなり近い場所にある。わたしから見れば、足元から三十センチ程度下に位置している。
　たとえば屋上に身体を伏せて、上半身だけを外に投げ出し、ほとんど逆さまになるような体勢になれば、窓に手が届くだろう。
　わたしは実際にやってみようと考え、窓の真上で身体を伏せた。コンクリートの上は少し濡れていて、びっくりするくらい冷たかった。
　眼鏡を落とすといけないので、外してポケットに入れる。
　ゆっくりと縁の外に頭を出す。
　眼鏡を外したせいで、はるか真下の庭もぼやけて見える。おかげで、少しだけ恐怖心は紛れる。
　ここからさらに、身体を外に投げ出さなければ、窓には届かない。
　ゆっくりと身体を虚空（こくう）に出していき……
　身体が建物の角に合わせて九十度になったところで……ちょうど逆さまの視界が、窓の位置を捉えた。
　室内が見える。
　霧切の落ち着かなさげな顔が、こちらを見上げていた。
「結お姉さま、そこから鉄格子の間に腕を通せる？」
「無理無理！　これ以上動いたら落ちちゃう！」
　ただでさえ逆さまの状態で、動作が制限されている。しかもちょっと重心をずらしたら、たちまち崖の向こうに落ちてしまうだろう。
「いいわ、危ないから戻って」

「……霧切ちゃん、大変」
「何？」
「この体勢から戻れない」
「がんばって、お姉さま！」
「……がんばる……」
　わたしは壁に手をついて、ゆっくりと身体を後退させていく。
　なんとか落ちずに生還することができた。
　へんな体勢で無理したせいか、今まで気にしたこともないような筋肉が痛い。わたしは身体のあちこちをさすりながら、続けて周囲を捜索（そうさく）した。
　ケータイで写真を撮りながら屋上を歩いていると、何かが足に突っ掛かった。よく見ると、湾曲（わんきょく）した太い針金のようなものが足元から突き出ている。鉄筋素材だろうか。コンクリートの灰色と同じ色をしているので、気づかなかった。
　これは一体なんだろう。
　とりあえず写真に収めて、わたしは屋上をあとにした。
　帰り道は比較的楽だった。階段の穴は、向こう岸の方が低いので、ジャンプで簡単に越えられた。
　わたしは成果を持って、『３０１』号室に入る。
「おつかれさま、結お姉さま」
　霧切はベッドに座ってわたしを待っていた。
「何かの役に立てたかな？」
「完璧よ。謎はすべて解けた、と云っても過言（かごん）ではないわ」
「よかった」わたしは彼女の隣に腰掛ける。「それで、何がわかったの？」
「さすがにお姉さまにももうわかったでしょう？」
「……うーん、なんとなくわかってはいるんだけど。そんなことが可能なのかな……と思って」
　──部屋には入らずに、室内にいる被害者を絞め殺す方法。
　──上下逆さまの扼殺痕。
　──存在しない四階と、存在するはずのない屋上。
　これらのことから、考えられることは一つしかない。
「どんなにあり得なさそうなことでも、それが他の可能性を排除したうえでの結論なら、真実に違いないわ。つまり──犯人は窓の外に逆さまになった状態で、鉄格子の隙間から室内に腕を伸ばし、中にいる被害者の首を絞めたのよ」

「でも……さっき実際にやってみたけど、崖っぷちから身体を投げ出した状態ではかなり行動が制限されるよ。そんな状態で殺人なんて無理だよ」
「屋上に、身体を固定させるための杭のようなものはなかった？」
「あ、杭というか、なんか鉄筋みたいなのが足元から突き出ていたよ」
「命綱を引っかけておくためのフックね。さっきお姉さまがやったように、窓から室内に腕を伸ばすためには、やっぱり足を固定させておかなければ、かなり不自由になると思うの。そのためにロープを引っかけて、下半身を固定する」
　下半身を屋上にしっかりと固定させておけば、たとえ上半身を崖の向こうに投げ出しても、ある程度自由になる。
「でもぶら下がりおばけの状態で首を絞めるって……相当難しいんじゃない？」
「訓練が必要だったと思うわ。少なくともぶっつけ本番でできることとは思えない。猛特訓を重ねたうえで、本番に臨んだと思う」
「あれ……でもちょっと待って」
　わたしは彼女の推理に、重大な欠陥があることに気づく。
　たとえ犯人が窓の外から室内に腕を伸ばすことができても、被害者の首を掴むことはできない。
　何故なら、窓の近くに被害者がいるとは限らないからだ。
　被害者がそこにいなければ、手は届かない。
　いや、むしろそこにいるはずがない。
「ねえ、霧切ちゃん、やっぱり無理だよ。だって被害者が偶然、窓の近くにいる状況なんて、そうそう起きないでしょう？」
「犯人が窓辺に被害者をおびき寄せたのよ。音を立てて誘い出したのか、それとも実際に声をかけたのか……もし声をかけたのだとしたら、『脱出する方法がある』とでも云ったのかもしれないわ。事実脱出してここまで来たのだ、と主張すれば、誘い文句も効果的だったでしょうね」
「そっか……」
　わたしは納得しかけて、ぶるぶると首を振る。
「ううん、そうじゃなくて！　だって窓は高い位置にあるじゃないか。少なくとも茶下さんの身長では、窓に頭も届かない。これじゃ、たとえ茶下さんを窓辺におびき出せたとしても、犯人の腕が相手の首まで届かない」
「そう、それが問題ね」霧切は人差し指を立てて云う。「犯人はいかにして被害者の首を絞めたのか。それを考える前に、最初の夜の殺人について、ここまでのおさらいをしてはどうかしら。そうすれば重要な

ことに気づくかもしれないわ」
「おさらい……そういうの苦手」
　まず犯人は、門限の十時になる前に、消失トリック用のドアストッパーを『３１２』号室に仕掛けた。ストッパーに結びつけられたロープは窓の外に伸ばしてある。
　その後、十時を回り夜時間になると、犯人はわざとわたしたちに姿を目撃させる。犯人自身は、空き部屋に逃げ込んだと思わせて、実は別の部屋に入った。
「犯人が逃げ込んだ部屋というのは、空き部屋でもないし、被害者の部屋でもないんだね？」
「そうよ」
「それなら、何処の部屋だったの？」
「それはもちろん、犯人自身の部屋よ」
　わたしは最初の夜の部屋割りを思い出す。
「そのあと犯人はどうしたの？」
「自分の部屋の窓から外に出て、屋上に上ったの。あの夜、十室あるうちのほとんどが密室状態だったけれど、犯人の自室だけは密室ではなかったのね。きっと鉄格子が簡単に外れるようになっていたのではないかしら」
「窓から外に這い出て、そこからさらに屋上に上がったの？」
「そういうことになるわ。もしかしたら上りやすいように、ロープなどをあらかじめ設置しておいたのかもしれない」
　一度屋上に出てしまえば、誰にも目撃されるおそれはないし、部屋と部屋を区切る壁や扉に阻まれることもない。一直線に目的の部屋まで移動できる。
「屋上に上ったあと、すぐに空き部屋の窓から外に垂らしていたロープを引っ張るわけだね」
　そのロープとは、ドアストッパーを外すためのものだ。
「そうね。あるいはロープそのものは、あらかじめ自分の部屋の窓まで引いてあったのかもしれないわ。屋上のフックを経由してね」
「そっか……わたしたちが廊下の角を曲がるタイミングを考えれば、空き部屋まで移動している時間はないか。自分の部屋に入ったあとで、すぐにロープを引く……」
　犯人がロープを引いたことで、わたしたちは消失現象を目の当たりにすることになる。
　しかしそのトリックは罠だった。
　結果的にわたしと七村は、空き部屋で足止めされる。
　この時、犯人は──

「屋上にいて、茶下さんを窓辺におびき出していたんだね」
　はたして用心深そうな茶下が犯人の甘言に乗っただろうか。かなり夜を怖がっていたようなので、『外に出られる方法』を囁かれたら、乗った可能性はある。
　けれど……そうして茶下が窓の近くまで来たとしても、犯人の腕は相手の首には届かない。
　せいぜい頭に触れるかどうかといったところだろう。
　窓の外から伸ばした手が、被害者の首に届くには……腕を伸ばすしかない？
　そんなのヨガの達人にしかできない、というかヨガの達人でも難しい。
　腕をそれ以上伸ばすことができない以上、被害者の方から近づいてもらうしかない。
　被害者が一段高い場所に来てくれれば……
　一段高い場所？
　それなら踏み台を使えばいい。
　被害者は窓の外を覗くために、踏み台を使ったんだ。
　でも踏み台って？
　ベッドは固定されていて動かせない。部屋にはそれ以外に、踏み台になりそうなものは何もなかった。
　何か踏み台の代わりになるものは……
　何もない。
　何も――
　いや、もしかして……
　あれを使えば！
「霧切ちゃん……まさかとは思うんだけど……」
「何か気づいた？」
「窓の傍に一億円の資金を置いて、踏み台にしたなんてことは――」
「その通りよ」霧切は耳にかかった髪を払う。「茶下さんと鳥屋尾さんの身長は、二人ともおよそ175センチで同じくらい。窓の高さは、その下端が2メートルの位置。仮に、50センチの踏み台があれば、被害者はちょうど窓と同じ視線の高さに頭を持ってこられる。被害者も最初は、窓の外を覗く方法がなくて戸惑ったでしょう。けれど犯人が直接、その方法を教えたのかもしれないわ。『そのお金を踏み台にしなさい』と。一千万のブロックが高さ10センチになるわ。茶下さんはそのブロックを窓際に五つずつ、二列に並べて、50センチの踏み台にした」

175cm
200cm
50cm

「それなら窓の外からでも相手の首に手が届く！」

　だんだんと密室に風穴が空いてきた。

　それは論理という弾丸によって空けられた穴だ。難攻不落に見えた密室も、彼女の打ち込む弾丸により崩壊する――

「あれっ、でもちょっと待って」わたしは現場に踏み込んだ時の部屋を思い出しながら云う。「窓の近くに一億円なんか置かれていなかったよ？　それどころか、被害者の資金そのものが何処にもなかったし……」

「ようやく気づいた？　お姉さま。被害者の資金がなくなっていたことに」

「えっ、君は気づいていたの？」

「ええ、何度も確認したでしょう？　現場に変わったところはないかって。結お姉さまは『何も変わっていない』と答えたわ。つまり最初の発見の時点で、茶下さんの資金一億円はなくなっていたということね」

「そ、そうだよ。最初からなかったんだから、気づくはずないよ！」

「そうね……たぶん他のみんなも、死んだ人の資金についてはまだ、なくなったことにまったく気づいていないか、あるいはノーマンの『死んだ者の資金は没収する』という言葉から、犯人に没収されたと漠然と考えているか、そのどちらかでしょうね」

「ち、違うの？　死んだら没収じゃないの？」

「あの時のノーマンの言葉は、魚住さんだけを指して云っていたみたいね。没収のルールは、死者全員に適用されるものではない」

「それなら茶下さんの時も、鳥屋尾さんの時も、殺害現場に彼らの資金がなければおかしい！」

「そういうことになるわ。けれど実際には、どちらの資金もなくなっていた。この事実こそ、今回の『黒の挑戦』のもっとも理に適ったシステムなの」

「ど、どういうこと？」

「それはオークションのゲームで勝ち続ける唯一の方法でもあったのよ。死者たちの資金がなくなっていたのは何故か？　没収されたのでなければ――奪われた。そう、つまりこのゲームで勝つ方法とは、他の誰よりも大金を入札して確実に《探偵権》を手に入れたあと、その《探偵権》を使って誰よりも先に、死者の資金を奪うこと」

「――ああっ」

　一度減った資金を、死者から取り戻す。

《探偵権》とは、墓荒らしの権利でもあったのだ。

「死者の遺物を奪う者が探偵であり続けられる……まるで私たちを皮肉ったようなゲームね」
「そんな……そんなの違うよ。わたしたちは……」
　違うと云えるのか？
　探偵は、死者を——過去を荒らす者たちのことではないのか？
　事実、わたしたちは『黒の挑戦』において、過去の事件を掘り起こし、犯人と被害者を白日のもとに暴こうとしている。
「もしもこの勝ち方に気づけば、『黒の挑戦』の標的にされている者も、生き残ることができるかもしれない。そういう意味では、フェアなゲームね。もっとも、自分が生き残るためには、他人が死ぬことが前提だけど」
　死んだ者の資金を奪って、自分が生き残るために使う。
　このオークションには、とてつもなくおぞましい裏技が隠されていたのだ。
「しかもそれだけではないわ。そのあとが重要なの。探偵になった者が死者の資金を奪うことで——このゲームは、さらに犯人に有利な状況をもたらすことになる。何故なら、お金そのものが密室トリックの一部に使われているから。つまり誰かがそれを奪うということは——」
「現場から証拠が消える！」
「そう。今回の『黒の挑戦』の進行にオークションが採用されているのには、そういう理由があるのでしょうね。鉄格子の窓近くに資金がブロック状に置かれていたら、さすがにすぐにトリックに気づかれてしまうかもしれない。犯人にはそれを回収している時間的余裕があるかどうかわからない。実際、最初の殺人では余裕がなかった。けれど犯人は慌てる必要がない。必ず探偵が証拠を消してくれるから——」
「う、嘘でしょっ？」
「いいえ、本当よ。最初の夜のことを思い出して。結お姉さまより先に、七村さんが現場に入っているわよね」
「う、うん……」
「彼はその時に、現場を見てすべてを理解したはずよ。そしてすぐに、窓の下にあった一億円を手に入れ、隠した。丸まっている毛布の中にでもナップザックを隠したんじゃないかしら」
「あの二、三分の間に？」
「ええ。そのあと結お姉さまたちをいったん三階のフロアから遠ざけさせて、自分は現場に戻って資金を持ち出し、何処か別の場所に隠したのでしょうね」
「あの時……そうかっ……」
　わたしはなんの疑いもなく、彼に誘導されていたのだ。

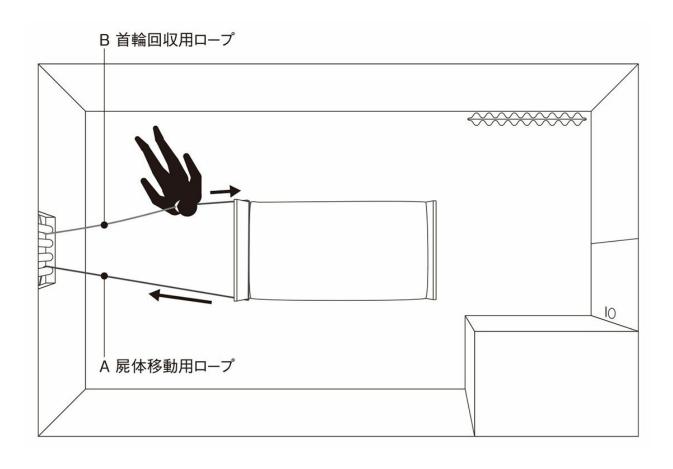
考えれば考えるほど……悔しい。
「もしかしたら七村さんは最初にこのオークションのルールを聞いた時点で、勝ち方も、犯人の狙いも理解したのではないかと思うわ。仮にもダブルゼロクラスの探偵だものね。すべてを理解したうえで、ひそかに犯人の計画に乗ることにしたのではないかと思う。たとえば……結お姉さまが彼と一緒に空き部屋を調べている間に、隣の部屋では犯行が行なわれていたわけだけど……彼はわざと長い時間をかけて空き部屋に留まったのではないかしら。犯人の密室トリックが完成するのを待つために」
　わたしと七村は、二十分かけて犯人の消えた空き部屋を調べた。わたしは特に意識せずに、充分な調査のために時間を使ったと思っていたのだけど……実際は七村によって時間をコントロールされていたのかもしれない。
「七村さんは犯人と通じていたの？」
「いえ、共犯関係があったとは云えないわ。どちらかといえば、七村さんが犯人の計画を察知し、逆手に取ったといえるんじゃないかしら」
「どういうこと？」
「犯人の目的は復讐だけど、七村さんの目的はお金。このまま犯人の計画に乗れば、苦労せずに大金を手に入れられる。事実、彼の手の中には一億円があるわ。もともと茶下さんの資金だけれど」
「……あいつ！　やっぱりどうかしてるよ！　頭の中、お金のことしかないんじゃないの」
「彼のパーソナリティについては、私たちも知らなかったわけではないわ。ちょっと普通の感性では理解しづらいけれど、彼にとってお金と時間はイコールなのだと思う。たとえばお金を使ってヘリをチャーターすれば、そのぶん短縮した時間が、人生に加算されるものね。要するに、お金は見えるライフタイム。大金を前にした彼が、どういう行動に出るか、私たちはもっと早く気づくべきだったかもしれないわね」
「うう……許せない……！」
　七村の行為は、探偵の誇りを汚（けが）すものだ。
　ましてダブルゼロクラスの栄誉を持つ者が、こんなことをしたとなれば、探偵全体のモラルを問われることになりかねない。
「さて……」霧切は相変わらず冷静な顔つきのままだった。「話を戻しましょう。最初の密室について」
「う、うん」
　彼女の言葉で、わたしはいくぶん落ち着きを取り戻す。
「犯人は空き部屋に七村さんと結お姉さまを足止めしている間に、粛々と密室殺人を行なっていた。まず窓辺まで茶下さんを誘い出す。茶下さんはおそらく犯人に指示されるまま、一億円を踏み台にして、窓を覗いたのだと思う。そして次の瞬間──」

逆さま状態の犯人が姿を現す。
　想像すると恐ろしい光景だ。
「犯人は最初に、被害者を窓近くに固定するために、張り詰めたロープを首にかけてその場に拘束したと思うわ。投げ縄の要領で、輪にしたロープを首にかけたのだと思う。これは窓の近くから逃げられないようにするためよ。あるいは、悲鳴を上げられないようにするためだったかもしれない。死なない程度に、きつく絞めたのだと思う」
「でも命を奪うためのロープではないんだね？」
「ええ。これが扼殺痕以外に遺されたロープ状の痕跡の原因ね。犯人は被害者をその場から逃げられなくしたあとで、直接首を絞める。何故わざわざ手で扼殺したのかというと、犯人が密室を出入りしたと思わせるため。扼殺である以上、何者かが室内に侵入し、直接その手で殺したとしか思えないものね」
「おかげですっかり混乱させられたよ」
「犯人はもちろん手袋をしていたと思うわ。被害者の抵抗によって手を傷つけられないようにするため、そして被害者の首に残る指紋や手形(てがた)をごまかすためね」
「用心深い犯人だね」
「ええ、でもまさか扼殺痕が上下逆さまにはっきり残るとまでは考えていなかったのかもしれないわね」霧切は肩を竦めて続ける。「とりあえず犯人は被害者を絞め殺すことができた。けれどそのまま屍体を放置すれば、被害者が窓の下にくず折れているという状態になってしまう。これでは密室トリックが気づかれやすい。だから屍体を移動させなければならない」
　わたしたちが現場に踏み込んだ時点で、屍体は窓際ではなく、ベッドに頭をもたげるようにして座らされていた。
　室内に入らずに、屍体をそんな状態にすることが可能だろうか。
「被害者が呼吸を止めたのを確認してから、犯人はまず被害者の口に『復讐せいこう！』の紙を丸めて入れる。これも犯人が現場を出入りしたと思わせるための細工だったと思う。それから屍体を移動させるために、被害者に首輪をかける。この首輪はロープと繋(つな)がっていて、ロープの端は屋上まで伸びている。このロープをAとするわ。そしてもう一方、首輪を回収するためのロープBを用意しておく。おそらく首輪はネジ込み式のピンか何かで固定されていて、紐(ひも)を引いてピンを緩めると、首輪が外れるようになっている」
「ふむふむ、それで」
「Aのロープを長めに用意して、室内でたわんだ状態になるようにする。犯人は逆さまの状態のまま、室

内に両腕を伸ばし、そのたわんだロープを両手でしっかり掴む。そして縄跳びの要領で、ロープを上下に振る。そのうちロープは室内のベッドに引っかかる。ちょうどベッドの頭の方にヘッドボードがあるわ。これにロープを引っかけるのよ」

「逆さまの状態で縄跳(なわと)びか……苦しそうだね」

「あとはAのロープを引くだけ。首輪が引っ張られることで、屍体がベッドの横まで移動する。屍体が移動し終えたら、ロープBを引っ張って、首輪を回収するだけ。これで私たちの知る密室が完成するわ」

B 首輪回収用ロープ
A 屍体移動用ロープ
10

「そう簡単に云うけど、ロープで屍体を引っ張るって相当重いでしょ？　茶下さんはそんなに太ってなかったけど、それでも五十キロ以上はあるだろうし……」
「たとえば滑車を使うとか……あるいは人力よりも強力な道具を使うとか」
「――あっ」
　わたしは屋上にあった奇妙なものを思い出して、霧切にケータイの写真を見せる。
「予想通りだわ。電気自動車ね。エンジン音がしないから、音を立てずに動かすには最適よ。これにロープAを結びつけて、屍体を移動させたのではないかしら」
「君は車にも詳しいの？　というか、屋上に自動車があるって君は知ってたの？」
「自動車については挑戦状に書いてあったでしょう」
「うん」
「もしかしたらリストに入れるだけ入れて、実際には使わないダミー凶器かとも思ったけど、トリックのことを考えたら、ここで使うだろうと思って」
「どういうこと？」
「車の使い道は二つ考えられるわ。一つはさっき云ったように、車で屍体を牽引する。もう一つは、車内に設置した滑車やウインチを使って屍体を引っ張る。車そのものは、防音装置として使うの。どちらも屍体を動かすのが目的だけど、より静音性の高い方法がとられたのではないかしら」
「それにしても屋上に自動車を用意するなんてどうかしてるよ」
　犯罪被害者救済委員会がクレーンで運び入れたのだろうか。
「これで密室の謎は解けたわね。犯人は鉄格子の窓越しに被害者を扼殺し、ロープを使って屍体を移動させた。窓の下にあった一億円の踏み台は、七村さんが隠して持っていった」
　これが真相――
　わたしにはとうていたどり着けないと思われた真相に、霧切はあっさりとたどり着いてしまった。
「そもそも三階の上が屋上って、この廃墟ホテルはどうなってるの。そんな改造されてたら、真相なんてわかるわけないって」
「想像力が足りないわね、結お姉さま。上下逆さまの扼殺痕から、犯人が上方向から訪れたと推理することはできたはずよ」
「そんなこと云っても、まさか三階より上がなくなってるなんて……」
「お姉さまはさっきから三階と云っているけれど、実質的にこのフロアは五階に位置していると思うわ。三階より上がなくなったのではなくて、わたしたちが三階より上にいるだけ。屋上は文字通り屋上なの。たぶん階段を設置し直して、階数としては三階までしか移動していないように思わせて、実際には私たち

は五階まで移動させられていたのよ。階段が妙に急だとは思わなかった？」
「そういえば……」
　屋上から見える風景は、三階とは思えないほど高かった。
「じゃあ踊り場の階数表示は嘘だったの？　ロビーにあったホテルの構造が描かれているパネルも、扉の『３』から始まる部屋ナンバーも」
「犯人が私たちを錯覚させるために用意したのかもしれないわね。あるいは犯罪被害者救済委員会か」
「すべては犯人が屋上を利用するためのトリックなのか……」
「ちなみに鳥屋尾さんが殺害された時も、茶下さんの時と同じトリックが使われたと考えていいわ」
「あの夜は確か、廊下に水を撒いて、足跡が残るようにしたんだよね。でも犯人らしき足跡はなかった」
「そう、犯人はたぶん、扉の外に水が撒かれていることに気づいたのね。あの夜は探偵が職務放棄を宣言していたから、扉から被害者の部屋に行くこともできたけれど、あえて屋上を使うことにしたみたい。犯人は自分の部屋の窓から外に出て、屋上を移動して、被害者の部屋に向かったのよ」
　あの夜聞こえてきた、何かを引きずるような音は、まさに屍体がロープでベッド横まで移動させられていた音に違いない。
「鳥屋尾さんは資金を７０００万しか持っていなかったけれど、踏み台として50センチを確保することはできたと思う。けれど案の定、私たちが屍体を確認した時には、資金はなくなっていたわね」
「あっ、そうか……水無瀬さんが持っていったんだ。だから三回目のオークションで、残金を上回る入札ができたんだね」
「そうね。彼はこのオークションの本質に気づき、実践（じっせん）しようとした。残念ながら私たちに負けたけれど。彼の敗因は、最小限度の額で勝とうとしたこと。せっかくの勝利の方程式も、彼の手には余ったみたいね」
「もし昨日、水無瀬さんが勝っていたら、やっぱり死者が出たのかな……」
「その可能性は高いわ。結お姉さまがそれを防いだのよ」
「そうだといいけど……」
　実際のところ、わたしはカードキーを持って走り回っただけだ。
「そういえば鳥屋尾さんの部屋に人形があったけど……あれはどうやって部屋に入れたの？　あの人形の大きさでは、鉄格子の間を通り抜けられなかったじゃない」
「一度分解して、鉄格子を通したうえで、組み立て直したのよ。服を脱がしてみたら、ツギハギだらけだったわ。わざわざ人形を用意したのは、やはり犯人が密室を出入りしていると思わせるためだと思う。

あの晩は犯人に時間が有り余っていたからこそ、わざわざそんな演出(えんしゅつ)ができたのね」
　二つの密室の謎は解かれた。
　残る問題は、犯人が何処の部屋の窓から外に出たのか、ということ。
「ねえ、霧切ちゃん、犯人は誰なの？」
　いよいよ核心(かくしん)に迫る。
「条件を絞っていけば、自然と犯人は特定できるわ」
　霧切は人差し指を立てて云う。
　その仕種(しぐさ)に、幼い名探偵の片鱗(へんりん)を見たような気がする。
「まず犯人は、小さな窓から外に出られるくらい体格が小さくなければならない。おそらく男性には無理ね。少なくともここにいる男性に、女性より小柄な人はいない」
　──犯人は女性。
「それから最初の消失トリック。これを行なうには、犯人は結お姉さまたちの死角となる『307』以降の部屋を利用していなければならない」
　──一日目の夜、『３０７』号室以降の部屋を使った者。
「そして屋上への行き来に使われた窓が、どの部屋にあるかという問題だけれど……その窓があるのは、十室のうち、たった一室に限られると思うわ。複数の部屋でそのような仕掛けになっていたら、他の人間に気づかれるかもしれないものね。その特定の部屋の窓だけ鉄格子が外れて、外に出られるのよ」
　少なくともわたしが入った部屋の窓は、鉄格子が外れたりはしなかった。
「その部屋が何号室かわかるの？」
「簡単よ。殺人は二日続けて行なわれた。つまり犯人は二日続けて、秘密の窓がある部屋を使っているということになるでしょう？　その部屋こそ、屋上への出入り口になっていたのよ」
　──二日続けて同じ部屋を使った者。
　その部屋に秘密の出入り口となる窓がある。
　わたしはメモ帳を開いて、当日の部屋割りを確認する。
　一日目の夜と、二日目の夜で、同じ部屋を使っている者が──一人だけいた。
「そう、犯人は夜鶴冴よ」
　まさか……あの未亡人が……
　彼女が使っていたのは『307』号室。
　あの傷だらけの細い腕で、男たちを絞め殺したのか。信じられないような……一方で彼女ならやりか

ねないような気もする。
　でも待てよ……彼女が『３０７』号室に入ったのは、偶然ではなかっただろうか。
　彼女が自分でその部屋を選んだわけではない。
「ねえ、霧切ちゃん。一日目の夜は、トランプで部屋割りを決めたよね。夜鶴さんが故意に『３０７』号室を選ぶことはできなかったと思うんだけど……まさか偶然、秘密の窓がある部屋に入れたの？」
「いいえ。夜鶴さんはあの時、配られる前のカードを手に取って触れているわ。インチキがないか確かめるふりして、その時に自分がインチキを仕込んだのね。きっと『４』のカードに傷でもつけておいたのだと思う」
　あの一瞬で、彼女はとっさに犯行の取っ掛かりを作っていたのか。
　二日目の部屋割りは、入札額の順番で決まったはずだ。オークションはかなり荒れていたけれど、順位で下位を狙うのは難しくなかったかもしれない。少額で入札すればいいからだ。結果的に『３０７』号室の獲得に失敗したら、殺人を別の日にずらせばいい。
「あれ？　でも最初の殺人があった夜、夜鶴さんは廊下で見張りをしていた美舟さんと扉越しに話をしていたよね。だからお互いのアリバイが証明されたのではなかったっけ」
「殺人にかける時間を十分、屍体を移動させてロープを回収し、部屋に戻るのに五分。さらに残りの五分間、美舟さんとお喋りしていたとしたら、整合性に問題ないわ。彼女は美舟さんのアリバイを証言しながら、誰よりも自分のアリバイを主張していたのね」
「そっか……」
　わずか二十分間で犯行を終えるのは、かなり厳しかっただろう。確実に被害者を扼殺する必要もある。おそらくこの日のために、彼女は何度も訓練したに違いない。
「ちなみに昨夜、問題の『３０７』号室の窓を調べてみたけれど、鉄格子は外れなかったわ。きっともう使うことはないと見込んで、封印したのね」
「もう使わない？」
「そう、少なくとも同じトリックはもう使わない……というか使えないのだと思う」
「どうして？」
「残された標的は身長が低すぎて、お金の踏み台を用意しても窓には頸部が届かないのではないかしら」
「あっ……美舟さん！」
「ええ、彼女が最後の標的だと思う。ただし確信を持っては云えないわ。信じてもらえるかどうかわからないけど、『死神の足音が聞こえる』としか云いようがないの……」

「それで充分だよ。彼女を守るんだ」
「……ありがとう、お姉さま」
　霧切は少しだけほっとしたような顔で云う。
　彼女は理論ずくめのなかで、唯一確かとはいえないことを口にするのが、不安だったのかもしれない。
　でもわたしは彼女の『死神の足音』に関しては、前例を知っている。彼女はどうやら、他人に関係する死を察知することができるようだ。
「犯人はどうやって彼女を殺すつもりなんだろう」
「最悪の場合、銃を使ってくることも考えられるわ」
「それなら、上からぶら下がり状態で、室内にいる標的を撃てば、第三の密室が完成してしまうよ！」
「銃弾には射線というものがあるわ。屍体を確認すれば、何処からどの角度で撃たれたのか、容易に判明する。それでもし、窓から撃たれたのだとばれたら、屋上を使ったトリックがすべてばれてしまうかもしれない。だからその方法は使わないと思う」
「なるほど……」
　凶器のリストには、他にハンマーもある。しかしこれはダミーの凶器なのかもしれない。
「どうやって殺すつもりなのかわからない以上、私たちも守りようがない。だから残りのオークションでは、美舟さんに《探偵権》を取らせて、安全を確保するしかないわ」
「《探偵権》を持つ者は殺されないというルールを、犯人はちゃんと守ってくれるのかな」
「ここにきてそれを破ることはしないでしょう」
「安全策を取るなら、七村さんに犯人を告発してもらって、『黒の挑戦』を終わらせるのがいいんじゃない？」
「云ったでしょう、彼はもう使えない。彼はむしろ、今回の『黒の挑戦』では犯人が勝つ方に賭けているんじゃないかしら。今のところ中立を気取っているようだけど、いざとなったら敵に回るかもしれない。刺激しないで、放っておくべきだと思う」
　ダブルゼロクラスの探偵が、お金のために名誉を捨てるなんて、わたしには信じられない。
「結お姉さま。このあとは決戦よ。相手の仕掛けてきたゲームに勝って、『黒の挑戦』に決着をつけましょう」
「勝てる見込みはあるの……？」
　わたしは不安で胸が一杯だ。
「不可能なんてないわ」霧切はそう云って、にっこりとほほ笑む。「正々堂々勝つ。ね、そうでしょう、お姉さま」

第八章
失楽
ロスト

39:59:12

　午後六時を回り、わたしたちは自然と食堂に集まっていた。電光掲示板の残り時間も、かなり少なくなってきている。
　肖像画には黒猫の画像が映し出されていた。
『やあ、僕はその辺を歩いていたノラ猫だにゃ。六時を過ぎたから、今日のオークションを始めるにゃ。ネタ切れって云わないでおくれ。きっと明日も僕だにゃ』
　四回目のオークション。
　わたしのメモ帳によると、それぞれの残金はこうだ。

　五月雨結　　2700万
　霧切響子　　4900万
　美舟メルコ　8900万
　新仙帝　　　9000万
　水無瀬有全　6800万
　夜鶴冴　　　9300万
　七村彗星　　1億

　単純に、美舟と夜鶴だけの一騎打(いっきう)ちなら、夜鶴が勝つ。
　ただしここにきて、共闘状態が発生していた。
　当然のことながら、わたしと霧切は美舟を助けるために動く。わたしたちの資金は、彼女の資金に加算して考える。
　一方、夜鶴はいつの間にか新仙を味方に引き入れていた。
　新仙は夜鶴こそ、犯人に狙われている標的だと考えているらしい。
「一連の殺人事件の動機が復讐であるなら、次に命を狙われる可能性は彼女がもっとも高いといえるでしょう。今ここにいる他の方たちは、どうやら殺されるだけの理由を持ち合わせていない」

新仙は落ち着いた声で云う。
「まるで私がとんでもない悪人みたい。ふふふ」
　夜鶴は冷たい目で笑っている。
　その瞳は限りなく深い闇のような黒——
　彼女が今回の『黒の挑戦』の挑戦者だ。
　すでに二人の男を殺害している。
　そうとわかっていて、わたしと霧切は手が出せないでいる。『黒の挑戦』のシステムと、オークションのルールにより、彼女は完璧なまでに守られていた。『探偵であること』すら奪い去る彼女の計画は、今のところわたしたちを無力にしている。
「みなさんも夜鶴さんの命を救うために行動すべきではないでしょうか。全員が彼女のために動くのなら、オークションだってもうやる必要がないはずです」
「悪いがそうはいかねえぜ」
　食堂の扉を蹴り飛ばすようにして、水無瀬が入って来た。
「お前らは信用ならねえ」水無瀬は新仙たちを指差して云う。「社会人経験のない俺だからこそわかる、危険なにおいを感じるんだ。てめえらはしゃべえってな。俺はこっちに賭けるぜ。こんな俺のことを、信じると云ってくれたからな」
　彼はわたしたちの方に参加してくれた。
「水無瀬さん！」
　ダメ人間だけど、かっこよく見えてしまった。
「おい、例の話、ちゃんと約束してくれるんだろうな？」
　水無瀬は小声で話しかける。
　霧切は黙って肯いた。
　結果的に、チーム資金はこうなる。

　美舟　２億３３００万
　夜鶴　１億８３００万

　圧倒的にわたしたちが有利になった。
　しかし——
　夜鶴がどさりと、ナップザックをもう一つ追加する。

「そ、それは……？」
　思わず尋ねると、夜鶴は七村の方を向いた。
　七村はウインクしてみせる。
「私のマネーだよ」彼は大げさに両手を広げて云う。「きっちり5000万入っている」
「ちょ、ちょっと待ってください！　どういうことですか？　なんで七村さんが夜鶴さんに？」
　というか心底ケチな彼がそんな簡単に大金を払うはずが……
「うふふ……聞きたい？　お子さまに聞かせられないような、いろいろなこと……」
「まさか……そっちか！」わたしは七村に詰め寄る。「七村さん、あなた色仕掛けで5000万も渡しちゃったんですか！」
「誤解するなよ、探偵少女。私は断じて女の色仕掛けなどにほだされるような人間ではない」
「嘘です、絶対嘘です！」
「嘘ではないよ、何故なら私はゲイだからね」
　唐突なカミングアウトに、場内が完全に静まる。
　わたしも言葉を失ってしまった。
「彼女に頼まれたから、条件つきで彼女に貸したんだ。条件は十倍。ここを無事に出られたら、十倍にして返してもらうとね」
　5000万の十倍って……五億？
「この前亡くなった主人の保険金と遺産があるから、ここを出られたら返せるわ」
「むぐぐ……」
　わたしは何も云い返せない。
「なあ、やっぱ俺、あっちに乗り換えるっつうのは……」
　水無瀬が何か云い出したので、わたしは睨みつけた。
「いや、冗談です、冗談」
　これで奇しくも、資金は五分五分——

　美舟　2億3300万
　夜鶴　2億3300万

　はたして運命なのか、それとも夜鶴の手の上で遊ばれているだけなのか……
　わたしが初回のオークションで無駄に使ってしまった500万があれば……今更ながら悔やまれる。

「七村さん、わたしたちにも残りの５０００万を貸してくれませんか」
　わたしは訴えかける。
　現在、どちらの側にも与(くみ)されずに、場に浮遊状態となっているお金はそれだけだ。
「君たちは夜鶴君と同じ条件は呑めないだろう？　それなら無理な話だね。云っておくけど、子供の色仕掛けには興味ないよ」
「水無瀬さんを一晩貸すんで……」
「馬鹿っ、ふざけんじゃねえ」
「あいにく、タイプじゃない」
　七村は肩を竦める。
「ほっとしたような、がっかりしたような……何この気持ち」
　水無瀬は当惑(とうわく)したような顔で、疲れたように椅子に座る。
　均衡(きんこう)状態は破れない。
「次に犯人に襲われるのは美舟さんです。みんなで美舟さんを守るべきです。新仙さん、わかってください！」
　わたしは相手を新仙に絞る。
　彼をこちら側に引き寄せることができれば、勝てるのに。
「その理屈が私にはわかりませんね。何故次の標的が美舟さんなのですか？」新仙は尋ねる。「美舟さんは犯罪者なのですか？　違うでしょう。ほら、本人も首を振っています。探偵さんたちが云っていた、例の『黒の挑戦』というものが本当なら、被害者は犯罪者に限られるわけですから、次に狙われるのは夜鶴さんでしょう。犯罪者を守るというのはおかしな話かもしれませんが……過去は過去です。あなたたちも、彼女を守るために行動すべきではないでしょうか」
　とつとつとロジックを語られると、わたしたちの方が間違っているような気になってくる。
「あなたは死が見えると云っていました！　美舟さんに死の影は見えませんか？　どうなんですか？」
　わたしが渾身(こんしん)の言葉で訴えると、新仙は一瞬、おそろしいほど冷徹な目つきでわたしを見た。
　しかしすぐに首を横に振る。
　彼の意志は覆らない。
「私は次のオークションで全額入れるわ」
　夜鶴が唐突に宣言した。
「なんだって？　おい、てめえ、何考えてやがる」
　わたしたちの特攻(とっこう)隊長、水無瀬が突っ掛かる。

「私、ここでの生活をしていて気づいたの。お金よりも大切なものがあるって……それは命よ。この命がなければ、お金なんか持っていても仕方ない……やっとそう思える日が来たの」
　嘘つき！
　彼女はきっと、《探偵権》を奪い、美舟を殺害する算段を立てている。
「いいか、てめえ。よく考えろ」水無瀬が云った。「全額出すだと？　こっちも全額出したら何もかもパーだぞ？　資金はゼロになるし、デメリットしかねえ。そのへんわかってんのか？　ちょっとでいい、ちょっとでいいから妥協（だきょう）しろ！」
「あたしたちが妥協した方が……」
　美舟は弱気になり始めていた。
　こちらは人数では多いが、そんなものは役に立たない。お金があるかどうかだ。
　両者とも動けないまま、時間が過ぎていく。
「話し合いでは何も解決しないわね」
　夜鶴は立ち上がると、ナップザックを引きずるようにして、入札ブースへ向かう。
「ま、待て！　まだ結論が出ていないだろ！」
　水無瀬が大声で呼び止める。
　しかし夜鶴の足は止まらない。
　誰かがブースで入札を始めたら、十分以内に次の人間が入札しなければならない。ブースが無人のまま十分が過ぎたら、自動的にオークション終了となり、結果が表示されてしまう。
　夜鶴が口火（くちび）を切ったのだ。
　彼女はとうとう入札ブースに入ってしまった。
「おい、いいのかよ？」水無瀬は額（ひたい）に汗を浮かべながら、わたしと霧切に詰め寄る。「今回は譲るべきじゃねえか？　あいつに全額使わせて、すっからかんにしてやればいい。そうすりゃ明日勝てるぜ」
「今までのオークションを見てきてわかったと思うけれど……なりふり構わず、資金を出せるだけ出した人間が勝つのよ。日和見（ひよりみ）な姿勢では負けるの」
　霧切は落ち着いていた。
「でも今回はまずいよ」わたしは小声で云う。「あの人が本当に全額入札するかどうかはわからないけど、そんなこともう関係ない。無茶しないで、確実にいこうよ！」
　もしわたしたちが全額投入して、夜鶴と同額だった場合、両者ともすべてを失う。今日の《探偵権》を得られないどころか、資金ゼロで明日のオークションに参加する権利すら失ってしまう。これが最悪のパターンだ。

仮に相手の『全額宣言』がブラフで、実際には入札金額が少なかった場合――こちらが全額投入したら、最低限、今日は勝てる。ただし明日のオークションでは勝てない。

では全額ではなく、少額での駆け引きを試みた場合はどうか。

もし少額入札をして、今日負けた場合、翌日は絶対に勝てる。たとえば今日、こちらが１０００万出して、相手が１２００万出したとすると、今日は負けるが、資金の総額は相手より２００万分多くなるので、明日は全額投入すれば絶対勝てる。七村からの追加資金がこれ以上なければ、だが。

その逆、今日勝った場合は、その分相手より資金が少なくなるので、明日は絶対に勝てない。

以上のケースから考えると、『同額により二回とも勝てない可能性』が一パーセントでもある限り、今回の全額投入は避けるべきだ。

今日か明日、確実にどちらか絶対に勝てるパターンに持っていくべきだろう。強いていえば、七村の追加資金を避けるために、今日のうちに勝っておきたい。

――しかし霧切の主張は違った。

「結お姉さま、そもそも『二回のうちどちらか勝つ』なんて考え方が間違っているわ。私たちは残り二回連続で勝たなければならないの。一回でも《探偵権》を失えば、その日に美舟さんは殺される。犯人にはきっとその用意がある」

「二回も勝つなんて無理だよ！　どっちかを捨てるしか勝てる方法はない！」

わたしは声を荒らげる。

水無瀬と美舟も肯いて賛同する。

「いいえ、勝つ方法はある」

霧切は真剣なまなざしでわたしたちを見返した。

こんな絶望的な状況でも、彼女は勝つつもりでいる。

一体どうやって？

数字は非情だ。どう計算しても、わたしたちが二回連続で勝てる見込みなんてない。

入札を終え、夜鶴が出てきた。

彼女のナップザックは……減っていない？

入っていった時とほとんど同じに見える。

やはりブラフだったのか。

それとも……入札したあとで、ひそかに何か別のものを詰め込んだ？　一体何を？　あのナップザックこそブラフなのか？　あるいは少額入札を仕掛けてきたのか？

ああ、考えれば考えるほど、相手の意図がわからない。

夜鶴の口元に笑みが零れている。
　彼女は守られるべき被害者を演じているが、彼女こそ『黒の挑戦』の犯人だ。彼女の過去に何があったのかはわからないけれど、彼女はもう黒の側に落ちた。殺人者を見過ごすわけにはいかない。
　まずはオークションに勝たなければ。
　霧切が美舟に耳打ちする。
「私の云う通りに入札して」
　美舟は戸惑いながら肯く。
　わたしたちは美舟のために、大金の入ったナップザックを一緒に運んであげた。2億3300万は、彼女一人で運ぶには重すぎた。
「じゃあ、頼むわ」
　霧切が美舟を入札ブースに送り出す。
　彼女は肯き、ブースの扉を閉じた。
　長い時間をかけて、ようやく美舟が出てくる。
　ナップザックはほとんど空だった。
　その十分後、第四回のオークション終了のブザーが鳴る。
　わたしたちは肖像画まで急いだ。
　結果は――

　本日のオークションの結果

　ミフネ　メルコ　２３３００万
　ヨヅル　サエ　　０万

　わたしは膝の力が抜けたように、バルコニーの手すりにもたれかかった。
　やはり霧切の意志は、あくまで真っ直ぐ、全額入札だった。
　同額で没収という最悪の事態を免れることはできたけれど、夜鶴は結局ゼロ円で入札を終えていた。
　わたしたちはまんまと彼女のブラフに踊らされたというわけだ。二回とも勝たなければならないわたしたちと違って、相手は一回でも勝てばいいのだ。余力を残して今日のオークションは捨てる、それが彼女の選択だったのだろう。

「あの女……やりやがったな！　くそっ」
　水無瀬は歯ぎしりして夜鶴を睨んでいる。
「ああ……」夜鶴は顔を青くしながら、新仙に抱きつく。「負けてしまったわ……やっぱり大金を手放すことができなくって……だって死にたくなるんだもの……」
「仕方ありませんね」新仙は彼女の言葉を真に受けているようだ。「今夜は美舟さんに守ってもらいましょう」
「そうね……そうするしかないわね」
　夜鶴は云いながら、こちらににやりと笑いかける。
　ああ……彼女はわたしたちが敵であることを理解している。もしかしたら、わたしたちが犯人を見破ったことも、承知のうえかもしれない。
　考えてみれば、探偵役であるはずの七村が、初日に証拠品をかっぱらっているのだから、その時点で犯人と探偵の間に、暗黙の共犯関係が結ばれたことをそれぞれ承知していたとしてもおかしくない。
　このまま犯人は『黒の挑戦』を勝利で終えるつもりだ。探偵役の七村は『黒の挑戦』に負けはするが、大金を手に入れて帰る。探偵に負けのデメリットはない。あえていえば、名誉が傷つくくらいか。
　億単位の金と、探偵の名誉。
　はたしてどちらが大切だろう。
　少なくとも七村にとっては、金だったのか。
　とにかくこれでわたしたちの資金はすべて底をついた。
　明日のオークションでわたしたちが勝つ方法は──ない。

　その夜の部屋割りは、昨日と同じように探偵が一番奥の部屋に決められた。あとの順番は、ジャンケンで決めた。
　美舟が《探偵権》を獲得したからといって、安心はできない。犯人は思いつきで、邪魔な存在を消そうとするかもしれない。
「おい、カボチャ頭。お前、ちゃんと全員を助け出すことができんのか？」
「よ、よくわかんないけど、やるしかないんでしょう？　ううう……」
　門限の時間を迎え、わたしたちはそれぞれ部屋に入る。
　夜時間はいつものように訪れた。
　美舟はかなりもたついたが、全員を客室から出すことに成功した。
　わかってはいたことだけど、犯人がわざわざこの夜に手を出すはずもなかった。

何故なら、明日は全員が閉じ込められたまま、無防備になるからだ。

そうして夜が明け、絶望の一日が始まる。

朝の七時を迎え、わたしと霧切の二人は『３０３』号室でシャワーを浴びて、最後の一日に備えた。
奇しくも今日は一年で最後の日、おおみそかだった。すべてを締めくくるにはちょうどいい日かもしれない。
ベッドに座る霧切の髪を結（ゆ）いながら、気づくとわたしは何度かうとうとしていた。ここ数日の極限状況のなか、まともに寝ていない。もうろうとした意識の中、彼女の柔らかい髪に触れているうちに、だんだんと睡魔（すいま）に襲われていく……
はっと目覚めると、目の前で霧切も同じようにうとうとしているのだった。
そのうち霧切はこてんとわたしに向かって倒れ込んできた。わたしは彼女の小さな頭を膝の上で抱き止め、彼女が眠るのを妨げないように、じっとしていた。
この小さな頭の中身は一体どうなっているのだろう。つくづく不思議だ。
眠る彼女の髪は、キュートな耳を覆い隠して、首筋まで広がっていた。けがれを知らない寝顔に、わたしは希望を見出そうとする。
きっと彼女には何か考えがあるはずだ。
そろそろ残り24時間を切ろうとしている。
「結お姉さま」
霧切はわたしの膝に頭を載せたまま、眠たげな瞳だけをこちらに向けて云った。
「起きた？」
「……もう少し寝ていてもいい？」
「いいよ」
肯くと、彼女は嬉しそうに微笑んで、再び眠りの中に落ちていった。
最初に会った頃は、彼女は感情を冷たい表情の裏に隠していたけれど、最近は素直に気持ちを表してくれるようになった。感情を見せないのは探偵としての訓練によるものらしい。それでも笑ったり困ったりしてみせる彼女の方が、探偵として信じられるような気がする。
それにしても、ここのところまともな探偵に会っていない。探偵は正義の味方ではなかったのだろうか。ダブルゼロクラスの尊敬すべき七村彗星も、結局のところ堕落（だらく）した俗物（ぞくぶつ）だった。彼は金のために、仲間であるわたしたちを売ったのだ。

けれど誰よりも早くゲームの本質を見抜き、自分にとって利益のある行動を選択したその速さは、やはり驚嘆に値する。彼ほどの能力がなければ、得られない大金といえるかもしれない。
でも正しいはずがない。
探偵としての正しさとはなんだろう。
わたしは正しくいられるだろうか。
気づくとわたしは夢の中にいた。
真っ暗な場所をさまよい歩いている夢だ。わたしは誰かを探していた。一体、誰を探しているんだっけ。焦って闇の中を駆け出す。早く彼女を救い出さなければ。暗闇の中で泣いている彼女。
それは――わたしだった。
いや、妹だろうか。
ごめんなさい。
助けてあげられなくて……
許さない。
わたしは絶対に――
彼女をこんな目に遭わせた犯人を許さない。

ふと頬に触れる感触に気づいて、わたしは目を覚ます。
霧切が心配そうにわたしの顔を覗き込んでいた。
彼女は指先でわたしの頬に触れている。
涙を拭ってくれていたらしい。
「結お姉さま。泣いていたわ」
「……ごめん、なんでもない」
わたしは起き上がって、眼鏡を外してベッドの上に置き、涙を拭う。
「私のことを聞き出そうとするわりに、自分のことは話してくれないのね」
霧切は拗ねたように眉をひそめる。
「今でも時々、妹の夢を見るんだ」わたしは今まで誰にもしたことのない話をする。「彼女はいつも助けを求めている。でも一度も、助け出せたことがないんだ。夢の中でも、わたしは無力で……それが悔しくて……」
「ねえ、結お姉さま」霧切はわたしに顔を寄せる。「それなら今度は私を守って。もしも私に何かあった時……結お姉さまが私を守るの。結お姉さまにはできるわ」

微笑む霧切を、わたしは見つめる。
　なんだかぼやけて見える。
　そういえば眼鏡……
　わたしはベッドの眼鏡を拾う。
　けれど霧切が素早くそれを奪ってしまった。
　彼女は自分の顔に眼鏡をかけて、おどけたように云う。
「似合う？」
「ごめん、よく見えない」
「……もういいっ」
　霧切は眼鏡を外すと、わたしに押しつけるようにして渡した。
　クールに見えて、けっこう怒りっぽいところもあるんだよな……
　それとも恥ずかしがっているだけだろうか。
　わたしは眼鏡をかけて、彼女の表情を観察した。
「それより、最後のオークションの時間が迫っているわ」
　霧切は急に真面目な顔になって云う。
「君はまさか、本当にオークションでやり合うつもりなの？」
「当然よ」彼女は薄っぺたな胸を張って云う。「昨日のオークションで確信したわ。彼女を落とすには、彼女のルールで負かさないとだめ。探偵役の七村さんが彼女側についているということも、彼女に自信を与えているみたい」
「あの七村なんとかってやつ、殴ってやりたい」
　わたしは拳を握りしめて云う。今まで誰かを殴ったことはないけど、彼を初めての相手にするのも悪くないだろう。あ、やっぱり嫌かも。
「それはともかく……わたしたちは昨日でお金を全部使っちゃったんだよ。一文無しの状態。新仙さんは完全に夜鶴さんを信じて、お金を預けちゃったみたいだし……七村なんとかは絶対にお金を貸してはくれないし」
　相手は少なくとも２億３３００万を自由にできる。わたしたちはゼロ。この圧倒的な差を埋めるものは何もない。たとえ七村から残りの５０００万を借りることができたとしても、結局は資金力で勝てない。
　どう考えても夜鶴に勝つことは不可能。
「今のうちに、屋上から外に逃げるっていう手はどうかな」わたしはひそかに温めていたアイディアを話す。「前に君が云っていたみたいに、シーツをひと繋ぎにして、外に垂らせば、それを伝って地面に降りること

ができるんじゃない？　ほら、屋上にある自動車にシーツを結びつけて……」
「五階分の高さがある屋根の上から、シーツのロープだけで降下するのは相当難しいわね」
「でも誰か一人でも地面に降り立つことができればいいんだよ。地面に降りたら、ホテルの入り口を外から開けて、そのまま開けっ放しにしておけば全員外に出られる！」
「たぶんゲームが始まった今となっては、玄関の扉も外から開けられないようになっている気がするわ。余計な人間が入って来ないようにするために」
「それもそうか……」
　さすがに全員、ロープ降下できるとは思えない。もちろんわたしもそんな経験はない。
「ねえ、霧切ちゃん。夜鶴さんに勝つ作戦があるの？」
「あるわ。でも勝負である以上、負ける可能性もある」
「ええっ、必ず勝てるわけではないの？」
「この世は何が起きるかわからないものね。でもこれだけは云える。私は万全を尽くしたわ」
　霧切は何処か楽しげに云う。
　そんな彼女を見ていると、頼もしいと思う一方で、いつかそんな表情が失われてしまうような気がして、不安になった。
　そして運命のオークションが始まる。

15:55:44

　食堂ではすでにわたしと霧切を除く全員が集まっていた。
　喪服姿で腕を組み、まるで女王のように立っている夜鶴を中心に、傍には新仙と七村が控えている。さしずめ女王に仕える衛兵（えいへい）か。
　美舟と水無瀬は彼らから離れて、隅っこで丸くなっていた。見るからに負け組の雰囲気を漂わせている。
「おいっ、遅いじゃねえか」水無瀬が立ち上がって、わたしと霧切を迎える。「もうあいつ、入札終わらせたぞ。六時になると同時にブースに入りやがった」
「ほ、ほんとですか？」
「ああ、見ろよあの恍惚の表情。完全に勝ちを確信しているぜ」

夜鶴の足元には、膨（ふく）らんだナップザックが三つ置かれている。あまり金額は減っていないように見える。ライバルはいないのだから、あえて多額の入札をする必要もないのだろう。
「ちなみに今日の肖像画は、やっぱり黒猫だったぜ」
「そんなことどうでもいいでしょ！」美舟が焦ったように云う。「すでに五分経過してるよう」
「誰か他にブースに入った人はいる？」
霧切が尋ねた。
美舟と水無瀬は同時に首を横に振る。
このままあと五分経過すれば、オークションは終了だ。夜鶴の一人勝ちとなり、《探偵権》を奪われる。標的である美舟を守るものは何もなくなり、わたしたちは部屋に閉じ込められ、なすすべなく最後の殺人が行なわれるのを見過ごすしかない……
「き、霧切ちゃん……どうするの」
「落ち着いて。お姉さま。もう一度ルールを確認してみて」
「ルール？　な、何をいまさら……」
「重要なのは、『《探偵権》を持つ者の前では殺人は実行されない』というルールよ」
「うん、だからわたしたちは必死に《探偵権》を落札しようと……」
「仮に──夜鶴さんが犯人だった場合のことを考えてみて（実際に彼女が犯人だけど）。今回のオークションで、夜鶴さんが《探偵権》を獲得したとするわ。この時、彼女は探偵であり、犯人である──という状態になるわね。けれど『《探偵権》を持つ者の前では殺人は実行されない』はずでしょう？　このルールを厳守（げんしゅ）するのであれば、探偵であり犯人である彼女は、誰も殺せない」
「う、うん。そういうことになるね……でもそれがどうしたっていうの」
残り時間が少なくなっていく。
15:50を切ったら、オークション終了だ。

15:53:15

「もし彼女が、これから訪れる最後の夜に、殺人を犯すつもりなら──」
「あ、そっか……《探偵権》を落札してしまっては、殺人ができない！」
「そう、彼女は《探偵権》を落札できない。落札してはいけないのよ。だからこの最後のオークションで、

彼女が入札したのは、間違いなくゼロ円。彼女は最後のオークションを流すつもりよ」

03:25:51

「それはわかったけど……でもわかってもなんの意味もないよ。最後の夜に探偵が不在になるということがわかっただけ。というか、相手が流すつもりでくることを知っていたなら、昨日全額使わないで、今日の分を少しでも残しておけばよかったじゃないか。そしたら今日も勝てたのに！」
「そうはいかないわ。私たちの資金が尽きたからこそ、彼女は今日のオークションを安心して流せるの。もし少しでも残していたら、彼女は新仙さんに資金を渡して、確実に私たちから《探偵権》を奪おうとするわ。そうさせないために、昨日の全額入札は必要だったのよ」
「あの無茶な全額入札は、相手を油断（ゆだん）させるためだったの？」
「そういうこと」
「でも相手が油断しててもしてなくても、同じことじゃない。わたしたちには勝つ手段がないんだから！」
　霧切は静かに首を振る。
「いいえ、勝つ手段はあるのよ」

81:15:51

　霧切は入札のタイムリミットぎりぎりに、一人ブースへ向かって歩き出した。
　一体なんのつもりだろう。
　彼女はブースの扉を開けて、中に入る。
　もちろん手ぶらだ。ナップザックも持っていない。
　資金を持たない彼女がブースに入って意味があるのだろうか。
　夜鶴は女王様の顔つきのまま、入札ブースを見つめている。彼女は依然（いぜん）として、自分の勝利を疑っていない。疑いようもないからだ。
　やがて霧切がブースから出てきた。

所要時間は二、三分程度だろう。
「まさか時間稼ぎかしら？」夜鶴は余裕の笑みを浮かべながら云う。「ブースの入室と退室を繰り返して、夜時間までオークションを引き伸ばすつもり？　そんなことをしても結果は何も変わらないわ」
　彼女の云う通りだ……
　わたしは霧切のもとに駆け寄る。
「な、何してきたの？」
「すぐにわかるわ」
　わたしたちはじりじりしてその時を待つ。これ以上時間稼ぎをするつもりはないらしく、霧切は入札ブースの扉に身体を預けるようにして立ったままだった。
　最後のオークション終了の時間が近づいてくる。
　夜鶴と二人の衛兵は、時間を待たずにバルコニーを上がっていった。水無瀬たちもそれに続く。わたしと霧切は最後にバルコニーへ向かい、気づくと全員が、真っ黒な肖像画の前に集まる。
　そして――
　終了ブザーが鳴り響く。
　ついにノーマンズ・ホテルにおける奇妙な探偵オークションは、これで終わる。
「おつかれさま、みなさん」夜鶴が両手を広げてくるりと回ってみせた。「人生をかけたゲームがついに終わったわ。これで私は、こんな窮屈(きゅうくつ)な世界から解き放たれるのよ！」
　結果が表示された。

　ヨヅル　サエ　０万

　霧切の推理通りだ。
　夜鶴は2億もの資金を持っていながら、オークションを流した。犯人である彼女にとって、《探偵権》は邪魔な存在だ。彼女自身がそれを手に入れるはずがない。
　今夜は探偵不在の夜が来る。
　美舟を守る手段はもうない。
　そう思われたのだが――

　キリギリ　キョウコ　１００万

「なっ」夜鶴は目をひんむいて結果を凝視している。「なんでっ？　どういうこと？」
「結果を見れば――云わなくてもわかるでしょう？」

　本日のオークションの結果

　キリギリ　キョウコ　１００万
　ヨヅル　サエ　　　　０万

「う、嘘よっ！　彼女がお金を持っているはずがないわ！　何処にも余分なお金はない！」夜鶴はふと気づいたように、七村を睨んだ。「お前だな！　お前、ゲイでしかもロリコンだな！　中学生を100万で買ったな！」
「馬鹿を云うな。私は何もしていない。それに私は女子中学生に興味はない」
「じゃあ誰？　何処から？　一体なんの金？　余分な100万など何処にもなかったはずよっ！　外部からの持ち込みの金は反応しないようになっている。ここで支給された札束には、帯封にチップがあって……」
　夜鶴は文字通り我を忘れて、犯人しか知り得ないことを口走(くちばし)っている。
「前のオークションでお金だけ投入して、帯封を手元に残しておいたんじゃないですか？」
　新仙が思いついたように云う。
「そんなやり方は通用しないのよっ」夜鶴は激高していた。「ちゃんと帯封で閉じられた一万円紙幣百枚でなければ、機械は反応しない！」
　彼女の慌てふためく様子を見ながら、霧切はいつもの冷ややかな目つきをしていた。
「霧切ちゃん……どういうことなの？　君は何処から100万円を手に入れてきたの？」
「このオークションの本質……それは死者から資金を奪うこと。私は最初から、その可能性もあるだろうと考えていたわ」
「さ、最初から……？　いつの話？」
「ルール説明の時」
「き、君もその時から……でもお金をどうやって手に入れたの？　死者なんてその時はまだ……」
　いや。
　わたしたちの目の前で、死んだ者がいた。
　魚住絶姫。

彼女はルール説明の過程で撃たれて殺された。彼女は犯人の標的ではなかったにもかかわらず被害者となった。
「銃声が二度聞こえて、魚住さんが撃たれたわね。バルコニーの下から見ていても、致命傷だとわかったわ。それでわたしは、すぐ傍にあった彼女のナップザックから、100万だけもらったの。そのあとすぐに、彼女の身体が落ちてきて、テーブル上で炎上してしまったわ。お金はすべて燃え尽きた。わたしの制服のポケットに隠された100万円以外は全部ね」
あの時――全員の視線がバルコニー上の魚住に注がれている間に、霧切は魚住のナップザックから100万を抜き取っていたのだ。
なんて残酷な判断だろう。
ある意味、霧切はあの時点で魚住を切り捨てたということになる。
けれどそれは同時に、わたしたちにとって希望になった。魚住の残した金が、わたしたちを救ったのだ。
「そんな……そんなはず……」
夜鶴は力が抜けたように、その場に膝をつく。
「夜鶴さん、夜時間まではまだ時間があるけれど、今夜はどうする？　もう終わりにする？」
いまや霧切は夜鶴に代わり、小さな女王となってこの場を支配していた。
「まだ終わっていないわ！」
夜鶴は床にへたりこんだまま、目だけをぎらつかせて、霧切を見上げる。夜鶴が犯人であることを知らない者たちにとってみれば、この構図はかなり不思議なものだっただろう。
霧切は視線を軽くいなすように、腕組みして遠くを見つめる。
「夜鶴さん。私より先に美舟さんの部屋に行って彼女を殺そうとしているのだったら、それは無理だと云っておくわ」
「な、なんでよっ！」
「ルール上、夜十時の門限はみんなが守らなければならない。守らない場合はペナルティとして、それ以降のオークションに参加ができなくなる。そうだったわね？　でもこのルールは裏返せば、オークションに参加するつもりがないなら、門限を破っても特に問題はない、ということにならないかしら」
まして最後のオークションを終えた今、門限を守る意味などない。
「今夜はみんな門限を破って、探偵である私の部屋に集まる予定よ。もちろん美舟さんも。私さえ門限を守ればいいのだから」
「実は昨日も、探偵カボチャ頭の部屋に俺と眼鏡っ子がいたんだぜ」水無瀬が口を挟む。「俺たちはオークションに参加する権利を捨てたのさ。もっとも、金を持ってない俺たちには参加権なんてもはやどう

でもいいものだったけどな」
　霧切が水無瀬に売った『ルールの裏をかいた生き残り方』とは、このことだった。実際、この方法でオークションを生き抜いていくというやり方もあっただろう。
「門限のルール自体、何処まで厳密に判定されているのか、私には疑問ね」霧切は云った。「どうやってチェックしているのか……あまり詮索しない方がいいかしら？」
　夜鶴は全客室をモニタリングできていたのか？
　それともただの口頭でのルール設定に過ぎなかったのか？
　もしかしたら指紋認証と連動したシステムが構築されているのかもしれない。しかし夜鶴一人ですべてをチェックできていたかどうかは怪しい。実際のところ、チェック機構は存在しなかった可能性もある。
「うう……うっ……」
　夜鶴はとうとうさめざめと泣き出した。
　そうして泣いている姿を見ていると、彼女もか弱い女性に過ぎないということに気づかされる。
「死にたい……ああ、今猛烈に手首を切りたい気分だわ……誰か刃物を貸して……ううっ」
　夜鶴は弱々しい声で訴える。
　ついさっきまで見せていた気丈な姿はもうない。
「死にたい……死にたい……」
「死んだらだめっ、夜鶴さん！」わたしは声をかける。「あなたがしたことは許されないことだけど……だからこそ生きて償って」
「子供にありきたりな説教された……死にたい……」
　もう何を云っても逆効果かもしれない。
「夜鶴さん、犯人であることを認めてください」
　わたしは彼女に自供を促す。
　七村が使えない以上、自供で『黒の挑戦』を終わらせなければならない。
　しかし――
「嫌よ」
　夜鶴はけろっと泣きやんで云った。
　しぶとい。
「お、おい、犯人ってこの女だったのかよ」
　水無瀬は狼狽している。
「え？　違うわよ。なんのことを云っているのかしら」

夜鶴は膝の汚れを払いながら立ち上がり、ロングヘアをかき上げて、平然と云った。
「ど、どど、どうしてあたしを殺そうとするのよう！」
美舟がわたしの陰に隠れながら、尋ねる。
夜鶴は冷めたような笑みを浮かべた。
「元超能力少女ちゃん……あなたのせいで、うちの家庭が崩壊したのよ」
「えっ？　えっ？　あたし、あんたのことなんか知らない！」
「私の父はテレビ局の制作で働いていたわ。そこにあなたの両親が、超能力少女としてあなたを連れてきた。テレビカメラの前でスプーン曲げをしてみせたあなたは、たちまちお茶の間の人気者。それ以来、あなたの両親はさまざまなテレビに出演し、雑誌の取材に答え、講演会にまで呼ばれるようになった」
「あたしなんも悪くない！」
「そうね。あなたの超能力とやらが本物だったら……ね。でも全部インチキだった。あなたの両親は、あなたを使って世間をだましたのよ」
そうか……
おそらく美舟の両親は詐欺師だったのだ。
美舟自身は、詐欺に加担したという意識はない。彼女は云われるままに、スプーンを曲げ続けたのだろう。それが本当に超能力だったのかどうかはわからない。両親は『超能力少女』というフレーズを使って、マスコミを翻弄したのだ。
「あなたがインチキだってばれてからは、誹謗中傷の矛先が私の父に向けられることになったわ。詐欺の片棒をかついでいるとまで云われ、父は責任を取らされてクビ。そのせいで自殺した。私が十二歳の時だったわ」
「イ、インチキじゃない！　あたし、スプーン曲げられたんだもん！　でも……だんだんと力が使えなくなっていっただけだもん！　それをパパとママは心配しなくてもいいって云ってくれてたんだもん！」
「うっさいのよ！　クソカボチャ！　あんた何歳よ！　ガキみたいに喋ってんじゃないわよ！」
夜鶴はとうとう怒鳴り出した。
「うわあああん！」
美舟がその場に座り込んで泣き始める。
「茶下さんと鳥屋尾さんとは、どういう関係だったんですか」
わたしは尋ねる。
夜鶴は色っぽい笑みを返して、腰に手を当てた。
「父が死んでから、母は宗教に救いを求めるようになったの。その過程で出会ったのが、茶下という男。

そのあとはよくある話よ。救いのために、金を浪費する日々。そのうち家にあるもの全部、質屋に持っていくようになった。そこで出会った鳥屋尾にまただまされる。詐欺の被害者は、連鎖的に、徹底的に追い詰められていくのね。母は最後にマンションから飛び降りて救われたわ」

にっこりと笑う夜鶴。

両親も財産も失い、彼女はどん底の日々を生きてきたのだろう。

「だからって……こんな途方もない『黒の挑戦』に挑まなければならないほど、追いつめられていたというんですか？　まっとうに生きる道もあったはずです」

「何を勘違いしているのかしら。私はまっとうに生きてきたわよ。授業参観に親が来なくていじめられても、ちゃんと毎日学校に行ったし、母が死んで高校に授業料払えなくなっても、部活もせず友だちとも遊ばず、夜までバイトしてお金を払ってきちんと卒業した。不幸な境遇にいたから、ひねくれた犯罪者になってしまったとでも思った？　残念だけど、私そういうのじゃないから」

「で、でも……夜鶴さん自身が、結婚詐欺みたいなことして……」

「そんなのはお金を集めるゲームに過ぎないわ」夜鶴は首を竦めて、片手を広げる。「私は人生を通して、この世の秘密を知ってしまったのよ。それは──お金は紙ではなくて、人間の命でできているっていうこと。ねえ、こんなゲーム知っているかしら。ハートのかけらを四つ集めると、それが大きな一つのハートになって、自分の生命力が一つ増えるの。お金はそれとおんなじよ。父も母もきっと、命のかけらを失い過ぎて死んだのね」

彼女もまた、金というものに奇妙な信仰心をもった人間なのかもしれない。今回の『黒の挑戦』は、そんな彼女が抱える闇を体現したようなゲームだった。

「云っておくけど、私にとって復讐なんておまけみたいなものよ。『黒の挑戦』は命のかけらを集めるゲーム。勝てば人生をまるごとやり直せるほどライフが集まる。わくわくするじゃない」

「それで人を殺しても平気なんですか？」わたしは思わず口に出していた。「あなたが誰かに強いられてきた不幸を、今度は誰かに強いるだけじゃないですか！」

「じゃあこれ以上我慢しろっていうの？」夜鶴は少しだけ感情的になって云った。「私が今までどれだけ我慢してきたのか知っているの？　私だって救われたいのよ！」

その言葉に、わたしは何も返せなかった。

少なくとも彼女を救える力は、わたしにはない。

「あ、でも私は犯人ではないから」

──しぶとい。

「タイムアップまで粘るつもりですか？　どちらにせよ、もうあなたの負けですよ」

「そうね、タイムアップと同時に、私の負けが確定するわね。でも問題ないわ。現金は手元にある分と、入札機械の中にある分、合わせて八億以上ある。機械は壊せばなんとかなるでしょ。それからこの前死んだ主人の遺産と保険金を足せば、ナントカ委員会に返済できる額を揃えられるわ」

　そうか……だから彼女は余裕なんだ。

　ゲームに使用したお金は、犯人が負けた場合、犯罪被害者救済委員会に返却しなければならない。もし返却できない場合、命を代償にすることになる。

　けれど彼女は返却できる。

　ゲームに負けはしたけれど、彼女はまだ終わってはいない。

「私が負けを認めるか、タイムアップにならない限り、この建物の玄関は開かないようになっているの。もちろん私は負けを認めない。だから私もあんたたちと一緒に、明日の朝までタイムアップを待つわ」

「そのあとはどうするんですか？」

「もちろん、何処か遠くへ逃げるわよ」

「ふざけんな、その前に警察に通報するに決まってるだろ」

　水無瀬が云う。

「好きにしたらいいわ」

「朝まで縄で縛りつけて逃げられないようにしてやる！」

「あら、そういうのはだめよ」

　夜鶴は自分の胸元に手を忍ばせた。

　中からリボルバー式の拳銃を取り出す。

　一瞬で空気が凍（こお）りついた。

「お願い、最後まで私にルールを守らせて」

　彼女はそう云って、わたしたちに銃口を向けたまま、食堂を出ていってしまった。

「ど、どうする、あの女……」

　水無瀬は額に冷や汗を浮かべている。

「彼女はルールを守るわ。だから放っておくべきね」

　霧切は云った。

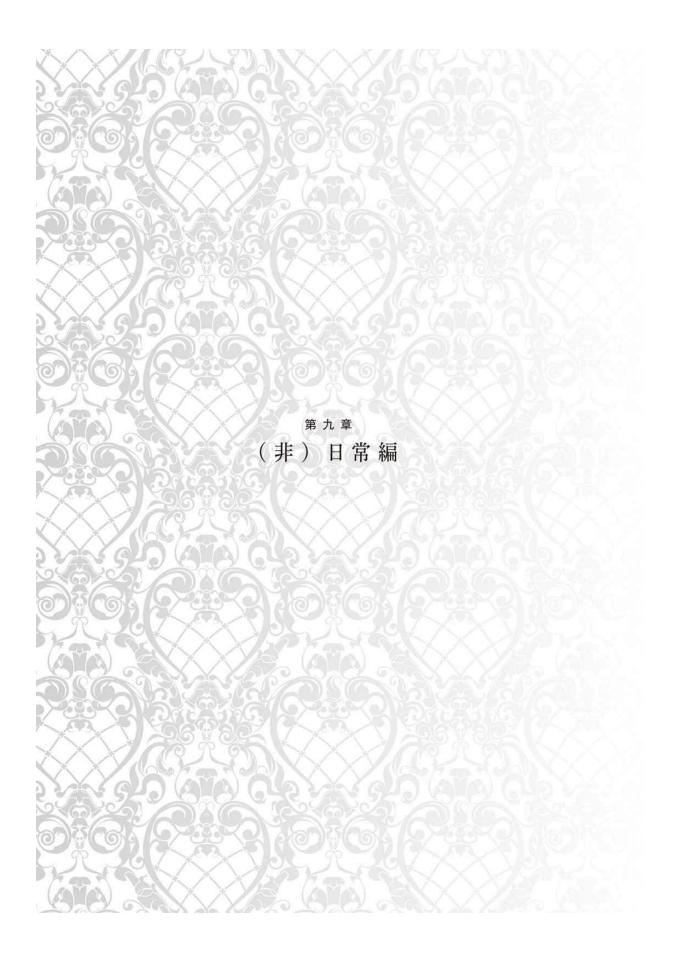
　確かにこの空間がルールで縛られている限りは、きっと安全だろう。けれどこのままでは彼女を逃がすことになってしまいそうだ。彼女には、犯罪被害者救済委員会について尋ねたいこともある。

　とりあえず今夜は、霧切のもとに集まって過ごすしかない。犯人が最後までルールを守るなら、わたしたちもルールを守ろう。

こうして、探偵の誇りをかけたオークションは終わった。

部屋に向かう途中で、ふと霧切がわたしを呼び止めた。
「結お姉さま……云っておくけど私は、誰かを助けるとか……そういうつもりで探偵をやっているのではないから」
「わかってるよ」
わたしが肯くと、霧切は満足そうな顔をして、三つ編みのお下げを振りながら、一人先に歩いていってしまった。

第九章

（非）日常編

わたしたちは『３０１』号室を霧切の部屋として、夜鶴を除く全員でそこに集まって一晩明かした。水無瀬と美舟は夜遅くまではしゃいで、トランプで遊んでいた。彼らの命を守ることができて、本当によかったと思う。今では二人に愛着みたいなものさえ感じている。

新仙と七村は部屋の隅で座るようにして眠っている。彼らは最終的に敵側だったけど、オークションが終わった今では関係ない。ただ、七村に関してはいろいろと許せない点もあるのだけど。

わたしと霧切はベッドを借りて、並んで一緒に寝た。二人で寝るにはベッドは小さすぎたけれど、わたしたちにはそんなことは関係なかった。一つの事件を無事に終えた今、わたしたちは寄り添うようにして、ただ眠りの中に落ちていった。霧切が傍にいることで、わたしは安心して眠ることができた。

夜時間が終わる頃、窓から朝陽が差し込んでくる。

ベッドの上で霧切が身じろぎした。ふと目を開けると、彼女と目があう。

霧切は少し照れたように目を逸らして、差し込む朝陽に髪を白く輝かせていた。

「あけましておめでとう、霧切ちゃん」

わたしが云うと、霧切は驚いたような顔をした。今日がなんの日なのか、思い出したのだろう。

「ハッピーニューイヤー、お姉さま」

わたしたちはそれだけの言葉を交わして、再び眠った。

寒くてふと目が覚める。

反射的にケータイで時刻を確認していた。

午前九時。

「わっ、もうこんな時間」

上半身を起こして、部屋を見回す。

隣で眠る霧切以外、誰もいなくなっていた。人数が少なくなったことで、室温が下がったのかもしれない。吐き出す息が白かった。

「霧切ちゃん、起きて」

わたしは彼女の肩を揺さぶる。

霧切は目を擦りながらむにゃむにゃと何か云っている。

「ハッピーニューイヤー……お姉さま……」

「それさっき聞いた！　それより、もうみんないなくなってるよ。ロビーに集まってるのかもしれない」

霧切は身体を起こして、ぼんやりと宙を見つめる。
あまり寝起きはよくないようだ。
「もう九時過ぎてるの。早く起きて」
「みんなは……？」
「わからない」
わたしはベッドから下りる。
夜鶴に逃げられる前に、話を聞き出さなければ。
部屋の扉を開ける。
廊下に出て、すぐに異変に気づいた。
目の前の壁に、点々と血痕らしきものが散っている。
これは何……？
みんなは何処に行った……？
やけに静かすぎないだろうか……
わたしの背後から、霧切が廊下を覗き込み、息を呑んだ。
「結お姉さま、これ」
「うん……」
その時――
突然わたしの携帯電話が鳴った。
びっくりして画面を見ると、いつの間にか受信可能な状態になっていて、見知らぬ番号が表示されている。
わたしは恐る恐る、通話ボタンを押した。
『やっと繋がったな。五月雨結君だね？』
老人と思しき声。
「あの……どなたですか？」
『私は霧切不比等（ふひと）――響子の祖父だ』
「あ、ああっ、お世話になっています」わたしはいっぺんに目が覚めた気分だった。「あの、外泊が長引いてますけど、特に問題は……」
『響子はそこにいるかね？』
彼の声は前に聞いた時よりも厳しい。
何か切迫（せっぱく）した様子だ。

「はい」
『よかったら代わってくれたまえ。響子はケータイを持っていない。だから君の番号を調べてかけさせてもらった』
「あ、はい、代わります」わたしは霧切にケータイを差し出す。「君のお祖父さん」
「こんな時に……何かしら」霧切はケータイを耳に当てる。「ハッピーニューイヤー、お祖父さま。そちらではまだ早かったかしら？　……はい、スピーカーに切り替えます」
　霧切はケータイをスピーカーモードに切り替える。
『五月雨くんもよく聞いてくれ。前に響子から犯罪被害者救済委員会のことを聞いた。その時はさほど関心を払わなかったが、事情が変わった』
「どういうことですか？」
『どうも会長が不穏(ふおん)な動きをしている。何を企んでおるかわからんが、私の推理が正しければ……そろそろ響子と接触を図(はか)る頃だと思われる』
「ええっ！　向こうから出てくるんですか？　どうして霧切ちゃ……響子ちゃんに接触を？」
『やつと私の間には浅からぬ因縁(いんねん)があるからだ』
「どういうことですか、お祖父さま」
『詳しい話は今度する。今はとにかく、やつに気をつけろ。できることなら近づくな』
「近づくなと云われても、その人がどんな姿をしているのか私にはわかりません」
　霧切は困ったように云う。
『姿など参考にはならん。前に教えただろう。やつの特技は偽装と変装。誰にも正体を見せないヴァリエーショニストだ』
「それなら、どうやって気をつけたらいいのでしょう」
『名前を教える。その名前を耳にしたら、とにかく逃げなさい』
「そんな……おおげさです」霧切は肩を竦める。「それで、その人の名前は？」

『新仙帝——元トリプルゼロクラスの探偵だ』

　わたしと霧切は同時に顔を見合っていた。
　まさかあの……
　彼こそが……犯罪被害者救済委員会の会長？
『やつの目的はおそらくこの私だろう。私を引(ひ)っ張(ぱ)り出すために、響子、お前を手にかけようとしているの

かもしれん。とにかく、そいつの気配を少しでも感じたら、逃げなさい。今のお前に敵う相手ではない』
「……わかりました」
　霧切は珍しく震える声で云った。
『いいな。私が行くまで、そいつとは絶対に接触するな。わかったね？』
「はい」
『いい子だ。ハッピーニューイヤー、響子』
　電話は切れた。
　霧切の手が震えている。
　わたしは彼女の手を包み、携帯電話を受け取った。
「霧切ちゃん……」わたしは彼女の目だけを見て云う。「逃げよう。早く！」
「でも……」
「お祖父さんが云っていたでしょう！　あいつに関わっちゃだめなんだ！」
「まだタイムアップの午前十時になっていないわ。玄関の扉は開かない」
「それなら今のうちに、玄関の前まで行こう」
「壁の血痕（けっこん）は……」
「気にしちゃだめ」
　そう云うしかなかった。
　わたしは霧切の手を摑んだまま、部屋の外に連れ出す。そのまま階段へ向かって駆け出した。
「だめ、やっぱり調べなきゃ！」
　霧切はわたしの手を振りほどき、廊下を引き返した。
　壁の血痕をたどるように、廊下の奥へ走っていく。
　自分勝手なんだから！
　わたしは慌てて彼女を追いかける。もし彼女に何かあったら、お祖父さんに一生恨まれるだろう。わたしが彼女を守らなきゃいけないんだ。
　霧切は廊下の角を曲がり、一番奥まで移動した。
　彼女は扉の前に立つ。なんとか彼女に追いついた。
　扉を開ける。
『３１２』号室。もともと空き部屋で、消失トリックが行なわれた部屋だ。右側の壁に、ピンク色の×印が描かれている。
　そしてわたしたちの目に飛び込んできたのは、左側の壁にも大きく描かれた×印だった。しかもそれはピ

ンク色ではなく、人間の血の色だった。

　そしてベッドの脇にくず折れている何か……

　かつて人間だったもの。

　頭部を叩きつぶされ、無残な屍体と化したそれは……

　夜鶴冴だった。

　床や天井にまで血痕が飛び散っていて、ここで起きた惨状を物語っている。屍体の傍らには、大振りなハンマーが転がっていた。

「まずいわ……」

　霧切は屍体に近づき、身体のあちこちをまさぐり始めた。

「何しているの！　早く逃げよう！」

「お姉さま、銃がないわ！」

「えっ」

　夜鶴が持っていたリボルバー式の拳銃……

　その時。

　――パン！

　何かが弾ける音。

　確か初日に同じような音を聞いた覚えがある。

　銃声だ。

「かなり遠くから聞こえた……」

　下の階だろうか。

　一体、この廃墟ホテルで何が起きているのだろう。

「行きましょう、お姉さま」

「行くしかない」

　出口はロビーの玄関しかない。屋上から外へ出る方法もあるが、霧切を階段の向こう側へ連れていくことは不可能だろう。

　わたしたちは手を繋いだまま、足音をたてないように、ゆっくりと階段を下りた。足元が軋むたびに、わたしたちは揃って身体を硬直させた。

　一階にたどり着く。

　ロビーへ続く扉は開きっ放しになっていた。

　わたしはそっと首を伸ばして、中を窺う。

ロビーの中央に誰かが倒れている。
　二人。
　水無瀬と七村だ。
　遠目からでも、彼らが血の海の中に倒れていることがわかる。
　わたしと霧切は用心深くロビーを見渡す。
　誰もいない。
「どうする？　行く？」
　小声で尋ねると、彼女は無言で肯いた。
　正面に見える玄関扉までたどり着かなければ、外には出られない。
　わたしと霧切は身体を屈めて、小走りでロビーを駆け抜けた。
　水無瀬と七村の横を素通りする。どちらも血まみれで、水無瀬の額には穴が空いていた。息がないのは明らかだった。
「助からない、行こう」
　わたしは霧切の腕を引いて、玄関の扉まで走った。
　扉に手をかける。
　まだ開かない。
　ケータイを確認する。
　九時五十七分。
　あと三分――

「遅かったね、お嬢さんたち」

　何処からともなく声がする。
　わたしと霧切は振り返った。
　ロビーの中央で、さっきまで倒れていた七村が立ち上がっていた。彼は血まみれのスーツを払うようにしながら、困ったように肩を竦める。
「なかなかの危機回避能力じゃないか。まさかスルーされるとは思わなかった。近づいたところを確実に仕留めようと思ったのに」
　七村の右手には、リボルバーが握られていた。
　まさかそんなはずは……

ダブルゼロクラスの名誉ある探偵が……

「弾はあと四発か」

　七村は弾倉を覗き込みながら云う。

　わたしと霧切は身動き一つできずに、彼の挙動を見守っていた。

　彼は近くに倒れている水無瀬に銃口を向けると、ためらいもなく引き金を引いた。

　一瞬の閃光（せんこう）のあと、水無瀬の屍体が軽く跳ねる。

　意味のない銃弾。

「『黒の挑戦』で犯人が負けてしまったら困るんだよ。私が受け取る予定だった五億五千万が、組織への返済にあてられてしまうだろう？　彼女には勝ってもらわなきゃいけなかったんだ。しかし運命とは皮肉なものだね。単なる女子高生と女子中学生のコンビがここまでやるとは……探偵の世界とは、つくづく奥が深いよ」

「あ、あなたがやったんですか……七村さん」

「見ての通りだ。ふと思いついてね。入札機械に入れられているらしい現金を持って帰ろうかと思ったんだ。もちろん夜鶴くんはそんなことに賛成しなかったから、黙らせたんだけど」

「あなたは探偵でしょうっ？　なんで平気で人を殺せるんですか！」

　わたしは許せなかった。

　彼の行為のすべてが。

　探偵は……人を救うためにいるのではないのか。

　どうかこれ以上、幻滅（げんめつ）させないでほしい。

　探偵なんて……

　ろくな人間がいないじゃないか！

「仕方ないだろう。これは社会や世界にとって、もっとも合理的な結論なんだ。世界はもっと理解すべきだよ。我々のようなランクの高い人間に投資することで、文明がもっと速く進むことを」

「仕方ないって……」

　言葉が通じない。

　まるで別の世界の人間のようだ。

「結果的に、私は九億の金を手に入れ、名誉も守られる。しかし一つ問題があるな。ここでのことが外部に漏れたら、大騒ぎになる。そこで君たちの口をちゃんと塞いでおかなきゃいけないわけだが、君たちの口は堅い方かい？」

「……ここを出たら、わたしはあなたを告発します！」

「そう、五月雨君はそう云うだろうと思った。霧切君はどうだい？」
「……お姉さまに従うわ」
「おや、君はこんな瑣末なこと、見過ごすタイプかと思っていた。五月雨君に影響されたのかい」七村はため息を零したあと、銃口をわたしたちに向けた。「では他の者たちと同じように、この世のために死んでもらうしかないな。君たちのような遅い人間たちがいるから、いつまで経っても世界は変わらないんだ」
　距離は十メートル程度。
　銃の経験がある者なら、簡単に当てられる距離だ。
　しかしそれは、標的が動かない場合。
　全速力で逃げ回れば、残り三発の銃弾は回避できるかもしれない。
　このまま黙って撃たれるよりは——
「結お姉さま、だめよ」
　霧切がわたしの服の裾を掴む。
「だって！　このままだと撃たれるよ！」
「あと三十秒」
「えっ？」
「時間を稼いで」
　そうか、わたしたちのすぐ背後にある玄関扉が開く時間——
　パン！
　七村が容赦なくこちらに向けて引き金を引いた。
　弾丸はわたしの左耳をかすめて、扉に穴を穿った。
　左耳が耳鳴りしている。
「時間稼ぎかい？　残念、君たちの考えが私に読めないとでも思ったのか。次は当てるよ」
　七村は親指で撃鉄を倒す。
　撃たれる。
　わたしは霧切の前に立って、彼女の盾になった。
　弾丸はあと二発。
　わたしがそれを全部受け止めれば、彼女は助かる。
　わたしは両手を広げた。
「どう？　当てやすくしてあげた。早く撃って！」
「お姉さま、だめっ」

「よろしい、君に一発、うしろの彼女に最後の一発だ」
　七村は引き金に指をかけた。
　その時、食堂の扉が勢いよく開かれる。
　そこから血まみれの美舟が現れた。
　彼女はほとんど倒れ込むようにして、ロビーの床に膝をつき、人差し指を真っ直ぐに七村へ突きつける。
「曲がれええ！」
　七村はとっさに翻（ひるがえ）って、美舟に向けて引き金を引いた。
　しかし弾丸は発射されなかった。
　七村は驚いた様子で手元の銃を眺め、操作しようとする。しかし正常に作動しないようだ。
　まさか、これが彼女の力――
　しかし美舟はそのまま力尽きたように、床にうつ伏せに倒れてしまった。
「どうなっているんだ、これは」
　七村はとうとう銃本体を、美舟に向かって投げつけた。銃のグリップがうつ伏せの美舟の背中に当たる。しかし美舟は反応しなかった。
　わたしたちの背後でピーという電子音が鳴り、扉が開く。
「開いたわ！」
　霧切が扉を開ける。
　わたしたちは玄関を飛び出した。
「ま、待てっ」
　背後から声がする。わたしたちは振り返らずに、もう一つの玄関扉を開け、とうとうホテルから脱出した。
　外に飛び出す。
　そこに立っていたのは……

　新仙帝だった。

　彼は右手だけをズボンのポケットに突っ込んだまま、こちらを向いて立っている。しかし相変わらず、闇を見つめているかのような、難しげな表情を浮かべているだけで、わたしと霧切に対しては無反応だった。まるでわたしたちの存在を認識していないかのようだ。

彼の両隣に、見知らぬ男たちがいた。一人は外国人、一人は車椅子の男。
わたしと霧切は手を繋いだまま、彼らの横を素通りした。彼らもわたしたちの邪魔をしなかった。彼らはわたしたちを無視して、ずっとホテルの入り口を見守っている。
とにかく今は逃げるしかない。
わたしと霧切は手を繋いだまま、ホテルの庭を横切る。そして鉄柵の門を抜けたところで、身をひそめるようにして、振り返った。
様子を窺う。
そこへちょうど、エントランスの扉を開けて七村が出てきた。
やはり七村も新仙たちの存在に驚いている。
七村はその場に立ち止まった。
「お……お前たちは……」
驚愕の表情。
わたしはあらためて、新仙の両隣にいる男を見た。
何処かで見た覚えがある。
「あの人たち……」
霧切が何かに気づいたように云う。
「あ！」
まさかそんなはずがない。
あの外国人は……現役トリプルゼロクラスの『法執行官（ほうしっこうかん）』——ジョニイ・アープだ。
そして車椅子の男は、同じく現役トリプルゼロクラスの『安楽椅子伯爵（あんらくいすはくしゃく）』——龍造寺月下（りゅうぞうじげっか）。
何故こんなところに？
伝説的な二人のトリプルゼロクラスが？
しかも新仙につき従うかのように……
新仙は無言のまま、ジョニイに指で合図する。
するとジョニイはスーツの内側からリボルバーを抜き、一度くるりと指先でそれを回してから、新仙の右手に載せた。
新仙はその銃を持って、七村に近づいた。
撃つのか——？
七村は身動きできないまま、膝を震わせている。
「う、嘘だろ……そんなはずは……」

新仙は七村にグリップの方を向けて、銃を突きつけた。
　その時七村は『激情にして最速』の思考速度で、すべてを理解したのだろう。
　震える手で銃を受け取る。
「そうか……もう……堕天は始まっていたのか……」
　七村はそう呟いて、自分のこめかみに向けて引き金を引いた。
　たちまち屍体と化したそれは、ノーマンズ・ホテルの玄関前に横たわる。

　新仙たちは満足したようにホテルに背を向け、歩き始めた。龍造寺は電動の車椅子だ。三人は同じ速度で、ホテルをあとにする。
　彼らが門に近づいてきた。
　敷地を出る際にふと、新仙がこちらを向く。
　気づかれた――
　彼は穏やかな表情でこちらに近づいてくる。
　わたしは霧切の盾になり、身構えた。
　死神の足音。
　わたしはその時確かに――死神の足音を聞いた。
「怪我をしているようだな」
　彼はスーツのポケットから、白いハンカチを取り出すと、そっとわたしの左耳に触れ、血を拭った。さっき七村に撃たれた時に、弾が掠ったのだろう。
　わたしは怖くて、身体を少しだけ引いた。
　新仙はすべてを許すかのような――慈愛(じあい)に満ちた笑みを口元に浮かべる。
　彼が犯罪被害者救済委員会をたった一人で束(たば)ねる男――新仙帝。
「目的はなんですか」わたしは覚悟を決めて尋ねる。「どうして……今回の『黒の挑戦』に紛れ込んでいたんですか」
　新仙は血のついたハンカチを両手で持って、わたしの目の前で広げる。
　一瞬、ハンカチがわたしの視界の一部を隠す。
「ただの挨拶だよ――」
　そう云って、彼はハンカチを折り畳み始めた。
　ハンカチが折り畳まれて小さくなるたびに、少しずつ、覆われていた視界の中に風景が戻ってくる。
　しかし、その風景の中には……

さっきまでそこにあったはずの……

　ノーマンズ・ホテルが跡形もなく消え去っていた。

「──新しい年の始まりのね」

　彼はポケットにハンカチをしまって、背を向けた。

　すると周囲の風景が突如として、折り畳まれるように少しずつ小さくなって、消えていく……！

　遠くに見えていた山々も、庭に生えていた枯れ木も、まるでそれらが紙切れにすぎなかったかのように、ぱたぱたと折り畳まれていく。

　視界から何もかも消えていく。

　これが偽装と変装のヴァリエーショニストの力──

　わたしと霧切は言葉を失ったまま、理解不能な現象を眺めていることしかできなかった。無意識のうちに、お互いに伸ばした手を繋ぎ合う。そうしなければ、わたしたちも消えてしまうのではないかという恐怖を感じていた。

　やがて周囲には、鉄柵に囲まれた空き地と、何処か見知らぬ場所へと下っていく坂道だけが残された。

　新仙たちは坂を下っていく。

　その途中で、新仙は背を向けたまま、顔からマスクのようなものをはぎ取った。

　やはりあれは素顔ではなかったのか。

「素晴らしい成長ぶりだ。霧切響子。さすが霧切家の娘というだけはある」新仙は振り返らずに、右手を振りながら云った。「また会おう。次会う時は──別の顔で」

──to be continued.

星海社FICTIONS
キ1-02
ダンガンロンパ霧切 2
北山猛邦
Kitayama Takekuni
星海社
DIVE INTO THE BOOKREVIEW &INFORMATION!
ノーマンズ・ホテルへようこそ
我々はお客さまの
いかなる絶望にもお応えいたします。
謎の組織、「犯罪被害者救済委員会」の次なる"黒の挑戦"は「探偵オークション」!!
廃墟と化したホテルを舞台に繰り広げられる死亡遊戯の行方は――!?
原作ゲーム『ダンガンロンパ』シリーズの
シナリオライター・小高和剛からの直々の指名を受け、
「物理の北山」こと本格ミステリーの旗手・北山猛邦が描く
超高校級の霧切響子の過去――。
これぞ"本格×ダンガンロンパ"!!
北山猛邦
Kitayama Takekuni
2002年、『「クロック城」殺人事件』（講談社ノベルス）で第24回メフィスト賞を受賞しデビューする。
代表作として、デビュー作に端を発する『「瑠璃城」殺人事件』（講談社ノベルス）などの一連の〈城シリーズ〉や、
『踊るジョーカー』（東京創元社）などの〈名探偵音野順の事件簿シリーズ〉、
『猫柳十一弦の後悔』（講談社ノベルス）などの〈猫柳十一弦シリーズ〉がある。
小松崎類
Komatsuzaki Rui
デザイナー・イラストレーター。（株）スパイク・チュンソフト所属。
『ダンガンロンパ』シリーズのキャラクターデザインを担当。
艶にあふれた曲線と着彩で魅力的なキャラクターを描き出す気鋭のイラストレーター。

星海社FICTIONS
キ1-02
ダンガンロンパ霧切
DANGANRONPA KIRIGIRI
2
「『家族の死に目に会うことよりも、探偵活動を優先させよ』……これって、おかしなこと？」
北山猛邦
Kitayama Takekuni
Illustration
小松崎類
星海社

星海社
FICTIONS
キ1-02
ダンガンロンパ霧切
2
北山猛邦
Kitayama Takekuni
星海社
DIVE INTO
THE BOOKREVIEW
&INFORMATION!
北山猛邦
Kitayama Takekuni
2002年、『「クロック城」殺人事件』（講談社ノベルス）で第24回メフィスト賞を受賞しデビュー。
代表作として、デビュー作に端を発する『「瑠璃城」殺人事件』（講談社ノベルス）などの一連の〈城
『踊るジョーカー』（東京創元社）などの〈名探偵音野順の事件簿シリーズ〉、
『猫柳十一弦の後悔』（講談社ノベルス）などの〈猫柳十一弦シリーズ〉がある。
小松崎 類
Komatsuzaki Rui
デザイナー・イラストレーター。（株）スパイク・チュンソフト所属。
『ダンガンロンパ』シリーズのキャラクターデザインを担当。
艶にあふれた曲線と着彩で魅力的なキャラクターを描き出す気鋭のイラストレーター。
ノーマンズ・ホテルへようこそ
我々はお客さまの
いかなる絶望にもお応えいたします。
謎の組織、「犯罪被害者救済委員会」の次なる“黒の挑戦”は「探偵オークション」!
廃墟と化したホテルを舞台に繰り広げられる死亡遊戯の行方は――!?
原作ゲーム『ダンガンロンパ』シリーズの
シナリオライター・小高和剛からの直々の指名を受け、
「物理の北山」こと本格ミステリーの旗手・北山猛邦が描く
超高校級の霧切響子の過去――。
これぞ“本格×ダンガンロンパ”!!
全ミステリファンを沸騰させた
傑作ゲーム『ダンガンロンパ 希望の学園と絶望の高校生』の
目眩く“前日譚”を、
担当シナリオライター
小高和剛が自ら小説化!
虚淵玄・奈須きのこ・
三田誠・成田良悟が熱賛!
キ1-02

ダンガンロンパ霧切２

2020年10月1日発行（01）

著　者　北山猛邦

発行者　太田　史

発行所　式会社星海社
112-0013
都文　区音羽1-17-14
音羽 Kビル4F
tt s:// .sei ais a.co.

発売元　式会社講談社
112-8001
都文　区音羽2-12-21
tt s:// . odans a.co.